

---

# サクラ大戦 花たちからの手紙

デロリアン4号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サクラ大戦 花たちからの手紙

### 【Nコード】

N4365T

### 【作者名】

デロリアン4号

### 【あらすじ】

『今から遡ること約100年前の太正時代。帝都東京・花の都巴里を救った帝国華撃団・巴里華撃団。戦闘部隊・花組は一人の男性隊長のもと女性隊員で構成されており、霊子甲冑「光武」に搭乗し平和を乱す魔物たちと戦い勝利をおさめた。2度目の世界大戦の終了と共に組織は解散。』文献にはこう書かれており、男性隊長と女性隊員の余生の事は書かれておらず知る者はごく少数である。

そして現代、女性に

しか動かせない兵器IS。そのISのパイロットを育成するIS学園に一人のサムライが転入してきた。それは未来にサクラが咲く瞬間でもあった。

## はじめまして

はじめまして、作者のデロリアン4号です。

サクラ大戦の大ファンである自分が見つけた作品IS。メカ設定、キャラ性格が非常に似ていおり、両作品も一人の男性が、複数の女性陣に囲まれ生活していくといういわゆる「ハーレム」と呼ばれる立場にあるので組み合わせしてみました。

本作はISの世界を舞台にサクラ大戦をリンクさせていきます。サクラ大戦は舞台が架空の1920年代「大正時代」で町並みもモロに現実の大正とそっくり、ISの舞台は2010年代の近未来。時代年数は100年以上の差がありますが、上手く書いていきます。

## 第1章の登場人物紹介（前書き）

ネタバレ注意！

## 第1章の登場人物紹介

【本作オリジナルキャラ】

おおがみ かずき  
大神一樹

「性別」男

「年齢」16歳

「身長」175cm

「出身」日本・栃木

「ISランク」A（非公式：S）

「誕生日」2000年8月15日

「紹介」この物語の主人公（ビジュアルは大神一郎と同じ）。約100年前に存在した組織、帝国華撃団・巴里華撃団の隊長大神一郎のひ孫。一夏に続くISを動かせる男性であり、世界的財閥・神崎グループとも縁がある。

剣道が得意で流派は二天一流で二刀流。さらには弓道・銃撃も得意で、イーストウッド・ランボー・ゴルゴ13の弟子と呼ばれるほどの腕前。特技に機械工作、音楽、天体観測、戦斧、手品、スリ、など多彩な才能をもつ（スリは危険物を所持している者へ使い、犯罪行為としては一回もしたことはない）。なお帝国華撃団・巴里華撃団の女性隊員全員と交流、指導がある。大神一郎が帝都と巴里に現れた魔物と戦った事は知らないまま。

女性99%のIS学園で生活する一夏と仲良くなる。ISの操縦技術・戦闘力は織斑千冬を上回ると言われている。ヒマになるとiPod touch（32GB）に入っている超高音質変換した太正時代の帝国・巴里華撃団の音楽を聴いている。

制服のデザインは一夏のは違う学ランタイプの制服。アンナが気になるお年頃。

アンナ・フォンテイーヌ

「性別」女

「年齢」15歳

「身長」156cm

「出身」フランス・パリ

「ISランク」B

「誕生日」2000年5月31日

「紹介」約100年前に存在したバリ華撃団・エリカ・フォンテイーヌのひ孫（ビジュアルはエリカ・フォンテイーヌと同じ）。やはりエリカのひ孫と言うだけあって、ドジで天然で、看板にぶつかつたり何もないとこで転んだり、エリカの生き写しそのままである。

一樹とは幼馴染同士で家族ぐるみの仲で、一樹との相思相愛にかなり近い人物。

加山雄四<sup>かやまゆうじ</sup>

「性別」男

「年齢」15歳

「身長」175cm

「出身」日本・和歌山

「誕生日」2000年5月5日

「紹介」約100年前に存在した組織、帝国華撃団月組隊長・加山雄一のひ孫。一樹の小学生のころからの幼馴染（ビジュアルは加山雄一と同じ）。生まれは和歌山でその後栃木に引越し、一樹と同じ学校に通った。相性のいいコンビで周りからは『カズとユージ』と呼ばれていた。現在は地元の普通高校に通っている。代々忍びの家系で雄四もそれを受け継いでいる。

たけださなえ  
武田沙苗

「性別」女

「年齢」15歳

「身長」155cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」2000年6月21日

「紹介」新聞部の一年で黛の助手をしているオレンジ髪の子生徒（ビジュアルはジェミニ・サンライズと同じ）。黛が言うには彼女は天然で、普通の人なら気づく事が数カ月後になって気づく人だと言っている。

松本かすみ

「性別」女

「年齢」ヒ・ミ・ツ

「身長」169cm

「出身」日本・東京

「誕生日」?????年3月9日

「紹介」IS学園の校医。金髪で微笑みを絶やさない菩薩のような人。菜食主義者の一面もある。生徒、教員間で数多くのファンがあり、真剣に交際を望む女性からのラブレターを彼女宛に送る者もいる。

### 【ISからの登場人物】

織斑一夏

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>の主人公で本作では一樹の友人というポジション。一樹と同室になり、仲が良くなる。原作同様、恋愛に関しては超鈍感。

篠ノ之箒

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>のヒロイン1号。本作では一樹の剣道仲間というポジション。一樹と剣道の手合わせをして仲良くなり、その後自分の稽古のときは相手に一樹を誘うようになる。その際一樹に名前を呼ぶことを許した。IS勝負でも敗北し、ISの決闘もするようになった。一樹曰く、「さくらばあちやんとグリシー又はあちやんを合わせた感じ」。

セシリア＝オルコット

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>のヒロイン2号。ポジションは特になし。転入した一樹に興味を示し、ISの模擬戦で敗れた後色々関わってくるようになる。のちに一樹に恋心を抱くようになった。高飛車な態度は原作と変わらない。一樹曰く「すみればあちやんと織姫はあちやんを合わせた感じ」。また学園ではサポテン女と呼ぶものがある。

凰鈴音

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>のヒロイン3号。ポジションは特になし。一樹の転入から1週間後に入ってきた。一樹のことを「イイ男」と言っているが落とされることはないと思っていたが、未確認IS乱入事件後、一樹に少しづつ意識し始める。

シャルル・デュノア

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>のヒロイン4号。ポジションは一樹と一夏のルームメイト。3人目のISを動かせる男性として転入してきたがある機会を機に女性であることが発覚。実家はヨーロッパで一番大きいIS企業「デュノア社」。一樹曰く「コクリコおばあちやんとレニおばあちやんを合わせた感じ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>のヒロイン5号。

ポジションは一樹を敵視している代表候補生。一夏を叩き潰そうとするが一樹の妨害が入り、彼のことをうっとうしく思うようになるが、命懸けで助けに来た一樹にホれる。一樹曰く「レニおばあちゃん」とマリアおばあちゃんを合わせたかんじ」

まゆずみ かおるこ  
黛 薫子

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>に登場する2年生。新聞部の副部長である点は変わらない。

織斑千冬

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>の一夏の姉。設定は原作と変わらない。一樹に対しても一夏と同様、容赦なしの教育をする。一樹の編入試験時、気絶した山田に代わりIS操縦の試験官をした。試験終了後、彼女は一樹の戦闘力を見切り「私を上回る」と言っている。一樹の曾祖父さんについて何か知っている。

山田 真耶

「紹介」原作IS<インフィニット・ストラトス>の一夏のクラスの副担任。一樹の編入試験時、IS操縦の試験官をしたが一樹の一撃で気絶してしまった。

### 【サクラ大戦からの登場人物】

大神一郎

「紹介」原作<サクラ大戦>の主人公。本作では一樹の曾祖父さんで故人（享年113歳）。約100年前に存在した組織、帝国華撃団・巴里華撃団の隊長で一樹が中学卒業まで存命していた長寿者。一樹の幼小時代に様々な事を教え、二天一流を教えたのも彼である。ISの登場をあらかじめ予測していたと一樹は語る。

真宮寺さくら

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン1号。本作では故人（享年111歳）。一樹とも交流があり北辰一刀流免許皆伝で一樹の二人目の剣術師範（一人目は大神一郎）。仙台にある北辰一刀流道場の館長。一樹の剣術の基礎は彼女に教わった。晩年も大神に好意を示しておりやきもち焼きな所も変わらない。

ISについて何か気づいている様子。

神崎すみれ

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン2号。本作では故人（享年109歳）。世界的財閥・神崎グループの終身名誉会長で、一樹のIS操縦を見抜いた人物で、いつか一樹がISに乗ることを想定して彼専用機を神崎グループ総出で制作を言い渡した人物。高飛車で高らかな笑い声が印象的だったと一樹は言う。元祖サボテン女であった。

ソレッタ・織姫

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン7号。本作では故人（享年111歳）。世界的な音楽家でイタリア貴族。一樹の特技の音楽は彼女から教わった。女性でありながら女尊男卑の時代に納得がいかず、男性の社会的立場の回帰活動に参加した。楽道家な人だったと一樹はいう。

レニ・ミルヒシュトラーク

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン8号。本作では故人（享年106歳）。ドイツ軍の元軍人で最終階級は大将（特進ナシ）。事実上ラウラの上官に当たる人物。彼女の少女時代の写真を見た人間は誰もが男の子と勘違いするほどである。

エリカ・フォンテューヌ

「紹介」原作<サクラ大戦>のヒロイン9号。本作では故人(享年106歳)。アンナの曾祖母。フランスのモンマルトルにある教会のシスター。晩年、ロベリアと孤児院『ボヌール』を創設し、子供達の世話をした。実はアンナに自身の遺産という名である物を渡した。

グリシーヌ・ブルーメール

「紹介」原作サクラ大戦のヒロイン10号。本作では故人(享年106歳)。フランスの超名門貴族ブルーメール家の当主。一樹専用ISの制作のスポンサーを担当した。織姫と同じく女尊男卑の時代に納得がいかず彼女と共に男性の社会的立場の回帰活動に参加した。セシリアのオルコット家と親交があった。

コクリコ

「紹介」原作<サクラ大戦>のヒロイン11号。本作では故人(享年101歳)サーカス界で古株で有名なサーカス団、シルク・ド・ユーロの団長で亡くなるまでその職を務めていた。一樹の特技である手品は彼女から教わり、形見である髪留めゴムを彼に託した。

ロベリア・カルリーニ

「紹介」原作<サクラ大戦>のヒロイン12号。本作では故人(享年110歳)。エリカ・フォンテーヌと共に孤児院『ボヌール』を建て、その院長を務めた。二面性のある人物で一樹も大神一郎もしよっちゅうダメされた。

## 第1章の登場人物紹介（後書き）

話が進むたび、登場人物・詳細を書き込んでいきます。  
設定は自分の想像・空想をもとにつくりました。

**舞台・用語・アイテム・事件（前書き）**

ネタバレ注意！このページはウィキペディアのように更新して行きます。

## 舞台・用語・アイテム・事件

### 【舞台・施設】

#### IS学園

原作と変わらない設定。一樹は一夏と同じ部屋になった。沿岸部に臨海公園があり、屋上は木陰もあるなど自然豊かな校舎。一樹は新聞部は副部長兼の許可により出入り自由とされた。

本作では東京都、東京湾海上の人工島にある設定。島全体がIS学園の敷地で正確な住所は『東京都港区 新島<sup>しんとう</sup>XXXXX』

#### デユノア社

シャルルの父が経営しているIS企業。一応フランスで一番きなIS関係の企業であるが経営危機に陥り、開発許可が剥奪されるほど追い込まれている。シャルルの父親である社長は彼女に光武のデータを盗んで来いと命令した張本人。

#### シャトーブリアン社

一樹の光武のレールガン「エクレール」、アンナの専用機「エヴァンジル」を開発したフランスのIS企業。

#### 神崎グループ

終身名誉会長・神崎すみれが経営していた世界トップクラスの財閥。彼女の亡き後は孫が就任。一樹個人の付き合いがある。IS訓練機の量産も行っており、一樹専用機の制作も担当した。

#### ブルーメール家

フランスの超名門貴族。グリシーヌが当主で世界の財界に深く関わりのある名家。彼女亡き後は孫が家督を継いだ。一樹個人の付き合いがある。神崎グループの一樹専用機制作のスポンサーに就いた。

セシリアのオルコット家とも親交があった。

【用語】

帝国華撃団（歌劇団）

約100年前、司令・大神一郎を中心に活躍。邪悪な魔物から帝都東京を救った組織。第二次世界大戦終結後、解散。

巴里華撃団（歌劇団）

約100年前、隊長・大神一郎を中心に活躍。奇怪な怪人から花の都巴里を救った組織。第二次世界大戦終結後、解散。

霊力

華撃団の隊員達が持つ不思議な力。回復・武装・身体強化以外にも分け合う事することで寿命をわずかだが伸ばすことや、ある程度若返りが出来る。

女尊男卑

ISの登場により男女間のパワーバランスが崩れ、女性「強い」ということが定着した時代のこと。男が女よりも強いのはISが出来る前となり、男が女に戦争しても3日もたないと言われているほど。いわば大奥の時代である。

R陽子

一樹のISの装備「銀狼」・「白狼」の攻撃力を上をあげるのに、シールドエネルギーと併用されるエネルギー。設計図には説明がなく詳細は不明。

歌劇団の葬儀

帝国華撃団・巴里華撃団の大神隊長・花組隊員の葬儀。大神一郎や

隊員達は互いの霊力を共有することで長生きしてきた。「生きるも死ぬのも一緒」だった大神隊長・花組隊員13人は、同じ日の同じ時刻に息を引き取った。一樹が中学を卒業後、IS学園に入る前の事。

## 【アイテム】

能面のカケラ

一樹がネガのような世界で出会った能楽師からもらった能面のカケラ。顔に付いたら機体のエネルギーが回復した謎のシロモノ。

変換プログラム

一樹の自作したコンピュータプログラム。古い音楽をiPodに高音質に変換できる以外にも、BD、DVD、VHS、LD、8ミリ、レーザーディスクCD、カセット、レコードなどの媒体をリマスターできるプログラム。

一樹のiPod

一樹がいつも使っているiPod。入っているのは帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団の3組の歌しかない。歌劇団の字が華撃団になっており一樹自身も「なんでだ？」と疑問に思っていた(歌劇団の魔物たちと戦う組織・華撃団としての一面があることを一樹は知らないため、単なる誤変換だと思い込んでいる)。

## 【事件】

未確認IS乱入事件

クラス対抗戦時、正体不明のISが破壊活動をした事件。会場に1機、学園から500m離れた上空に1機の計2機が襲撃した。2機のうち、1機は一樹が両腕を切り落とし逃亡。もう1機は、一樹、

一夏、セシリア、鈴の4人により破壊。残骸は学園に回収された。

#### 学年別トーナメント事件

学年別対抗戦時、武者姿をした「脇侍」と呼ばれる機械が2機現れ、破壊活動をした事件。ラウラを操り、スタジアムの半分を破壊するという被害が出た。「能面のカケラ」をつけた一樹が一人で脇侍2機を撃破し事態は終結した。残骸は学園に回収された。

## 登場IS・兵器(前書き)

ネタバレ注意です。このページはウィキペディアのように更新していきます。

## 登場IS・兵器

名称：第5世代IS『光武F式』（ここうぶえふしき） 通称『青い剣豪』

搭乗者：大神一樹

カラー：紺色（淵に白いラインがある）

武装：対IS用大太刀型ブレード「銀狼」（右腰に装備）

対IS用大太刀型ブレード「白狼」（左腰に装備）

対IS用レールガン「エクレール」（右肩に装備）

高性能レドーム（左肩に装着）

高機動兼瞬発力強化ブースター「疾風改」（スラスター後の両肩に装備）

装備収納バックパック

（収納武器）対IS用ダネルMGL型グレネードランチャ

「詳細」神崎グループ総出のもとに制作した一樹専用IS（ISSスーツは大神の戦闘服と同じデザイン）。ハイパーセンサーはもちろんのこと、搭乗席からのびるコードをISSスーツにあるコネクタと直結することで自分の体のように操作できるといった性能がある。一樹の戦闘スタイルは「疾風改」を使い「銀狼」「白狼」の二刀流が主流。未完の段階であるISSの完成型に一番近い機体と呼ばれている。

待機状態は絵馬に似た紐付きの札（表と裏に帝国・巴里華撃団のエンブレムが彫ってある）。

武器：「銀狼」「白狼」

光武F式の主力装備。（刀デザインは光武の太刀と瓜二つで刀身が肉抜きされている）。「銀狼」「白狼」は特殊な金属でできた刀

で砲弾を切っても刃こぼれしない、ダンプカーにひかれても刀身が1ミリも曲がらないなどかなり頑丈。日本刀をベースに設計し、日本刀本来の性能を忠実に再現した武器である。刀身・鍔つば・柄つかそして鞘さやまで日本刀を再現したデザインでシャルルからも「見た目もすごいカッコイイ」と好評。

二刀は白式の能力に似たものがあり、シールドエネルギーを刀身にコーティングをすることで高い攻撃力を出すことが可能で、エネルギーの込め度で高い攻撃力を出せる。一度コーティングすると持続時間は最大3分〜6分。必殺技使用時、エネルギーを雷に変換しそれを刀身に覆わずことで相手に大ダメージを与える。

シールドエネルギーで刃を形成の白式と違う所は、コーティング時、少量のシールドエネルギー以外にもう一つ別のエネルギーと混合してコーティングすることで攻撃力強化をしている。そのためシールドエネルギーの消費が少量で済むことから、白式よりも燃費が良い。別のエネルギーは一樹本人にも不明で、設計図には「R陽子」と書かれていた。

武器：エクレール

右肩に装備されたレールガン。フランスのシャトーブリアン社製で装弾数は40発。高い命中精度で、チャージにより威力、距離が変化する。欠点はレールガン一番の特徴である、チャージに時間がかかることである。レドームと組み合わせることで射撃能力が極限にまで上昇する。

弾倉のスペースが大きすぎるため現在の光武では予備弾を積めない。そのため一回の戦闘が終わるたびに再装填しなければならない。

装備：高性能レドーム

左肩に装備された高性能のレドーム。これには望遠、暗視、赤外線、相手の情報表示ほか、あらゆるレーダーが組み込まれている。それをエクレールとリンクさせて、絶対的な長距離攻撃を可能にし

ている。アメリカ国防省が使うようなレーダーを小型化して搭載されていると予想されている。

装備：疾風改

両スラストターの後ろに装備されたブースター。起動させることで機動力が向上し従来のISよりも機動性が格段に上がる。また瞬発力を向上させる機能もありラウラのワイヤーブレードを掴んで振り回すほどの力を出せる。

装備：装備収納バックパック

学年別トーナメント前の装備ではラウラに勝てないと言う一樹の要望で、急遽神崎グループに依頼した装備。バックパックと言っても大容量ではなく武器2、3個積めるだけのサブバックのような物で、一樹曰く「サバイバルキット」のこと。

武器：対IS用ダネルMGL型グレネードランチャー

バックパックに積まれた対IS用のグレネードランチャー（形状は実在のダネルMGL型）。学年別トーナメントでラウラの「白式に射撃武器は無い」という心理を利用して用意した武器。試合では一夏が使用。ダットサイト以外にもレーザーサイトを付けているので、射撃初心者の一夏でも使えた。

必殺技

狼虎滅却・快刀乱麻

二刀の刀身に高電圧の電気を覆わせ、相手を切りつける攻撃。技を出すとき刀の色が青白になる。高い攻撃力だが、近接戦闘で一对一のときしか高い威力が発揮出来ないという欠点がある（ようはリーチが短い）。

狼虎滅却・天地一矢

快刀乱麻の強化版。威力は快刀乱麻より上な分、消費エネルギーの量も多い。電気量・発光量が増している。

#### 狼虎滅却・刀光劍影

短期決戦用の特攻型必殺技。相手のシールドエネルギー残量が3分の2以下なら確実にダウンさせるほどの威力だが、自身のエネルギー残量が2分の1以上なければ相打ち、または自爆になるというまさしく捨て身の技。

#### 破邪剣征・桜花天昇

刀にエネルギーを込め、それを飛ぶ斬撃にかえて放出する攻撃。技を出すとき刀の色が桜色になる。斬撃を飛ばせるので離れた相手にも攻撃出来る。有効射程距離は約30メートル。ただ一直線に放出するのでかわされやすい。

名称：第5世代IS『エヴァンジェル』 フランス語で『福音<sup>ふくいん</sup>』

搭乗者：アナ・フォンテューヌ

カラー：赤

武装：対IS用可変銃身式20mmガトリング「エリカ」（右腕に装備）

対IS用120mm砲ライフル「ルノー」（量子化保存）

対IS用12.7mm機銃「マリア」（右腰に装備）

対IS用7.62mmマシンガン「ヨハネ」（左腰に装備）

ウイングスラスタ

#### 「詳細」

エリカ・フォンテューヌがシャトーブリアン社に製造を要求したアナン専用IS。待機状態はロザリオ。アナンがエリカの死後から1

週間に届いた手紙を受け取り、シャトーブリアン社でIS訓練を2ヶ月間受けたあと、『エリカの遺産』という名前で彼女が貰った。

白式<sup>びやくしき</sup>

一夏のIS。設定は原作通り。

ブルー・ティアーズ

セシリアのIS。設定は原作通り。

甲龍<sup>シエンロン</sup>

鈴のIS。設定は原作通り。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムII

シャルルのIS。設定は原作通り。

シュヴァルツエア・レーゲン

ラウラのIS。VTシステムはない以外は原作と同じ。

紅椿

篝のIS。

## 第一話 学校に舞う桜吹雪

「ここがIS学園か、すごく広そうだな。」  
初めて学校に来る生徒の決まり文句。編入試験は別の施設で受けたため、学校の敷地をまたぐのは今日が初めてである。

「大神くん、ここが教室よ。」  
山田先生に案内されて教室の前に来る。廊下から教室を見ると99%女子しかない。先生の話では、織斑 一夏という男子が一人だけいると聞いているが、それでも心細い。共学になった女子高でも男子は10人以上はいるもんだと思う。しかしここはIS学園、ISを動かせる人しか集めない学校なため共学でも女子高でもない。

「では、今日からこのクラスに転入した大神一樹くん、自己紹介をお願いします。」

「本日付けでこのクラスに転入した、大神一樹です。皆さんもご存知の通り、「世界で二人目の男性IS操縦者」と呼ばれています。特技は剣道で、剣道部入部希望です。IS専用機も所有しておりますが、代表候補生ではありません。初めてでわからないことだらけですが、お教えていただければ幸いです。不束者ですが粉骨碎身の覚悟で頑張ります。」

( 一郎じいちゃんに、自己紹介の際は「粉骨碎身」を入れたほうが印象付けやすいって教わったな ) と心の中で思った一樹。その結果、クラスからやや高めの手拍が送られた。

「あいつが二人目の男性操縦者か。やっと男友達ができ嬉しいぜ」

「剣道が出来るのか。なかなかの腕の者とみた、一度手合わせを願っていたいな。」

「お手やわらかにな、篤。」

「なかなかいい人じゃありませんの。機会があれば、私のブルー・ティアーズと手合わせ願いたいですわ。」

「お手やわらかになセシリア。」

「席は織斑くんの隣ね」

山田先生は、一夏の左側にある一樹の席を指定した。一樹は速やかに席についた。

「よう。俺、織斑 一夏。一夏って呼んでくれ」

一夏は握手しようとして手をさしのべた。それに答えるように一樹は手をだした。

「よろしく。噂はかねがね聞いているよ。」

その光景にクラスがザワつく。

「静かにしろ。質問なら休み時間にすればよからう。」

千冬先生が腕を組んで姿勢で注意した。

休み時間、千冬先生に注意された通り、一樹の席の周りに女子が集まる。

「ねえねえ、大神くんってISをどういう風に動かしたの？」

「どうって、ただ普通に乗っただけで動かせたけどな。」

「織斑くんと握手した感想は？」

「いい友達と出会ったと思っっているよ」

この光景は転入生にありがちな光景であるが、二人目の男性操縦者ということもあって女子達は興味津津な目で、一樹に質問攻めをしていた。

「すごい人気だな、大神。」

「それはそつだ。お前と同じ男性IS操縦者だからな。」

「廊下も見てください、全学年の生徒が覗いてますわよ。」

帰りのS H Rが終わり山田先生が教壇に立った。

「今日の授業はこれで終わりです。気を付けてお帰りください。大神くん、織斑くんはこの後職員室に来てください。」

先生の呼び出し、なぜこの二人なのかは不明のまま職員室へ。そこで待つていたのは千冬先生。

「大神、お前の寮の部屋だが一夏と同室になつてもらつ。荷物もすでに届いている。」

言われたのは入寮の部屋のこと。

「同室つて、筈はどうすんだよ。」

「篠ノ之は別の部屋にした。本来学生寮で男女混同はダメだからだな。すでに他の部屋に移してある。一夏、大神に色々教えてやれ。」

一夏と筈は同室だつたらしい。一夏はこの知らせに嬉しいような残念なような、複雑な心境だつたことが感じられる。

そしてその夜、一樹は一夏の部屋へ。寮への道、一樹・一夏の後ろから大勢の女子がついてきたこともあり、かなり疲れた。

「ここが部屋か、ビジネスホテルより豪華だな。」

「初めてここに来た時と同じセリフだぜ。」

男の部屋に笑いが立ち込める。

「前いた篠ノ之くんつてどういう人なんだ。休み時間、ずっと一緒にいたけど。」

「幼なじみで小学生のころ、あいつと剣道やっていたんだ。ああ、お前と剣道の手合わせしたいって言うってたぜ」

「へえ、剣道部なんだ。」

一樹は少し食いついた。

「もう一人イギリス人の子、セシリアくんとも関係があるのか」

「なんでセシリアを知っているんだ？」

「フランスのブルームール家つていう屋敷に居候してたとき、ばあ

ちゃんに聞いたんだ。両親を失っても家を守った真の貴族だつて言つてた」

ブルーメール家はフランスの超名門貴族で、一夏も知っているほど有名。一樹は一時期、ブルーメール家に居候したことがあり、当主のグリシーヌと交流があつた。その際、彼女と親交のあつたイギリス貴族のオルコット夫妻の訃報、残された娘は家を守ろうと努力した事を聞いたことがある。

「あいつもお前とISで手合わせしたいって言つてたぜ。」

「さすが女尊男卑の時代。女性から勝負してくるのは当たり前だな」

近いうち手合わせが来ることを思いながら、かすかに篝の匂いが残る布団をかぶる一樹であつた。

第二話 吾輩の猫である (前書き)

転入日から次の日の朝の出来事です。

## 第二話 吾輩の猫である

午前6:30

一樹はこの時刻ちょうどに目が覚めた。別に悪い夢でもみたわけではないがこの男、目覚ましナシで切りのいい時間に起きるといふ几帳面な身体機能がある。

一樹は甚平のパジャマを脱ぎ、制服に着替えた。着替え終わったと同時に一夏が目を覚ました。

「ここの飯はうまいな。さすが国立の学校、良い飯つくるぜ」

「やっぱり、朝はご飯に味噌汁だな」

一夏が着替え終わり、二人は食堂でご飯大盛り、味噌汁、焼き魚の朝食を食べているた。

「大神、昨日はよく眠れたか？」

横から声がして、振り向くとポニーテールの子がやや顔を赤めながら座った。

「ああ、篠ノ之くんおはよう。よく眠れたよ」

「そ、そうか眠れたならいい。」

箸の使っていたベッドがそのまま一樹に使われたので、女の子としてやっぱり気になるのか。

「どうしたんだい、顔赤いけど」

箸の顔がさらに赤くなる。

「な！なんでもない！ そうだ大神！お前剣道できるんだよな。今日の放課後、私と手合わせお願いできないか。」

「うん、いいよ」

あっさりOKした一樹。すると、その後から高らかな笑い声が聞こえてくる。

「お~~~~ほっほっほ、何言っているんですか箸さん。今日の放

課後、大神さんはわたくしとISで手合わせを願うんですよ。」「  
周りから「もうアタックしているよ」「先越された〜」などの声  
が上がっていた。

「何を言うか！私が先に約束したのだ。お前のは私の組手が終わっ  
てからにしろ！」

「剣道の組手よりもまず先に、大神さんのIS操縦を見るのが代表  
候補生の勤め。わたくしが先に手合わせさせていただきますわ！」  
二人の一樹の取り合いは食堂中に知れ渡った。

「落ち着けよ二人とも、周りの子たちも食事中だし、」  
一夏が仲裁に入ったが、

「一夏（一夏さん）は黙ってる（黙っててくださいまし）！」  
二人同時に怒鳴られて縮こまる一夏。

「わかった、わかった二つとも受けるよ。最初に篠ノ之くんの剣道  
で、次にセシリアくんのISでいいかい。」

この一言で二人の態度は一変した。

「まあ、大神が言うなら私もそれで良いとしよう」

「わたくしも、大人気なかつたですわ。大神さんが言うならかま  
いませんわ」

なんとか戦争は回避された。一樹は額の汗を拭き、一息ついた。

「一夏、お前も最初はこんなのだったのか」

「いや、俺のはもつと辛かった」

「お互い、苦労人になりそうだな」

二人は深いため息を同時に吐き、残った朝食を胃にいれた。

第二話 吾輩の猫である (後書き)

次回は一樹の二天一流・二刀流が冴えます。サブタイトルは夏目漱石の「吾輩は猫である」のパロディ

### 第三話 最後のサムライ（前書き）

女尊男卑の時代に最後のサムライが現れた瞬間。

### 第三話 最後のサムライ

今朝の食堂での一樹争奪抗争は一時おさまり、時はその日の放課後一樹・一夏・箒の3人は剣道場にいた。箒・セシリアの手合わせの事は生徒間で知れ渡り、3人以外にもギャラリーが何人かいた。

「大神、剣道はどのくらいだ」

防具をつけながら一樹に話しかけた箒。

「9年経つかな。段位二段で、小1からやってたよ」

一樹の剣道は一郎とさくらから教わり、IS学園編入試験で千冬を押ししたほどの実力を持つ。

「そうか、手加減ナシ。最初から本気でいかせてもらうぞ」

「箒の奴、実力がわかってヒートアップしやがって」

さすが箒の幼なじみ。性格も手に取る用ようにわかっている。彼女は剣道全国大会の優勝者でもある。

防具が付け終わり、一樹・箒の二人は定位置についた。

「お前のセシリアとの組手があるので勝負は一回きりだ。用意はいいか、大神」

「ちよつと待つてくれ。おゝい、竹刀もう1本貸してくれ。」

一夏に声をかけ、彼はすかさず竹刀を一樹に投げる。ギャラリーがざわつく。

「お前、二刀流か」

「二天一流の二刀流が俺のスタイルだ。北辰一刀流も使えるよ」

その言葉に箒のヒートアップはさらに強くなった。このとき一夏は頭を手で押さえて、あちゃ〜なりアクションだった。

一樹は二刀流の3・4回素振りし、再び位置についた。

二天一流は剣豪・宮本武蔵が考案した剣術で、二刀流の中でも最もポピュラーな流派である。集団戦闘では高い威力を発揮出来るもの

だが、一騎打ちではそれを使う剣士の腕次第で優位性は大きく上下する。

北辰一刀流は幕末の・日本で多く広まった剣術。かの坂本龍馬もこの流派である。剣道において技術追求型でスタンダードな剣術である。

「では行くぞ！」

その言葉と同時に切り込んできた。一樹は二刀で防ぎ、弾き返す。箒はすかさず次の攻撃を連続して打ち込む。一樹はその一撃一撃を的確に見切り、防ぐ。真左から強めの一撃が来る。防ぐのも難しいコース。箒は決まったと思った。しかしその直後その気持ちは崩れ、驚愕する。彼女の竹刀は一樹の左竹刀の柄頭で止められた。一樹は右竹刀ですかさず打ち込む。箒はすぐ反応してかわし一樹から距離をとる。

「（私の太刀筋を見切った？並の動体視力では読めないぞ）」  
今度は一樹が攻めに入る。一樹の攻撃に箒は防戦一方。しかしわずかなスキが出来た。箒は今度こそと思いい、一撃を入れる。その一撃は左竹刀で受けながされ、右竹刀が彼女の胴に入る。勝負アリだ。二人は互いに礼をした後、ギャラリィから拍手が送られた。

「（私が負けた？この者、強い。）」  
彼女は困惑していた。全力で打ち込んだ全国大会優勝者の一撃はいつも簡単に防がれ、5分もかからず試合終了してしまったのだから。

一樹は面を外し汗を拭いた。一夏は箒が負ける所を久しぶりに見た。「お疲れ。あの箒を負かすなんて大神、強いな」

「彼女もなかなかの腕前だ。一撃が重く、回避反応も良い。二刀流の太刀筋を読む動体視力も並じゃない。また手合わせしたいよ。」  
ふと箒が後ろから一樹を呼び止める。

「大神、剣道部に入るんだろ。入ったら私の組手に付き合え。いつ

かお前を負かしてみせるからな！」

箒はそう言い残すと箒は更衣室へ歩いていった。

「もしかして彼女、負けず嫌い？」

「ああ、勝つまで相手をさせられるぞ。ガキのときも勝つまで俺に勝負を挑んだ。」

小学生のころ剣道は一夏の方が上だったが、今では実力は箒のほうが上である。

「一夏、お前も付き合ってくれ。先が怖い。」

ともあれ、手合わせを見ていた剣道部長に入部届けを出し、次の対戦相手のいるアリーナに走って行った。

箒は更衣室で何か考えていた。

「（サムライ、この時代にその心を持つ男はいない。ＴＶの時代劇でしか見たことがない存在だ）」

彼女の剣道は全国レベルで、ＩＳ学園剣道部で１年生で大将を勤めるほどである。剣道で男に勝負をしたがどれも弱すぎてすぐ音をあげた。むしろ女よりも弱かった。

「（大神、この時代でお前みたいなサムライがいたとは。次こそ勝つてお前を全生徒の前で土下座させてや・・・いやいや、それだと変な疑いがかかる。）」

箒は首をふり考え直した。

「（お前に勝つて一夏に良い所をみせて・・・って、なんであいつのために勝たなきゃいかんだ！）」

箒は自分の頭をポカポカたたいて、妄想にふけこんでいた。

「（おのれ、大神一樹っ！私にこんな思いをさせるとは、今に見ておれっ！）」

アリーナに向かう一樹に悪寒が走る。

15分後。今度はアリーナでセシリアとＩＳの組手。一樹は更衣室でＩＳスーツに着替え、格納庫にいた。

「それがお前のISスーツか？貴族みたいな服だな。」

「これは神崎グループが開発した新型ISスーツだ。俺の専用機に合わせて作ったものだ。」

千冬先生と山田先生が、コンテナと一緒に歩いて来た。今回は両先生の立会いのものとの模擬戦だ。外を見ると剣道のときよりもギャラリーが多い。一夏以外の男性操縦者を見るのがよっぽど気になるのか。

「大神、それが新型のISスーツか。品が良すぎるな。」

「大神くん、あなたのISが神崎グループから届きました。メンテナンスもバッチリです。」

コンテナが開き、中から一樹専用ISが出てきた。それは一夏の『白式』や、セシリアの『ブルー・ティアーズ』とも全く違うISだった。操縦席からコードが伸び両肩部分にブースターみたいな物があり、両腰に刀みたいのがさげていた機体でなんだか侍を思わせるような雰囲気を持つ。

「これが俺の専用機『光武F式』だ。装備は今の所は近接ブレード2つで肩にあるブースターを使って戦う、近接戦闘主体のISだ。」

一樹が自慢そうに入っているが、この装備でセシリアと戦う事は自殺行為だと一夏は目に見えている。なぜなら一夏はブレード『雪片』一つでセシリアと戦った人間だからだ。

「ちょっと待て、その装備じゃ俺の二の舞になるぞ」

「馬鹿者、大神はお前みたいにへマはしない。」

千冬先生から厳しい言葉をもらった。千冬先生は一樹の編入試験のIS操縦の教官だったから一樹の操縦はすでに見ている。しかしあの千冬先生がああ言う所は見ることがない。まるで自分を上回っている事を言っているみたいだった。兄弟だからわかるのか、一夏はそう悟った。

表で待っているセシリアを待たせるのも悪いだろう。一樹は乗り込むかのようにISに搭乗した。一樹のISは操縦席に座ったと同時に機体から伸びるコードが彼のISスーツのコネクターに接続され

た。あのコードが何の役割をするのか、このとき一夏はまだわからなかった。

一樹がカタパルトに乗り、飛び出す前に山田先生からルールが告げられた。

「アリーナの使用時間は30分です。勝負は1本。先にISのシールドエネルギーがなくなった方が負けです。引き分けの場合はシールドエネルギー残量で勝敗を分けます。」

「わかりました、じゃあ行ってきます。」  
「そう言くと勢い良く飛び出し、空で待っていたセシリアの前についてた。」

「待たせたね、セシリアくん。」

「それがあなたのISです。スーツ・デザイン・武装も全く違いますわね。でも見たところ武器はその2つのブレードのみ。一夏さんの二の舞になりますわ。」

一夏と同じセリフ。セシリアの機体『ブルー・ティアーズ』は中距離射撃型IS。近接戦闘型ISである『光武F式』では分が悪い。それは『白式』も同じである。

「当たり前だ、今の武器はこの刀のみ。二刀流の白兵戦が俺の主流だ。」

圧倒的にこっちが不利なのに、このとき一樹は余裕な顔していた。

「両者、位置につけ」

千冬先生のアナウンスが流れる。二人は位置につき、一樹は二刀を鞘から抜き構えた。

「（どうゆうことですか！機体はわたくしの方が有利なのは絶対。なのにあの澄んだ顔はなんですか）」

「3、2、1、始め」

開始のアラームが鳴る。

「先に攻めさせてもらいますわ！」

セシリアが先攻に出た。主力装備ライフル・スターライトmkⅠ  
ⅠⅠ、ビット型武器ブルー・ティアーズのレーザー・ミサイルの狙  
いを一樹に向け撃ち放った。

一樹はこれをスイスイかわし、セシリアに接近する。これを防ごう  
とビット型武器ブルー・ティアーズのレーザー、ミサイルの照準が  
一樹に定まり一樹に集中砲火がいく。見ているギャラリー、一夏も  
これはダメかと思っただが、信じられないものを見た。

彼はこれらをすべて二刀で防いだ。レーザーを弾き返し、ビット・  
ミサイルを斬鉄剣で切ったかのようにキレイに両断した。攻撃をく  
ぐり抜けセシリアの横を通り過ぎながら二刀の斬撃を入れた。彼女  
のシールドエネルギーは2撃により結構削られた。

「くっ、まだまだですわ！」

残ったビットとライフルで、一樹に対抗しようとした。だが一樹の  
機体にある変化が起きていた。機体の両肩にあったブースターから  
火が噴射された。

すると一樹はスゴイスピードでセシリアに接近した。レーザー・ミ  
サイルを撃つが、向こうが速すぎて一発も当たらない。

「（そんな！わたくしの攻撃が当たらないなんて。いくらISでも  
あんなに速く動くことなんて不可能よ）」

そう思った瞬間、目の前に一樹がいた。一樹の刀が青く光り刀身に  
雷が帯びていた。

「ダメツ！避けられない！」

「狼虎滅却……快刀乱麻あ！」

会心の一撃を受けたセシリアは絶対防御が発動し、シールドエネル  
ギーがゼロになった。その瞬間、終了のアラームが鳴った。

「勝者・大神一樹！両者は速やかに下降すること」

千冬さんの判定を受けた二人は下に降りていった。

「セシリアくん、大丈夫かい。」

「敗者に声をかけるなんて情けのつもりですか？私が女だから慰め  
ようかと？いらぬお世話ですわ。」

セシリアの心はこれまで味わった事のない敗北感に包まれていた  
「とてもいい勝負だった。ありがとう」

彼女はキョトンとしていた。なぜお礼を言われるかがわからなかった。

「なぜですの！敗者が勝者にお礼を言われる筋合いはありませんわ。代表候補生が敗北、それも男に負けるなんていい恥さらしですわ。」

「勝敗なんて関係ないよ。この模擬戦で君と仲良くなりたかった。君のような優れた操縦者と出会えて嬉しいんだ。また俺と手合わせをしてくれるかい？」

こんなにまつすぐな瞳を持つ男性は一夏だけだと思っていた。でもこんな真摯な態度は彼女の心に衝撃を与えた。

「か、か、考えさせていただきますわ、失礼します。」  
この言葉にセシリアは顔を赤らめ、その場を立ち去る。

一樹は格納庫に戻り、一夏・千冬、山田先生に出迎えられた。

「大神くん、ただいまの戦闘時間は5分。その撮影したビデオがこれですので、今後操縦の反省点を改善するに役立ててください」

一樹はこの模擬戦を撮影したビデオの入ったデータを山田先生からもらった。

「スゴイ動きだったな、大神。今度お前のIS教えてくれよ。」

「馬鹿者、大神は基礎も応用も出来ないお前とはわけが違う。貴様は基礎から勉強し直せ。でなきゃ大神のISを知ることが出来んぞ。」

千冬先生から厳しいアドバイスをくらった一夏。

「そう落ち込むなよ、今度はお前と模擬戦やってみたいし・・・」  
慰めようとする一樹だったが、千冬先生の厳しいアドバイスは彼だけではなく一樹にも降り注いだ。

「大神、お前は猪か。射撃武器もあつたのに装備せず、ブレードだけで突っ込みおつて。戦術をもっと勉強しろ。チーム戦では足を引張ることになるぞ。お前ら二人これから私たちの特別補講を受け

させてやる。ありがたいと思え」

この二人は千冬先生と山田先生の特別講習で夜まで勉強させられた。

シャワーを浴びてるセシリアは昔あることを思い出した。子供のころ親交のあった、フランス貴族・ブルーメール家当主のグリシーヌ・ブルーメールに会い、彼女が昔の事を話したときのことを。

「マドモアゼル・オルコットよ。私が若き頃、東洋の国・日本から一人のサムライという男が来た。そのサムライは何も迷いもない強い瞳を持ち、澄んだ綺麗な目をしている。私に真の誇りというのを教えてくれた。お前もいずれその心を持つ者と出合うだろう。」  
女尊男卑のこの時代、心の強い男なんて見たことがないし実の父親ですら冴えない男だった。だからそんな男いるわけがないと思っていた。

でも一夏という強い瞳を男性に出会い、もう一人の強い瞳・そしてサムライという心を持つ男性・大神一樹に出会った。

「（一夏さん・大神さんあなたたちのこと、もっと知りたい）」  
彼女は二人に意識し始めた。

一夏・一樹の二人は、箒・セシリアに対しライバル・恋心などの感情を植え込んだ。一樹はやや気づいていたが、一夏はそのことに気づかず特別補講に苦しんでいた。

第三話 最後のサムライ（後書き）

タイトルは映画「ラストサムライ」から

## 第4話 スナップ・パニック

第5世代とセシリアとの手合わせから数日。

「なあ、大神。この間聞きそびれちゃったけど、お前のISSって第5世代型なんだよな。どういふのか教えてくれ」

「そうですね、私も気になります。大神さん、あなたの専用機について詳しく説明してください。」

「私も教えてくれ。」

一樹は一夏・第5世代・セシリアから、自分の専用機・第5世代ISS「光武F式」の説明を迫られた。光武F式はセシリアとの組手で全生徒の間に広まり、当然「男が動かすISS」なので興味を抱くのも当たり前なのである。その要求を受けた一樹は説明する。

「じゃあ説明するよ。光武F式は神崎グループのもと作られた第5世代ISSだ。その特徴は操縦席にあるコードをISSスーツに直結することで、従来のISSよりも操作性が良い所だ」

一夏・セシリアは気になったあのコードはそういう意味があったと納得する。

「後ろにあるのは機動性と瞬発力を強化するブラスター『疾風改』。近接戦闘型である機体に必要なのは、間合いを縮める機動性と高い攻撃力を出す力だ。それを補うための装備だ。」

セシリアの集中砲火を出来たのはこれのおかげだ。シールドエネルギーがあつという間に0になったのも、このブラスターの瞬発力強化によるもの。

「大神さん、あなたの武器の二本の刀、通常のISSが装備する物と違いますわね。」

「あれは光武F式の主力装備は両腰に差した刀『銀狼』『白狼』だ。この装備は特殊な金属できていて、シールドエネルギーを刀身にコーティングすることで攻撃力を増幅出来るんだ。」

「俺の白式と似ているな。エネルギーで攻撃力を上げるのは」

「一夏の専用機「白式」は自分のシールドエネルギーを使いバリアーを無効化できる攻撃特化型ISだ（欠陥機のレットルが貼られている）。しかしこの刀は少し違う。」

「白式のこととは調べさせてもらったよ。シールドエネルギーで刃を形成の白式と違う所は、コーティング時、少量のシールドエネルギー以外にもう一つ別のエネルギーと混合してコーティングすることで攻撃力強化をしている。シールドエネルギーの消費が少量で済むことから、白式よりも燃費が良いんだ」

「マジかよ、かなり高性能じゃん。」

「一夏がうらめしそうな顔をした。ここで箒が疑問を抱いた。」

「シールドエネルギー以外に何のエネルギーを使っているんだ。」  
それには3人同時に思ったことである。

「すまないが俺もよくわからないんだ。設計図を見た時はそのエネルギー名が『R陽子』と書かれているだけで詳細が書いてなかった。」

「『R陽子』。それは従来のISになれば、マニュアルに載っている用語でもない。どういう意味かわからなかった4人にはその疑問が残ってしまった。『R陽子』について考えているとき予鈴がなつた。」

「そろそろ時間だ。もっと知りたい場合は目次にある『登場IS・兵器』で見てくれ。」

読者に解説する。一樹。と横から一夏が

「誰に話してんだ？」

とツッコミをいれる。

今日の授業はISの操縦訓練。

「まず基本的な飛行操作を行う。大神、織斑、オルコットやってみせる。」

千冬先生に言われセシリアは待機状態にあつたイヤリング状のブルーティアーズを展開し、続いて一樹も待機状態にあつた絵馬状の光武を展開したが、一夏はまだ出来ない。まだ展開がうまくできないらしい。

「織斑、何をしている。熟練者なら展開に1秒もかからんぞ」

「イメージ、イメージ・・・来い！白式！」

力を込めなんとか白式を展開した一夏。

「よし、飛べ」

大神、セシリアは勢いよく飛んだ。一夏はふらつきながらもなんとか空へ飛んだ。下から筈が不安そうに見ていた。

グラウンド上空を旋回する3機。大神機、セシリア機を先頭に後ろから一夏機が来る

「遅いぞ、織斑。スペック上、出力は白式が上だ」

一夏はISを動かしてまだ一ヶ月も経っていない素人同然。

「ええと・・・『自分の前方に角錐を展開するイメージ』って」

横から速度を落とした大神、セシリアがアドバイスをする。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そういわれてもなあ」

「そつだ、Don't think・Feel 考えるな、感じるんだ」

昔の香港映画にそんな言葉があつたが、今どきの若者は知る訳がない言葉に二人は首をかしげた。

「三人とも、急降下と完全停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ」

「はいっ。では、お先に」

セシリアは急降下し、地上数センチの完全停止を難なくクリアした。

「じゃ、下で待っているぜ」

一樹も急降下、地上数センチの完全停止をクリアした。最後は一夏の番。スゴイ速さで急降下した。

キィ

ン！ズド

ン！

急降下ではなく墜落だった。グラウンドに大穴があき、下を見ると一夏の顔が埋もれていた。一樹は下に降りて一夏を掘り起こした。

「アラレちゃんかお前は。大丈夫か、一夏」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

肩を落とす一夏を心配すかのようにセシリアが寄ってきた。

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう。それにISを装備していて怪我などするわけがないだろう。」

「箒が降りてきた。」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

二人がだんだん仲が悪くなっているのは気のせいだろうか。一夏はそう思い、一樹は昔見たすみれとグリシーヌの喧嘩を思い浮かべた。

「お前ら、何をやっている！無事ならさっさと上がって来い！」

上から千冬先生の怒鳴り声に驚き、4人はすぐに穴を登った。

「次は武装展開だ。では始める。」

一夏は『雪片式型』、セシリアは『スターライトmkII』と展開し、一樹は両腰の刀『銀狼』・『白狼』を抜いた。

「織斑、遅いぞ。0.5秒で出せ。オルコット、そのポーズはやめ

ると言ったはずだ。・・・大神、武装はそれだけか？」

「二刀は量子化しにくいから腰に差しているんです。他の武装は調整中で。」

ISは武器を量子化しデータ保存することができ、複数の武器を内蔵することができる。でもこの二刀は特殊金属のせいかな量子化しにくく、IS待機状態の保存がやっとのこと。そのため展開すると同時に常に差している状態である。

「そうか、まあいい。それじゃあ各自訓練を始めろ！」

終鈴5分前。

「今日の授業はこれで終わる。それとクラス対抗戦だが織斑ともう一人、大神が特別に参加が認められた。代表はクラスから一人が原則だが、単独名義で出場することとなった。」

千冬先生から衝撃の発言。これにはクラス一同が騒然する。

「大神くんが特別出場ですって」

「やっぱり男だからかな、上も気になるからデータがほしいのかも」

「スゴイですわ大神さん、単独名義で出場なんて。このセシリア・オルコット、心から祝福を申し上げますわ」

「えっ、ウソでしょ」

これには一樹も驚いた。聞いていたクラス対抗戦に単独で参戦するのだから、トーナメント表に1組、2組、3組、大神一樹と表記されるということになる。

「織斑はクラス代表の名に恥じぬよう精進しろ。では授業は終了だ。あっ、言い忘れたが織斑は開けた穴を埋めておけ。では解散」

千冬先生から、さりげにグラント整備を言い渡された一夏。それを不憫に思った一樹は整地を手伝った。ふと一樹は訓練時、視線を感じたことを一夏に話した。

「なあ一夏、訓練のとき誰かに見られている気配しなかったか？」

「いや、なにも感じなかった」

「そうか・・・」

一樹は首をかしげ、黙々と整地を手伝った。

その日の夕食後の自由時間。一樹・一夏は2人の女子生徒によびだされて、寮の食堂に連れて行かれた。

「織斑くんクラス代表アーンド大神くん特別出場おめでとう！」

壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれ、下に黒マジックで『&大神くん特別出場記念パーティー』と書かれている紙がかけてある。まあ今日知ったから慌てて書いたんだろう。

「まさかウチのクラスから二人も出場するなんてね」

「ホント、同じクラスになれてラッキー」

「二人ともセシリアとの、戦いもイイ線行ってたよね」

「織斑くんのISもカツコイイけど、大神くんのISも武士見たいでステキ。」

女子たちが二人の話題でキヤイキヤイしている。

「人気者だな、お前ら二人」

篤はそうつぶやいて茶を飲む。

「どうも、新聞部です。話題の新生、織斑一夏さんと大神一樹さんに特別インタビューをしに来ました。あ、私、副部長の篤薫子です。」

二人に名刺を渡す篤。

「ではまず織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……まあ、なんていうか、がんばります」

冴えないコメントである。篤の「馬鹿者」という声が小さく聞こえた。

「冴えないけど、まあ適当に捏造しておくからいいとして」

この人、相当綱渡りなコト繰り返したんだろうか、一樹はまるで命懸けの博打をやって来た人のように見えた。一夏にもう何もないと悟った彼女は、次に一樹をインタビューした。

「じゃあ次は大神くん！ 特別参加ということで出場することになったけど、その感想は」

「特別出場出来ることをとても嬉しく思いますので、参加する以上粉骨碎身の覚悟で頑張ります。あと代表の一夏によい結果を期待しています。」

一夏以上にいいコメントを言い残した一樹。

「いいね〜。次にあの第5世代ISについて何か教えてくれませんか」

「自分のはまだプロトタイプなので、第5世代型はあの1機だけですとしか言えません。」

「じゃあ最後の質問。IS学園にきた理由は」

「男でISを動かせるのにはそれなりの訓練が必要です。学園に入った理由はもつと上手く操縦できるようにになりたいからです。」

「ありがと。じゃあ、代表を一夏くんに譲ったオルコットちゃん・

セシリアは息を整え語りだす。

「わたくしはこうゆうの苦手ですが、まあいいでしょうコホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかということ・・・

「・・・は長いから適当に捏造しておくね。」

セシリアはズルツとコケた。

「じゃあ最後に写真とるから、まず織斑くんと大神くん握手をしている写真ね。ハイ、チーズ」

二人の写真は、後に生徒間で高く売買されることになるだろう。

「今度は大神くん、織斑くん、オルコットちゃんの手の甲を重ねて3人で撮るよ。」

その瞬間、クラスの女子全員が目を光らせた。

「その写真は貰えますの？」

「もちろん。」

「(貰えたら額に入れて飾って置きますわ。あと一夏さんと大神さ

んのツーショットも)」

「じゃあ撮るよ、ハイ、チーズ」パシャ  
撮り終わるとクラス全員がフレームに入っていた。箒もどさくさに  
紛れて一夏と一樹の間に入っていた。

「あ、あなたたちっ！せっかくのスリーショットが台無しですわ！」

「まあ、まあ、まあ」

「オルコットだけ抜け駆けはさせないわよ」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

クラスの全員が同じ行動に入るとは想定外だった。3人で撮ると  
き全員が目の色を光らせていたのはこうゆうことだった。ちなみに  
一樹・一夏のIS操縦時の隠し撮り写真も生徒間で売りさばかれい  
ることはあまり知られていない。

この後ドンチャンは続き、パーティーは終わったのは10時過ぎで  
一樹、一夏は疲れて布団に潜った。布団に入って一夏はすぐに寝て  
しまったが、一樹はパーティーとき黨の

「IS学園に入った理由は」

について考えていた。一樹はISを使いこなしたいと言ったが、彼  
のIS操縦は非公式であるが世界一の実力で、基礎を勉強する必要  
なんてないハズ。その世界一の間人がなぜ今更、この学園に入った  
のか。一樹は自分の机の引き出しから手紙の入った封筒を取り出し  
て読みはじめた。そして4、5分経ち、読み終わったところであつ  
た。

「一郎じいちゃん、俺をIS学園に行かせた本当の理由は何？」

文末に差出し人の名前が書いてあり、「大神一郎」と書かれていた。  
その手紙は「大神一郎」の書いた遺書である。

## 第4話 スナップ・パニック（後書き）

タイトル由来は「フルメタル・パニック」より

## 第5話 中国からの転校生X

「く走れ 高速の 帝国華撃団」

一樹は剣道部の朝練の後、授業が始まるまでの間iPodを聞いていた。箒も席に座って不機嫌そうな顔で外を眺めていた。また一樹との勝負に負けたのである。

「おはようございます、大神さん」

セシリアと一夏がそろってきた来た。この二人も対抗戦に備えて朝練をしていた。

「おはよう。一夏クラス対抗戦頑張れよ。」

だんだんクラスの生徒が登校してきた。するとあることを耳にはさんだ。

「おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校？、一樹以外に？

「転校生？この時期に?!」

「確かIS学園への転入って、国の推薦がないとダメなんじゃないか？ たか？俺は特例で入れさせてもらったけど」

「なんでも中国の代表候補生らしいですわ。私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

なるほど、それなら国のお墨付で転入出来る。さすがはセシリア。代表候補生らしく、他の候補生の情報をしっかり仕入れてる。

「どんなやつなんだろうな」

「きつとチャイナ服で、メガネで、そばかす・三つ編みで関西弁を話す子かな？」

明らかに誰かを指しているような発言。一樹の知っている中国人女性はこの人しか知らない。

「む……気になるのか？」

箒は二人を睨んだ。

「ん？ ああ、少しは」

「俺も、少し」

「ふん……」

「箒の機嫌が悪くなってしまった。すると女子たちが寄ってきた。」

「二人とも、クラス対抗戦、頑張ってるね。一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られるのよ。」

「二人も出場するんだから、どっちか脱落しても最後の一人が辿りつけば商品はもらえるよね」

「俺には商品出ないよ。先生が特別出場者は対象外だって言った。」

「その言葉に女子たちががっくりする。その後一夏に思いっきり発破をかける。」

「織斑くん！頑張ってる！！男の底力見せてあげて！！」

「彼女たちはああ言っているが、100%商品目当てだろう。」

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男が弱気でどうする。負けたら承知しないぞ」

「クラスの女子、セシリア、箒が好き勝手に言ってる。一夏は一樹に助けを求めた。」

「大神、なんとか言ってるやってくれ」

「ファイトオー、一夏。」

「助ける空気じゃなかったのか、フォローの言葉が何も思い浮かばなかったのか、あっさり一夏を見捨ててしまった一樹。南無三。」

「でも、今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

「教室の入り口から声が聞こえた。見るとツインテールの気の強そうな子が立っていた。」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。久しぶりね、一夏。」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「なんだ、知り合いか？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

「宣戦布告？ 決闘の果たし合いかい。」

「なっ！ なに言ってるのよ、対抗戦に決まっているでしょ。それにアンタ誰よ！」

「申し遅れた、俺は大神一樹。今度の対抗戦に特別参加するんだ」

「へえ、あんたね。「世界で二人目の男性IS操縦者」っていうのは」

鈴は一樹に寄って彼の顔をジッと見る。

「ふっふん、イイ男じゃない。でも、あたしを落とすのは諦めなさい。」

「お、俺は何も・・・」

何がなんだかわからないが、ふられてしまった。

「さて、一夏。今はあなたに用があ・げんこつ！」

永遠の5歳児が叩かれるような音が響いた。

「いったく、ちよつと何すんのよ！ って千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。早く自分の教室に戻れ、バカモノ」

「はっい。一夏、またあとで来るからね！ 逃げないでよ！」

彼女はあっかんべくをして去って行った。

授業が終わり、昼食の時間。一樹、一夏、篝、セシリア、鈴は食堂にいた。

「一夏！ どういうことか説明してもらおうか！」

「そうですね！ ま・まさかこの人とつ・付き合っているらしいの！」

篝とセシリアは一夏に迫る。

「セカンド幼馴染だよ。篝がファースト幼馴染だ」

「箒が引越していったのが小四の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。つまり二人は入れ違いで引越して来んだ。中二に転校したから会うのは一年半ぶりだな」

「（幼馴染にファーストもセカンドもあるのか）」  
数奇な出会いだな。

「で、こつちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼なじみで、俺の通っていた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ。初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

軽い火花が散った。

「こいつが大神一樹。ここで唯一の男仲間だ」

「改めまして、よろしく」

「こちらこそよろしく」

「ちよつと！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「・・・誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかご存じないの？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・！？ い、い、言っておきますけど、わたくしはあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

「い、言ってくれますわね・・・」

「（落ち着くんだ、セシリアくん）」

怒りが頂点に達する前に一樹が止めた

「あなた、対抗戦に特別出場するんですよ。特別って言うくらいだから強いんですよ」

鈴は一樹に訪ねた。

「たぶん、それ以上が決めたからな」

「まあ、頑張つてね。それより一夏。アンタ、クラス代表なんだ

つて?」

「お、おう。成り行きで。」

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

「そりや助か・・・」

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは二組でしょう!? 敵の施しは受けませんわ」

「一夏の決定権は二人の発言で飛ばされた。」

「あたしは一夏に言っただけ。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて図々しいことを」

「後からじゃないけど。あたしのほうが付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ!」

何の勝負をしているのか。男子にとってはどうでもいいが、女子にとっては大事なことらしい。なんとか軌道変更しないとますますヒートアップする。

「そういえば、親父さん、元気にしてるか?」

「あ・・・うん、元気・・・だと思う」

なんとか軌道変更は成功だが、元気だと思っただけのことなのか。

「それより、積もる話もあるでしょ? 放課後にでも・・・」

「あいにくだが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですよ」

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏!」

鈴は食器を片付けて食堂を出て行った。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間を使っているという事実をお忘れなく」

「前途多難だな、一夏。俺も付き合っよ。」

放課後、グラウンドに集まった4人。

「な、なんだその顔は。おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうか・・・」

「篠ノ之さん！？ ど、どうしてここにいますの！？」

一樹と一夏、セシリアの前にいるのは箒。しかも純国産のIS『打鉄』を展開している。何というか、箒の侍のような雰囲気によく合っている。一樹の光武を展開すればもつと似合っ。

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

確かに箒にも頼んでたし、格闘訓練の相手を頼んだ。でも、あれは箒に近接格闘のコツを教えてもらっっていう意味だったんだが、訓練機を借りてくるとは。おまけにライバルである一樹にISで勝負するため目的も兼ねてだろう。恋・対抗心ある女子の行動力はスゴイ。

「くっ。まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるだなんて・・・」

とても悔しそうな声を上げるセシリア。一樹と一夏の男二人で訓練できると思っていたらしく、すごく悔しそうだ。

「では一夏、大神、始めるとしよう。剣を抜け」

「お、おうっ」

「いくぞっ！」

一夏は雪片を展開し、一樹は銀狼・白狼を勢い良く抜いた。

「では・・・参るっ！」

と、そこにセシリアが割り込んだ。

「お待ちなさい！ 一夏さんとお大神さんのお相手をするのはこのわたくしですわ！」

「ええい、邪魔な！ ならば斬る！」

「訓練機」ごときに遅れを取るほど、優しくはなっってよー！」

そしてそのまま二人は戦闘に入ってしまった。一樹と一夏は顔を見合わせ、相談する。

「どうするんだ、一夏」

「しょうがないからお前が教えてくれ」

「わかった。男同士・女同士で訓練するか」

戦闘をしている二人の方を見る。二人の戦闘を見て、星一徹のようにしごかれると一夏は思った。二人は急にこつちを振り向いた。

「一夏！大神！」

「何を黙って見ていますの！？」

「いいっ！？　だつてどつちかに味方したらお前から怒るだろ？」

「当然だ！」

「当然ですわ！」

「（よくもまあ、この二人好かれたな一夏）」

どちらかに加勢しても怒られる。加勢せずに傍観していても怒られる。なら他に選択肢はないのか。一樹が考えた。

「じゃあこうしよう。二人対一夏で勝負し、一夏がダウンしたら俺と交代、回復したら俺と交代っていうのはどうかな。その繰り返しで」

「いいだろう。覚悟しろ一夏。その後は大神お前だ」

「まあ、いいでしょう。一夏さんが近接・中距離両方を訓練できますし」

「おい、それって俺が地獄になるんじゃないか」

「（どつちかに加勢して、どつちかに恨まれるよりはマシだよ。それにお前は『クラス代表』の看板を背負っているわけだから、厳しくしなきゃ勝てないぞ）」

一夏に耳打ちした一樹。体を犠牲にして、好感度を極力落とさない選択肢、大神家の考え方である。これしかないので一夏はそれに乗った。結局星一徹のようにしごかれてしまったのである。

第5話 中国からの転校生X（後書き）

タイトル由来は映画「遊星からの物体X」より

## 第6話 ICHIKA 約束の男

時は日入り、辺りは暗くなってきた。グラウンドに、あおむけに倒れている一人の男がいた。一夏である。一樹の考えた特訓法にのつた結果である。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ……お前ら……俺を……殺す……気……か……ゼエ」

「今日は、このくらいにしておきますか」

「情けない、それでも男か。鍛えてないからそうなるのだ」

「二対一じゃこうなるって」

その横で一樹がケロツとした顔で、立っていた。

「生きているか、一夏」

「それに比べて、大神さんは平然としていますわね。あんなに動いたのに、疲れがきてなさそうですし」

「俺はあと5時間はイケるよ」

「（お前のIS稼動時間は何時間だよ）」

心の中でつぶやいた一夏。あつという間に打ちのめされ、休んでいる間、一樹の訓練を見ていると二人相手に全く疲れる色をしていなかった。

「剣道以外にもISでお前に負けるとは、何たる未熟！明日こそは私が勝つ！」

剣道以外にもISで一樹に対抗心を燃やす篤。よほどの決闘マニアなのか。篤と一樹の戦闘訓練は激しいチャンバラを繰り広げ、あつという間に一樹に軍配が上がった。

「では、一夏さん、大神さんのちほど」

セシリアはそう言い残すと去って行った。

「私たちも寮に戻るぞ」

「先行つててくれ、俺はまだ動けない」

「俺も一夏と後から行くよ」

「しょうがない奴だな、後から来い。大神、明日の朝練も私と手合わせしてくれ」

「わかった、箒くん。じゃあとで」

箒も去って行った。あれ今、箒のこと名前で。

「大神、今、箒のこと名前で言わなかったか」

「ん、ああ。今日の朝練のとき、（お前は私が認めた、好選手だ。<sup>ライバル</sup>だから私のことは名前で呼んでくれ）って言われたんだ」

あの箒が名前で呼ぶことを許すなんて、どついう心境の変化だ。

数十分後、一夏はなんとか動けるようになり、二人は更衣室にいた。

「これからクラス対抗戦まで、ずっとこの調子かよ」

「二人もお前のためを思ってやってくれてんだ。期待に答えてあげないと」

一樹はISスーツを脱いで、制服に着替え終わっていた。一夏はまだISスーツを着ていて、ぐったりしていた。よほどしごかれたんだろう。何せ打ち込まれた上に撃ち込まれ、星飛雄馬も逃げたくないような訓練だった。

「お疲れっ、一夏！飲み物はスポーツドリンクでいいよね。」

元気な声が出た。一夏のセカンド幼馴染・鈴だ。一夏にタオルを

「あれ、カズキ、あなたも一緒？。一夏の特訓に付き合ってたの？」

「ああ、一夏がクラス代表で出るからな。俺も訓練がてら、協力しようと思って」

「へえ、やさしいのね。あつゴメン。飲み物とタオル、一夏に分しかないや」

「いいよ、いいよ、俺先に帰るからそんなに気を使わなくて。じゃあ一夏、先行ってるよ」

一樹はさっそうと更衣室から出て行った。本当は一夏と鈴を二人きりにさせてあげるといふ、彼の心遣い。一年半ぶりに再会したんだから、二人きりにさせてあげるのが武士の情けである。

「（アレがサムライというのね。ありがとうカズキ） やっと・・

・二人きりになれたね」  
小さな声で鈴がつぶやく。  
「ん・ああ、そうだな」

1025号室、一樹と一夏の部屋。一樹はシャワーを浴びて、寝巻の甚平に着替えて布団につくところだった。

「〜はじめてのことなのに〜みんな知っている〜」

iPodをスピーカーにつなげて音楽を流していた。

「一夏のやつ、遅いなあ、いつまで話しているんだ。・・・まあいいや、カギは持っているんだし先寝るか、明日も朝練だし・・・」

iPodを切つて、布団に入ろうとした瞬間！ドアが勢いよく開いて鈴がズカズカ入り込んで来た。

「カズキ！部屋代わって！」

「いいっ！」

なんだ？一夏と一緒にじゃなかったのか。あのあと何話したんだ？わけがわからなかった。一夏も後からきて更衣室での出来事を、かくかくしかじか説明した。

「というわけで、部屋代わって？」

彼女は可愛げで一樹に願う。彼女の要求に戸惑う一樹。

「無理だよ、部屋を男女混合にするのは禁止だし、代わっても俺は何処で寝たらいいんだい？」

「そうだ！男女の相部屋なんて、私は許さんぞ！」

鈴の後ろに、箒が寝巻の長着を着て立っていた。一樹は彼女の寝巻を見たのは初めてで、なかなか綺麗だったが今は見とれている場合じゃない。

「私は一夏の幼馴染だからいいの。ねっ一夏っ」

「俺に振るなよ」

「とにかく部屋は代わらない！お前はさっさと自分の部屋に戻れ！」

「そういう訳だから、一夏も戸惑っているからここは引き取ってもられないか、鈴」

鈴はむうつと顔をした後、話をそらそうと一夏に子供るとき交わした約束を話した。

「ところで一夏、約束覚えてる？」

「約束？」

「そ、小学生の時の・」

「無視するなっ！こうなったら・成敗っ」

箒が竹刀で鈴に斬りかかった。これはヤバイと思い、一夏と一樹は止めに入ろうとした。鈴は自分のISの右腕を部分展開し、箒の攻撃を防いだ。

「部分展開！？しかも早い」

「（この子、なかなかデキるな）」

「いまのが生身の間人だったら、本気にあぶないよ。ま、いいけどね」

箒は竹刀をさげ、鈴は展開を解除した。展開速度が早いほど、その者が強いことを意味する。つまりそれだけ鈴が強いということである。

「そ、そうだ、約束がどうか言ってたな。何の話だ。」

「あ、うん！・・・あのさ・・・えっと・・・覚えてる・・・よね」

一夏は手をあごに抑えて思い出そうとする。

「えっと・・・あれか。鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を・・・」

「そう、それ！」

「おごつてくれるってやつか」

いい約束だと思うが、鈴はハイッ？という顔をした。

「だから、俺に毎日メシを作ってくれるってことだろ。いや、一人暮らしの身にはありがたい。」

バシッ！鈴は一夏の頬を強く叩き、彼の頬には手形がくつきり残った。

「最っ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて！、男の風上にもおけないヤツ！犬に噛まれて死ねっ！」

彼女は激昂し、一方的に一夏を責めた。一樹と箒はいきなりすぎて、

キョトンとしていた。

「な、なに怒ってんだよ。ちゃんと覚えていただろう。」

「約束の意味が違うのよ！意味が！」

「だから説明してくれよ！どんな意味があるってんだ！？」

聞くかぎりとても良い約束である。女の子にご飯作ってもらえるなんて。だが他に何の意味があるのか、一樹・箒には理解不能だった。一夏に説明を迫られた鈴は、顔を少し赤らめ小声で言った。

「せ、説明なんて、そ、そんなこと言えるわけないでしょ。・・・

じゃあこうしましょう。来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方になんでも言うことを聞かせられる。」

「おういいぜ。俺が勝ったら説明してもらおうからな」

「そっちこそ覚悟しなさいよっ！」

彼女はカバンをもって出て行った。

「一夏」

箒が怖い顔で一夏を睨みつけた。

「馬に蹴られて死ねっ！」

そう言い残すと竹刀を持って出て行った。

「女のビンは心身共に痛むなあ。お前この調子が続けば、大奥みたいになってしまうぞ。あっ、頬がまだ赤い・・・」

「あいつつ。女ってなんであんなに怒りっばいんだ」

一樹は氷を一夏に渡した。なんでこうなったのか。一樹と一夏はもう何がなんだか、わけがわからなかった。

一樹・箒・セシリアの一夏に対する星一徹のような指導が一週間続き、そしてあつという間に対抗戦当日を迎えた。

第6話 ICHIKA 約束の男(後書き)

タイトル由来は映画「HACHI 約束の犬」より

## 第？話 タタミネーター

試合当日、アリーナの席には生徒以外にもVIP席にお偉いさんが座っていた。今大会の目玉は、何といても二人の男性出場である。しかも専用機持ち同士の戦いとあって、アリーナは満席。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋めつくされ、会場の外ではモニターで試合を観戦する生徒もいる。第1試合の組み合わせは一夏と鈴で、一樹は第3試合に単独名義出場とのことである。一樹、篤、セシリアの3人は千冬先生、山田先生とともにモニタールームからその試合を観戦することになった。

モニターには鈴の「甲龍」が映ってる。ブルー・ティアーズ同様第3世代のISで、肩の横に浮いたスパイク・アーマー装甲が、攻撃的な主張をしている。

「一夏は大丈夫だろうか・・・」  
「どういうことですか？」

「一夏はISを操縦してから一ヶ月しか経っていないシロウトだ。相手は代表候補生で、不利じゃないのか」

「何を言っていますの、大神さん。一夏さんはこのわたくしと互角に戦ったのですよ？ 心配は不要でしょう」

「でも鈴は一夏とセシリアの模擬戦をビデオで見ているんだ。それに武器・操作・経験のアドバンテージは彼女が上だと思う」

一樹とオルコットが一夏の勝敗予想をしているを話している。それに千冬先生が割り込んだ。

「いや、この一ヶ月で一夏もある程度成長したし、元々あいつには才能があると私は思っている。それにあいつは土壇場で逆転するタイプだからな」

「（一夏、勝てよ）」  
篤が不安そうにモニターを眺めていた。

いよいよ試合開始だ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが聞こえ、一夏と鈴が戦闘態勢に入る。

『それでは両者、試合開始！』

その直後、一夏が展開した雪片式型が鈴の青龍刀・双天牙月に弾かれる。一夏はそのまま旋回して鈴を正面に捉えた。その後も鈴は縦横斜めと、自在に角度を変えながら斬り込んでくる双天牙月を雪片式型でなんとか防ぐ。防戦一方の一夏が距離をとろうとしたとき、鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、一夏は見えない衝撃を受けた。

「あれは一体？」

「弾が見見えなかったぞ」

モニターを見ていた一樹と篤が呟く。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す わたくしのブルー・ティアーズと同じ第三世代型装備ですわ」

「そうなのか？セシリア」

「ええ。しかも、砲弾だけじゃなく、砲身まで見えない。それに加えて砲身が実体じゃないから、どこにでも撃てる……」

「完全にステルスか。これは厄介だな」

一夏の技術はブルー・ティアーズならまだ回避して攻撃できるが、見えないというのは辛い。しかも鈴の技術も加わってかなりの強さを誇っている。一夏は鈴の攻撃をかわしながら、何かを狙って動き回っている。それに気づいた山田先生が呟く。

「織斑くん、何かするつもりですね……」

「瞬時加速だろう。私が教えた。一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出し所さえ間違えなければ、あいつでも代表候補生と渡り合える。セシリアと大神の勝負のとき、大神が使ったものだ」

「わたくしと大神さんの勝負？」

「俺がセシリアくんと勝負のとき、光武のブースターを使ってセシリアくんの攻撃を避けたのと似たものだ。俺の場合は奇襲よりも間合をつめての接近法として使っているんだ」

あの勝負で、一樹の高速移動は疾風改を使った瞬時加速に似たものである。

「しかし、通用するのは一回だけだ。一夏の瞬時加速はあくまで奇襲攻撃。奇襲というのは普通一度しか通用しない」

「そ、そうなのですか!？」

「だが成功すれば一夏にも勝機が生まれる。失敗すれば、おそらくそのまま負けるだろう」

急に一樹は何かに気づいたように立ち上がり、放送席を出て行った。

「すまない、ちょっと席外す!」

「どうしたんでしょう、大神さん。あんなに慌てて」

「どうせ、手洗いだろう。一夏の逆転劇は見れずじまいだな」

箒とセシリアが一樹の途中退席を疑問に思いつたあと、二人がモニターを凝視したとき、ついに一夏が瞬時加速を発動させた。一夏と鈴の距離が一気にゼロになる。そのまま零落白夜を発動させた雪片式型で鈴に切りかかる。

ズドオオ

ン

その直前、大きな衝撃がアリーナを襲った。

「システム破損! 何者かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいですよ!」

山田先生の言葉を聞きながらモニターを見ると、ステージ中央からは黙々と煙が上がっている。どうやら今さっきの衝撃はその『何者か』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたことによるものらしい。アリーナの遮断シールドはISと同じもので出来ている。通常の兵器なら傷をつけることすらできないそれを貫通するだけの威力を持った『何者か』が入ってきた。その事実は観客全員に不安

を与えるには充分すぎるものだった。

煙がはれ、『何者か』の姿がモニターにはつきり映る。そこに映っていたのは異常としか言いようのないISだった。

深い灰色で手が異常に長く、ゴーレムが武者姿をしたような形をしている。何より特異なのが、その『全身装甲』。その巨体も2メートルを超え、全身にスラスター、頭部にはむき出しのセンサーレンズ、腕には先ほどのビーム砲台が左右合計四つある。『何者か』は棒立ちしている鈴めがけてビーム砲を打つ。しかし間一髪、一夏に助けられ鈴は彼に抱えられた。

「バカ、バカ、バカ、一夏なにしてんのよ！はやく降して〜」  
こんなときに何恥ずがしがっているのか。お礼の言葉すらナシだった。

「織斑くん！ 鳳さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！  
すぐに先生達がISで制圧に行きます」

山田先生が一夏と鳳に通信を入れる。しかし、返ってきたのは先生の意に反したものだだった。

「いや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」  
「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」  
「織斑くん！？ だ、ダメですよ！ 生徒さんにもしものことがあったら」

山田先生の言葉をさえぎるように、通信が切られた。モニターを見ると一夏と鈴が『何者か』に向けて飛び出していった。

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 鳳さんも！ 聞いてますー！？」

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！ 何をのんきなことを言ってるんですか！？」  
「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする

んだ」

「・・・先生。それ塩ですけど」

「・・・」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、千冬先生は白い粒子を容器に戻す。

「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを」

「・・・」

イヤな沈黙。山田先生は話を逸らそうと試みる。なんだか無駄な抵抗な気もするが。

「あ、あのですね」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ・・・」

「どうぞ」

「えっ、そ、そんなあ」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ。ダミアンほどではなかったが、人のかわを被った悪魔だ。

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、遮断シールドがレベル4に設定。扉がすべてロックされている」

「そ、それって あのISの仕業ですの!？」

「どうやらこの仕業も『何者か』によるものだ。」

「そのようだ。しかし、三年の精鋭がシステムクラックに実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

「淡々と述べる千冬先生。なんとかセシリアも食い下がろうとする。」

「で、でしたら！ その部隊にわたくしも」

「お前は突入隊に入れないからな。お前のISの武装は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

確かに中距離射撃型で行ったら、敵と一緒に味方まで撃ってしまう。「そんなことはありませんわ！ このわたくしが邪魔だなどと」

「では連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ブルー・テイアーズをどういう風に使う？ 味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定してある？ 連続稼働時間」

「わ、わかりました！ もう結構です！」

「ふん。わかればいい」

千冬先生のマシンガントークにさすがのセシリアも白旗を挙げた。

「先生！大神がいません。さっき出て行ってまだ帰って来ません」  
箒が走って来た。途中退席した一樹が何処にもいない。

「よく探しましたの？！今アリーナは誰も出られないんですよ！あなたの目は節穴ですか？！」

「探した！でも何処にもいない！そんなに言うんだったら自分で探しにいけっ！」

箒とセシリアが言い争い、山田先生が止めに入った。でも千冬先生は違った。

「大神なら大丈夫だ。心配いらん」  
偉く落ち着いていた。その根拠はなんだろうか。あの千冬先生がこう落ち着いているのを見て二人は言い争いを辞めた。

そのころアリーナでは、一夏と鈴が『何者か』との戦闘が続いていた。

「くっ……！」

4度目の切り込み。しかし一夏の斬撃はするりとかわされてしまう。

「馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！アイツの動きが速すぎるんだよ」

『何者か』は全身につけたスラストターの出力が尋常ではなく、鈴がどれほど注意を引いても俺の突撃には必ず反応して一瞬で回避する。一夏シールドエネルギー残量が60を切っていた。零落白夜を出せるのはよくてあと一回。敵は攻撃を受けた後、でたために長い腕を振り回して接近、反撃をしてくる。しかも、その高速回転状態からビーム砲撃までやるのだから回避しか出来ない。

「ああもつつ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴が衝撃砲を展開、砲撃を行う。がしかし、敵の腕はその見えない衝撃を防ぐ。これでもう7度目だ。

「くそつ、なんてやつだよ。後ろにも目があるんじゃないか？」

「ISならハイパーセンサーで後ろも見えるわよ」

異常だった。IS搭乗者が感覚的に後ろを見るなんてことが簡単にできるとは思えない。

「鈴、エネルギーの残りは？」

「150くらいね。離れて砲撃してたから、あまりダメージも食らってないわ。あんたは？」

「俺は60もない。零落白夜もあと一回できるかどうかってところだ。あいつ強いな。でも何か違和感を感じる……」

「違和感？ あいつは違和感の塊でしょうが」

「まあ、そうなんだがな。なにか攻撃のときの動きが変なんだよ」

セシリアとの模擬戦、彼女と箒、一樹との訓練のときも何かが違う。ふと一夏は何かに気がついた。

「なあ、あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？」

「いや、なんつーか……機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

そんなコト小学生でも分かることだ。でも一夏の言っていることはそんなことではない。

「そう言うんじゃないよ。えーと、あれって本当に人が乗っているのか？」

「は？ 人が乗らなきゃISは動かない」

とそこまで言っただけで鈴の言葉が止まり、『何者か』を見た。

「そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているよ……」

「あいつの攻撃はいつも正確だった。正確すぎるほどにな。無人機

ならあの全身装甲も、異様な回避性能も納得がいくしな」

「でも無人機なんてありえないわよ。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

確かにそうだが、そう考えれば全ての違和感は解消される。

「仮に、仮にだ。無人機だったら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対ありえないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

一夏に一策あると知ってか、鈴はにやりと不敵に笑った。

「一夏、どうしたらいい？」

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても。アイツの注意をそらしてくれ。一瞬だけでもいい」

「了解！」

「じゃあ、行くぞっ！」

一夏の出たとこ勝負作戦を信じ、さっきと同じように『何者か』に突撃、攻撃を開始する。ただし、さっきよりも攻撃に集中する。相手の攻撃が何回当たっても構わない。一夏は全力でこいつの注意をひく。

「一夏あっ！」

そんな中、真後ろからいきなりアリーナのスピーカーから大声が響く。その声は筈のものだった。その声に意識を向けてしまった一瞬にも満たない隙をつかれ、一夏は『何者か』の長い腕に殴り飛ばされてしまった。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」



「完璧ですわ！」

客席からブルー・ティアーズのスターライトとブルーティアーズで『何者か』を打ち抜く。『何者か』は電流と煙を出しながら倒れた。シールドバリアーがない状態でブルー・ティアーズのレーザー狙撃を一齐に浴びれば、ひとたまりもない。一夏はここまで計算してたのである。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

「セシリアならやれると思っていたさ」

「そっ・・そうですね。とっ・・当然ですわねっ」

そのセリフにセシリアは顔を赤らめた。

「まあなんにしても、これで終わ・」

ビーツ、ビーツ。白式の警告がなった。

「一夏！あいつ、まだ動いてる！」

セシリアの攻撃をくらってもまだ動いていた。まるでターミネーターだ。『何者か』は一夏に向けて再びビームを発射しようとした。

「ヤバイッ！つてあれ、白式が動かない。ダメだよけられない」

鈴の衝撃砲をまともに受けたのだ。動けなくなるのが当然だが、こんな時に動かなくなるのは勘弁してほしい。『何者か』の左腕のビーム砲の砲口に光が集まる。

「これは本気でヤバイ！頼む、動いてくれ！」

絶体絶命の危機。もうダメかと思つた瞬間、空から何かが飛んできた。

ISスーツに繋がれたコード、両腰に差した刀、サムライを思わせる風貌。そう、光武F式を展開した一樹だった。その右手に銀狼を持っており、『何者か』に突っこんで行った。

でいいいりやあああああああ！！ ガキイイイイン！！

一樹は銀狼で『何者か』の額を貫いた。『何者か』はさっきよりも激しく電流と煙を放出し、光の収束をやめ左腕をおろした。一樹は

左手で右腕の手首を押さえ、機体から出る桜色の光を刀に込めた。

「破邪剣征！桜花天昇！」

突き刺した銀狼から、桜色の衝撃波が放出され「何者か」の頭部を吹き飛ばした。頭部がなくなった「何者か」は完全に機能停止し動かなくなった。どうにか一夏の、絶体絶命の危機は去った。

「もう・・・動かないわ・・・よね」

鈴がおそろおそろ近づき、ツンツンしてみる。本当に動かなくなっただよう。頭ナシで動いたらそれこそおっかない。

「いや、危なかった。なんとか間に合って良かったよ。一夏、大丈夫か？」

一樹は刀を鞘に収め、一夏に近づく。

「一樹、助かったぜ。あれ・・・意識・・・が・・・」

一夏は目を閉じ、そのまま気絶してしまった。

第?話 タタミネーター (後書き)

タイトル由来は映画「ターミネーター」より

## 第？話 ISの再起動する日

「ん．．．．．？」

ここは何処だ？薬品のおい、誰かの気配、まさかシヨッカー本部！？なわけがない、保健室である。でも顔の近くに誰かの気配。

「ひえっ」

驚く声をして一夏はまぶたを開けると、鈴が顔を赤らめて立っていた。

「何しているんだ、お前？」

「お、お、起きてたの！？」

一夏はまだ重い体を起こす。

「何そんなに焦っているんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ．．．勝手なこと言わないでよ、バカあ！」

寝ている一夏に何をしようとしたのか、ここは読者の想像にお任せします。一夏はここで気を失う前の記憶を思い出した。

「．．．．．あのISどうした？」

「カズキがトドメをさして動かなくなっただわ。心配しなくても、ケガ人はあんた以外一人もナシ」  
それを聞いて一安心した。

「．．．．．そうか。っ痛つてえ」

鈴の甲龍の衝撃砲を直に受け、絶対防御をカットしていたので当たり前である。数日は地獄だろう。一夏は窓の外の夕日を見てふと昔の事を思い出した。

「なあ．．．．．小学校の時、酢豚の話をしたときも、こんな夕日だったよな」

「えっ？」

ふと脳の中からこみ上げてくる、小学校の教室で約束を交わした記

憶。

「（料理が上手になったら、毎日私の酢豚を食べてくれる？）」

「あの約束って、もしかして違う意味なのか？俺はてっきり、タダ飯を食わしてくれんのかと思っていたんだが・・・」

「ち、違わない！違わないわよ！誰かに食べてもらったら、料理って上達するじゃない。あつははは・・・」

「お前の酢豚も食ってみたいけどさ、鈴のおやじさんの料理美味いもんな。また食べたいぜ」

鈴がおやじさんの名前を出すと、転校初日の食堂の時と同じ暗い顔をした。

「あ、うん。お店はしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから。国に帰ることになったのもそのせいなんだよね」

一夏は言葉が出なかった。あんなに美味しい中華料理を食べさせてくれたおやじさんが離婚しちゃったなんて。数秒の沈黙のあと一夏が口を開いた。

「なあ、鈴。・・・今度・・・どっか遊びに行くか？」

「えっ、それってデ、デート！」

一夏の思い切った言葉に、鈴の顔から満面の笑みがでる。その直後、保健室の扉が開きセシリアが入ってきた。

「一夏さ〜ん、具合はいかがですか〜。わたくしが看病に来て〜つて？・・・あらっ？」

一夏と鈴のイイ雰<sup>ムネ</sup>囲<sup>ムネ</sup>気をみてあ然とするセシリア。われに帰り、スゴイ形相で鈴に問いかける。

「どうしてあなたがっ！・・・一夏さんが起きるまで抜けがけはナシと決めたでしょう！（怒）」

「そういうお前も、私に隠れて抜けがけしようとしていたなあ（怒）」

「そ、それは・・・」

セシリアの後ろに腕を組んで仁王立ちしていた。

「二人ともでてつてよ！一夏はあたしの幼馴染なんだからっ！」  
「それなら私も・・・」

「だいたい2組のあなたがっ・・・」  
なにやら言い争いが始まり、徐々にヒートアップしてきた。保険室  
ドアが三たび開き、一樹が入ってきた。

「おう、一夏、目覚ましたか。気分はどうだい？」

「キツ！！！」

「キツ！！！！！」

「キツ！！！！！！！」

箒、セシリア、鈴は獲物を取り合う虎のような眼で一樹をにらみつ  
けた。

「・・・・・・じゃ、またあとで」

一樹はそう言い残すと保健室から出て行った。一樹が出て行ったあ  
と言い争いが再開した。ふと一夏は自分の身を誰よりも心配してい  
るハズの人間がいないことに気づく。

「あれっ・・・千冬姉えは？」

「そういえば」

「どこへ行っちゃったのかしら」

「さっきまで私たちと一緒にいたのだが」

一樹が保健室を訪れることから遡ること、5分前。一樹は千冬先生、  
山田先生のところに行った。

「なんだ、話とは」

「織斑先生、回収した未確認ISを見さしてほしいんです」

『何者か』は一樹にトドメをさされたあと学園に回収された。当然、  
未確認であるため一般学生に見せることなんて出来ない。

「ダメです、大神くん！あのISは学園のほうで分析するので生徒  
に見せるなんて・・・」

「待て、山田先生」

千冬先生が山田先生を止め、一樹に問いかける。

「お前、会場に未確認ISが現れる前に放送室から出て行つたな。そして敵が動けない一夏に攻撃しようとした時、会場に現れてトドメをさした。お前はその間、何処で何をしていた」  
「会場から500メートル離れた所にもう一機現れたので迎撃に行きました」

この証言を聞くと会場に現れた機体以外に、もう一機がこの学園に来ていたということになる。

「回収された機体は一機と聞いています！そんなウソを・」

山田先生は一樹の話の話を聞こうとせず、かなり疑っている。千冬先生は落ち着いており、一樹の話をまともに聞いている。

「山田先生、落ち着くんだ。その機体はどうした？」

「両腕を切り落としたあと、煙幕を出して逃げました。切り落とした両腕は敵が破壊し証拠隠滅しました。お願いです、10分・いや5分でもいいから見せてください。」

会場の機体は一夏と代表候補生であるセシリア、鈴の三人がかりで倒したのに、一樹はたった一人でもう一機の『何者か』を退けさせたのである。千冬先生は考え込み決めた。

「……いいだろう。30分後、昇降口に来い。時間まで一夏の見舞いでも行つてやれ」

「織斑先生!？」

「ありがとうございます！では30分後、昇降口で一樹は一夏のいる保健室に走っていった。」

「織斑先生、いいんですか？一般生徒をラボに入れるなんて」

「いいんだ山田先生。それに、奴にあの機体を見せれば我々の知らない何かを掴むかもしれん」

学園はいまだ未確認のISについて研究している機関でもある。そのためISの全てを知っているわけではない。

「それは一体？」

「それは見せてからのお楽しみだ」

そして現在。千冬先生に言われた通り、30分後昇降口にいた。本当は一夏の見舞いに行ったが、筈たちに保健室から追い出されて予定の時間より10分早く来ていた。そして定刻通り、千冬先生が来た。

「大神、一夏はどうだった」

「ええ、元気でしたよ。やさしい女の子達に看病されてました」

一夏を巡る戦争が起きていたことはふせておこう。

「そうか。じゃあこれから機体が収容されたラボに行くわけだが、その前にこれをつける。見せるが場所は教えられんからな」

千冬先生は笑えるデザインのアイマスクとロック音楽の流れているMP3プレーヤーを渡した。視覚と聴覚を塞ぎ、ラボの場所を知らねないためである。マスクとイヤホンをつけた一樹は、千冬先生に先導されラボへ案内された。

どのくらい歩いたのだろうか。目も見えず、耳に流れてくるのはロック音楽で自分が学園の何処にいるのかわからない。千冬先生の先導が終わり、一樹のイヤホンをとった。

「マスクもとつていいぞ。」

一樹はマスクを外すと、そこはうす暗い研究施設でその先には一樹が倒した頭部のないISが横たわっていた。すぐ横に山田先生がそのISの解析作業をしていた。

「山田先生、これは？」

「あ、大神くん。あなたが倒してそのままの状態で回収しました。多少はいじりましたが、診れない程度にはしていません」

「上に頼んで、15分間診る許しを得た。バラバラにしない限り余計な詮索はするな」

15分も診る許しがもらえらるとは、どうやって上に頼んだんだ。一樹は機体の周りを歩き、手足、間接、破損部分を見渡す。

「何か収獲はありました？」

「これは無人機。ISのコアは世界に467個しかありません。このISには467のどれでもないコアが使用されていました」

「つまり、どの国家にも登録されていないコアで、どの国家にも登録されていないISだ」

完全の名無しの権兵衛である。ISコアは世界に467しかないし、コアはブラックボックスでIS開発者である篝の姉・篠ノ之束にしかわからない。他に何かはないのか、一樹は模索したが何もまま10分が経過した。

「(何かはないのか、これが一郎じいちゃんの言っていた敵なのか? ・ ・ ・ダメだ、何もなし。ん?)  
ふと一樹は機体の胸部のド真ん中を見て何か感じる。

「先生、機体の胸を開くこととってできますか?」

「はい、ちよつと待ってください」

山田先生はマジックハンドを操作して、機体の胸部を開いた。覗き込むと露出したコアがあった。完全停止したもののコアは無事でまだ動いていた。

「それがISのコアだ。いま現在では未確認ということしかわからない」

「(この感じ、どこかで)」「  
なにを感じたのか、コアに手を近づける一樹。

「ちよ、大神くん!何を!」

一樹がコアに手をかざした瞬間、ISの手が動き出した。そして山田先生のパソコンに左手の機能が復活したことが表示された。

「大神くん!止めてください!」

山田先生の叫びに驚き、一樹は手をかざすのをやめた。すると左手の機能がさがり、また動かなくなった。千冬先生が一樹に歩いていき、げんこつをした。

「馬鹿者!大神!お前、今何をした!?!」

「俺はただコアに手をかざしただけです。手をかざした時(腕動させるのかな)と考えたら勝手に動いたんです」

コアに念じて動かしたということ？そんなことが出来るはずない。ISコアは専用機の場合、そのマスターにしか反応しない。訓練機のは誰でも使えるが、未確認ISのコアは訓練機のようにできていない。

「（訓練機でもないのに、コアを動かすなんて。大神くんはいったい・・・）」

その時、ベルがなった。一樹の見学時間の終了である。千冬先生は再び、アイマスクとMP3プレーヤーを一樹に渡した。

「時間だ。大神、見学終了だ、来い」

「・・・はい。（でもあの感じは確かに）」

心のモヤモヤが残りつつも千冬先生について行く。

「今日見た事は他言無用だ。漏らした場合、お前は退学処分だ。無論私も首が飛ぶ。一夏の心の支えを奪いたくなければ黙っている」

「・・・わかりました。織斑先生、山田先生。今日はありがとうございます」

「本当に言わないでくださいね。私も黙認したことがバレますし・・・」

「はい。決して言いません」

千冬先生がいなくなれば、一夏は再び家族を失うことになるし、山田先生も骨を折ってくれたのだ。大神家の名にかけても守らなければならぬ。一樹はアイマスクとイヤホンをつけ再び千冬先生に先導された。

「着いたぞ。アイマスクを外せ」

一樹がアイマスクを外すと、そこは昇降口だった。所在不明のラボから帰ってきた。外は日が入り、星が出ていた。

「じゃあ私はまたラボに戻る。お前も早く寮に帰れ」

「はい、わかりました。今日はありがとうございます。失礼します」「待て！大神」

一樹は寮に帰ろうとした時、千冬先生が呼び止めた。

「いや、なんでもない。行っていい」

一樹は首をかしげ寮に帰って行った。千冬先生はラボに行く道にある事を考えていた。

「（まだ言うときではない。大神一郎さん、あなたのひ孫はきっと世界を変えるでしょう）」

一樹の曾祖父、大神一郎と何か関わりがあるのか、一樹はこのとき知るよしはなかった。

帰る道一樹はあの未確認ISのコアに手をかざした時の事を思い浮かべてた。

「（あれは確かに俺の光武と同じ感覚だった。俺のISコアはあの未確認ISと同じものなのか?）」

何か悪い予感がする。しかし現時点ではまだ何もわからず、情報がない。しばらく様子をみよう、また現れるかもしれない。

「あつ、一夏の見舞い・・・いいや、明日行こう」

一樹が寮に帰っていったそのころ、保健室では。

「わたくしが看病します!」

「それなら幼馴染のあたしが」

「いいや、ファースト幼馴染の私が」

まだ三人は一夏の看病についてもめていて、一夏は心の中でよめるこの有野風に助けを求めている。

「（大神くくくたすけてくくくく）」

第?話 ISの再起動する日(後書き)

タイトル由来は映画「地球の静止する日」より

第？話 学園の休日（前書き）

サクラ大戦名物のあの選択肢が登場します。

## 第？話 学園の休日

クラス対抗戦の乱入事件から2日後。学園は臨時休校で静まりかえっていた。休校の間生徒達は実家に帰ったり、外出したりとのんきな生活を送っている。あの乱入事件は、実験中のISが暴走したと学園は言っているが本当のところはどうか。さて、ここは一樹と一夏の部屋。現在もう一人の部屋の住人、織斑一夏。彼は乱入事件の際、負傷したが無事回復し、休校を利用して実家近くの友人宅へ遊びに行っている。現在部屋には一樹一人だ。

もちろん一樹も一回実家に帰ったのだが、家は空き巣にはいられていたという悲惨な出来事があった。幸い荒らされただけで何も取られた形跡はなかった。

「南風 南風 G O G O G O G O G O G O G O」  
部屋に響く、iPodの音楽。部屋には一樹一人で、何やら考える顔でベットに横になっていた。

「あの時、俺の光武と似た感覚だった。あれは一体？」  
千冬先生に見させてもらった未確認IS、あれが頭から離れない。コアに手をかざしたとき、光武と同じ感覚。となるとあのISは光武に近い新型ということになる。光武は現在、1機しかない第5世代ISのプロトタイプ。開発した神崎グループに聞いたところ、量はしていないと証言していた。

「教科書にもあった。ISは世界に467機しかない。その467機に使われていないコアが使用されているなんて」  
コアを製造できるのはIS開発者である篠ノ之 束博士のみであるが、ある時期を最後に彼女はコアの製造をやめたため、ISの数が467機しかない。ということは、使われているコアも467個しかないということになる。新型機体を造る場合は、既存の機体を解体しコアを初期化しなくてはいけない。光武のコアも467個の内、一つを解体し初期化されたコアで造られた。

「ダメだ、頭がこんがらがってきた。……散歩でもするか」  
一樹は起き上がると、靴を履いて部屋を出た。

休校とはいえ全寮制の学校だから、学内には何百人の女子生徒がいる。散歩をしている一樹を見てこそこそ話をしている。

「あ、見て、大神くんよ。この間の暴走ISを止めた一人」

「ホント、今日は織斑くんと一緒じゃないみたい」

一樹は一夏、鈴、セシリアの4人は暴走IS鎮圧の当事者として学園中に広まっていた。この事件を機に二人の株価は高騰し、好意を示すものが増えた。

「大神くん、こんにちはっ」

一樹に元気なあいさつをした女子生徒は新聞部副部長の黛薫子。

「黛さん、こんにちは。今日はどうしたんですか？」

「事件後にインタビューした記事ができあがったので、その1部を大神くんに」

黛は事件翌日、4人にインタビューをしていた。彼女はその時の記事をつくり、印刷用サンプルの1部を一樹に手渡した。

「ありがとうございます。……捏造はしていませんよね（焦）」

「し、失礼ですねっ。ちゃんと真実を書いていますっ」

初めて出会ったときの取材の際、平気で「捏造しておくから」って言っていたので、『男性IS操縦者二人、代表候補生二人と愛のコンビネーションで撃退』なんてスキャンダルな記事にされたらたまったもんじゃない。

「なになに、『男性操縦者&代表候補生 暴走IS鎮圧 対抗戦に突如現れた謎のISは破壊活動を開始、同時にセキュリティにハッキングし事態は最悪。しかし現場にいた大神一樹（1年）、織斑一夏（1年）、セシリア・オルコット（英国候補生 1年）、凰鈴音（中国候補生 1年）の活躍により、被害は最小限に抑えられた』か」

「ねっ、ちゃんと書いているでしょ。」  
このとき一樹に選択肢が出た。

- ・捏造したほうが売れるんじゃない
- ・ちゃんと書けているね
- ・未確認ISについての情報は？

ここは真ん中の選択肢で。

「ちゃんと書けてます。さすがは新聞部副部長、いい仕事しますね」  
「?ピンピロリン?」(好感度が上がる音)

「そうでしょ、そうでしょ。この記事であなたたちの株はさらに上がるわ」

好感度の上がる選択肢を選んだ結果、黛はとても喜んだ。さらに黛はこんな情報も。

「それともう一つ。あのISのことなんだけど、実験中に暴走したことしかわからないの。大神くん、何か知らない?」

千冬・山田先生の約束は絶対、口が裂けても言えない。

「いや、知らないですが。」

「ふ〜ん、わかった。じゃあ私、この記事刷ってくるからまたねっ」  
黛は疑いもなしに、校舎に走って行った。あぶない、あぶない。一樹は新聞を折りたたみ、ポケットにいれて再びブラブラ歩き始めた。

ブラブラすること一時間、そこは学園の沿岸部の臨海公園。

「もうここまで来たか。だいぶ歩いたし、少し休むか」

一樹はベンチに寝転び、海風にあたりながら空を眺め、天に手をかざした。

「どこまで行っても、俺はここから逃げられない。・・・なんてなっ」

また映画のセリフをつぶやく一樹。今の状況と、映画のシーンが似たんだろう。

「別にこの世界から逃げ出すなんて考えない。今の世界があるのは・  
・あれ・・なんだか・・眠くなって・・」  
ウトウトしていつの間にか眠ってしまった。眠ってしまった一樹は、  
昔の夢を見た。

## 第？話 学園の休日（後書き）

サクラ大戦名物、リップス選択。ちなみに選択肢の上段は好感度ダウン、下段は好感度変化ナシ。

タイトル由来は映画「ローマの休日」

次回はいよいよあの人が登場！

## 第10話 ドリームのキャスト(前書き)

サクラ大戦からのキャラが登場!・・・回想ですが

## 第10話 ドリームのキャスト

2007年春、仙台、真宮寺道場。

「さくらおばあちゃん！来たよ」

「あら、一樹くん。ずいぶん早かったのね」

大神一樹（当時7歳）が訪れた道場。そこに髪をポニーテールに結った、和服姿の老婆がいた。彼女こそ元帝国華撃団・花組隊員、真宮寺さくら（当時102歳）その人である。100歳は越えているのに髪は灰色で、シワも少なく、背筋がまっすぐに伸びている。まるで6、70歳の人間のようにだった。実は隊員全員は少女時代、常人以上の運動の継続と霊力により老化をわずかに遅らせ、身体は杖も車椅子も使わず、猫背にもなっていない。霊力とは色々な用途がある未知のエネルギーである。

「一郎じいちゃん、ちよつと寄っていく所があるっていつてさ。あ、来たよ」

後ろから逆上がった白髪の老人が現れた。この人が一樹の曾祖父であり元帝国・巴里華撃団隊長、大神一郎である。彼もまた、杖も車椅子使わず、猫背にもなっていない。

「やあ、さくらくん。ご無沙汰」

「お久しぶりです、大神さん。さあどうぞ、上がってください」

さくらが師範を勤める真宮寺道場は北辰一刀流の流派で、剣道全国大会で9年連続優勝するほどの強豪。その休館日の真宮寺道場で一樹少年は一人、素振りを行っていた。

「一樹はどこへ行ったんだい」

「道場で素振りをしています。一樹くん、また大きくなりましたね」  
真宮寺家は代々の日本家屋で敷地も結構広い。その屋敷の床の間で、大神とさくらはある新聞記事を見ていた。

「それはそうと大神さん、この記事見ました？」

「ああ、見たよ。今後世界はどう動くのか、全くわからない」

その記事とは篠ノ之束がISを量産、世界に配備したという記事だった。二人は浮かぬ顔をした。

「去年、東博士がISを開発した時、私たちは驚きました。あの技術は確かに・・・」

「待ってくれ、まだその技術が使われている確証がない。ここは様子を見よう」

二人はISについて何かを話あっていた。ISについて何か知っているのか、今はまだ明かすときではない。その時一樹がふすまを開けて入ってきた。

「さくらおばあちゃん、そろそろ剣道教えて」

「ええ、今行くわ。じゃあ大神さん、ゆっくりしてってください」  
さくらは剣道場の方へ歩いていき、大神は縁側に座り込み、けわしい表情で空を眺めた。

一樹は道場でさくらに、剣道を教わっていた。

「じゃあ、見せてもらおうかしら」

「うん！・・・はあっ！」

一樹少年は腰にあてていた竹刀を抜き、4回振ったあと刀を収めるように再び腰に竹刀をあてた。

「前よりもだいたいぶ太刀筋がよくなってきたわね。ちゃんと精進している証拠ね。」

「えへへ。ちゃんと家で練習してたんだ」

一樹は去年の小1に剣道を始め、二天一流は大神、北辰一刀流はさくらに師範してもらった形で剣の腕を磨きあげた。

「一樹くんは将来、何になりたい？」

「一郎じいちゃんのようなでっかい人間になる！」

大神一郎は、人望も厚く、正義感・信頼感がある人間。そういう人間になりたいんだらう。

「そう、あなたならきつとなれるわ。だって大神さんのひ孫ですもの」  
さくらは一樹の頭を撫でた。

「きろ・・・、起きろ・・・大神、起きろ」

目を開けるとそこにはポニーテールの女性が立っていた。まさかっ！

「さくらばあちゃん！？なんで若返・・・」

「馬鹿者！何を寝ぼけている！私だ、箒だ！」

ポニーテールの女性はさくらではなく箒だった。そこは学園沿岸部の臨海公園のベンチで、周りを見るともう夕方だった。

「あれっ、箒くん！？・・・なんだ夢か」

それもそのはず。華撃団隊員は今年の3月、全員老衰で逝去したのだ。

「こんな所で寝てたら風邪を引くぞ」

「ああ、すまない。つつい寝てしまった。あゝよく寝た」

一樹はベンチから立ち上がり、背伸びをした。満足そうな顔をする一樹に箒は質問した。

「なんか、イイ夢でもみてたのか」

「ああ、なんて言うかな、その、やわらかい夢だった」

「な、なんだっそのやわらかい夢というのは。ふらちな夢を見ていたのか！」

一樹は懐かしい夢をみたと聞いたいたつもりが、箒にはイヤラシイ意味で伝わってしまった。

「ち、違うよ、なんていうかそのいい匂いの夢で」

「やっぱり、ふらちな夢ではないかっ。ええい、成敗してくれる箒はどこからか竹刀を取り出し、一樹めがけて振り下ろす。

「待ってくれ箒くん！そっちの勘違いだっば ブンッ うわっ、あぶない」

「問答無用！覚悟！」

かわして逃げる一樹に箒は竹刀を持って振り回し追いかけた。

夜。箒のしばきからなんとか逃れた一樹は、甚平に着替えベットでぐったりしていた。

「はあ〜ひどい目にあつた。音楽でも聞かか」

一樹はイヤホンを耳に入れ、iPodを聴き始めた。曲はもちろん超高音質変換した、太正時代の音楽。

「〜散るも 散らぬも そりゃ花に聞けよ〜」

「〜アラビアンカフェ 苦くて甘い 異国の味〜」

iPodを聞いたまま一樹は寝てしまった。するとドアが開き、3人の女子が入って来た。

「大神さん、いらつしやいますかあ〜。このセシリア・オルコットが遊びにつて、あら。寝ていますわね」

「そのような、お話ししようと思つたのに」

「やめる、お前たち。勝手に上がりこんでこんなこと」

その3人とは私服姿の箒・セシリア・鈴である。3人は部屋に腰掛けた。

「それはあなたも同じことですよ、篠ノ之さん」

「一夏はまだ帰つてこないし、ヒマなんだもん」

「だからといって、殿方の部屋に入るなんて」

休校中、この3人もかなりヒマだったんだろう。鈴はニヤケ顔で箒に話しかけた。

「箒、みたわよ。竹刀を持って、カズキを追いかけ回すところ」

「なつ。あつ、あれはだな・・その」

鈴以外にもこの光景は、他の生徒にも知られていた。『竹刀を持った女子生徒が大神一樹を追いかけていた』ということが。

「まあ、怖いですわね。あなたが竹刀を持つたら、金棒持った鬼ですわ」

「なんだとつ貴様！猫を被つた化猫にいわれたくないわ」

「なんですつてえ！」

第とセシリアはいがみ合い、後ろに虎と龍の幻影が表れた。ニヤニヤ顔の鈴は2人をほつたらかして一樹の方を見た。

「よく寝ているわね。そういえばいつも音楽聞いているけど、何聴いてんのかな？ 見ちゃえ」

鈴は気づかれないように一樹のiPodを動かし、アーティスト一覧をみた。そこには3つのアーティストしかなかった。

「テイコク（帝国）・カゲキダン（華撃団）？ 聞かないわね、どこかの劇団かな。こっちは巴<sup>パリ</sup>里華撃団と大神華撃団。この華撃団って、歌劇団の間違いじゃ」

その時入口で男の声がした。

「お前ら、俺の部屋で何やっているんだ」

もう一人の住人、織斑一夏が帰って来た。その後ろに大勢の女子生徒がいた。

「あゝっ、大神くんの寝込みを襲っている」

「ズルイよ、大神くん独り占めなんて」

「ズルイ、ズルイ」

他生徒の責めに3人は焦りはじめた。

「いや、これはですね。その・・・」

「違うぞっ、決してふらちな事はしていないぞっ」

「そうそう、遊びに来たらカズキが寝ていて・・・」

3人が必死に弁解する。この騒ぎにさすがの一樹も目を開けた。

「うん・・・うわっ、なんだこの状況はっ。なんで部屋にこんなにいるんだ」

寝ている間に何が起きたのかさっぱりわからない。まるで起きたら横にジャンボジェットが墜落しているような感じだった。女子の群れの後ろから怒鳴り声がした。

「お前ら、何をしている！ もうすぐ消灯時間だ！ さっさと部屋にもどれ！」

寮長・千冬先生が仁王立ちしていた。それに反応し、女子達はクモの子を散らすかのように自分の部屋に帰っていった。千冬先生も男

二人に早く寝ると言い、出て行った。

「一夏、何があつた？」

「さあ。俺は今帰つて来たところだし、お前が一番知っているんじゃないのか？」

一夏はカバンを置き、浴室へ行った。一樹は再び眠りに入るため、流れていた音楽を止めようとiPodを持った。

「あれ、アーティスト一覧になっている。なんでだ。・・・いいや、寝よ」

あまり気かけずに再生を止め、一樹は再び眠りについた。

第10話 ドリムのキャスト（後書き）

タイトル由来はゲーム機「ドリームキャスト」より

第11話 ボーイ・ミーツ・ワールド(前書き)

シャルルの登場。

## 第11話 ボーイ・ミーツ・ワールド

コンコン

「は〜い ガチャ あれ、篝くん」

一樹がドアを開けると篝が腕を組んで立っていた。

「・・・一夏はいるか？・・・話がある」

なにかもじもじしている篝の指名に一夏がドアの前に来た。

「来月の学年別個人トーナメントで・・・私が優勝したら・・・付き合ってもらおうっ！」

「はい？ 一樹・一夏」

あまりにもとうとつな告白（要求）。廊下の影から3人の女子が盗み聞きしていた。

「聞いた？」

「聞いた」

「これは、大ニュースだー（小声）」

数日後

「ねえ、あの噂聞いた？」

「今月のトーナメントで勝つと、」

「大神さんと、織斑くんのどちらかと付き合えるんだって」

「え〜ウツソオ」

「マジ〜」

それは対抗戦が未確認IS乱入で中止になり、新しく開催する個人トーナメントのことである。それに優勝した生徒は一樹、一夏と付き合える権利が与えられるという噂が出始めた。

「何の話で盛り上がってますの？」

「いや、私にもさっぱり」

この二人が知ったら大変なことになる。盗み聞きした3人組が広め

だが、歪んで広まってしまったようだ。

「おはよう」

「何盛り上がっているんだい？」

一樹と一夏がそろって登校して来た。

「なんでもない(一同)」

噂をすればってヤツだ。女子たちはかなり同様した。優勝すれば、二人の貴公子のどちらかと付き合えることを考えると興奮する。

「席に付け、ホームルームを始める」

千冬・山田先生が来て、生徒たちはすぐに自分の席に座った。全員座ったところで、山田先生が教壇に立った。

「今日はなんと、転校生を紹介します！」

ドアが開き、一人の生徒が入ってきた。金髪で綺麗な容姿に小柄な体格で、ズボンの制服を着ていた。その姿にクラス中は衝撃を受けた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願ひします」

「・・・お、男？」

「はい、こちらにボクと同じ境遇の方がいると聞いて、本国から・・・」

「キヤーーーーー」

「男子、3人目の男子！」

「しかもウチのクラス」

「美形、しかも守ってあげたい型の」

完璧な男だった。一樹、一夏に続く3人目の男性操縦者が入ってきたことに、クラス中が興奮し歓喜の声をあげた。千冬先生の一言で、教室は静けさを取り戻す。

「騒ぐなっ、静かにしろ！今日は2組と合同でIS実習を行う。各人員は着替えて、第2グラウンドに集合。それから大神、織斑」

「はい 二人」

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。解散！」

これで学園の男は3人になった。異例中の異例だ。ISのメカニズムはさらに謎が深まってきた。シャルルは一樹と一夏に寄ってきた。「君たちが、大神くんと織斑くん？はじめまして、ボクは・」

「ああ、いいから、いいから。とにかく移動が先だ」

「男性更衣室がないから、アリーナのロッカーで着替えるんだ。俺らが案内するよ」

二人は席を立ち上がり、一樹はバツクを持ち、一夏はシャルルの手を掴んで教室を出て行った。

「実習のたびに移動しなきゃいけないからな、早く慣れてくれ」

「あ・・うん」

「どうしたんだい、そわそわして」

「いや・・その」

男同士なのに、シャルルはなぜか顔を赤らめて落ち着かない素振りを見せていた。その時、通路の四方から女子の声がした。

「あー！噂の転校生発見！」

「者ども。出あえ、出あえ！」

すると、瞬く間に女子が通路を覆い尽くした。

「あゝ二人手を繋いでいる」

「大神くんと、織斑くんの黒髪もいいけど、金髪もいいわね」

ヤバイ、ここで捕まると実習に遅れる。ここは逃げるべきだ。3人は女子たちをかいくぐり、アリーナへの通路を走りだした。

「一夏、シャルル行くぞ！こっちだ！」

「あ、逃げた」

「せめて、写真を・・」

もう遅い。3人はあつという間に通路の奥へ消えていった。

授業開始まであと10分、3人は息を切らしてアリーナの更衣室に到着。一樹は入口で追跡がないか確認を終え、ロッカーの前に来た。「なんとか、振り切ったみたいだ」

「ゴメンね、いきなり迷惑かけちゃって」

「いいって。それより良かつよ。学園に男二人だけでも辛かつたからな」

男二人とはいえ、女子99、8%の中で0.2%しか男はいない。

1%にも満たない環境ではさすがにしんどかつた。

「これからよろしくな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「ボンジュール、ムツシュ。俺は大神一樹」

「よろしく、一夏、一樹。ボクのことシャルルって呼んでいいよ。男三人組が誕生した瞬間。一人のサムライに二人の貴公子で、しかもイケメン。ここで一樹がシャルルの名前に関心を持つ。」

「シャルル・デュノアか、いい名前だ。シャルルとデュノアは百年戦争時代、ジャンヌ・ダルク共に戦った戦友の名前だ」

一樹の言っていることは、シャルル7世とジャン・ド・デュノア。この二人はジャンヌ・ダルクと共にフランスを救った英雄として語り継がれる名前である。

「ありがとう、一樹」

名前を褒められ、顔が笑顔になるシャルル。人は名前を褒められると、無意識のうちに幸福感に包まれるものである。

「うわっ、時間ヤバイな。すぐに着替えちまおうぜ」

一樹と一夏は制服を脱ぎ捨て、パンツ一丁になった。それにシャルルは顔を激しく顔を赤らめ、顔に手を当て後ろをむいた。

「早く着替えないと遅れるよ。担任の千冬先生、時間につるさいんだ」

「うん、着替えるから。・・あのさ、二人ともあっち向いててね」なぜ、男同士なのに恥ずかしがるのかわからなかった。一樹と一夏は後ろを振り向いた。

「いやまあ、着替えをジロジロ見る気はないが。なんでもいいけど急げよ」

一夏が振り向くと、シャルルはもう着替え終わっていた。

「着替えるの超早いな、何かコツでもあるのか？」

「いや、別に。アハハハ」

シャルルのISスーツは通常のアンダーウェア状のスーツだった。

「これ、着るとき裸っていうのがなんか着づらいんだよな。俺も大神のようなやつがよかつたなあ。」

一樹のISスーツは第5世代に合わせたもので、ズボンに上着といった普通の服と変わりのない物のため、パンツとシャツを着たままでは着れるだけでなく、傷・衝撃・暑さ・寒さを防ぐスグレ物。そう言っている間に一樹も着替え終わった。

「待たせたね。ん、シャルルのそのスーツ着やすそうだな」

「デュノア社製のオリジナルだよ。父が社長している会社の品で、

一応フランスで一番大きいIS関係の企業なんだ」

「へえ、社長の息子なのか。どうりで貴賓というか、イイ所の育ちって感じがしたじゃん。納得したわ」

一夏の感想にシャルルは少し暗くなった。なにか地雷を感じた。

「二人とも、授業が始まるぞっ！早く行こう！」

時計を見ると授業開始3分前だった。一夏は急いで着替え、3人は更衣室を飛び出し、グラウンドへ走り出した。

第11話 ボーイ・ミーツ・ワールド(後書き)

タイトル由来は海外TVドラマ「ボーイ・ミーツ・ワールド」より

第12話 男たちの雑談 / ZATHUDAN (前書き)

登場人物が多くなってきたので、「」のセリフを誰が言っているのかわかりやすくなりました。

## 第12話 男たちの雑談 / ZATHUDAN

授業開始1分前。男3人はギリギリ間に合った。女子生徒はもう既に全員整列していて、一樹達もすぐに列に並んだ。列に並んだ一樹に女子達が注目した。

一樹「なあ、前から思っていたんだけどさ。みんな水着みたいなスーツなのに、俺だけ普通の服って浮いてないか」

一夏「しょうがないだろ。お前のスーツは機体に合わせた新型なんだから」

みんなスクール水着みたいなスーツなのに、一人だけ普通の服というのは非常に目立つ。水泳の授業の欠席者みたいだ。

「キンコンカンコン」

チャイムがなり、千冬先生が来た。

千冬「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらおう。大神、オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう。前へ出る！」

一樹「いきなりだな、行ってくるか」

セシ「はあ、なんだかこういふのは見せ物みたいで気が進まないですわね」

二人は前に出てきた。洪々なセシリアに千冬先生が近づいた。

千冬「お前は少しはやる気を出せ。あいつらに良い所見せられるぞ」それを聞いたとたん、セシリアはやる気ゲージがMAXになった。

セシ「やはりここは、イギリス代表候補生わたくしセシリアオルコットの出番ですわね」

一樹「(なんだ！？セシリアくん)」

急なモチベーションUPに驚いた一樹。とその時、空から何か聞こえてきた。

山田「キャーーーーーいーーーーーいーーーーーいーーーーーいーーーーーい

ーーーーーい」

ど、どいてくださー

それはISに乗った山田先生だった。山田先生は一樹めがけて落ちてきた。

一樹「危ない！」

ズドーーーーー

一樹は間一髪にかわし、先生はそのまま地面に激突した。砂ぼこりが晴れ、先生のIS姿を表した。

山田「あいたたたた、失敗しちゃいました〜」

千冬「山田先生は元代表候補だ。お前ら二人で山田先生と模擬戦を行ってもらう」

今回のIS実習は山田先生と二人がかりの模擬戦だった。一樹、セシリアはISを展開、山田と上昇していった。マイクを通じて一樹は千冬先生に質問した。

一樹「千冬先生、いいんですか？2対1なんてフェアじゃないですよ」

千冬「どうかな、お前はともかく、オルコットは瞬殺だな。では・・・始め！」

セシ「では、行きますわっ！」

先攻にでたのはセシリア。ブルー・ティアーズを山田先生めがけて撃ちだした。山田先生はスイスイかわしセシリアから距離を置いた。一樹は先回りして銀狼・白狼を抜き、山田先生に斬りかかる。これも先生はかわしと盾を使って回避した。下で一夏と、シャルルが模擬戦を見ていた。

シャ「スゴイね、一樹。刀2本で先生と渡り合っているよ」

一夏「ああ。でもあいつ、他の武器積んでいるのに使わないのか？」

山田先生は武器をライフルからグレネードランチャーに切り替え、無防備のセシリアに向けて発射した。

セシ「ま、まずいですわっ！当っ・・・」

バチバチツ！ドオーン！

電気と発射の音がした瞬間、山田先生の撃ったグレネードが撃ち落とされた。セシリアと山田先生が横を見ると、一樹の装備している武器が変わっていた。

一樹「感無量の精度だ。悪くないが、やっぱりチャージに時間がかかるな」

セシ「大神さんっ？なんですそのライフルは」

一樹は、右肩に装備されたレールガンを構えていた。一樹の光武の武器は、二刀だけではなく遠距離用の武器も装備していたのである。セシリアは一樹の装備に見とれてスキをつくってしまい、山田先生の2発目のグレネードランチャーを直に受けた。

セシ「キャーーーーーー」

空中に煙が立ちこめ、セシリアは地面に落ちていった。

セシ「わ、わたくしとしたことが、不意打ちを受けるなんて屈辱ですわ」

一人残った一樹は山田先生に向けてレールガンを連射した。銃撃も先生はスイスイかわし、一樹との間合いを詰めグレネードランチャーから近接ブレードに切り替えた。一樹もレールガンを収め、二刀を抜いた。

ガッ！ギインッ！！

先生の一撃を後ろへ受け流し、先生の体制は崩された。

一樹「もらいましたっ！」

一樹はすぐさま斬りかかるが、山田先生は右手に対IS用ピストルを持って一樹に反撃した。

山田「まだまだだよっ、大神くん！」

ドンッ！

当たった！かと思いきや、一樹はマトリックス避けをして弾をかわした。先生はすぐさま一樹の後ろに回り込み銃を構え、よけた一樹も身体を縦に1回転して体制を立て直し。二刀を振った。

カチャ！ ブオン！

一樹の身体には山田先生のピストルが構えられ、山田先生の身体には一樹の二刀が寸止めされている。互いの抑止力状態にあった。

山田「やりますね、大神くん」

一樹「先生もいい動きしますね」

そこまでっ！

千冬先生の終了の合図とともに両者は武器を収め、下に降りていった。

千冬「教員の實力は理解できたであろう。以後は敬意を持って接するように。大神、なかなかイイ動きだったぞ。山田先生、もっと大神とオルコットにスパルタ指導を」

一樹にとって±0、セシリアにとってマイナスな指導。本当に厳しい千冬先生であった。

夜。シャルルの寮の部屋は一樹・一夏の部屋に決まり、1025室は男三人部屋になった。一樹・一夏・シャルルは椅子に座り、雑談をしていた。

シャ「ほんとにいいの？一樹のベット、ボクが使っちゃって」

一樹「いいんだ、俺は布団で寝るよ。日本人は昔から床で寝るのに親しんでいるんだ」

シャ「ありがとう。さすが、神秘の国と言われているだけあるんね」

寮の部屋は二人用なのでベットは二つしかない。そこで急遽学園に布団を支給してもらった。しかし欧米では床に寝る習慣がないため、シャルルを布団に寝かせるのはどうかと思った。そこで一樹のベットのシャルルに渡し、支給された布団を一樹が使うということにしたのである。

一樹「しかし、男が三人になるといいもんだ。二人だけではまだ心細いかったんだ」

一樹「まったくだ。どうだいシャルル、緑茶の味は？」

シャルルと一夏は、一樹に煎れてもらった日本茶を飲んでいた。

シャ「うん、紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でも美味しいよ」

一樹「それはよかった。知り合いのプロに教わったんだ」

一夏も緑茶を喉に通す。彼も一樹の入れる緑茶は好きみたいだ。一

夏は今日の山田先生との模擬戦について話だした。

一夏「大神。今日の模擬戦、お前新しい武器使っていたな。あの、どデカイライフル」

一樹「ああ、あれはフランスのIS企業・シャトーブリアン社製のレールガン『エクレール』だ。調整に出していたのが休校中に戻ってきたんだ。あと今日は見せていないが、同社製の高性能レドームも装備している」

シャ「他の武器は装備されていないの？」

シャルルが熱心に一樹に聞いていた。

一樹「まだ調整中のがいくつかある。気長に待たせ」

一夏「まさか、それを俺との訓練のときに使うのか？」

一樹「当たり前じゃないか。セシリアくんがいないとき、射撃型との訓練ができないからな」

一樹の訓練もまたハードな訓練である。しかし指導法が姉の千冬先生に似ているため、なかなかタメになると実感しているようだ。

シャ「一夏と一樹はいつも放課後、ISの特訓をしてるって聞いたけどそうなの？」

一夏「ああ、俺は他のみんなから遅れているからな。で、ルームメイトで男仲間の大神に、指導してもらっているんだ。」

一樹「一夏はまだ素人同然だからな。操縦を見てあげるのが、友達である俺の役割だからな」

放課後、セシリアはテニス部、鈴はラクロス部、箒は剣道部で指導者がいないとき、一樹にコーチングしてもらう。一樹も剣道部なのだが、公式戦には出れない。IS学園は女子しかいないため、全ての部活は競技連盟の女子の部に加盟しており、公式戦に出れるのは女子のみ。さらに女尊男卑の時代により、剣道に女子の部ができたのだ。一樹は己自身の修行のために在籍しているのである。

シャ「ねえ、ボクも加わっていいかな？専用機もあるから役に立てると思うんだ」

一夏「ああ、是非頼む」

一樹「練習は人数が多いほど、成果は伸びるからね。シャルル、よろしく頼むよ」

シャ「うん、任せて」

そんな感じで男たちの夜はふけていく。

第12話 男たちの雑談 / ZATHUDAN (後書き)

タイトル由来は映画「男たちの大和 / YAMATO」より

## 第13話 トランスウエポン(前書き)

今回はIS操作と会話が多いです。

### 第13話 トランスウエポン

次の日、1年1組のクラスが騒然とする。

山田「ええと、今日も嬉しいお知らせがあります。転校生のラウラ・ボーデヴィッツヒさんです。」

山田先生の横には右目に眼帯をつけ、ナチス・ドイツの軍服を彷彿させるデザインの制服を着た銀髪の女子がいた。二日続けて転校生は流石におかしいことに、クラスが騒ぎだす。

千冬「あいさつをしる、ラウラ」

ラウ「ラウラ・ボーデヴィッツヒ！以上だ」

名前を名乗っただけの自己紹介、短すぎる。彼女の祖先はナチの軍人だったのか、厳格なオーラがビシビシ伝わって来る。彼女は一夏に目を向け、席まで歩いて来た。

バシッ！

裏拳で殴られた一夏、クラスがざわつく。

ラウ「私は認めない。貴様があの人の弟であることを私は認めるものか」

一夏は会って殴られるほど悪いことをしたのか。でもこれはあまりにも酷すぎる非情さ。一樹が割って入った。

一樹「何するんだ！いきなり殴ることはないだろ！」

ラウ「フン、貴様には関係ない」

一樹「友達が殴られたのを黙って見てはいられない」

ラウラは後ろを振り向き、一樹から目をそらした。教室内に不穏な空気が立ち込める。

ラウ「この男に友情をかけるとは、呆れる。こいつは友と呼べるにふさわしくない人間だ。近いうち縁を切ることだな」

彼女はそう言い残すと席についた。

放課後、一樹はアリーナで一夏のIS操縦の訓練に付き合っていた。

ハズが、今回は箒・セシリア・鈴が、一夏を指導する形になったので一樹は一人、光武を展開して二刀の素振りをしていた。

一樹「セイツ！ ブンツ！ フンツ！ ヒュン！ とっつ！ ビュン！ はああつ！ フォン！ でやあ！ ヴォオン！ ・・ふう、こんな感じか」

シャ「いい動きだね、一樹。完全に乗りこなしているし、白兵戦では活躍しそうだね」

横を見るとシャルルがいた。よく見ると彼は、オレンジ色の自分IS『ラファール・リヴァイヴ・カスタムIE』を展開した姿でいた。一樹「ありがとう。・・・シャルルのIS、第2世代か」

シャ「うん、第2世代を大きくカスタムして第3世代にも負けない仕様にしたんだ」

シャルルのIS『ラファール・リヴァイヴ・カスタムIE』はデュノア社製の機体を改造し複数の武器積載を可能にした機体である。

最も一樹から3世代、一夏から2世代も離れており兵器の名残がみられる機体だ。

シャ「ねえ一樹、その片方のブレード、ボクに見せてもらえないかな？」

一樹「いいよ、はい。気を付けて扱ってくれ」

『白狼』を鞘に収め、シャルルに渡す。シャルルは一樹から『白狼』を手に取り、隅々まで見渡した。外国人は日本刀をみて興味を抱くことがよくあると聞くが、どうやらそれは本当のようだ。

シャ「これが神崎グループが開発した第5世代の装備かあ。ヒュン！ シャツ！ 悪くないし、扱いやすいね」

一樹「それは、日本刀をベースに設計したんだ。日本刀本来の性能を忠実に再現した武器だ」

刀身・鐔・柄つかそして鞘さやまで日本刀を再現したデザインで見た目もすごいカツコイイ。この武器を装備していることから機体カラーが紺色の光武は『青い剣豪』と呼ばれている。シャルルは刀を鞘に戻し、一樹に返した。

シャ「ねえ一樹、一夏も誘ってちよつと相手してくれる？光武と白式と戦ってみたいんだ」

一樹「いいよ、じゃあ一夏を連れて来る」

一樹は一夏の方へいきこつちに連れてきた。3人の目が怖かった。

観客「見て見て、大神くんとデュノアくんがやるみたいよ」

「デュノアくんの専用機、ラファール・リヴァイヴよね。フランスの第2世代型IS」

「あ、大神くん刀を抜いたよ。やっぱりサムライみたいでかっこいいー」

最初は一樹とシャルルの組手。それに女子生徒は一斉に注目した。

シャ「じゃあ、行くよ一樹」

一樹「よし。大神一樹、いざ参るっ！」

一樹はシャルル目がけて突っ込んでいった。二刀をシャルルに打ち込んで、シャルルは盾での確に防いだ。一樹の大きなひと振りかわしたシャルルは空へ飛んだ。一樹もそれを追って飛んだ。

シャ「来たね、一樹 カチャ」

ダダダダダダダッ！

シャルルは一樹の方へ身体を向け、右手にサブマシンガンを展開・発泡した。一樹は難なくかわし、シャルルに近づき一撃を入れた。

一樹「今のは1本だ、どんどんいくぞっ！」

シャ「やるね。でもまだまだっ！」

シャルルは一樹の攻撃をかわし距離をとった。距離をとったところでサブマシンガンをしまい、今度はスナイパーライフルを取り出した。

シャ「これは、よけられる？」

ドオン！ チッ！

弾は一樹をかすめ、エネルギーをわずかに減らした。ここでシャルルは追い込むかのようにたて続けに打ちまくった。一樹はかわしながらもシャルルから距離をどんどんとる。

鈴 「カズキの奴、あんなに距離とって何するつもりなの？」

セシ「ライフルの有効射程距離から離れるためですわ。そこで昨日の装備を使うという作戦ですわね」

鈴 「でもカズキはシャルルから100mも離れているのよ！仮に長距離撃てる装備があっても、当てられるの？」

一樹とシャルルの距離は200m以上になつていた

シャ「こんなに離れていて、エクレールで当てられるのかな、一樹？」

ISの望遠カメラで200m以上先の一樹を見る。一樹は刀を収め予想通り、レールガン『エクレール』を取り出した。エクレールを構え、チャージする一樹。シャルルは飛び回り、狙いを付けにくくした。徐々に電気が溜まっていき、引金に指があてられた。そして飛び回るシャルルめがけて撃ちだした。

バチバチバチバチ！ドオオオン

シャ「来たつ。これならかわせ・バカアアン」

一樹のワンショットはシャルルの右足に被弾した。一樹はシャルルにむかつて一発一発、当てていった。

シャ「そんな！200mも離れているのにこんなに的確にあてるなんていつたい。！？、あれは・・・」

シャルルが見たもの。それは光武の左肩に盾のようなものが装備されていた。シャルルがそれを解析しようとするが、時既に遅し。シャルルのシールドエネルギーがゼロになり、一樹に軍配があがった。

一夏もシャルルと手合わせするが、あつという間にやられてしまったので省略します。

一樹「これが昨日話していた『高性能レドーム』だ。これには望遠、暗視、赤外線、相手の情報表示ほか、あらゆるレーダーが組み込まれているんだ。それをエクレールとリンクさせて、絶対的な長距離攻撃を可能にしているんだ。もちろん補助的な装備で狙撃は俺自身

の腕だけだ」

一夏「スマン、どういう意味だ？」

シャ「つまりこれは、迎撃ミサイルと同じようなレーダーなんだ。標的を探し、狙いをつけるといった感じにね」

一樹「これがあれば、俺は5km先にあるBB弾を撃ち抜く事ができるんだ。アリーナの範囲の狙撃なんてめじゃないよ」

一夏「俺は的にはなりたくないな」

3人が手合わせを終え、光武の新装備ついて語りあっていた。光武の新型装備『高性能レドーム』はアメリカ国防省が使うような高性能レーダー。これもシャトープリアン社の装備である。

シャ「それにしても、一樹は強いね。完璧に乗りこなしているうえに剣術・射撃もできるなんて」

一夏「ホントだよ。しかし俺も、射撃武器を使いたいな」

シャ「あ、じゃあ練習してみよう」

一夏の一言で射撃訓練が始まり、アリーナのグラウンドに射撃用のが出現した。まず一夏がシャルルのライフルを借りて、初めての射撃訓練をすることに。

ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ トータル43p

t

シャ「どう？」

一夏「なんていうか、その・・・早いつていう感想だ」

一樹「初めてにしてはなかなかだな。よし次は俺・・・ん？」

一樹がやる気満々でエクレールを取り出し構えに入ったとき、アリーナ上段のカタパルトに専用機を展開した眼帯をつけた銀髪の女子、ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

シャ「あれつて、ドイツの第3世代だよ。まだ本国のトライアウト段階だつて聞いてたけど」

鈴「なに！？あいつなの！一夏をひっぱたいたドイツの代表候補生つて」

第たちにも緊張が走る。ラウラは一樹たちの方へ向き、一夏に問いかけた。

ラウ「織斑一夏、貴様も専用機持ちか。ならば話が早い、私と戦え」  
一夏「いやだ、理由がねえよ」

いきなりの宣戦布告。好戦的な性格ではない一夏は不要な戦闘は避け、もうすぐ始まるクラスリーグマッチで決着をつけるようラウラに説得するが彼女は聞き入れようとしなかった。

ウィーン ガチャ！ ドオオン！

ラウラは急に右肩に装備した大型キャノンを一夏めがけて発砲した。その前を刀を抜いた一樹が入り込み、銀狼でラウラの攻撃を弾き飛ばした。地面に彼女の撃ったキャノンの薬きょうが大きな音を立てて落ちた。

一夏・（シャ）「大神・（一樹）！」

一樹「どうしても戦いたいなら、俺と戦うというのはどうだ！ ちよつとはウサ晴らしにはなるだろう！」

ラウ「貴様、まだそいつを友呼ばわりするつもりか。最新世代の専用機を持っているからといって調子に乗るな！ どけっ、どかなければ撃つぞ！」

一樹「言つとくけど仮に勝負しても俺は負ける気が全然しない。未だに量産めどが立たないドイツの第3世代の機体で俺に勝てないことがわからないのかい」

ラウ「貴様っ！」

二人のケンカはヒートアップし、火蓋が切って落とされようとしていた。その時、アリーナのアナウンスが聞こえた。

『その生徒！ 何をやっている！』

この声にラウラは臨戦態勢を解除し、機体展開も解除して待機状態にした。

ラウ「ふんっ、今日のところは引いてやるう。おいサムライ、これが最終警告だ。今度私の邪魔をしようというのであれば、本気で潰す」

彼女はそう言うのと去っていった。あの目は本気だった。しかし彼女の一夏に対する激しい憎悪はなんなのか。一夏に問いかけても彼は黙り込んだままだった。

第13話 トランスウエポン（後書き）

タイトル由来は映画「トランスフォーマー」より

第14話 誘拐大捜査線（前書き）

タイトル無理やりですが、一夏が昔誘拐されたことを語るお話です。

## 第14話 誘拐大捜査線

アリーナ更衣室のベンチ、一夏が腰をかけて浮かぬ顔をしていた。そこへ一樹とシャルルがやって来た。

一樹「一夏、大丈夫か」

一夏「ああ、さっきは助かったよ。サンキュ大神」

一樹と一夏はスーツを脱ぎ始め、シャルルは上着を着て帰り支度をした。

シャ「じゃあボクは先に部屋に戻っているね」

一夏「えっ！ここでシャワー浴びていけないのか？お前いつもそうだよな」

シャルルは転校してからES実習が終了たびに着替えず自室に帰るのである。男同士で着替えるのを拒むのはなにかおかしい。

一樹「どうして、俺らと着替えるのを嫌がるんだい」

シャ「いや、べ、別にそんなことはないと思うけど・・・」

一夏「そんなことあるだろ。たまには一緒に着替えようぜ」

一夏は上半身でシャルルの肩を組んだ。

シャ「うっ、うわあああああああああ！」

シャルルは悲鳴をあげ、更衣室から逃げ出した。あまりにも不自然な言動、何かある。一樹は怪しんだが一夏は「なんだ？」と不思議そうにシャルルを眺めていた。

夕方、二人は寮への道を歩いていた。二人とも特訓のあとラウラのことが頭から離れない。ふと池のほうから声がした。

ラウ「答えてください、教官！なぜこんな所でっ」

千冬「なんとも言わせるな、私には私の役目がある」

二人は木の影から覗いた。そこにはラウラと千冬先生がいた。何やらもめているみたいだ。

ラウ「教官、お願いします。どうかもう一度、我がドイツでご指導

を！ISをファクションか何かと勘違いしているこんな国の連中に指導をする必要はありません！」

千冬「そこまでにしとけよ、小娘。しばらく見ないうちに偉くなつたもんだな。もう寮に戻れ、私は忙しい」

ラウラは学園生徒を見下した意見をしゃあしゃあと述べたが、すべて千冬先生の権力の前にひれ伏された。彼女は怒りを押さえ歯を食いしばり、寮へ走っていった。

千冬「その男子二名！盗み聞きとは関心しないな」

さすがは千冬先生、すっかりバレていた。二人は無駄な抵抗は止めて出てきた。

一樹「なあ、さっきのラウラって奴が言っていたこと、千冬姉えの弟とは認めないって。あれってやっぱり、俺のせいで千冬姉えが2度目の優勝を逃したことを。」

千冬「終わったことだ、お前が気に病む必要はない。では」

千冬先生は去っていった。一樹がおずおずと一夏に聞いた。

一樹「一夏、先生の2度目の優勝を逃したこと気持ちに差支えがなければ教えてくれないか」

一夏「・・・第2回モンド・グロツソISの世界大会決勝戦の当日、俺は何者かに誘拐された。どうゆう目的があつたのかはわからないが、俺は拘束された。それを助けてくれたのが決勝戦を放り投げ駆けつけた千冬姉えだ。決勝戦は千冬姉えの不戦敗、誰もが2度目の優勝を確信してたのに決勝戦棄権は大きな騒ぎを生んだ」

一樹「俺も知っている。かなり騒がれたよ、あの時は。でもまさか裏でそんなことがあつたとはな」

見かけによらずヘビーな過去を持っている一夏。

一夏「で、俺の監禁場所に関する情報を提供してくれたドイツ軍に借りを返すため、1年ちよつとの間ドイツ軍IS部隊の教官をやっていたんだ。」

これで納得した。ラウラは千冬先生の教導を受けた教え子であること、千冬先生にあそこまで崇拜する理由がわかった。

一夏「・・・全て俺の不甲斐なさのせい。情けない弟だよな」

自分を責める一夏。そんな一夏に一樹が喝をいれた。

一樹「そんなことはないっ！千冬先生は名誉よりも家族を心配してお前を助けたんだ。本当に不甲斐ない弟だったら今のお前はここにはいない！誘拐されたのは誰のせいでもない。お前の姉さんは家族のために命をかけて守る人だということを誇りに思うんだ！」

一樹の喝。自分のせいで千冬先生は優勝できなかった、でも優勝よりも家族の命を助けたこと。そんな姉がいるということは誇りに思っている。

一夏「大神・・・ありがとう、俺強くなる。強くなって千冬姉え、そして千冬姉えが大事にしている人達を守る！大神、早く部屋に帰えろっぜ！」

一夏は寮へ走りだし、一樹もあとを追いかけて走り出した。木の影で千冬先生が聞いていた事に気づかず。

千冬「（やはりあの方の子供だ）」

第14話 誘拐大捜査線（後書き）

タイトル由来は映画「踊る大捜査線」より

第15話 シャルル1ノ1（いちぶんのいち）（前書き）

シャルルの秘密が明らかになる話。ここでサクラ大戦のキャラの名前が登場します。

## 第15話 シャルル1/1（いちぶんのいち）

一夏「ただいま、シャルル戻っているか」

部屋に帰ると浴室からシャワーの音が。どうやらシャルルが入っている。一夏はベットに腰掛けた。

一樹「あ、そうだ。ビオレu切れたんだ」

一樹は棚から新しいボディソープ（ビオレu・オレンジの香り）を取り出し、浴室にいるシャルルへ持って行った。

一樹「シャルル、ビオレu切れてるだろ、替えの・・・」

浴室で見たもの、それは胸の膨らんだシャルルの姿だった。シャルルは慌てて隠れチワワのような目でこっちを見ていた。

一樹「これ・・・ボディソープ・・・」

シャ「・・・うん・・・ありがと・・・」

一樹「・・・じゃ」

一樹は一步一步ギクシャクしながら歩いていった。出て行ったあと壁に頭をつけ何かブツブツ言い始めた。

一樹「（お、落ち着くんだ大神一樹。これはアレだ、シャルルはお湯をかぶると女になって、水をかぶると男になるんだ。きつとそうだ、水をかければ男にもどるんだ。いやマンガでは水をかぶると女

になって、お湯をかぶると男になるんだ。あれ、どっちをかければいいんだ〜」

一樹が何か悩んでいるのを見た一夏は気に留めず洗面所の方へ歩いていった。

一夏「何やってんだ、大神？俺顔洗うぜ ガチャ ん？・・・」

洗面所で顔を洗おうとした一夏。見たものはタオルで膨らんだ胸を拭くシャルルの姿だった。一夏は回れ右して洗面所を出て、ベットに腰掛け何かブツブツ言い始めた。

一夏「（お、落ち着くんだ織斑一夏。これはアレだ、昔、再放送のアニメで見たことあるぞ、水をかぶった男が女になるっていうアニメ。あれと同じように、アレ。水とお湯どっちだっけ〜」

数十分後、二人はなんとか自分の中で折合いつけ、シャルルが浴室から出てきてベットに腰掛けた。

シ  
ン

長い沈黙が続いた。ここで一樹が乗り出した。

一樹「あーその、なんだ・・・お茶でも飲むか」

シャ「う、うん。もらおう・・・かな」

お茶を入れる一樹。今回は冷茶を入れ、彼、いや彼女に渡した。聞くことは山ほどあるがとりあえず飲んで落ち着いてもらうことにした。

「夏」で、なんで男のフリなんかしてたんだ？」

シャ「実家からそうしろって言われて。社長である父からの直接の命令だね」

一樹「シャルルの実家ってデュノア社かい」

社長直々の命令、どうということなのか。この後シャルルの口から衝撃の事実が

。シャ「ボクはね父の本妻の子供じゃないんだ。もともと父とは別々に暮らしてたんだ。2年前にお母さんが死んで、デュノアの人に引き取られた。それで色々検査する過程でIS適正が高いことがわかって、非公式だけどテストパイロットに選ばれたんだ。父とは2回しか合ったことがなく、話した時間は1時間にも満たない」

なんとということだ。シャルルも一夏と同じくヘビーな過去を持っていた。次にシャルルは会社のことについて話だした。

シャ「そのあと経営危機になったんだ。デュノア社はISシェアが世界第3位とはいえ、第2世代型しか生産していない。世界中では第3世代型の研究が主流なんだ。研究はしているんだけど形にならなくてね。このままだと開発許可が剥奪されてしまうんだ」

「夏」それがお前の男のフリをしているのとどういう関係なんだ？」

「夏はどう聞いても接点はないと考えた。一樹は予測した核心を口にした。

一樹「シャルルは注目を浴びるための広告塔。それに男装すればなら日本に出現した特異形質とも接触しやすいし、その使用機体と本

人のデータがとれる。つまり俺たちのデータを盗んでこいと指示されたんだ。違うかい」

シャルルは会社の利益のために引き取られ、自分の意志と関係なくIS開発のための道具として扱われてきたのである。

シャ「ほぼ正解。会社の欲しいデータは光武なんだ。だから会社は君の機体データを欲しがっているんだ。・・・本当のこと話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今までウソについてゴメン」

・・・これがシャルルの正体だった。光武データを盗む産業スパイまがいであった。一樹が拳を握り締めシャルルに今後  
の事を聞いた。

シャ「女であることがバレたから、本国に呼び戻されるだろうね。あとのことはわからない、良くて牢屋行きかな」

シャルルの行く末は絶望的だ。何か考えなければシャルルの自由は閉ざされてしまう。

一樹「いや、本国へ行く必要はない。俺たちが黙っていればそれで済む。そうだろ一夏」

一夏「ああ。それに仮にバレてもお前の親父は手出し出来ない。IS学園特記事項・本学の生徒は在学中あらゆる国家・組織・団体に帰属しない。ここにいれば3年は安全だ」

一樹達はシャルルをかばった。自由を掲げた国で自由を束縛されていいように使われてきた子。そんな子を助けない訳にはいかない。

一樹「（かわいそうな過去。コクリコおばあちゃんも家族に縁がない辛い過去があったって言った。一郎じいちゃんがコクリコおばあちゃんを助けたように、俺もシャルルを助けるんだ！」

シャ「ありがとう、一樹、一夏。かばってくれて」

彼女はお礼を言ったとき、服のファスナーが少し開いて谷間が少し見えていた。男二人は顔が赤くなり目をそらした。

一夏「お、おい、胸見えてるって」

シャ「ええっ、もう、二人のえっち……」

ファスナーをあげ、やらしい顔で二人を見るシャルル、ずるい奴だ。

一夏「不可抗力じゃないか、今は。……じゃあ飯でも食いに行くか。今日の日替わり飯はちらし寿司だ」

日本食はシャルルにとってもまだ未知の味。寿司は日本を代表する食事。フランス人のシャルルでもきつと気にいるだろう。するとここで食堂に向かう前に一樹が呼び止めた。

一樹「待ってくれ、シャルルにプレゼントがある。今、俺の両手の上に何も無いのがわかるかい？」

一樹の両手のひらの上には何も無い。その両手をポンッ！とおにぎりを握るように手を合わせた。開けると手のひらにボールがついた髪留めゴムがあった。

シャ「スゴイ、一樹って手品も出来るんだね」

一樹「『手品は辛いことがあってもそれを笑顔に変えてくれる』。昔、ばあちゃんに教えてもらったんだ。今はもういないけど、この髪留めゴムはそのばあちゃんがつけていたものだ。シャルルにあげるよ」

シャ「ええ、いいの？それおばあちゃんの形見でしょ？」

一樹「いいんだ、俺たちの友情の証しとして受け取ってくれ。ばあちゃんもきつと喜ぶよ。」

シャ「……ありがとう。大事にするよ」

シャルルは、もらった髪留めゴムを受け取って、今つけていた髪留めリボンを解きコクリコが使っていた髪留めゴムをつけた。一樹の特技の手品はコクリコから教わったもの。コクリコは世界で古株で有名なサーカス団、シルク・ド・ユーロの団長。101歳の亡くなるまで団長を務めていた。若い頃は、巴里華撃団・花組隊員として巴里を攻めた魔の怪人達を退けた功績を持つ。

シャ「どう？似合うかな？」

一樹「ああ、良く似合っているよ……シャルル、今は笑おう。大丈夫、俺たちがいる」

シャ「……うんっ」

シャルルに満面の笑顔が戻り、3人は食堂へご飯を食べに行った。部屋を出て行くとき、一樹は思い出し笑いをしてしまった。

一樹「(ふふっ。そういえばレニおばあちゃんも昔よく男の子に間違わられたな)」

アリーナ。カタパルトの上、月夜を眺めている女子がいた。眺めていたのはラウラだった。月をみて何かをつぶやいた。

ラウ「教官、春にミルヒシュトラーク大將が亡くなり私の生きる糧かてはあなただけです。あなたの強さこそ目標であり、存在理由。織斑一夏、教官に汚点を与えた張本人。排除する、どんな手を使ってもそして大神一樹、私に逆らうのであるば二度とISに乗れなくするまでだ」

レニ・ミルヒシュトラーク。ドイツ軍の最高指揮官で106歳の亡くなるまで大將の座に就いた女性軍人。若い頃は、帝国華撃団・花組隊員という経歴の持ち主である。レニとラウラがどのような関係があるのか、今の彼女の口から教えてもらえることはなかった。

第15話 シャルル1/1 (いちぶんのいち) (後書き)

タイトル由来はアニメ「らんま1/2」より

第16話 曲を流す男（前書き）

サクラ大戦の音楽、オンパレードです。

## 第16話 曲を流す男

昼休み。一樹は早めに食事を終え授業が始まるまでの間、屋上でiPodを聴きながら日向ぼっこをしていた。と、そこへ弁当を持った一夏・篤・セシリア・鈴・シャルルが来た。

セシ「あら、大神さん。こんな所でお昼寝ですか？」

鈴「のんきなものね、コイツも。あれっ、また音楽聴いてる。またテイコク カゲキダンという歌手の歌でも聴いているのかしら」

鈴は以前、一樹の部屋にお忍びで入った際iPodの中身を勝手に見たことがある。彼女がiPodに手を取ろうとしたとき一樹の目が開いた。

一樹「アレ、鈴、何してるの？」

鈴「うわぁ！あんた起きていたの！？脅かすんじゃないわよ！」

鈴は驚き、仕返しに一樹の頭を軽くペシン！と叩いた。一夏達も一樹によって行き、そこで昼食をとることにした。

一樹「痛いな〜ヒドイよ鈴。君たち、お前たちこれから昼食か」

一夏「ああ、ここで食わして貰うぜ」

一同が芝に腰をかけた。ここで一夏が一樹のiPodに気がついた。

一夏「お前っていつも音楽聴いているよな。前から気になっていた

けどどんな歌聴いていんだ？」

一樹「見てみるかい、はいiPod」

一樹はiPodを一夏達に渡した。一夏たちはアーティスト欄を凝視しながら見ると、帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団の3組しかなかった。

第「・・・帝国華撃団、巴里華撃団、大神華撃団？聞かない名だな、どこかの劇団か？」

シャ「ボクもフランスにいた頃、この巴里華撃団っていう名の劇団は聞いたことがないよ。」

一樹「みんなが知らないのは当たり前だよ。だってこの3組の歌劇団っていうのは今から90前、1920年代に存在していた劇団なんだ。入っている曲はその当時の曲なんだ」

一樹のiPodに入っている曲、それは全て1920年代の太正時代の音楽だった。ありえない、近代国家になって間もなく、レコードだって出たばかりの時代の音楽なんて存在するはずがない。

鈴「1920年代い！？あんだ、ウソしてるんじゃないの。そんな大昔の音楽が綺麗に聴けるわけないでしょ」

一樹「出来るようにしたんだよ。保管されていた音源を俺のパソコンに入っている自作した変換プログラムを使えばどんなに古い曲でもデジタル音質に変えることができるんだ」

曲は全て1920年代に出た曲。もし現存するのであり当然そのま

まで聞いたら雑音がまじり、途切れ・途切れで聞こえるような代物だ。しかし一樹はそれら曲をパソコンで超高音質変換し現代の音楽技術で作られたかのように綺麗に聞こえるようにしたのである。

セシ「ねえ、大神さん。よろしかったらこちらに入っている音楽を聞かせて欲しいのですが」

セシリアは興味津々で曲を聴きたいとウズウズしていた。

一樹「ああ、いいよ。じゃあイヤホンを外すね。帝国・巴里3曲ずつ流すからみんなも聞いてくれ」

iPodのイヤホンを外し、屋上の一樹達付近に高らかな歌声が響く

「く恋もケンカも人生も スチャラカチャンチャン チャンバ  
ラブギだぜく」

篤 「なかなか愉快的な曲だな。それにしても男のような声だな、これは」

「くごめんなさい わたくしは ああ そうよ女神なのですもの  
く」

セシ「これはわたくしにピッタリですわね。わたくしという女神への示しを表しますわ」

鈴 「トゲトゲのサボテン女が何言ってるのよ」

セシ「な、なんですって」

「 ～走れ 高速の 帝国華撃団 唸れ 衝撃の 帝国華撃団」

一夏「この歌、カッコイイな。耳に残っちゃうような歌だ」

一樹「これは帝国華撃団の主題歌だ。他にも様々なバージョンがある。帝都組はここまでで次は巴里組だ」

「 ～おいしい 料理の決めてはスパイス スキップしちゃう キッチンミュージカル」

鈴 「料理の歌かとおもったら愛情のスパイスみたいな感じの歌ね。明るい元気な歌だったわ。これ聞いたら一夏のために料理をしたくなってきたわ」

「 ～ああ素晴らし 巴里華撃団 夢と 希望と 明日と 正義を 讃える」

一樹「これが巴里華撃団の主題歌だ。入っている曲で一番好きな歌だ。どうだい、結構いい歌だろ」

シャ「いい歌だね。聴いてるだけで本国を思い出すよ」

曲が終わり。一同の耳にはかなり印象に残るような歌が響いていた。

篤 「しかしなぜお前が太正時代の音楽を聞いているんだ。何か関係があるのか？」

一樹「俺の曾じいちゃん、二つの歌劇団の支配人だったんだ。で、歌っている人が当時の歌劇団の団員だ。この音楽は曾じいちゃんの部屋で見つけたレコードを使って変換したんだ」

一樹はパソコンも使えるといった特技も持っており、自作した変換プログラムは古い音楽を高音質に変換できる以外にも、BD、DV、VHS、LD、レーザーディスク、8ミリ、CD、カセット、レコードなどの媒体をあらゆる機器に対応出来るように変換するプログラムである。

鈴 「へえ〜曾じいさんの。そういえばカズキって自分の事あんまり話さないけど生まれは何処なの？」

シャ 「一樹っていつからISを動かせるようになったの？」

急に一樹の昔話に切り替わり、それに一樹は気軽に応じた。

一樹 「生まれは栃木の田舎だ。ISとの出会いは中学1年の時、知り合いのIS開発研究所へ行ったときそのISが俺に反応したことがきっかけだった。その後中学まで普通の学校に通いながら非公式のIS訓練をしていたんだ」

一夏 「お前、俺よりも先にデビューしていたならなんで公に発表しなかったんだ」

一樹 「ISは女性にしか動かせないということが絶対的。大騒ぎにならないよう発表を中卒まで延期したんだ。そうしたら先にお前が世界初ISを動かせる男ってデビューしてしまったんだよ」

一夏 「なんだよそれ！俺はお前の下見役になっていたってのか」

一夏は高校受験のとき会場を間違え、IS学園の入試を受けそのISを勝手に起動させてしまった事が始まりでそれがきっかけで公に広まった。一樹もそれから約3ヶ月後に二人目のISを動かせる

男としてデビューした。現在、国際IS委員会の議題は一夏と一樹をどの国の所属にするかである。

篤「大神、お前、剣道は誰に教わったんだ。以前手合わせしたときあの腕は相当強い者から教え込まれたと見たが」

一樹「ああ、あれは・・・」

キーンコーンコーンコーン

彼の剣術。その師匠を聞こうとした直後、チャイムが鳴った。

一樹「ああ鳴っちゃったか。またの機会に話すよ。じゃあ教室戻るか」

立ち上がり教室に帰ろうとする一樹。屋上からの階段の踊り場でセシリアが一樹を呼び止めた

セシ「お待ちください、大神さん！ちよつとお話がありますの。放課後またここへきていただけないでしょうか」

セシリアの顔はいつもと違った顔つきだった。あまりにも真剣な顔だったので一樹は放課後にあう約束をした。もちろんこの事は一夏たちは知らない。

第16話 曲を流す男（後書き）

タイトル由来は映画「嵐を呼ぶ男」より

第17話 振り返れば彼女と彼がいる（前書き）

iPodを聴いて何かに気づいたセシリア。そしてオリジナルキャラ二人目が登場します。

## 第17話 振り返れば彼女と彼がいる

時は放課後、外は夕方。一樹は屋上で夕日を眺めていた。そこへ帰り支度を済ませたセシリアが来た。彼女の顔は真剣な表情だった。

一樹「セシリアくん。なんだい、話って？」

セシ「あのiPodに気になる声がありましたの。大神さん、グリシーヌ・ブルーメールという人をご存知ですか？」

一樹「今年の春亡くなった、フランスの大貴族・ブルーメール家の当主のことかい」

セシ「そうですね。わたくしが子供のころ、あの人と親交がありましたの。顔も声も今でも覚えており、あんな高貴な人は他にいませんでしたわ。・・・大神さん、お答えください。そのiPodに入っている曲を歌っている一人はグリシーヌ様なのですね？」

『御旗のもとに』を流したとき2番目に差し掛かった所はグリシーヌのパート。彼女はそこを聞き、この声がグリシーヌであると気づいたようだ。セシリアの問いかけに否定もせず一樹は語った。

一樹「そうだ、確かに歌っている一人はグリシーヌおばあちゃんだ。若い頃、モンマルトルにあった劇場で『ブルーアイ』というステージネームで活動していた舞台役者だったんだ」

昔、巴里のモンマルトルにテアトル・シャノワールという劇場があった。レビュウを観劇しながらとる食事というのは当時としては斬新で、一般客以外にも財界人が訪れるなどの超有名な店だった。グ

リシー又以外にも一樹に手品を教えたコクリコもこの劇場の踊り子だった。

セシ「グリシー又おばあちゃん！？あなた、グリシー又様に会った事がありますの！？あの人と会えるのはごく少数の選ばれた貴族・政府の人間だけですわ！庶民のあなたが何故！？」

セシリアは血相かえたスゴイ形相を一樹の顔に近づけた。バイキングの時代から続くフランスで最も伝統のあるブルーメール家。政府にも影響をあたえほど権威のある貴族とどういう関係なのか。

一樹「お、落ち着くんだセシリアくん！・・・昼休み、俺の曾じいちゃんが二つの歌劇団の支配人だったということは話したよね。その一つがグリシー又おばあちゃんの所属していた劇団なんだ。俺が子供のころ曾じいちゃんと一緒にパーティに招待された時に初めてあったんだ。それ以来、学校の長期休暇の時にフランスへ遊びに行ったとき、ばあちゃんの屋敷で世話になったことがあるんだ」

それを聞くとセシリアは納得し、平常心を取り戻した。

セシ「そうでしたの・・・あなたの曾おじいさん、一体何者なんですかの？」

一樹「劇場の支配人であり、旧日本海軍の軍人であった。退役後は日本の防衛庁に入って、晩年はISについて何か調べていたみたい」

大神一郎は死ぬまでISを個人的に研究し、そして霊力の枯渇により亡くなった。一樹の記憶は探求者として、剣の師匠としての記憶がある。

一樹「セシリアくんはグリシー又おばあちゃんと仲が良かったんだね」

セシ「わたくしも色々教えて貰いました。若い頃に日本のサムライに出会って真の誇りというのを教えてくれたとおっしゃってましたわ。そのサムライがもしかしたらあなたの曾おじいさんなのかもしれないわ」

一樹「きつとそうだね。・・・箒くん、グリシー又ばあちゃんと結構似ている所があるんだ。不用意な言動を取ると、即座に愛用の竹刀を振りかざして「成敗！」って言うところなんて激似だし」

セシ「グリシー又様もそのようなことありましたね。鉄面皮に見える篠ノ之さん、隠れてもふもふしたりすることもありえますわ。いわゆるクーデレというやつですわね」

一樹「だろうね、箒くんクールって言われてるけど恋話になると思いつきりデレデレするしね」

二人がゲラゲラ笑っていたら、後ろから恐ろしく低い声で二人を呼びかける声がした。

箒「だれがクーデレだ」

振り向くとそこには腕を組んで鋭い目付きで二人を睨んでいた箒の姿があった。

セシ「ほ、篠ノ之さん！い、いえこれはあの・・・その・・・」

箒「オルコット！お前という奴はとことん抜けがけが好きなのだな！そして、大神！・・・賛同したお前は今、ここで成敗いたす！」

あまりにも理不尽だ。箒はどこからか竹刀を取り出し、ブンブンと一樹に切りかかった。一樹は交わしながらも屋上から逃げた。

夜、一樹の部屋。箒の竹刀から命からがら逃げた一樹はベットでぐったりしていた。

テテテ〜ン テテテ〜ン テテテ〜ン テテテテ〜ン

部屋に響く携帯の着信音の「太陽にほえろ」。一樹の携帯だ。一樹はぐったりした身体を起こして電話をとった。

一樹「はい、もしもし。大神ですけど。」

??「いよ〜う、大神い。元気でやっているかい」

電話の向こうはなにか陽気な声がする。

一樹「お前、加山か、加山雄四か！？どうしたんだ急に電話なんて」

電話の声は加山雄四<sup>かやまゆうじ</sup>。一樹の小学校のころからの幼馴染である。彼は和歌山生まれ栃木育ちで、現在は地元の普通高校に通っている。

加山「いやあくお前が女子まみれの生活にムラムラしてきて、何かやらかすのを防ぐために電話をしてきた」というわけなんだ」

一樹「なっ、そんなことあるわけないだろう。用がないなら切るぞ」  
実際シャルルのシャワーを見たことで、身体が勝手に動くこともままあった。

加山「冷たいぞ、大神い。冗談だって、小学校から『カズとユージ』って言われた仲だろう」

一樹「そうだが……で、どうしたんだ。急に電話なんて？」

加山「お前が栃木を旅立ってから全然連絡してこないから。学園で上手くいってないのかと思ってな」

一樹が親友と呼べる加山は細かい気配りができ、人に分け隔てなく接していることから一樹と小・中学時代かなり人望が厚かった。

一樹「心配するな。友達も何人かできたし、例のISを動かせる男とも仲良くなっただし」

加山「ああ、織斑一夏か。彼はどんな人だ？女性にしか動かせないISをどう動かす？」

一樹「機体性能を生かしていないし、まだまだ素人同然だ。いざという時もぶっつけ本番だな」

一夏は白式の性能を生かしきれず、零落白夜も使うもエネルギー切れを何回も起こしてしまう。IS乱入事件も彼は崖っぷちで機転を生かして場をしのいだに過ぎなかった。ここで加山は女性99%の学校に編入した一樹に嫉妬をした。

加山「お前だけ羨ましいぞ、大神い！一人天国でウハウハしゃがって」

一樹「それでもないぞ、今でも『ISを動かせる男』ってことで興味津々の眼差しで見られているんだ。結構シンドいよ」

一樹「一夏の株価はまだまだ高騰している。なにせ学年別トーナメントで優勝すれば二人のどちらかと付き合えるというのだ。学園以外でも世界中のメディアは大体的に取り上げ、国家・企業・研究者はこの二人を如何いかににして自分の組織に引き込むか策を練っている。

加山「しかし驚いたな。高校受かったのに「IS学園に行く」って言いだして、受かった高校蹴ってIS学園に編入するなんてな。どいうことなんだ？」

一樹「前にも話しただろ。やることができたんだ。そのためにIS学園へ来たんだ」

一樹がIS学園に来た正確な目的は不明だが、曾祖父・一郎の遺書をもらってから学園に来た。

加山「まあ、ヒマができたらいつでも帰ってこい。いつでも付き合っぞ」

一樹「ああ、ありがと。もうすぐ学年別トーナメントが開催される。また時間空いたら電話するよ」

加山「おう。……大神、学園に見学みたいなものはないか？」

一樹「いや、男性にはないと思うが。．．お前、忍びこもつなんて考えるなよ」

加山「はっはっは、そんな事はしないぞ。．．タブン」

一樹「おいつ、今、タブンって．．」

加山「今、窓にいるんだ」

！！！！！！ 一樹は慌ててカーテンを開いてして窓を見た。そこには月が学園を照らしていた幻想的な景色が広がっていた。

一樹「お前、脅かすなよ〜〜。本当にいるかと思ったぞ」

加山「はっはっはっは。じゃあな大神い、アディオ〜〜〜〜〜ス」

加山はそう言い残すと電話を切った。加山家は代々忍びの家系であった。加山雄四の曾祖父「加山雄一」は一樹の曾祖父「大神一郎」と旧日本軍の士官学校のころからの親友であり、同時に帝国華撃団・隠密部隊月組隊長という経歴の持主である。雄四もその家系をしっかりと受け継ぎ、小・中学時代はもう色々と．．。一樹はいつか天井からぶら下がっている事を考えながら月夜を眺めた。

第17話 振り返れば彼女と彼がいる（後書き）

タイトル由来はTVDドラマ「振り返れば奴がいる」より

## 第18話 大神一樹の憂鬱（前書き）

前回の話から翌朝の出来事。黛薰子またまた登場です。

## 第18話 大神一樹の憂鬱

一樹「誰もいない学校って何か不思議な感じだな。王様になった気分だ」

朝、一樹は剣術の朝練が終え教室への廊下を歩いていた。すると後ろから声がした。

?? 「おはよう、大神くん」

一樹「あっ、黛さん、おはようございます」

あいさつの声は新聞部・副部長の黛薫子だった。

一樹「黛さん、こんなに朝早く何やっているんですか？」

黛 「もうすぐ学年別トーナメントでしょ。その取材の準備をしに朝早く来たのよ」

一樹「新聞部も大変ですね。朝からお疲れ様です」

業務熱心な人だ。この間のIS乱入事件のようなデキの良い記事が発行されることを期待しよう。

黛 「ねえ大神くん、新聞部の部室に来てみない？色々面白いものもあるし」

黛からの誘い。ホームルームまでだいぶ時間があるので一樹はこの誘いに乗る、彼女に新聞部部室へ連れて行ってもらった。

黛に連れられ新聞部・部室に来た一樹。新聞部の部室は校舎の一番上の階にあり、窓の外を見ると一番眺めがよい場所にある。さらにはテラスもありとても優雅な部室だ。部室内は綺麗に整頓され、棚には資料と過去に発行した新聞のサンプルが丁寧に保管されている。

一樹「綺麗な所ですね。ここでいつも作業しているんですか？」

黛「まあね、ウチの部長しつかり者だから整理整頓第一にしているの。あと生真面目だから私が捏造しますって言うと怒るのよね」

一樹「それはどこも当たり前じゃないですか。捏造は犯罪ですよ」

そりゃそうである。新聞は常に真実を報道するもの。捏造記事なんてもつての他である。

黛「それは置いといて、ホーモルーム始まるまで時間があるしここでコーヒーでも飲んでく？」

一樹「じゃあいただきます。黛さん、この棚の中見てもいいですか？」

黛「いいわよ。読んだら元の場所に戻しておいてね」

黛がコーヒーを入れに出ていき、一樹は一人部室に残って過去の記事を見始めた。まず見るのはやはり第1号。ファイルを見つけて取

り出した。日付は2007年4月。今から9年前、IS学園が創立されたばかりの時代だ。

一樹「なになに、『新時代で活躍する人材を育成する学校 新しく創立したIS学園はISパイロットの育成、ISの研究を目的とする国家機関である。』か。ん、写真もある。コレが第1世代型か、ガンダムっばいな」

読んだ過去記事を元の場所にしまい、次にみたのはまとめられた資料の中から白騎士事件についての記事を見つけて読み始めた

一樹「『白騎士事件 IS発表から1カ月後の2006年3月某日に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、約2500発以上のミサイルが発射されるも、その全てをIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようとする各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。この事件以降、ISの関心が高まることとなる』。俺も知っているぞ、白騎士事件。結構ワイドショーで騒がれたな。第1世代型は完全な兵器型だからな」

黛「第1世代型は現在、全て退役しているからね。今最も配備されているのは第2世代型と研究段階の第3世代が今の一般的な段階ね」

一樹が第一世代型の感想を述べているときコーヒーを煎れた黛が来た。彼女は一樹にコーヒーを添え、自身も腰をかけてた。

一樹「ゴクッ あゝ、朝のコーヒーはおいしいです」

黛 「大神くん、あなたこの間の放課後のIS訓練の時、ドイツの代表候補生の乱闘を抑えたんだって」

コーヒを飲んで和む一樹に黛はこの間のを聞いた。あの時、アリナのスタンドには黛が一樹とシャルルの訓練を見学していたので、ラウラが一夏に向けてレールカノンを発射したのもすっかり見えたのである。

一樹「はい、彼女が一夏に激しい憎悪を抱いているみたいで。戦意の無い彼にいきなり発砲したんです」

黛 「あの子、気を付けたほうがいいわよ。ドイツ本国では特殊部隊の出でかなり好戦的だから。動けなくなってもとことん叩き潰す性格だから」

黛はラウラの情報を一樹に教えた。しかし何故彼女がラウラの経歴を知っているのか、おそろおそろ聞いてみたら返事はこうだ。

黛 「禁則事項です」

どこかの未来人のセリフだった。黛のようなメディア系の人是我々の知らない様々な情報入手手段がある。それを教える訳にはいかなのだらう。ここで一樹は話題を変え、黛のことを聞いた。

一樹「黛さんはISの成績は良い方ですか？」

黛 「私は成績は中の上で整備科に所属しているの。専用機は持っていないけど適正ランクAで、武器は銃をメインに使うのよ。この間見ていたけど大神くんは二刀流以外にもライフルを使うよね」

一樹「はい、二刀だけでは対応出来ない局面もあるので。でも基本は近接戦闘ですのであくまで二刀がメインウエポンです」

レールガン『エクレール』は装弾数は40発。弾倉のスペースが大きすぎるため現在の光武では予備弾を積めない。そのため一回の戦闘が終わるたびに再装填しなければならない。

黛 「大神くん。あなたの専用機、従来のISとはまるで違う代物で世界中が研究している事を無駄にさせてしまっているの。急な登場で帰属を巡る火種になりかねない存在で世論は大騒ぎよ」

一樹「ええ知っています。今はまだわかりませんが、光武は今までのISとは何かが違うんです。これは俺の推測なのですが光武は何かに対抗するための兵器だと思うんです。それにISは女性にしか動かせないのは鉄則。開発されてから10年経った今、俺や一夏のように男性操縦者が出てきたことは時代が変わる前兆なのかと考えています」

ISは現代の女尊男卑を象徴するモニュメント。それを崩す存在が現れたということは何か時代の変化を意味するのではないか。その一方、第5世代型は計画、発表、試験なども一切公表されず、今年の3月にメディアを通じて全世界に報道された。国際IS委員会は開発した神崎グループに「第5世代型の資料を提出せよ」と指示し、それに対し神崎グループは素直に応答。委員会は資料を解析しているが一向に進展しないと聞いている。

黛 「なんなのかね、未だに明らかにされていないISをさらに複雑にさせるような出来事ね」

.....

長い沈黙が続いたあと、黛の一言に衝撃が走った。

黛 「話は変わるけど・・・大神くんは今好きな人はいるの？」

黛は質問を変え、一樹に動揺をあたえるような質問をした。イエスと答えれば熱愛、ノーと答えればフリーとなる。学年別トーナメントに優勝すると一夏か一樹のどちらかと付き合えるという噂は黛の耳にも入っていた。

一樹 「どうしたんですか急に？」

黛 「いや、大神くんも男の子だから学園で好きな人もできたのかな」と思っ

ここでイエスと答えれば何か嫌な予感がする。一樹に好きな人がいるってバレたら争奪戦が激化する可能性がある。一樹はなんかやこしいことになると考え出した答えはこれだ。

一樹 「禁則事項です」

黛と同じ答えを話した。すると彼女は引き、答えを求めるのを諦めた様子。「禁則事項です」これは何か質問を迫られたら使える万能な解答だと一樹は感じた。時計を見るとホームルームまで残り10分だった。一樹はコーヒーを飲み干しカバンを持って席を立った。

一樹 「じゃあ黛さん、もうそろそろホームルーム始まるの失礼します。コーヒーおいしかったです、ごちそうさまでした」

黛 「うん。あ、大神くん、またいつでもここに来ていいから。今

度は織斑くんも連れて来てね」

新しい行きつけの場所が増えた。保管されていた新聞記事サンプルは見て面白いらしい、薫さんのコーヒーはおいしいかったし、また来たい。そう思いながら一樹は階段を降りて教室へ走って行った。教室までの廊下に差し掛かった時、一樹は薫の「今好きな人はいるの？」について思い出した。前にも初めて会った時「学園に入った理由は？」と聞かれたときと同じだった。どうも彼女の質問は一樹の核心に近づくような質問だ。

一樹「好きな人が・・・アンナくん、元気かな？葬儀の時ずっと泣いていたけど」

アンナとは一体誰なのか、一樹は空を眺めて謎のアンナという人物を思い憂鬱な気持ちで廊下を歩いた。一樹はまだ知らなかった。学年別トーナメントで優勝者には、一夏・一樹のどちらかと付き合えるという事を。何か厄介にならなければいいが。

第18話 大神一樹の憂鬱（後書き）

タイトル由来はTVアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」より

第19話 模擬戦線異状あり(前書き)

ついにメインキャラに学年別トーナメントの優勝者に与えられる権利が告げられる。

後半はラウラの非道さが目立つシーンです。

## 第19話 模擬戦線異状あり

一樹が新聞部部室から出てきたと同時刻、1年1組の教室にはほとんど生徒が来ていた。セシリアと複数人の女子と隣のクラスの鈴木も来ていて何か話をしていて、篤は一人席について外を眺めていた。

セシ「そ、それは本当ですよ!？」

鈴 「ウソついてんじゃないでしょうね」

女子A「本当だってば。この噂、学園中でもちきりなのよ。今月の学年別トーナメントで優勝したら、織斑くんか大神くん付き合えることになっているらしいの」

とうとう篤、セシリア、鈴の耳に入ってしまった。

セシ「それは、一夏さんと大神さんは承知していますの?」

女子B「それがね、織斑くんはよくわかっていないみたい。大神くんはなんかわかってるっぽいのよ」

女子達はそう思っているのだが、一樹本人は一夏同様全然わかっていない。そもそも盗み聞きしたのが歪んで広がってしまったため女子だけの取り決めらしい。

鈴 「じゃあ優勝者は一夏かカズキのどちらかを選んで、準優勝者は残りのどちらかを選べるってこと?」

女子A「必然的にそうなるね。1番の選択権は優勝者にあるみたい」

女子C「じゃああたし、大神くんがイイ！サムライのような所がカッコイイ」

女子D「私は織斑くんを選ぶ！付き合ったらなんか面白そう」

女子B「あ〜くん、あたしはどっちにしようか迷う〜」

優勝者と準優勝者は花ある賞をもらえる。秤はかりではかってもやや釣り合う賞だが若干、一樹の方が人気だ。

一夏「おはよう！」

シャ「何の話をしているの？」

一夏とシャルルが教室に入ってセシリア達に近づくと屯たむろっていた女子は蜘蛛の子を散らすかのように悲鳴をあげて去っていった。

鈴「じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから」

セシ「そ、そうですね。わたくしも席につきませんと」

二人も場を去って行き、残された一夏とシャルルはキョトンとしていた。チャイムが鳴ると同時に一樹が教室に息を切らして駆け込んできた。

一樹「ゼエ・・ゼエ（新聞部から教室まで結構距離あるなあ）」

一夏「大神、お前始業ギリギリまでどこ行っていたんだ？」

一樹「おう、一夏。黛さんに連れられて新聞部の部室に行っていたんだ。ああ、黛さんがいつでも来ていいからお前も来てくれってさ」  
一樹は汗を拭き、席についたとき山田・千冬先生が来てホームルームが始まった。

休み時間、箒は渡り廊下から空を眺めていた。浮いている者はやらたと空を眺めるクセがあると見た。

箒「（なぜだ、トーナメントで優勝したら一夏と付き合うのは私だけのはずだ。それがなぜ大神とセットであんなことに）」

もともと箒が優勝したら一夏と個人的に付き合うということだったが、女子3人組が盗み聞きして歪んだ噂が広まったのだ。今更「私が始めにトーナメントで優勝したら付き合ってもらおうと一夏に言った」なんて言えるわけがない。

箒「（と、とにかくだ。私が優勝すれば問題ない。・・・しかし大神も捨てがたいほど男前だ。・イヤイヤ待て待て待て、私は一夏一筋で、それを背けるなど武士道に反する。武士たるもの一度決めたことは貫き通すものだ）」

箒はあくまで一夏一筋でいくこと。なんとか折合いをつけどうやら決心したみたいだ。

放課後、アリーナに鈴の姿があった。と、そこへセシリアもやって

来た。

セシ「あら、てっきりわたくしが一番乗りだと思っていましたのに」

鈴「あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだから」

セシ「わたくしも全く同じですわ」

嫌悪なムードが漂う。ただでさえこの二人は一夏が本命だが、一樹にも興味を示しどちらかを取るのはまだわからない。

鈴「この際、どっちが上かこの場ではっきりさせておくのも悪くないわね！」

セシ「よろしくってよ。この場で決着をつけて差し上げますわ」

鈴「もちろん、あたしの方が上だから、あんなのようなトゲトゲのサボテン女に負けるわけないわ」

セシ「フン、弱い犬ほどよく吠えるというのは本当ですわね」

鈴「その言葉、そのままあなたに返すわ！」

ヤバイ、ヤバイ。とうとうケンカになってしまった。二人は瞬時に専用機を展開させ、一気に互いが接近しあった。

ドオオオオoooooooooooo

突如、二人の前を一発の砲撃がかすめた。二人は飛んできた方向を

見るとそこには専用機を展開したドイツ代表候補生、ラウラ・ポー  
デヴィツヒの姿があった。

鈴 「ドイツ第3世代型・シュヴァルツエア・レーゲン。どういう  
つもり!?いきなりぶっぱなすなんてイイ度胸してるじゃない!」

ラウラは専用機を通して甲龍とブルー・ティアーズを分析し始めた。

ラウ 「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズか。データで  
見た時のほうがまだ強そうであったな。数くらいしか能がない国と、  
古いだけが取り柄の国はよほどの人材不足とみえる」

鈴 「この人、スクラップがお望みのようよ!」

セシ 「そのようですわね」

二人は機体の最終安全装置を解除し、臨戦態勢に入った。

ラウ 「ふん、二人ががりて来たらどうだ?くだらん種馬を取り合う  
ようなメスに私が負けるものか」

ラウラは相当な自信だ。二人は彼女めがけて突っ込んでいった。

シャ 「一夏、一樹。今日も特訓するよね?」

一夏 「おう、トーナメントまで日がないからな」

一樹 「日がない分、当日までは実戦重視の特訓をしよう。白式に実

戦データを記録させて強化するんだ」

男二人と女一人はアリーナの入口いた。すると周りが何か騒いでいた。話を聞くと代表候補生3人が模擬戦をやっているらしいという情報を得た。3人は急いでアリーナへ向かった。観客席に行くとそこから見るのは荒んだ光景だった。

シャ「ファンさんとオルコットさんだ！」

一樹「あの二人がやれている！？相手は一体誰だ！？……っ！  
ラウラ・ボーデヴィツヒ」

彼女を見た一夏の顔が険しくなった。

鈴「こんのお！ ドオオン、ドオオン」

フィールドで鈴がラウラに向かって龍砲を放った。するとラウラは右手を前に開き半透明の虹色のバリアのようなものを出した。そのバリアに龍砲はラウラに届かず防がれた。

シャ「AICだ」

一夏「エー・アイ・シー？」

シャルル、篝、一樹は理解していたが一夏にはさっぱりだった。

一樹「アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略だ。慣性停止結果とも呼ばれるもので、停止対象を任意に停止させることができるんだ。こいつは厄介だな」



シャ「ヒドイ、あれじゃあシールドエネルギーがもたないよ」

第「もしダメージが蓄積してESが強制解除されたら二人の命に関わるぞ」

一樹は黨の警告を思い出した。「（特殊部隊の出でかなり好戦的だから、動けなくなってもとことん叩き潰す性格）」まさにその通りだった。しかし時すでに遅くセシリアと鈴はラウラの憂さ晴らしの生け贄となってしまうた。

一夏「ドン、ドン、ドン やめろ！ラウラ！やめろお！」

一夏は観客席に貼られたシールドを叩き、ラウラに暴力をやめるよう呼びかけた。しかし彼女はその呼び掛けに応じず無視した。そして暴行を加える彼女の顔から笑みがこぼれた。

一樹「あいつ、楽しんでやがる！！一夏、二人を助けに行こう！」

一夏「おう！！」

一樹はポケットに入れていた札を取り出し光武を展開し、一夏は腕を上げ白式を展開した。

一樹・一夏「いくぞおおおおっ！！ バリーーーーーー」

一樹は二刀をコーティングし、一夏は零落白夜を発動させ二人は観客席のシールドを大胆に叩き割り、フィールドに入り込んだ。

第19話 模擬戦線異状あり（後書き）

タイトル由来は映画「西部戦線異状なし」より

## 第20話 アリーナの戦い（前書き）

ラウラの暴行を阻止しようとして一樹・一夏を防ぐと立ち上がるお話。

## 第20話 アリーナの戦い

バリーーーーーー

一樹と一夏は観客席のバリアを豪快に叩き割り、フィールドに降り立った。

一夏「その手を話せえーーーーー」

一樹「待て、一夏！突っ込めばA I Cで・・・」

セシリアと鈴を助るだけで頭が一杯だった一夏は一人ラウラに突っ込んで行った。ラウラは近づいている一夏に気づき、右手をかざしてA I C発動させた。

一夏「な、なんだ！？くっ、か・体が・・・うご・・・かな・・・い」

言わんこっちゃない。まんまとA I Cにハマり一夏は動けなくなった。セシリアと鈴は機体が解除され、地面に倒れた。

ラウ「感情的で直線的、絵に書いたような愚か者だな。やはり私の敵ではなかった。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では有象無象の一つでしかない！」

ラウラはレールカノンを一夏に向け、ゼロ距離発射するつもりだ。一夏の顔に焦りの表情が。

ゴオオオオオオ      ガアアアアアア

一樹が疾風改で左側から突撃し、レールカノン諸共ラウラを蹴り飛ばした。数メートル飛ばされた彼女は体制を立て直し、一樹を睨んだ。

ラウ「おのれえ、サムライめ ガアン つ、なんだ!？」

観客席の割れたバリアからシャルルがラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを展開し、狙撃体制に入っていた。

ラウ「ちっ、次から次へとザコが」

セシリアと鈴は体をゆっくりと起こした。一樹は二刀を抜き、通信回線を通じて一夏とシャルルに指示を出した。

一樹「一夏っ!二人を連れて早くアリーナの外へ行くんだ!俺はラウラの注意を引く!シャルルは俺の援護・一夏の護衛を頼む!」

一夏・シャ「わかった!」

一樹の的確な指示に同意する一夏とシャルル。ラウラは逃がさんと言おうばかりに、セシリアと鈴を抱えて逃げる一夏に向けてレールカノンで追撃しようとする。

バアン!バアン!バアン!

シャルルの射撃にひるむラウラ。そのスキを見て切り込みを入れる一樹。ラウラは距離をおいた。

ラウ「貴様、今度私の邪魔をするなら本気で潰すと言っていたはずだ」

一樹「動けない人間をいたぶるなんて、心はないのか！」

ラウラの顔はまるでユダヤ人を殺すナチスのような顔だった。

ラウ「あの二人が勝手に勝負を挑んで勝手に負けたのだ。だから二度と齒向かわないように教えてやっただけだ」

一樹「許さん！今度は俺が君に一夏と彼女に齒向かわないようにするまでだ！」

一樹は銀狼・白狼に大量のエネルギーを込めてコーティングし、ラウはレールカノンを構え二人は戦闘体制に入った。

ラウ「ふん、面白い。第5世代型と戦って勝利すれば、我がドイツ世界で最も優れたIS国と名があがる。・・・勝負だっ！！！！！」

177

鈴 「う・・・一夏」

セシ「無様な姿をお見せいたしましたわね」

二人を観客席に移した一夏。どうやら二人は意識もあり無事のようにだ。筈は専用機もなく、ただ見ている自分の無力さを痛感していた。

一樹「でやああああ ブオオン」

一樹は疾風改をフル回転させラウラと接近戦を繰り広げていた。彼女の真正面に入ってしまったとAICで動けなくなるので、四方八方から散らして攻め込む戦法で戦う。

ラウ「なめるなあ！ ドオン」

レールカノンを撃つも高速移動する光武には止まって見えるもので、ヒョイヒョイかわされる。ラウラは舌打ちをして地上に降り、今度はワイヤーブレードを出し一樹に向け伸ばした。

一樹「あれは捕まったら終わりだ！ キン！キン！」

ワイヤーブレードに付いている振り子を弾き、捕縛を回避した。一樹は右手の銀狼にエネルギーを込め、刀身が桜色に変色した。

一樹「桜花天昇！！！」

刀から桜色の飛ぶ斬撃が放出されラウラめがけて飛んで言った。ラウラは右手を出しAICを発動し桜花天昇を防いだ。煙に包まれ視界を遮られた彼女はセンサーを使って一樹を探知した。後ろに光武の反応があり振り向くと二刀を構えた一樹がすぐそこまで来ていた。

一樹「もらったあ！ ピタッ！」

動きが止まった。周りを見ると光武の周りは虹色のバリアに包まれていた。ラウラのAICに捕まったのだ。

一樹「なぜだ！？今のはハイパーセンサーでも反応出来る速度じゃなかった」

ラウ「ずいぶんあっさりな最後だな。さらばだ ガチャン」

ラウラは一樹の眼前にレールカノンを構え、発射体制に入った。一樹は焦るところか澄まし顔で何やら語り出した。

一樹「武士たるもの、相手の性格を逆手にとることで好機を手にするものだ。そうですね、千冬先生 チラッ」

ラウ「何！教官っ！ バツ！」

一樹がラウラの後ろに視点をやり、ラウラもそれにつれられ後ろを勢いよく後ろを振り向いた。しかしそこには千冬先生の姿はなく、むしろ誰もいなかった。

ズバアアアアーーン

ラウラが後ろに気を取られてせいでAICが解け一樹が動けるようになり、光武の一撃をくらってしまった。

ラウ「ぐはっ！貴様、そのような卑怯な手に教官の名前を！」

一樹「時にココ 指を頭にトントン は力よりも勝るものだ。君の  
ような単純な者には尚なほ更さら有効だ」

ラウ「おのれええええええええ！ ドオオオオン」

ついにラウラがブチギレた。彼女はレールカノンを一樹の手前の地面に撃ち、砂煙を発生させた。一樹がひるんでいる間にラウラは一夏に接近しワイヤーブレードで彼とシャルルを捕縛した。どうやら一夏を先に潰す戦法にでたようだ。

一夏「ぐあぁ！お前・・・何を？」

シャ「うぐっ、しまった！」

ラウ「（フウ、私としたことがあのような挑発に乗ってしまうとは。しかしコイツをやれば私の目的は達成され、サムライも守れなかったと悲観するだろう） 織斑一夏、教官の汚点であるお前は生かしておくわけにはいかない。行くぞお！」

プラズマ手刀を出し一夏に切りかかる。一樹もそれに気づきエクレールをとおうとするが、ラウラの性格からしてシャルルを盾にして防ぐに違いない。慌てて疾風改を起動させて向かうが間に合わない。ラウラは手刀を大きく振りかかりつた。

一樹「だめだ、間に合わない！」

第20話 アリーナの戦い（後書き）

タイトル由来は映画「タイタンの戦い」より

第21話 SS（鈴・セシ）本命救命室（前書き）

一 夏・シャルルに襲いかかるラウラ。またまた絶体絶命の一夏に、  
一 樹は間に合うのか。

第21話 SS（鈴・セシ）本命救命室

捕縛した一夏に切りかかるラウラ。一樹も止めに行くが間に合わない。

一樹「待てえ、やめるんだあ！」

ガキン！

黒いスーツにスレンダーな体つきの女性教師が一撃を止める。

ラウ「き、教官！？」

千冬「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

一夏「千冬姉！？」

今度は本当に千冬先生が現れた。しかもISを起動せずIS用近接ブレードでラウラの一撃を止めていた。

一樹「千冬先生・・・」

千冬「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナのバリアまで破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

ラウ「教官がそうおっしゃるのなら。サムライ、織斑一夏！トーナメントで私はお前たちを確実に潰す！覚悟しておけ！」

ラウラは素直に応じ、機体展開を解除した。そして一樹達に向かって指をさし、宣戦布告して出口へ歩いて行った。

千冬「お前たちもそれでいいな？」

一夏「あ、ああ」

千冬「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

一夏「は、はい！」

一樹もシャルルも納得した。

一樹「異議はありません」

シャ「僕もそれで構いません」

千冬「では、学年別トーナメントまで私闘を一切を禁止する。解散  
！」

時刻は夕方、ところ変わって保健室。アリーナの騒動から一時間が経過していた。ベットの上では鈴とセシリアが包帯を巻き横たわっていた。

鈴「別に助けなくてもよかったのに」

セシ「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

下手したら命に関わる状態だったのに二人はケロリとしていた。

一夏「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

鈴「こんなのけがのうちに入らな ビキツ いたたたっ！」

セシ「そもそもこうやって横になっていること自体無意味 ズキツ つつっつっ！」

体の至るところに包帯を巻いているのだ。安静にしていなきゃパツクリ傷が開いてしまう。

一樹「大丈夫かい？じっとしてなきゃ治る傷も治らないぞ」

一夏「本当にお前らはバカだな」

鈴「バカってなによバカって！バカ！」

セシ「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏の唐変木な発言に二人は激怒した。そこへシャルルが飲み物を買って戻ってきた。

シャ「二人とも好きな人達に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

一夏「ん？」

一樹「それって・・・」

一夏は聞き取れなかったみたいだが、それ以外は聞き取れたようだ。  
一樹が口に言おうとした瞬間に二人が。

鈴 「な、な、な、何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！  
こ、こ、こ、これだから欧州人って困るのよねえっ！」

セシ「べ、べ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるとい  
ささか気分を害しますわねっ！」

この動揺っぷり。明らか男二人に気があることをバラしてしまっ  
ている。こんな反応したら誰でもわかるだが、一夏はわかってないだ  
ろうが。

シャ「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね  
？」

鈴 「ふ、ふんっ！」

セシ「不本意ですがいただきましたきましようっ！」

ひったくるように受け取って、ごくごくと飲み干した。

一樹「ま、まあ先生も落ち着いたら帰ってもいいって言ってるし、  
しばらく休んだら……」

ドドドドドドドドドシ………！

一樹「な、なんだ？何の音だ？」

急に地響きがして保健室の薬品ビンがカタカタ音を立てた。廊下から聞こえてくる。

ドカーーーーーー！

と保健室の扉が開いた。開いたと言うよりぶっ飛んだ。

女一同「織斑くん！大神くん！デュノア君！」

女子の大群が保健室に雪崩れ込んできた。俺たちを見つけるなり手を伸ばしてきた。

一夏「な、な、なんなんだ!？」

一樹「ど、ど、どうしたんだい?」

シャ「ど、どうしたの、みんな・・・ちょ、ちょっと落ち着いて」

女子の大群が出してきたのは出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

一夏「な。なにになに……?」

一樹「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは……』」

女子D「ああ、そこまででいいから!とにかくっ!」

そしてまた手を伸ばしてくる。

女子A「私と組もう、織斑くん！」

女子B「私と組みましょう、大神くん！」

女子C「私と組んで、デュノア君！」

一年の女子が男子と組もうと来たのか。しかし今の一樹と一夏にはやらねばならない事があった。

一樹「すまない、みんな。俺は一夏と組んで、シャルルは俺の友人と組むんだ。諦めてもらえないかい？」

シーーーーーン

女子B「まあ、そういうことなら……」

女子A「他の女子と組まれるよりかはいいか……」

女子D「男同士って絵になるし……ごほんごほん」

女子C「大神くんの友人って誰だろう？」

女子たちは少しずつ保健室を出て行った。

鈴 「カズキ！」

セシ「大神さん！」

ああ、鈴とセシリアが喰い付いて来たよ・・・

鈴 「カズキ！何勝手に一夏と組んでんのよ！一夏！あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！ バキッ あうっ！」

セシ「いえ、大神さん！クラスメイトとしてここはわたくしと！  
ベキッ ひう！」

その体では無理だなんとか出場を諦めてもらおうと説得したとき、ぶっ飛んだドアから声がした。

??「ダメですよ」

山田先生が甲龍とブルー・ティアーズの損害報告の結果を持ってきたのである。

山田「お二人のISの状態をさつき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

一樹「すまない、二人とも。でも俺と一夏は決着をつけなきゃいけない事があるんだ」

シャ「ラウラ・ボーデヴィツヒだね」

一樹「彼女の目的は俺たち二人の殲滅だ。他の子とパートナーと組めばその子が危険な目にあう。標的が一つにまつまれば周りに危害が及ぶことはないだろう」

セシ「まさか！決着をけるために一夏さんと組んだんですの！？」

鈴「あんたバカあ？！なんでわざわざ的が固まって行く必要があるのよ！」

二人は一樹に怒りの矛先を向けた。一向に暴言のアラレを投げつけられる一樹に一夏も二人の説得を試みる。

一夏「セシリア、鈴。ここは大神の言うとおりして貰えないか。ラウラがああなのは俺が原因かもしれないんだ。だからトーナメントで大神と白黒はつきりつけたいんだ」

鈴とセシリアは齒を食いしぼり、ため息をついた。

鈴「わかったわ。あんたたちがどうしても言うなら、もうなんにも言わないわ」

セシ「わたくしも殿方の真剣勝負を見守る義務があります。言うこととはなにもありませんわ」

セシ・鈴「そのかわり、優勝しなかったら絶対に承知しませんわ！  
！（許さないからね！！）」「

一樹「あ、ああ。粉骨碎身でがんばるよ」

一夏「お、おう。任せとけ」

納得してくれたが、最後の一言だけはただならぬ執念が込められていた。

山田「美しい友情ですね」

いや、違うと思う。

帰り道、橋の近くの街灯のまえで三人組は一人の女子生徒といた。

一樹「この子が新聞部の一年で、なまえ 黛さんに紹介してもらった武田沙苗さんだ」

武田「初めまして、武田沙苗です。あなたの事はよく知っています」

シャ「初めまして、トーナメントよろしくお願いします」

オレンジ髪の少女、武田沙苗。以前取材中の黛と会い、その時彼女の助手をしていると紹介された。クラスも鈴と同じ2組だそうだ。

一夏「小声 なあ、大丈夫なのか。普通の子とシャルルを組ませちまって。女だってバレたらそこで終わりだぞ」

一樹「小声 大丈夫だ。黛さんが言うに武田さんは天然で、普通の人なら気づく事が数カ月後になって気づく人だと言っていた。シャルルが男である事を思い込ませれば1年は大丈夫だろう。それにISもそこそこ出来るし」

そんな子と組ませて大丈夫なのか。しかしシャルルが女であることをごまかすには、気づきにくい人と組ませるのがベストな作戦だ。

第21話 SS(鈴・セシ)本命救命室(後書き)

タイトル由来は海外TVドラマ「ER 緊急救命室」より  
感想待ってます。

## 第22話 武士の三分（前書き）

学年別トーナメント当日。アリーナ更衣室での出来事です。

## 第22話 武士の三分

6月第4週に入り、月曜から学年別トーナメントが開催された。初日一回戦、開始まで35分。一樹、一夏、シャルルはアリーナ更衣室でISスーツに着替え待機していた。更衣室のモニターから観客席の様子を見るとそこには一般学生以外にも、各国のお役人、研究者、IS企業重役、その他VIPの顔ぶれが貴賓席そとに揃っていた。

一樹「すごい観客だな。プロ野球オールスター戦みたいな感じだ」

シャ「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チエックが入ると思うよ」

一夏「まあ、俺や大神は確実にチエックが入ってるだろうな・・・」

お偉いさんは一樹のISはわかっているんで、この大会は第5世代型のデモンストレーションを兼ねた見物に来ているに違いない。もちろん一夏も男性操縦者ということで注目されている。

一樹「遠路はるばるご苦労様ってところだな。でも俺たちはやらなければいけない事がある」

一樹と一夏に課せられた事。それはドイツ代表候補生 ラウラ・ポードヴィツヒと戦い、勝利し彼女の「一夏への憎悪をなくす事。武人であるラウラは勝負に負ければこちらの要求を呑むだろう。・・・」  
・タブン

シャ「一樹はポードヴィツヒさんとの対決だけが気になるみたいだ

ね

一樹「ああ、でもこれは一夏自身の問題なんだ。俺は友達を侮辱されたことが許せないし、それに彼女も俺との戦いを望んでいる。相手からの果たし状を受け取ったら必ず白黒をつける。それが俺の武士道だ」

現代のサムライとはこういう精神を持つ者なのだろう。箒もサムライの心を持つ、サムライガールだ

一夏「お前、本物のサムライみたいだな。時代劇で見たことあるけど負けた武士は死ぬっていう奴もいたっけな」

シャ「サムライって命懸けなんだね。一樹、もし負けたらハラキリっていうことするの？」

一樹「いや・・・切腹はしないよ。あれは昔の責任をとる自決方法なんだ」

切腹は今の言葉で言うと自殺。武士社会に浸透した罰で武士にとって潔い死に方だが、現代社会に合わないもので現代人には責任逃れという解釈がつけられている。ここでシャルルは話の筋を戻した。

シャ「でも二人とも、感情的にならないでね。ボーデヴィツヒさんは一樹と同じくらい強いし、一樹の第5世代型にも引けを取らないし・・・」

一樹「心配ない、作戦は考えてある」

一夏「作戦？ いったいどんなのなんだ、大神？」

一樹の考えた作戦はなんなのか。それを言おうとした瞬間、モニタ―にトーナメント表が映し出された。

シャ「あ、対戦相手が決まったみたい」

一樹・一夏・シャ「・・・えっ!？」

出てきた表に一樹達は驚いた。第1試合で一樹と一夏の一回戦の相手はラウラと篤のペアだった。ペアが決まらなかった場合は抽選で決まるとあったが、よりによってこの組み合わせとは。恐ろしい偶然だ。ちなみにシャルルと武田さんペアは一樹達の真隣だった。

一樹「おいおい、しょっぱなからか!？てつきり準決が決勝で戦うと思ったが、こんなに早い決戦とは」

一夏「初戦から決勝モードかよ」。しかもラウラのペアが篤なんて余計にやりづらいぜ」

シャ「これはしょうがないよ。組み合わせも向こうが抽選して決めただし・・・」

一夏「だからって、これはいきなりすぎるだろ!しかも相手の組み合わせも最悪だしよ」

一樹「やるしかないだろう。ラウラと決着をつけることが早まっただけだ。ペアに篤くんがついただけで状況に変わりはない」

あまりにも早すぎる戦い。高校野球地方大会で弱小校が、甲子園常連校と一回戦から戦うようなムードになった。シャルルは言いかけ

た一樹の対ラウラ用作戰を聞いた。

シャ「一樹、一夏に一樹の考えた作戰を教えなきゃ。あと30分しかないよ」

一樹「ああ、そうだな。一夏！ブリーフィング（作戰説明）するか  
らこつち来てくれ」

一樹は更衣室のホワイトボードに戦闘作戰、対ラウラ作戰を一夏に  
わかりやすく教えた。その戦闘作戰とは、かの戦国武将の考えた戦  
術を現代に蘇らせた作戰であった。対ラウラ作戰は、何か昔の映画  
のタイトルを引用した作戰名であり、確実性は五分五分だ。

・・・20分後

一通りの作戰を伝えた一樹。一夏の顔にはやる気と不安の二つの表  
情があり、シャルルは日本人の考えに深く関心を持っていた。

一夏「・・・だいたいはわかったがラウラへの作戰、あれで通  
じるのか？」

一樹「確証はないが俺を信じろ。少なくとも、最初に話した戦闘作  
戦はラウラや今後の戦いでも有利になるだろう。あと俺の言ったこ  
と忘れるなよ」

一夏「ああ、わかってるって。でもなんか、お前と一緒にだとか何か負

ける気がしねえしな」

シャ「サムライって本当に変わっているね。戦闘作戦は確かに合理的で実用性が良いかもしれない」

一樹「さあ時間だ。行くぞ」

一夏「おうっ」

一樹と一夏は準備万端とした雰囲気更衣室を出てアリーナのカタパルトへ歩いて行った。

・・・・・・7分後

試合開始まで3分。一樹と一夏はカタパルトで光武と白式を展開し、落ち着いた表情で待機していた。その横でシャルルが二人を見て心境を聞いた。

シャ「いよいよだね。どう二人とも、今の気持ちは？」

一夏「また大勢の前で戦うとなると緊張するもんだ」

一樹「一夏、この戦いは俺たちとラウラの果し合いに白黒つけるために戦うんだ。俺とお前が集中するのは観客じゃない、ラウラと篤くんだ」

一樹が喝を入れ、一夏は吹っ切れた。どうやら覚悟を決めたようだ。

一夏「そうだったな、大神。この勝負は負けられない。俺たちは絶対に勝つ！」

一樹「ああ！この時代、俺たち強い男がまだいる事を証明してやろう！サムライの意地っ、みせてやるぞっ！」

大神・織斑ペア。試合時間が近づきました。フィールドに出て、所定の位置に移動し待機してください

アナウンスが流れ一樹と一夏はカタパルトで勢いよく飛び出した。そこには既にラウラと箒が位置にっていた。

ラウ「ふんっ、逃げずに来とはな。少しは褒めてやろう。しかし試合開始直前まで何をしていた？戦うのが怖くて隠れていたのか？」

一樹「いやなに、気合をためていただけだ」

ラウ「ほう、私に勝つ気にいるのか、面白い。だがもう今までのような生ぬるい戦いではないぞ。私が本当の戦いというのを教えてやろう」

一樹「そうかい。ならこっちは本当のサムライというのを教えてあげるよ カチャ 爺ちゃん仕込みの戦闘、みせてやる」

一樹は両腰から銀狼・白狼を抜き構えた。

箒「大神、一夏、こつも早く戦うことになるとは。当たった以上全力で戦うまでだ。勝負だ ブンッ」

一夏「負けないぜ。箒、ラウラ、勝負だ ブオン」

一夏と箒も雪片式型と打鉄のブレードを展開して構えた。アナウンサーが入り試合開始まで秒読みが開始された。

試合開始まで5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・試合開始!! パア  
—————

一樹・一夏・ラウ・箒「いくぞっ!!!!」

## 第22話 武士の三分（後書き）

タイトル由来は映画「武士の一分」より  
感想待ってます。

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦（前書き）

サクラ大戦の作戦コマンドが登場！

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦

箒 「覚悟お」

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！

一夏「でやあああああ」

箒と一夏がチャンバラを繰り返している反対側でラウラと一樹が対峙していた。

ラウ「どうした？かかってこい」

一樹「ふん！ゴオーーーーーー」

疾風改を始動させラウラに切り込み突撃していく。ラウラはすぐさまAICを起動するが一樹はレールガンを地面に撃ち、砂けむりを発生させた。ラウラは上へ急上昇したがそこには既に一樹が待ち構えていた。

一樹「せい！ガキ！とう！ガキ！でやああ！ガン！ガキン！これでどうだっ！バカアン！」

ラウ「ガアン！くっ・・・なめるなあ」

ラウラはとつさにAICを出す、すぐに反応した一樹はラウラから離れ、AICを回避した。次にラウラはワイヤーブレードを出し、一樹の左刀の白狼に巻きつけた。

ラウ「ふふっ、捕まえたぞ」

一樹「どうかな ブオオオオオオン」

ラウ「なに！引っ張られ・・・ ガアン ぐはっ」

一樹は疾風改の出力を上げ、ワイヤーが巻き付いた左刀を思いっきり引っ張り、引き寄せられたラウラに蹴りを入れふっ飛ばした。疾風改は機動力上昇だけでなく、瞬発力上昇という機能もあるのだ。  
一樹はここで一夏に何か告げた。

一樹「一夏！そろそろ行くぞ、火作戦だ！」

一夏「了解っ！」

今を遡ること30分前、場所はアリーナ更衣室。ホワイトボードの前で一夏は一樹の考えた作戦のブリーフィング（説明）を聞いていた。

一樹「一夏。『風林火山』という言葉を知っているか？」

シャ「フウ・リンカ・ザン？なにそれ？」

一夏「『風林火山』って確か、『疾はやきこと風の如く、徐しずかなること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如く』だったな。千冬姉えから教わったことがある」

一樹「そうだ。移動するときには風のように速く、静止するのは林の

ように静かに、攻撃するのは火のように、防御は山のように。 武将：  
武田信玄の旗に書かれた言葉だ」

戦国時代、甲斐の虎こと『武田信玄』がこの言葉を陣旗にしていた  
ことから、風林火山という言葉が広まったのである。

一樹「戦闘作戦として風林火山を使うことにする。まず風作戦は相  
手への進軍スピードを重視した機動作戦だ。相手に接近してじわ  
りじわり攻撃する以外にも、敵が攻撃してきたら一時的に逃げるん  
だ」

シャ「攻撃は徐々に与え、相手を翻弄させるんだね」

風作戦は機動力作戦のため、攻撃、防御も低く特に目立つような作  
戦ではない。

一樹「林作戦はいわば普通の状態だ。」

一夏「つまり、普段通りの戦闘スタイルでいいってことか？」

一樹「そうだ。次に火作戦は攻撃に専念する作戦だ。攻撃は最大の  
防御なりとも言う。つまり徹底的に攻撃して相手を素早く倒すんだ。  
防御なしだからリスクは覚悟の上の作戦だ」

シャ「一夏にピッタリの作戦だね。白式は攻撃特化型だし、一夏の  
性格にも合っているし」

一夏「ありがとよ、褒め言葉として受け取るぜ」

これまで一夏は猪突突進な行動をとってきたので、この作戦はお似

合いだろう。

一樹「山作戦は文字通り山のようにどっしり構える、防御戦法だ。相手の攻撃に耐える、迎撃体制の作戦だ」

以上が作戦『風林火山』である。曾祖父 大神一郎から教わった作戦であり、大正時代に帝国華撃団、巴里華撃団に使われていた作戦である。

一樹「まず最初は林作戦でいく。その後の指示は俺が出す。ぶつつけ本番だがお前ならできる」

一樹の一言で二人の陣形が変わり、箒に一樹はレールガンを連射し、一夏は斬りかかった。攻撃は箒へ集中放火した。

ドオン！ドオン！ガキ！ガキン！

箒「くっ、これでは防戦一方だ」

凄いい勢いで箒のシールドエネルギーはみるみる減っていく。一樹は射撃を止め、ラウラが接近してくるのに気がついた。すぐさま一夏に指示をだし、作戦を変更した。

一樹「一夏、ラウラが来る！風作戦に変更だ！」

二人は攻撃の手を止め箒、ラウラから急加速して距離をとった。

ラウ「ジャマだ、どけ！」

ラウラはワイヤーブレードで箒を放り投げ、彼女は地面に叩きつけられた。

箒 「くっ、何をする！」

一夏 「なんて、奴だ。味方なのに」

一樹 「一夏、箒くんはもうエネルギーが少ない。ラウラを警戒しながら林作戦でいくぞ」

一夏 「おう！」

モニタールームにて、二人の戦術を観る千冬先生と山田先生。

山田 「先に篠ノ之さんを倒す作戦でしょうか」

千冬 「賢明な判断だ。ボーデヴィツヒは自分側が複数なのでの戦いを想定していない。パートナーの事は最初から頭数<sup>ハナ</sup>に入れてない」

山田 「それに比べて、大神くんと織斑くんの連携は素晴らしいですね。大神くんの言っている風、林とは何の合図でしょうか」

千冬 「（一郎さんの作戦を使うとは。しかし、その作戦を使いこなせるかがカギだ。状況に応じて使い分けなければ戦局を変えられんぞ）」

箒 「はあああつ！ ガキイン」

箒が一夏に突っ込んで行くのを一樹に止められた。

一樹「すまない、箒くん。先に君を倒すんでね。悪く思わないでくれ  
ズバアアアアン」

一樹の二刀が箒の機体に刻まれ、訓練機『打鉄』はシールドエネルギーがゼロになり沈黙した。

箒 「く、ここまでか」

一樹はすぐに一夏のもとに駆けつけた。

一夏「箒は？」

一樹「倒した。今度はこっちに専念だ」

一夏「よし。あの作戦か」

一夏「いや、まだだ。山作戦で行く」

一夏「山あ！？ここで必要なのか」

一樹「ラウラは接近するとAICを使う。だったら向こうからこっちに近づかせた方があの作戦に有利だ。ガチン」

一夏「・・・わかった。行こう ジャキン」

二人は互いの距離をとり刀を構え、動きを止めた。ラウラは二人の陣形を見て疑惑を抱いた。

ラウ「（どういうつもりだ。さっきまで攻撃的だったが今度は動かなくなった）」

一樹「さあ、ラウラ！どっちにでもかかってこい！」

一夏「お前を負かせる準備は出来ているんだ！」

ラウラを挑発し始めた二人。これに対しラウラは冷静に分析をはじめた。

ラウ「（サムライは遠距離攻撃の武器があるが、織斑一夏はあの刀剣武器のみとみた。ここはサムライを対象を絞るか）行くぞっ、サムライ！」

ラウラはプラズマ手刀を出し、一樹に接近した。一樹はこの機会を待っていたかのような笑みを出した。

一樹「来たぞ、一夏！プロジェクトK、発動！」

一夏「よしてきた！」

対ラウラ用作戦『プロジェクトK』とは一体何なのか。

第23話 大神一樹FIRST 今、甦る作戦（後書き）

タイトル由来はTVドラマ「古畑任三郎FINAL 今、甦る死」  
より

## 第24話 プロジェクトK（前書き）

プロジェクトK。

サクラ大戦にはそんな作戦は登場しませんが、サクラ調な戦闘です。最後まで楽しんでください。

## 第24話 プロジェクトK

プロジェクトK発動！一樹はラウラと接近戦を繰り広げていた。AICに捕まらずに回避を繰り返しながら白熱した戦闘が続いた。ここで一樹の桜色の必殺技が出た。

一樹「桜花天昇！ ザンツ！」

一樹が桜色の衝撃波を飛ばし、ラウラに当たった。シールドエネルギーが大幅に削られ、煙が立ち込める。

ラウ「バアーーーーン くそオ、何処だサムライ！」

煙の切れ間から一樹が表れ、それに気づいたラウラはとっさにAICを発動させた。一樹の光武は動かなくなり、ラウラはレールカノンを構えた。

ラウ「こつもあつけなくとはなつ ドガン、ドガン ぐはっ！」

いきなり爆発をくらったラウラ。二発受け、よろめきながら後ろを見ると、『対IS用ダネルMGL型グレネードランチャー』を構えた一夏の姿があった。

また時は遡ること、試合開始前の更衣室。

一夏「プロジェクトK？なんだその作戦は？」

ホワイトボードに作戦の陣形を説明した。

一樹「まずはラウラ自身から俺へ接近戦に来るように持ち込み、そこでわざとAICを発動させる。そこで一夏がこのグレネードランチャーで攻撃するんだ」

光武の右手を部分展開させそこへ「対IS用ダネルMGL型グレネードランチャー」を出した。装備が他の機体と比べて不足している光武のために、バックパックが取り付けられた。容量は小さいがレールガンの予備弾薬×2、サブウエポンを1、2個を収容出来る装備だ。

シャ「そんなの、一夏に使えるの？」

一樹「大丈夫だ、ダットサイト（光像式照準器）以外にもレーザーサイトが付いている。これなら初心者の一夏でも扱えるだろう」

一夏「確かにこれなら俺にも見えそうだな」

一樹「ラウラは一夏が飛び道具を持っていないと思っている。その心理を利用するんだ」

そして現在、アリーナ試合中。

一夏「なんて使いやすい武器だ。簡単に狙えるぜ！ ドガアン！、ドガアン！ドカアン！ドカアン！」

たて続けにラウラに装弾数6発、全弾撃ち込んだ。ラウラは激昂し

ターゲットを一夏に変え突進していった。

ラウ「ボンッ！ボンッ！ぐあっ、く、この死に損ないがああアアアア！」

ラウラは一夏へAICを発動させて動きを止め、またレールカノンを構えた。しかし一夏は笑っていた。なぜなら

一夏「忘れたのか、俺達は二人いるんだぜ」

この一言にラウラは一樹の方向へ顔をやった。一樹は二刀を構え、刀身には青い稲妻がまとっていた。疾風改をフル稼働させ神風特攻隊のように突撃してくる一樹。プロジェクトKのKとは神風特攻隊のKであった。

一樹「いくぞ！狼虎滅却ううう！」

ラウ「させるかあ」

ラウラはAICの対象を一夏から一樹に変更した。一夏は巻き添えをくらすことを避けるためにイグニッション・ブーストでその場を離れ安全な距離をとったところで、一樹から借りたグレネードランチャーを大きく振りかぶった。

一夏「これで、どうだあ！ブンっ」

なんと、一夏はグレネードランチャーをラウラめがけて投げつけた。ラウラはそれに気づき、手で防いだが、その行為こそが一樹たちの狙いだった。

ラウ「ガン！ く、こしやくな・・・！！！！しまった！！」

一樹「（A I Cは対象への集中力が必要だ。その集中力さえ乱せば、必殺技を与えるチャンスができる）」

一夏の投げつけたグレネードランチャーで、一樹へA I Cを発動させる集中力を乱したラウラ。早く集中しようとしたがもう既に一樹は眼前にいた。

一樹「天地！！一矢！！！！」

ラウ「うわあああああ！ バリバリバリバリ」

二刀の稲妻の斬撃がラウラに刻まれ、シールドエネルギーが凄い勢いで減っていき、残りの量が100前後にまで下がった。攻撃を終えた一樹は、一夏と合流した。

一樹「作戦成功だ、一夏」

一夏「ああ。無茶な作戦だったが、上手く行ってよかったぜ」

控え室でシャルルがモニターで、プロジェクトKをじっくり見ている

シャ「ボーデヴィツヒさんがターゲットを一樹にしなきゃ発動出来ない作戦。ほとんど賭けな作戦だよ、ホント」

ラウラは膝をついて動かなくなり、機体からも煙が出始めた。もう勝負はついたも同然であった。

ラウ「ま、まだだ！まだ終わってない！」

一夏「まだやる気みたいだな」

一樹「作戦を『風林火山』に戻そう。林作戦で行くぞ」

一夏「よしきた！」

ラウラは立ち上がり、煙と電流を放出する機体を持ち上げた。一樹と一夏は刀を構え、作戦『風林火山』に切り替えた。と、そのとき

ズドオオ

ン！

ン！ズドオオ

大きな音と共にアリーナのフィールドに黒い影が二つ。煙が晴れ、刀を持った日本の鎧のような機体が2体現れた。場内に警報が鳴り響き、スタンドに防御壁が展開され避難アナウンスが流れた。

緊急事態発生！緊急事態発生！鎮圧部隊は直ちにフィールドに急行してください！

一夏「この間の謎の機体と似ている！また来やがったのか！」

一樹「お前たち、一体何者だ！名を名乗れ！」

謎機体「ギ……脇侍……」

片言だがしゃべった。ここでラウラがレールカノンを構え脇侍に向かって躊躇なく発射した。

ラウ「何者が知らんが、私の戦いのジャマをするなああああ！  
ドオオン」

脇侍はラウラの砲撃を紙一重にかわし、一機がラウラに近づき手をかざして金色の超音波らしきものをラウラに浴びさせた。

ラウ「ウイ~~~~~ン　なんだこの音は!?!?!?!?  
ガ、ガガ、ガガガ」

金色の超音波を浴びたラウラは鉄仮面な顔つきでレールカノン乱射、ワイヤーブレード、プラズマ手刀でアリーナの破壊活動を始めた。被害はみるみるうちに広がっていき、スタンド防御壁も所々破られていた。

山田「ボーデヴィツヒさん、何やっていますのですか!」

千冬「駄目だ、彼女は何も聞かない。おそらく、あの超音波でボーデヴィツヒは操られているのである」

フィールドでは一樹と一夏が脇侍と呼ばれる敵と何やら会話をして  
いた。

一樹「貴様、彼女に何をした!」

脇侍1「タダノ・・・カイハツチユウノ・シンヘイキノ・・・テストダ」

脇侍2「ダガ・・・シツパイダ。ヤハリ・・・デキソコナイデハ・・・シツパイモ・・・トウゼンカ」

この一言で二人に怒りの2文字が浮かび上がった。操られたラウラが破壊活動を中断し、狙いを一樹&一夏に定めた。

一夏「敵とはいえ、ラウラは千冬姉えにとっては大事な人だ。あいつも守ってやる！大神、手を貸してくれ！」

一樹「わかった！行くぞ、一夏！」

ここで脇侍達は一樹の名前を聞き、こそこそし始めた。

脇侍1「オオガミ？・・・マサカ・・・」

脇侍2「オイ・・・ソナ・・・ワケ・・・アルハズガ・・・ナイダロウ・・・イクゾ」

脇侍2機側は腰から刀を構え、臨戦態勢に入った。一樹は互いのエネルギー残量と作戦を確認した。

一樹「一夏、残りエネルギーはどのくらいだ？」

一夏「零落白夜が1回か2回出来るくらいだ。お前は？」

一樹「天地一矢で大きくエネルギーを消費した。桜花天昇はもう出せないから快刀乱麻2回が限界だ」

一夏「あの脇侍って言う奴を倒せばラウラは元に戻るんじゃないのか」

一樹「あの超音波の音源が脇侍だったらそれを破壊すれば彼女は洗脳から解けるかもしれないな。……よし、火作戦で行こう！  
目標、脇侍2機の殲滅！」

一夏「了解！」

二人は火作戦の体制になり2機の脇侍に向かって行った。このとき、  
一樹自身の戦いが今始まった瞬間だった。

## 第24話 プロジェクトK（後書き）

タイトル由来は映画「プロジェクトA」より  
感想待っています。

## 第25話 ダイ・ハード（前書き）

戦闘場面の書き方がわからなかったので効果音を入れてみたら、感想で台本調というのを指摘されました。

それを改善し、戦闘描写を不器用なりにがんばって文章にしてみました。

上手くかけているかわかりませんが最後までお楽しみください。

## 第25話 ダイ・ハード

脇侍2機&ラウラ対一樹&一夏。2対3というのに一樹達は引けをとらずに、必死に戦っていた。脇侍2機の武器は刀一つだが、動きに感情がない。前回、襲撃した無人機と同じようだがこつちのは片言だがしゃべる。一樹と一夏は各脇侍に一对一で接近戦を繰り返していた。しかし脇侍側が不利になると奴らはラウラを使い、二対一で挑んで来る。モニタールームで千冬先生達はその様子を見ながら分析していた。

「大神くんたちが戦っている機体、前に乱入したISと似ています  
が簡易分析した結果、通常のISとは違う反応があります」

「純製ISではない、ということか」

「そういうことになりますね。この前の襲撃犯といい、一体なぜ学園にこのような事を？」

「山田先生、鎮圧部隊を急がせてください。何か悪い予感がする」

「わかりました。大神くんたちにはそれまでがんばってもらおうよう  
伝えておきます」

「（あれが一郎さんの言っていた敵か。あいつが関係してなければ  
いいが）」

この事態を千冬先生が一番知ってそうだが、先生はただ黙って一樹  
たちを見ていた。一方、控え室に待機していたシャルル。そこへセ  
シリアと鈴が来た。スタンドの防御壁はラウラの破壊行為で所々に

穴が空いており、一部の生徒はアリーナの奥へ避難した。

「シャルル！今どうなってんの！」

「二人は無事ですよ！？」

「鳳さん、オルコットさん。今の所は二人とも無事だけど、機体のエネルギーも少ないから長期戦はできない」

モニターを見ると敵3機に立ち向かう一樹たちの姿が。機体は傷つき、二人の息もあがっているのも見えた。そこへ一樹に破れ、フィールドから退場した筈が息を切らして走って来た。

「ハア、ハア、ハア・・・一夏・・・一夏たちはどうなっている！？」

「篠ノ之さん、無事でしたの」

「無事だけど、なんかヤバイ雰囲気ね。カズキたちも体力が残っていないみたいだし」

モニターの向こうでは激しい戦闘が行われておりその様はまさしくチャンバラ。生徒、教師、VIPは映し出される映像を凝視していた。4人は一樹たちの無事を祈るように見守っていた。

「一夏・・・」

「大神さん・・・」

「一樹・・・」

場所はフィールド。接近戦を一時止め、敵から大きく距離をとった一樹と一夏。その顔は疲労困憊ひんがひの色だった。

「はあ、はあ……強いな、コイツら」

「くそっ！ラウラの機体のエネルギーも残りわずかなはずだが、なかなか停止する気配が見えてこない！」

二人のシールドエネルギーも残りわずか。零落白夜は1回、快刀乱麻は2回を使っただけで機体は止まってしまっほどの量だった。脇侍と剣を交えて一夏があることに気づいた。

「……大神、あいつら俺たちと近接戦闘するだけで一回も空を飛んでないよな？」

「そういえば……ISならPIC（ISの浮遊・加減速を行う基本システム）があるはず。なぜ使ってないんだ？」

ISはPICで中に浮き、機体を推進させるのだが脇侍は地面にべったり足をつき中に浮いているのは見られない。そもそもアリーナに出現してきた時、飛んできたのではなく落ちてきたのだ。一夏が大きく息を吐き、自分の案を提案した。

「よし、チャンスだ！大神、林作戦に変えてくれ。PICがないのならこっちが断然有利だ。まず俺の最後の零落白夜で1機を倒す。その後からお前が必殺技でもう1機を頼む」

「そうだな、飛べないのならこっちが優勢だ。それに持久戦ができるほどエネルギーも無い。……わかった、林作戦に変更！一気にキメるぞ！」

一樹の指示のもとに二人は陣形を変えた。先方に一夏、後方から一樹という陣形で零落白夜を発動、快刀乱麻を準備して一直線に突撃。

「行くぞおおおおおおお！」

脇侍2機を倒せばラウラの洗脳も解け、被害は収まる。その目標を胸に白式と光武の残りわずかなエネルギーを使い向かっていく二人大きく雪片を振りかぶった一夏。太刀筋も悪くない。そのうしろで一樹が電気を帯びた銀狼・白狼を握り締め、一夏に続いて構えていた。脇侍2機を同時に破壊できると一夏と一樹、千冬先生やシャルルたちも確信した。

だが……

2機の脇侍は二人の太刀筋を見切り、光武と白式の機体に1本の切り込み入れた。しかもひと振りを受けた上に二人はラウラの飛び蹴りを受け、シールドエネルギーは0になった。倒せるはずだった。それがPICも無い脇侍のひと振りで逆に二人は倒された。ラウラの蹴りをくらった二人はフィールドの壁にぶつ飛ばされた。壁に叩きつけられたショックで展開が解け、一樹と一夏は地面に倒れ、その様子はモニターを通じて見ていたモノの目に入っていた。

「一夏あああああつ！」

「大神さあああああん！」

「一樹ーーーーーッ！」

「大神くん！織斑くん！大丈夫ですか！？返事をしてください！大神くん！織斑くん！」

「くっ……鎮圧部隊っ！二人の救助を最優先だ。医務室への搬送をおこたわるな！」

一同に不安が走る。モニターを見ていた者は不安のあまりざわめきだした。

「ウソ……大神くんが簡単に……」

「織斑くん、動かないよ……」

絶望に思った女子生徒達。その時、二人は体を起こし、吐血を拭き取った。二人の無事に一同は安心した。だがフィールドの二人は今起きた事にえらく焦っていた。

「ば……ばかな……俺たちの渾身の振りを……簡単に……」

「……ぐッ……まだだ！俺は……」

一夏は立ち上がるうとするがその場で膝を付いた。全身を壁に打ち、敵の一撃をくらったのだ。それに今の一樹たちにもうISを起動させるエネルギーはない。と、そこへ10機編成の鎮圧部隊が駆けつけた。うち4機が一樹と一夏の所に救助も来た。

「大丈夫ですか！？すぐに医務室に連れていきますからね。早く夕

ン力を！」

残り6機は脇侍とラウラの周りを鎮圧部隊が囲み、武器を構えた。部隊長が現場に降り立ち、指揮をとりはじめた。

「現場に到着。これより敵機撃・あああッ！」

部隊長は指揮をとろうとした瞬間ラウラがレールカノンで部隊長を攻撃した。それと同時に脇侍たちは動揺した隊員を次々と攻撃していった。慌てて反撃したため狙いが定まらず、2機、3機と次々と倒されて行った。

「ムダ・・ダ・・オマエ・・タチ・・ガ・・ナンニン・・・・コ  
ヨウト・・・ワレラ・・・二八・・カテン」

脇侍2機はラウラを従え、鎮圧部隊を片っ端から攻撃していき、救助員を含む10人部隊員は倒されていった。学園の治安を守る部隊は3機の敵にあつという間に全滅し、一樹と一夏を救助する人員も次々と倒された。恋の争奪戦だった学年別トーナメントのアーリーナは虐殺の場と化した。その様子は千冬先生と山田先生の目にも入っていた。

「そんな、部隊があつという間に壊滅なんて」

目を疑う山田先生。千冬先生は目を閉じて数秒の沈黙のあと、山田先生にある要請を出した。

「・・・・私が行く。山田先生、訓練機の打鉄を私に手配してください」

モンド・グロツソ世界大会の優勝者である千冬先生が自ら出撃しにドアへ歩いて行った。その時、山田先生がモニターに映る一樹を捉えた。

「織斑先生！あれを見てください！」

それは一樹が打ち身の体を起こし、脇侍達のほうへ歩いていく姿だった。千冬先生はアナウンスマイクを取り、一樹に一夏を連れて早く逃げろと言うが一樹は聞こうともせず、散乱していた鎮圧部隊の装備の太刀を手に取り構えた。

「俺はまだ戦う！最後まであきらめない！一夏を……仲間を……守る！」

一樹がそう発言した瞬間、敵の動きが止まり、急に視界がカメラフイルムのネガのような世界になった。慌てふためく一樹。すると、向こうから能面をつけた能楽師みたいな者が現れた。謎の能楽師は一樹の元へ歩いて行き、太刀を構える一樹に超低音で問いかけた。

「男よ……まだ……戦い……たい……か？……か？」

「（誰だ！？）」

この場において、あまりにも不信な相手だ。能楽師は一樹の質問に応じず、戦うかどうかの質問を一樹に問い続けた。

「戦い……た……いの……か……か……？」

能楽師の質問に一樹は口を噛み締め、答えた。

「（俺は戦う！）」

「何……の……た……めに……？」

「（平和を乱す敵から人々を守るために戦う！一郎じいちゃんのように！）」

「なら……ば……我の……力……を……か……そ……う……」

能楽師は扇子を開き、光る球体を出した。その光る球体は一樹の顔の左上部分にくっついて変形し、やがて顔左上半分の能面の形を成した。すると待機状態にあった札状の光武が展開され、ステータスを見てみるとエネルギーが全回復されている状態にあった。あまりのことに一樹は驚くしかなかった。

「（待つてくれ！あんたはいつたい！？）」

一樹の質問に謎の能楽師は一つも答えもせず、ネガのような世界の奥へ消えていった。能楽師が消えたあと視界は元に戻り、脇侍達はこちらを振り向いていた。その横で一夏が目を丸くしてあ然とした顔で一樹を見ていた。

## 第25話 ダイ・ハード（後書き）

タイトル由来はそのまま映画「ダイ・ハード」より  
これまで台本調に書いたことをお詫びさせていただきます。  
感想を待っています。

## 第26話 落武者の黙示録（前書き）

脇侍との戦闘クライマックスです。上手く書けているか不安ですが、最後までお楽しみください。

## 第26話 落武者の黙示録

「フン・・・シヨセン・・・ハ・ワレワ・・・レ・・・ノテキ・・・デ  
ハ・・・ナカッタ・・・ナ」

「イク・・・ゾ・・・シレイ・・・デ・ハ・シセ・・・ツノ・・・ハカイ・  
・ダ」

一樹と一夏、鎮圧部隊を倒しアリーナの外へ出ようとする脇侍達。  
スタンドへの防御壁を壊そうと振りかぶった瞬間、アリーナに振動  
が走った。振り向くとそこに顔左上半分の能面を被り、光武を展開  
した一樹が二刀を抜いていた。近くにいた一夏は目を疑った。

「大神？お前なのか!？」

「・・・ああ、大丈夫だ」

一樹は光武のステータスを開きエネルギーの量を確認し、二刀を素  
振りした。

「よし、動く!これなら勝てるぞ!」

なぜエネルギーゼロだった光武が展開できたのかは不明だが、一番  
の疑問は能面である。ベージュ色で金色の目玉の能面が一樹の顔左  
上半分を覆っており、反対の覆われてない右目の瞳は青く輝いてい  
た。機体と刀はこれまでかかつてないほど青白く光っていた。

「一樹、一体どうしちゃったんだろう。復活したら顔にお面みたい  
のが顔についているし・・・」

「あの面・・・能面みたいだが・・・」

和風の筭はすぐに能面のかけらとわかったが、外国人の3人には？お面”と呼んでいた。控え室モニターにも一樹の異変は終始映つて、モニタールームでも確認済みで山田先生が再起動した光武を分析し始めた。自分が出撃しようとした千冬先生も異変に目が釘付けだった。

「なんだ・・・あれは？」

「織斑先生！大神くんの機体のエネルギーが全回復しています！」

シールドエネルギーがなくなったISはそのエネルギーを補給しなければ戦闘ができない。光武が補給している所なんてなかった。モニターを見ていたものはいつの間に補給したんだという疑問が残った。脇侍達が一樹に気づき再び臨戦態勢に入った。

「ナンダ・・・ヤツ・・・ガ・・・フツカ・・・ツ・ダ・・・ト」

「オレニ・・・ヤラ・・・セ・ロ・・・スグ・・・オワ・・・ラ・・・セル」

脇侍1が刀を手に再び一樹との戦いが始まった。一樹は疾風改を起動させ、脇侍1に突撃して行った。剣2、3回交わり、再び激しいチャンバラが始まった。一樹の動きは、ダウンする前よりも動きが良くなっており、剣技の一撃一撃が重く、ひと振りで伏せられた脇侍に一人で相手していた。しかも一樹が攻勢はグイグイ押していた。

「ナンダ・・・コノ・・・ウゴキ・・・ハ」

脇侍1が思いつき振り振ったが一樹はその振りを素手で掴み、バキッ！と脇侍の刀をへし折った。その折れた刀身を脇侍1のこめかみに突き刺し、二刀でよろめく脇侍1の両腕を切り落とし最後に胴を両断した。地面に両腕が欠けた脇侍1のまっぴたつになった残骸が転び。

「すごい、部隊でもかなわなかった敵をあんな簡単に」

「パワーが今までと比べ物にならないくらいアップしてますわ。一体、光武の何処にそんな力があるのでしょうか？」

残るは脇侍は1機。一樹はエネルギーを銀狼・白狼に注ぎ込んだ。しかし何かが違う。刀身にいつもの倍以上の超高電圧の電気がまわり、疾風改の起動音も激しい。そして一樹の後ろに狼の幻影が出た。それに脇侍は急に怯えはじめた。

「マサ・・・カ！オマ・・・エハ！」

脇侍が一步一步さがりはじめ、一樹は逃がさんとはかりに超高電圧を帯びた刀と疾風改で脇侍に特攻を開始した。

「狼虎滅却ウウウ・・・刀光剣影！」

脇侍2の機体に4本の電気を帯びた切り傷が刻まれ脇侍2はその場に膝をつき仰向けに倒れた。脇侍2が倒れた後に一樹の光武のエネルギーが何もしていないのに急に減ってゼロになり展開が解け、待機状態に戻り復活する前の状態に戻ってしまった。同時に一樹の体に打撲の痛みが走った。一樹は面を外し、痛む体を引きずりながら倒れた脇侍の方へ歩いていった。脇侍は機体から放電し動く気配は

なかった。すると、頭部が動きだし何かを喋りだした。

「ナゼ・・・ダ・・・オオガ・・・ミ・・・イチ・・・ロウ・ハ・・・  
モウ・・・イナ・・・イハ・・・ズダ」

脇侍の口から衝撃の言葉が。「オオガミイチロウ」、一樹の曾祖父の名前で2016年春に死んだ、元帝国・巴里華撃団の隊長をなぜ脇侍が知っているのか。一樹は脇侍の言葉に耳を傾けた。

「おい！俺の曾祖父・大神一郎の何を知っている！」

「ハハハハ・・・オマエ・・・ハ・オオ・・・ガ・・・ミ・・・イチ・・・  
ロウ・・・ノ・・・ヒマ・・・ゴカ」

脇侍は笑いながら死に際・・・いや破壊間際に一言を放った。

「オモシ・・・ロイ・コトラ・・・イツ・・・オシエ・テ・・・ヤル。  
コノ・・・ジダ・・・イ・ハ・ヤツ・・・ガツク・・・ツタ・・・モ・・・  
・・・オ・・・ナ・・・ジ・・・ダ・・・」

「！」  
「どういうことだ！この時代とは女尊男卑でISの時代のことか！」

一樹が解い続けるが、脇侍2は完全に動かなくなった。

「（一郎じいちゃんが女尊男卑、ISの時代をつくっただと。どう  
いうことだ）・・・そうだ、ラウラは！」

脇侍2機を倒せばラウラの洗脳も解けるハズ。後ろを見るとプラス  
マ手刀を構えたラウラが立っていた。するとレーゲンの機体から金

色の煙が出て待機状態に戻った。一樹はそのまま地面へ倒れこんできたラウラを抱きかかえた。

「ラウラ、大丈夫か！？ラウラ！」

一樹の応答に答えたのか、ラウラはゆっくりと目を開けた。

「お・・・前は・・・」

「よかった無事で何よりだ」

そのまま気絶してしまったラウラ。スタンドの防御壁がさがりアリのナ警戒体制が解除された。一樹はラウラを抱え、一夏の方へ歩いていき無事に帰還したことを告げた。

「一夏、大丈夫か？」

「あ、ああ。俺は大丈夫だ」

この事件、一体誰が企てたのか。脇侍が破壊間際に言った曾祖父の名前と、曾祖父がつくったとされるISの時代。この戦闘で考えることは山ほど積もった。

「・・・お前一体何をした？」

急に復活したことを一樹に聞いた一夏。一樹はネガの世界に現れた能楽師の事と脇侍の破壊間際の言葉を話そうとした。

「いや、能楽師が・・・・・・」

これから話そうとしたとき、一樹はそのまま倒れ込んで気絶してしまった。現場に援軍が駆けつけ一樹、ラウラ、一夏は医務室へ運ばれた。

脇侍を破壊してから30分後、アリーナから続々と人が出始めた。山田先生がモニタールームからオペレータを勤め避難誘導を開始。

「学生の皆さんは退去後速やかに寮にお戻りください。なお明日は今回の事件の調査を行うので休校にします。アリーナには近づかないでください」

フィールドでは千冬先生は現場検証をはじめた。現場に散乱した脇侍の残骸に近づき先端から端まで見渡した。

「これは……一郎さんに見せてもらったものとは違う。」

千冬先生は脇侍の残骸を見て考察していた。そのとき足元になんかのカケラが落ちていたのを発見した。手袋をはめ、面を手に取りビニールの袋に入れた。それは能面のカケラだった。面のカケラをじっと見つめ怪しいものがないか360°見渡した。

「これは……大神の顔に付いていた面か」

「織斑先生、収容トレーラーが到着しました。これから積み込み作業を開始します」

「あ、ああ、頼む。くれぐれも慎重にな。私は少し場を離れる。なにかあったら連絡をくれ」

千冬先生は慌てて面のカケラをポケットにしまい、作業員に業務を任せアリーナを出て行った。千冬先生はアリーナの人気ひといけもないところで何やら電話を取り出し何処かへかけ始めた。

「おかけに鳴った電話は電波の届かない所にあるか、電源が入っていない・・・」

急ぎな時、この返答はなんか腹立つ。それは千冬先生も同じで彼女は舌打ちをした。電話を切り今度は別の所へ歩き出した。

「くそつ、こんな肝心な時にアイツは・・・仕方がない、かけ直すのを待つしかないか」

第26話 落武者の黙示録（後書き）

タイトル由来は映画「地獄の黙示録」より

第27話 レニ102歳 別れの手紙(前書き)

アリーナの騒ぎから数時間後、保健室での出来事です。  
またまたサクラキャラ登場です。

第27話 レニ102歳 別れの手紙

「おば上~~~~~」

一人の少女が夕日の原っぱ広がる平野にポツンと建つ一軒家へ走って行った。そのウッドデッキでレコードを流して、椅子に座る一人の老婆がいた。老婆は新聞を広げ記事に目を通していて少女が帰って来た事に気がついた。

「おかえり。どうしたの？そんなに慌てて」

「訓練校の模擬戦で教官5人を退け、優秀軍人賞を授与しました。これが勲章です」

彼女はドイツ軍訓練校の制服の左胸から輝く勲章を見せた。

「それはよかったね。ボクも鼻が高いよ」

老婆は彼女の頭をなで褒めた。少女は顔を赤らめ恥ずがかった。老婆は少女を褒めた後新聞をたたみ、夕食の準備を始めた。

夜。食事の後、彼女の今後の事について聞き始めた。少女は訓練校を卒業後、スカウトされていたドイツ軍のエリート部隊に配属されるとのことである。それを聞いたあと老婆は少女に別れとも言葉を述べた。

「2週間後、ボクはある事情で軍を離れることにした。もしかしたら寿命が尽きて本国<sup>コク</sup>へは帰ってこれないかもしれない。これからも

辛いことがあるかもしれないが、いい仲間と出会える事を願っているよ」

少女は別れの言葉を聞いて愕然がくぜんとした。しかし彼女は軍人、そこにいる人は親であり自分の上官でもある人だった。少女は動揺した声で老婆に退役理由を聞いた。

「おば上、なぜですか？あなたが軍を離れる理由とは何ですか？第二次大戦にドイツを守り、老いてもなお軍で崇められ、生ける伝説とされているあなたが辞める理由とは？」

少女の質問に老婆はこう答えた。

「次の世代へ時代を渡す。って言うのは変かな？でもこれからは君たち若い人が時代を築いて行くんだ。ボクたち老兵はいつまでも椅子に座っている訳にはいかないからね」

老婆は青く輝く目で少女を見つめた。彼女はフォークを強く握り締めたあと、ゆっくりと食器の横に置き立ち上がった。気を付けをした。

「わかりました。あなたが軍を辞める事については何も聞くことはありません。満を持して退役してください、ミルヒシュトラーク大將」

少女は敬礼をしたが、レニは訂正を求めた。

「ラウラ、おばあちゃんって呼んでよ。最後は君の親でありたいから……」

「……」

夢………。ラウラが目を覚ますとそこは保健室だった。外は夕方です。ベットの横には大神一樹がいた。

「よかった。ラウラ、目が覚めたんだね」

一樹はラウラが目覚めたことを校医に報告した。彼の顔はよく見るとぼんそうこうが3ヶ所貼られていた。一樹に呼ばれて、金髪でバンドナを巻き赤淵メガネをかけた白衣の校医の人が来た。

「意識が戻ってよかったです。薬が効いたのでしょう」

この校医の先生は松本かすみ。IS学園の名医？だそうだ。彼女は微笑みを絶やさない菩薩のような人で、菜食主義者の一面もある。生徒、教員問わず真剣に交際を望む女性からのラブレターが松本宛てに数多く送られているが紹介はここまでで。ラウラは勢い良く起き上がり

「敵は！私たちの戦いのジャマをした敵は！」

と叫び、一樹はラウラを止めた。

「落ち着くんだ、敵はもう倒した。安全だ」

「安全の問題ではない！私とお前たちの決着はまだ……ううっ！」

ラウラは体を起こした瞬間、痛みが走りうずくまった。松本先生が

オロオロしながら彼女に寄った。それでも彼女は一樹と決着をつきようとおがいた。

「ああ〜ダメですう〜。傷口がひらいてしまいます〜」

「はなせ！私はコイツと決着をつけないといけない！」

松本先生がラウラを必死で押さえようとする。見ていた一樹は止めに入るがラウラの蹴りが顎にクリーンヒット。床に倒れた。その拍子にポケットからiPodが落ち、保健室に音楽が流れ始めた。その歌を聞いたラウラは急におとなしくなり、昔の記憶に惚けていた。

「（この歌、ミルヒシュトラ―セ大将がいつも聞いていた歌・・・しかもこの声・・・大将の！）貴様！この歌を何処で！」

ラウラが血相をかいて一樹の胸ぐらを掴んだ。落ち着こうと一樹は彼女の手を解き、お互いの事を全て話し合うことを要求した。彼女はすんなりと聞き入れ、一樹は松本先生に席を外すよう頼んだ。松本先生が出て行ったあと保健室には一樹とラウラの二人きりになった。ラウラが落ち着いたところで話を始めた。

「落ち着いたかい？・・・じゃあまず、君はレニおばあちゃんの事を知っているんだね？」

「あの方、レニ・ミルヒシュトラ―セは私の上官でもあり、血のつながりはないが親でもあった。試験管ベビー（体外受精児）で身寄りのいなかった私を12歳まで育ててくれたのだ」

レニはラウラの上官で仮親、つまり養母であった。戦闘のためとして生まれたラウラを見てレニはかつての自分と照らし合せ、不幸に

しないよう彼女を引き取り自分の子供のように育てた。しかしラウラの遺伝子は戦闘に特化した強化試験体で人間の感性はほとんど消えて表情の変化にも乏しかった。でもレニの前では親子のような振る舞いを見せようと、軍では上官と部下、家では親と子の生活をしていった。

「今度は俺が話す番だ。俺の曾祖父は昔、東京にあった劇場の支配人だったんだ。その劇場で女優をやっていたのがレニおばあちゃんだ。長寿だったから子供の頃よく会っていたんだ。その時子供を引き取ったと聞いたけど、それが君だったとは」

ラウラは一樹のiPodの歌について聞いた。それは大正時代の音楽を、パソコンに入っている変換プログラムでデジタルリマスターした音楽という事を説明した。レニとラウラの聴いていた華撃団の歌はレニが大事に保存していたドイツ製レコードの歌を聞いていた。今は無いがラウラは華撃団の歌をしっかりと覚えていた。

「これで互いの事は全て話したね。じゃあ俺はもう行くから、早く元気になるんだぞ」

レニの事を全て話終えた一樹は腰を上げ振り返って保健室から出ようとした。帰ろうとしたときラウラが呼び止めた。

「なぜだ！私は・・・お前の敵だ。なぜ恨まないで平気な顔が出来る！」

震えた顔で一樹に問いかけるラウラ。一樹はため息を吐き、ラウラの両肩を掴んだ。

「きみは敵なんかじゃない。レニおばあちゃんが育てたのなら、心

から笑顔ができる人間だ」

「笑・・・顔・・・だと」

「きみはレニおばあちゃんにとって、千冬先生にとっても大事な人だ。だから俺は自分の愛する人、仲間の愛する人を守るために戦う。きみもその一人だ」

「それは、まるで大将の・・・」

やはりひ孫。一樹は知らないがその言葉はかつて大神一郎が洗脳されたレニを元に戻した言葉だった。その言葉を聞き、ラウラは顔を少し赤くし一樹から目をそらした。

「いい雰囲気のを邪魔して悪い」

後ろからクールな声がした。千冬先生だった。彼女はアリーナの現場検証から一時離れ、保健室に来たのである。

「大神、外に出てくれ。お前に話がある」

一樹を呼び出した千冬先生。一樹は素直に保健室の外へ出た。一樹が出て行ったあと千冬先生はラウラに語った。

「お前は大将にも、私にもなれんぞ。ラウラ・ボーデヴィツヒという人間になれ」

保健室の入口で一樹は千冬先生に呼び出されていた。このシチュエーション、クラス対抗戦以来か。千冬先生は腕を組んで、一樹に2、3質問した。

「お前、あの敵と何を話していた」

「あの敵は脇侍と名乗っていました。奴が壊れる間に自分の曾祖父『大神一郎』の事を知っているようでした」

「お前の曾祖父とは一体何者だ？」

「元日本海軍の軍人でもあり、昔東京にあった劇場の支配人でもありました。終戦後は警察予備隊、保安庁を経て防衛庁に勤務してました。退職後、晩年はISについて何か調べていました。」

終戦後、日本の軍隊は解体され、軍人は人に還った。大神一郎は復員後、警察予備隊に入り頭角を表し順調に出世していった。当時は今の防衛省はまだ存在せず警察予備隊 保安庁 防衛庁 防衛省という順序で変わっていった。大神一郎は防衛庁を退庁後、栃木の実家に隠居し、亡くなるまでISについて何かを調べていたのである。

「もう一つ聞きたい事がある。なぜエネルギーが無くなってからすぐに復活できた？」

モニターを見ていた者の一番の疑問点を聞かれた。本来ならごまかす所だが、相手は千冬先生。ここは正直に話した方がよさそうだ。

「千冬先生、フィールドに能楽師を見ませんでしたか？」

「何を話している。私はなぜ復活できたのかと聞いているんだ」

無意識のうちにごまかしていると思われる。しかしここは洗いざらい起きた事を話続けた。

「いえ、その能楽師から面を与えてもらったら、光武のエネルギーが全回復したんです」

「その面とはコレのことか」

千冬先生は懐からビニールに入った能面のカケラを取り出して一樹に見せた。能面のカケラは（前から見て）右上半分の状態で金色の眼が彫られていた。一樹はそれを指指し、千冬先生に返してもらおうよう頼んだ。しかし、千冬先生は・・

「駄目だ。これは事件の証拠品としてもらっておく。分析が終われば返してやる」

しかし一樹は反発し、なんとか返してもらえよう粘った。

「それではいけません！今すぐ自分に返してください。その面はこの先必要になるかもしれない！今回のような敵にはその面が必要なんです！」

大きく見開いた目で千冬先生の目を見つめた一樹。目力に負けたのか、千冬先生はため息を吐きビニールから能面のカケラを取り出して、一樹に返した。

「それが危険なシロモノだった場合、お前は厳しい罰を受ける事になる。場合によっては退学処分になっても弁護はしないから覚悟しておけ」

そう言い残すと千冬先生はアリーナへの道を歩いて行った。千冬先生の歩く後ろ姿から、一樹感謝の言葉を投げた。でも何故、そこまでしてくれるのか一樹は不思議に思った。クラス対抗戦で倒した『何者か』の残骸を見せてほしいと頼んだ時、山田先生は断固反対したが人一倍厳しいはずだった千冬先生はあっさり許可してくれた。それは俺だからなのか、自分のためなのかこのときはまだわからなかった。

ラウラは保健室で夕日を眺めていた。松本先生が持つてきてくれたラウラの私物の入ったバックから、一枚の封筒を取り出し中に入っていた手紙を読み始めた。差出人はレニだった。

『ラウラへ。君を引き取ってから12年の月日が流れた。君の成長を見てきたけれど、まだ表情の変化ができないようだ。でもこれからその機械のような表情を壊し、力強い腕で君を抱きしめてくれる仲間ときつと出会っただろう。その仲間と一緒に未来を歩むんだ。君と過ごした日々をボクは決して忘れない。

最後に君を引き取った理由。それは昔のボクと同じ戦闘機械ではなく普通の女の子として育ててほしい。ただそれだけを望んで君を育てた。生まれ方が普通の人と違うとか、望まれない子供だったとか、そんなことはどうでもよかった。血の繋がりは無いけど、君はボク、レニ・ミルヒシュトラーセの子であることをこれからも忘れないでほしい。

イッヒ リーベ デイツヒ（ドイツ語で愛しています）レニ・ミルヒシュトラーセ 2012年9月1日  
』

読み終えたラウラは静かに、掛け布団の上から大粒の涙を流した。

第27話 レニ102歳 別れの手紙（後書き）

タイトル由来は映画「チエ39歳 別れの手紙」より  
感想待っています。

第28話 幼馴染は突然に（前書き）

サクラキャラで、ついにあの人のひ孫と思われるキャラが登場！

## 第28話 幼馴染は突然に

千冬先生から能面のカケラを返してもらったあと、一樹は一夏・シャルルと合流し食堂で晩ご飯を食べていた。一樹はトンカツ定食、一夏は海鮮ラーメン、シャルルはミートドリアを心身疲れた胃に入れた。

「結局、トーナメントは事故により中止。ただ、今後の個人データ指標と関係するためすべての一回戦は行い、所と日時の変更は各自の端末で確認してだっ」

「そりゃあ、あんな事が起きたんだからな」

「お偉いさん方は頭を抱えて帰っていったよ。せつかくのデータ収集ができないことがよほど悔しいんだろう」

一夏のケガは軽いすり傷で済み、シャルルとのんびりと食事をしているが、一樹は脇侍の死に際の言葉が頭から離れない。食事が終わったら話そうと思っていた。味噌汁を飲み干し、箸を置いていざ。のハズが一夏も同時に食べ終わり満足そうな笑みで食事の感想を述べた。

「ふー、ごちそうさま。この学園は本当に料理が上手いな。毎日美味しいメシで幸せだ……ん？」

一夏がこちらをじっと見ている女子に気がつき、一樹とシャルルも視線を移した。よく見てみると女子達はなぜかすごく落胆している。

「優勝……チャンス……消え……」

「交際・・・無効・・・」

「・・・う・・・う・・・うわあああんっ！」

「びええ~~~~~~~~~~~~ん」

女子たちが泣きながら走り去っていった。

「どっしたんだろっねっ？」

「さあ・・・」

一夏とシャルルにはわけがわからなかった。

「・・・」一夏はどう思っているか知らないが、俺はどのみち交際は断るつもりだったからな」

一樹は今回のトーナメントの優勝者ペアは一樹と一夏のどちらかと付き合えることを数十分前に黛さんから聞いた。それを聞いて彼は「もうちよっ」と早く訂正をすればよかったな」と呟いた。交際を断るということは好きな人がいるということであるが、それを知る者は誰一人いない。

女子が立ち去った後に、一人呆然と箒がこちらを見ながら腕を組んで仁王立ちしていた。一夏は箒のそばへと移動する。

「そっいえば箒。先月の約束だが・・・」

箒はピクツと反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「……………なに？」

「だから、付き合ってもいいって……………うおっ!？」

ウワアオ!爆弾発言!そもそも『優勝者付き合い』というのは箒が優勝したら個人的に一夏と付き合い合うというのが真相だった。いきなりの告白の返事を聞いて箒は、一夏の胸ぐらを締め上げる。

「ほ、ほ、本当、か? 本当に、本当に、本当なのだな!？」

「お、おう」

何回本当を繰り返すのか。彼女は手を離し腕組みをする。

「な、なぜだ? り、理由を聞こうではないか……………」

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合いさ」

「そ、そうか!」

箒の顔が今までにないくらい輝き始めた。これはひよっとすると……………

「買い物くらい」

「……………ピキッ」

何かがイヤな音がした。輝いていた箒の顔はみるみるうちに恐ろし

い顔に変化していった。そしてついには……

「そんなことだろうと思ったわっ！」

「ぐはあっ……！」

腰のひねりを加えた正拳。一夏はその場に膝をつき、箒は彼の腹にトウキツクを入れた。悶える一夏、これは痛い。

「ぐ、ぐおおおお。な……なぜ？」

怒りの箒はそのまま去って行き、一樹とシャルルはうずくまる一夏へ詰め寄る。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「な、なに……どういう意味だ……それは」

「さあね」

腹に蹴りをくらった一夏の顔色が悪い。一夏は口を押さえて必死にこらえた。

「ヤバイ……さっき食った……ラーメンが出てきそうだ……ウプツ……」

「待て、待て、待て！吐くな！そのまま押し込め！」

なんとか嘔吐だけはまぬがれた。そこへ山田先生が来た。

「あ、大神くん、織斑くん、デユノアくん。ここにいましたか。今日は本当にお疲れ様でした。」

「はい、そちらこそ捜査お疲れ様でした。」

関係者は今回の事件で夜も捜査を行っていた。対抗戦くだりの時の件もまだ片付いていないので今回の事件との関連性がないかを調べる方針で先生側は大変だ。でも山田先生はそんな疲れを感じさせない顔で大きな胸を揺らしながら一樹達にイイ情報を持ってきた。

「それよりも、朗報です！なんと！ ついに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

日本人の心ともいえる、温泉。それが今日から三人・・・ではなく二人の男子への使用許可が降りたのだ。これは嬉しい。

「 そうなんですか！？ てっきりもう卒業まで入れないものかと思いましたよ」

「そ、それはちょっと大げさですね・・・では気を取り直して。時間は休日の8時から9時までの一時間。平日の今日は特別です。その間女子の立ち入りはできないようにしておきますので、混浴はありません」

「わかりました。ありがとうございます、山田先生。（まあ混浴はなくても、これからのぞきができるな・・・）」

「大神くん。女の子の・・・入浴を・・・のぞこうなんて・・・考えてはいませんか？」

男のロマンを女のカンで察したのか、山田先生は恐怖感のあるニッコリ顔をズンズン一樹に近づけた。

「い、いえ・・・考えていません」

「そうですか。大神くんがそんなことするわけありませんね」

のぞきはやめよう。冒険野郎になるのはいいが、バレたらえらいことになりそう。その横では一夏がまだお腹を押さえて悶えてそれを見ているシャルルの光景があった。

1日の休校を終え、朝のHR、山田先生が入って来た。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生はなぜかフラフラしながら教壇に立った。　　いったいどうしたのだろうか。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を二人紹介します。じやあ、入ってきてください」

またまた転校生。山田先生の紹介で一人目の女子が入ってきた。栗色で内側にクルツとした長い髪。両肩には十字架の刺繍ししゅうが入って、まるでシスターをイメージさせる制服を着て、その首には口ザリオが下がっていた。

「一人目の転校、アンナ・フォンティーヌさんです」

「はいは〜い。アンナ・フォンテーヌです。フランスから来ましたあ」

一樹は目を丸くして彼女をみた。それは子供のころ、一緒に遊び、学びあつた幼馴染の姿だった。

「ア、アンナくん!?ど、どうして学園に!？」

「ああーっ!大神さん。お久しぶりです。アンナ、来ちゃいました」

アンナは一樹に走っていき恋愛ドラマのように一樹に抱きついた。

「大神さん、会いたかったです〜」

「マズイよ、アンナくん。みんな見ているよ・・・」

一樹は顔を赤らめた。クラスの女子は一樹とアンナの恋愛劇に釘付けで、セシリアはワナワナとした表情で二人に指をさした。

「お、お、大神さんっ!その方と知り合いですの!？」

「え、あ・・・うん。幼馴染なんだけど・・・」

後ろから山田先生の声がした。

「あの〜お次は転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと・・・」

「失礼します」

廊下から二人目の転校生が入ってきた。その人物に一同はさらに衝撃が走った。

「シャルロット・デュノアです。 皆さん、改めてよろしくお願ひします」

スポンではなく、美脚でミニスカート姿のシャルロットが礼をする。

「ええと、デュノア君はデュノアさん・・・でした」

シャルル・・・ではなく、シャルロット・デュノアが女性であることが公表されたのだ。

山田先生がふらふらだったのはそれが理由か。

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 『美少年』じゃなくて『美少女』だったわけね」

「って、大神さんと織斑くんは同室だから知らないってことは・・・」

「ちょっと待って！ 一昨日って確か男子が大浴場使ったわよね！？」

教室が一気に喧騒けんそうに包まれる。とその時、教室のドアがすごい勢いで開く。甲龍を展開した鈴が入ってきた。

「一夏あつ！！！！」

うわあ、すげえ怒っている。アンナは話を聞いててもちんぷんかんぷんで、一樹から離れ近くの女子に聞いた。

「あの……どういうことですか」

「その大神くん、女子と混浴したのよ！」

「ええ！大神さん、私以外の女の人と一緒に風呂入ったんですか！大神さんがそんなことを……」

アンナは両腕を上へ上げ自分の専用機の両腕を部分展開して同時に装備のガトリングを出し、銃口を一樹に向けた。その横から鈴、さらには箒とセシリアも一樹達にアンナに便乗してきた。

「もう、懺悔したって許しませんからね！」

「一夏あああああつ！」

「大神さん！どうゆうことですよ！」

「一夏あ！貴様あつ！」

やべえ！ぶつ殺される！

鈴は闘牛のように鼻息を荒くし、アンナは専用機の両腕を部分展開したガトリングを構え、箒とセシリアも鬼のような形相で4人の少女達は一歩一歩、男二人に近づいた。

「神様……、俺はまだ死にたくない……い！」



## 第28話 幼馴染は突然に（後書き）

タイトル由来は小田和正の曲「ラブ・ストーリーは突然に」より感想待っています。

## 第29話 東京のフランス人（前書き）

一樹と一夏が脱走して数時間後のお話。アンナの人物像もまたサクラのあの娘を思わせます。

ちなみに本作ではIS学園の所在地は東京都で、東京湾海上に作られた人工島にある設定です。

## 第29話 東京のフランス人

「ごめんなさいいいいいいいいい！」

「決していやらしい事を考えていたじゃないんだ！」

昼休み、場所は芝生屋上。アンナ、箒、セシリア、鈴、ラウラのまえで土下座する一夏と一樹。女子5人は土下座する二人を見下し、ガミガミと怒った。彼女達5人以外にも昼休み前に山田先生、千冬先生に教室を脱走し授業すっぱかしたことを、こっぴどく叱られた。

「待つて！二人をそんなに怒らないで。一樹達は、ボクを守るために黙つててくれたんだ」

シャルル・・じゃなかった。シャルロットが男二人を庇い、自身が男装をしていた理由を話した。自分の出生、実家の会社の経営難、社長である父の命令で第4、第5世代のデータを盗むための男装、一樹達の庇い、実家との決別のことなど全て話した。それを聞いた4人は納得しシャルロットに同情、シャルロットの父親に憤慨した。

「そうだったのか、随分辛い思いをしていたのだな。まあ混浴は許されないが、デュノアを守るためには致し方あるまい」

「そんなの父親じゃない！サイテーね、アンタの父親！」

シャルロットの親の酷い扱いを聞き、混浴をしたことへの怒りは鎮火の方向へ向いた彼女たち。アンナも話を聞いて救いの手を差しのべた。

「実の息子を商売道具にする父親、縁を切ってしまうのが当然です。大神さん。混浴は許し難いですが、事情があつてやったことなら仕方ありません。神様も許してくれるでしょう」

「（な、なんだ、コイツは？つかみどころが全く読めん・・・）」

アンナの言っていることは筋が通っているが、どこかがズレている。まあ、彼女はいわゆる天然キャラというヤツだ。超真面目なラウラはアンナの天然の思考を読み取ることは多分ムリだろう。

「大神さん、もう一つ教えてください。そのアンナという人はあなたとどうゆう関係ですか？」

セシリアは一樹に近づき、転校生、アンナ・フォンテイーヌの紹介を求めた。

「わかった、わかった・・・じゃあ改めて紹介するよ。俺の幼馴染、アンナ・フォンテイーヌくん。フランスの巴里にある修道院でシスター見習いをしていて、子供のころフランスへ行ったときによく遊んだんだ。家族ぐるみの仲だね」

「アンナ・フォンテイーヌです。皆さん、よろしくお願いします」

ニッコリとスカートを広げ丁寧にあいさつをするアンナ。箒たちも自己紹介をした。

「こちらこそよろしく。私は篠ノ之箒だ」

「わたくしはイギリス貴族にして代表候補生のセシリア・オルコックですわ。」

「あたし中国の代表候補生の鳳鈴音。クラスはとなりの2組だけだね。ちなみさっきの女はサボテン女っていうあだ名があるわよ」

「ちょっと、鳳<sup>ファン</sup>さん！それはわたくしのことですよ！？」

「他に誰がいるの？アンタみたいなトゲトゲした言い方の女」

「なんですってええええええ！」

始まった、二人のケンカ。鈴はニヤけ顔でセシリアをからかった。まあこの二人のケンカは置いて、シャルロットももう一度自己紹介をした。

「ボクも改めて。シャルロット・デュノアです。君と同じフランス出身です。よろしくね」

シャルロットまで紹介が終わり、次はラウラの番……のはずが彼女は腕を組み、横を向いてツーンとしていた。一樹はラウラの肩をポンッと叩き、自己紹介を勧めた。

「ほら、ラウラ。君も」

「ラ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ……ドイツの……候補生だ……よ、よろしく頼む」

自己紹介を終えたラウラはアンナから目をそらした。あのラウラがタジタジなんて、アンナはラウラの天敵なのかもしれない。最後の紹介は一夏。

「俺は織斑一夏。見ての通り男性操縦者だ。大神とはルームメイトで仲良くやってるよ」

一夏はアンナの顔をじつと見てやや顔を赤くした。

「（カワイイな、この娘。まるで天使のようだ）・・・イイツ！」

両足に激痛が走った。よく見ると一夏の右足に箒、左足に鈴の足が踏みつけられていた。二人は一夏を上目使いに睨んだ。

「あなた、あの娘にホレたんじゃないでしょうね？」

「私以外の女性を好きになるなんざ許さんぞ」

おっかね〜〜〜。一夏の恋路は前途多難だ。

「一夏さんって結構モテるんですね〜」

「いやアンナくん、あれは違うと思うよ」

深々（しんしん）に話す二人を見て、セシリアはアンナと一樹との間に割り込むかのように興味津々な顔を装い、HRでアンナが両腕を部分展開できたことを彼女に聞いた。

「お話の途中失礼しますわ。アンナさん、さっき機体を部分展開しましたけど、専用機持ちなのですか？」

「ええ、私の専用機『エヴァンジェル』です。たしか〜シャトーブリアン社から貰ったとき、開発主任って人が第5世代型って言ってましたね」

今、なんと言った！？シャトーブリアン社から貰った！？第5世代型！？現時点で世界中にある第5世代は、神崎グループが造った一樹の『光武F式』一機のみ。それを何故、アンナが持っているのか聞いてみた。

「『エヴァンジェル』は曾祖母の遺産・・と言うべきでしょうか。実は今年の春に、私の曾祖母が亡くなりました。その1週間後に曾祖母から手紙をもらいました。それがこの手紙です」

一樹はアンナから曾祖母の手紙を受け取り読み上げた。

「『アンナへ、この手紙を受け取ったらシャンパーニュにあるシャトーブリアン社に行ってください。その社長にこの手紙を見せたあとは彼女の指示に従ってください。その指示が終わったら、私の遺産をあなたに差し上げます。私の遺産を貰ったらそれを持って、ニッポンのトウキョウにあるIS学園に編入し3年間すごしてください。その学園には大神一樹くんがいるので心配ありません。これはあなた方の未来に関わることです。旅立つあなたに光あれ、アーメン。 エリカ・フォンテューヌ』か。なるほどね」

「で、シャトーブリアン社に行って2ヶ月間のIS操縦の訓練を受けたあと、遺産という『エヴァンジェル』を貰い、IS<sup>ユ</sup>学園に来たっていう感じなんです」

エリカ・フォンテューヌ。彼女もまた巴里華撃団の隊員だ。そしてそこにいるアンナ・フォンテューヌはエリカ・フォンテューヌのひ孫なのだ。『エヴァンジェル』はエリカのひ孫への贈物らしい。ここに編入することを勤め先はなんと言っているのか。

「アンナくん、日本に行くことを教会や『ボヌール』の人はなんて言ってたんだい？」

「はい、『神に仕える者の命もまた主しゅの命でもあります。エリカ様のご遺言に従い、こちらの事は任せて行きなさい』って言ってました」

アンナは巴里のモンマルトルにある教会でシスター見習いをしている。『ボヌール』とは、エリカと同じ、巴里華撃団の仲間であるロベリア・カルリーニと共に開いた孤児院の名前である。現在はロベリアの孫が院長を勤めており、アンナはシスター見習いをしながら孤児院の子供達の世話をしているのだ。

ちなみにボヌールとはフランス語で「幸福」という意味だ。アンナの専用機『エヴァンジェル』もフランス語で『福音ふくいん』という意味である。

「アンナくんも俺と一緒にだ。本当の事を言うと俺もじいちゃんの遺書に『IS学園に行くんだ。これはお前たちの未来に関わることだ』って書いてあったからこの学園へ編入したんだ」

もうこの際、本当の事を話そう。以前クラス対抗戦に特別参加が決まった時、黛の『学園に来た理由』のインタビューの際に『IS操縦を極めたい』と言ったのだが、本当は大神一郎の遺言で受かっていた高校を蹴りIS学園に編入したことを話した。

「お前、自分を磨く為でなく本当は遺言で学園こくへ来たのか」

黛は以前、黛のインタビューと違う言葉に驚き、その場にいたセシリアは一樹の発言に異議をたてた。その後ろでは鈴が一夏にコブラリストとまんじ巩固めをキメていた。

「すると何ですか！？大神さんはわたくしたちとの学校生活は、本当は不満はだったというのですか」

「イヤ、全然不満じゃないよ。ココ（学園）はとつてもイイ所だ。．．．．．いろんな人、そして．．．君たちと出会えてとても楽しい日々を送っているしね」

その爽やかな一樹の顔でセシリアはおだてれた。彼女の顔は赤く染まり一樹から目をそらした。アンナもこの出会いに感謝の言葉を述べ、その横から痛々しい体を引きずる人の声がした。

「まあ、まあ。大神さんも、国籍の違う皆さんがここで出会つのも何かの神様のおかげです。仲良くしていきましょう」

「そ、そうだな。お、おんなじ釜の飯を食う仲間だからな．．．イテテテ、こ、腰が．．．」

鈴のコブラツイストと<sup>まんじ</sup>正固めから解放された一夏。姿勢はカツコ悪いが、いい台詞に一同は賛同した。

「まあ、みんなと居ても退屈しないしね」

「同感ですわ。それに．．．．．なんでもありません！」

「私もだ。幼馴染と再開できたし、いい剣道仲間と会えたしな」

「ボクも。自分を必要としてくれるみんなと出会えたことを、とても嬉しく思うよ。ねっ、ラウラ」

「・・・コクッ・・・ぽっ」

ラウラとセシリアは一樹にホの字だろう。ともあれ、これから七人で共にスクールライフをおくると同時に、平和を守る仲間ができた瞬間だった。これから起きる出来事に向けて・・・

## 第1章 熱き記憶に 終

第29話 東京のフランス人（後書き）

タイトル由来は映画「巴里のアメリカ人」より  
感想待っています。

## 第2章の登場人物紹介（前書き）

ネタバレ注意！このページはウィキペディアのように更新していきます。

## 第2章の登場人物紹介

【本作オリジナルキャラ】

米田トオル（よねだ とおる）

「性別」男

「年齢」14歳

「身長」160cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」2002年9月2日

「紹介」大神一樹と加山雄四の後輩（ビジュアルは大河新次郎と同じ）。中2。勤勉精神でまじめな性格。己を磨くために栃木の父親の実家で生活している。出身は静岡の熱海で実家は旅館『超新星』を営んでいる。両親との仲は凄いいい（母からは異常なまで愛を受けている）。自身の更なる向上を目指し、将来は「紐育ニューヨークに行く、でっかい男になる！」という目標を掲げている。

米田ナナ（よねだ なな）

「性別」女

「年齢」11歳

「身長」120cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」2005年7月4日

「紹介」トオルの妹（ビジュアルはリカリッタ・アリエスと同じ）。小5で東京の劇団に所属している。明るい性格で、学習能力が高く東京の学校はトップの成績。相棒の「もしものごはん（非常食）」のフェレットのニコと一緒にいる。八チャメチャぶりに兄のトオルは手をやいている。

米田カオル (よねだ かおる)

「性別」女

「年齢」ひでぶっ!

「身長」173cm

「出身」日本・静岡

「誕生日」?????年10月11日

「紹介」トオルとナナの母で、旅館『超新星』の女将。肝っ玉母ちやんで息子と娘を心から愛している。

### 第30話 追跡者（前書き）

始まりました。第2章 『君、忘れたもうことなかれ』  
戦いと恋路はさらに加速していきます。

### 第30話 追跡者

今日は日曜日。シャルロットが女であることが発覚したあと、彼女は別の部屋へ引き取られた。シャルロットの使っていたベットは一樹の元に戻り、部屋は男二人部屋に戻った。一樹はシャルロットの匂いが残るベットでゴロ寝していた。すると扉が開きシスター風の制服来た女子が入ってきた。

「大神さ〜ん。朝ですよ〜〜〜」

朝から元気な声の主はアンナだった。アンナはフォンテーヌ家に伝わる伝統芸『おはようボンジュール』で一樹に爽やかな朝(?)を贈った。彼女の『おはようボンジュール』で目を開けた一樹はのっそりと体を起こした。

「アンナさんの朝は早いな〜。ン……………」

一樹は体起こした時、いつもと違うベットの反発感を感じた。よく見ると毛布の中に何か塊のような物がモゾモゾ動いている。おそるおそる毛布をめくった一樹。

「うおおおおお！」

一樹は驚いて床に転げ落ちた。そこにはランジェリー姿のラウラが添い寝していた。

「ん〜〜、もう朝かあ〜〜」

「な、なんで君が俺のベットで寝てるんだ」

「日本の言葉では気に入ったものを『俺の嫁』だとか『自分の嫁』  
と言っそうだが」

「そうです！だからわたしもこうして大神さんを起こしに来たんで  
す」

「君たちに間違った日本の知識を教えたのは一体誰なんだ！」

これはヤバイ！海外で日本の知識や価値観がこんなふうに取り  
れるとは、いろんな意味でヤバイ。サムライ、ワの国と神聖に呼ば  
れた時代はどこへ行ったのか。

「なんだよ〜朝からうるさいな〜・・・って、なんだこりゃ！」

この騒ぎで一夏もさすがに目を覚まし、セクシーなラウラのラン  
ジエリー姿を見て仰天した。一夏はラウラに近づき部屋に帰ると言  
い、彼女に指を指した。その時、ラウラは一夏の手を掴み十字固め  
を決めた。

「痛ででででで！ギブ、ギブ、ギブ！腕折れる、腕折れるって！」

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな」

「やめるんだ、ラウラ！一夏もタップしてるぞ。アンナくん、離す  
の手伝ってくれ」

一樹とアンナは一夏から引き離そうとラウラの肩を掴み、引つ張  
った。しかしエリート軍人であるラウラは二人を一瞬で放り投げ、  
二人は壁にぶち当たった。一夏は一瞬解放されたが、すぐに三角締

めで捕まった。その時入口の方にまた女子の声がした。

「私だ一夏、大神入るぞ。朝練に付き合え！」

ドアが開き竹刀を持った剣道着姿の箒が入ってきた。その姿を見てアンナは目を光らせ箒に寄ってきた。

「わあ、箒さんはサムライ娘なんですね！うわあ、カッコイイです~~~~~」

「そ、そうか。あ、ありがとう」

アンナのキラキラ光る目で見られた箒はとりあえず礼を言った。ここでアンナはあることに気がついた。

「あれえ、箒さんはチョンマゲの免許は持ってないんですかあ？」

チョンマゲの免許。曾祖母エリカから教わった日本の事。元々大神一郎がエリカ・フォンティーヌに初めて出会った時、日本の事を聞かれてとっさに言ってしまった言葉だ。それがひ孫にまで伝わってしまうとは恐ろしい。

「い、いやそんなものは。それより一夏は.....」

ベツトを見るとそこに一夏がランジェリー姿のラウラ三角締めを決められていた光景だった。箒は竹刀を落とし、青ざめた顔で口を鯉こいのようにパクパクさせた。一夏も箒の顔を見て顔から一気に血の気が引いた。一夏は一夏が痛い目に合うと感じ彼を弁護した。

「ち、違うんだ箒くん！これには事情があって・・・」

「そ、そうだ！箒、これは誤・・・」

箒は落した竹刀を再び手に取り、ジャンプして大きく一夏に向け振りかぶった。

「天誅うううううっ！」

「うぎゃあああああああああああ」

一樹の弁護も虚しく、寮全体に男の悲鳴が響き渡った。

朝食を食べ終え、一樹とアンナは学園のある島と本土を繋ぐモノレールに乗った。ガタンゴトンと揺れる車内から見えるのは青いと空と海の見える風景だ。

「大神さん、どこへ行くんですか？」

「もうすぐ臨海学校なんだ。アンナくん、巴里じゃ水着着ることないから持っていないだろう。だから俺の分も合わせて一緒に水着買いに行こうと思ってね」

「なんだ、お前らも水着買いに行くのか」

隣りの座席を見ると一夏とシャルロットがいた。一夏の顔には今朝の箒の竹刀の後があり、顔のど真ん中が額から顎にかけ縦に綺麗

に赤くなっていた。

「おお、一夏。お前も水着買いに行くのか？」

「ああ、シャルロットが女子用の水着持ってないって言っててな。俺も水着を買おうと思ってたからついではと思って」

一夏達も臨海学校に向けて新しい水着を買いに行くらしい。シャルロットを見てみると何か顔がおかしい。一夏の「ついでに」という発言にシャルロットはうらめしそうな顔で、一夏に冷たい態度をとった。

電車を降りた男女ペア2組。一夏はシャルロットの手を握り、それにつられアンナも一樹の腕に抱きつき、いい雰囲気ムード満天の2組は改札口へ歩いて行った。するとホームの自販機の後ろから病んだ目で見ているセシリアと鈴の姿があった。鈴は甲龍の右腕を部分展開して負のオーラ全開で

「あの幸せ、ぶっ壊す！」

と言い、自販機の影から飛び出た。それを見てセシリアは鈴の肩を掴んで自販機の影に戻した。

「お待ちください！まずあの二人をトラックキング（追跡）して情報収集をしてから、どこまで行っている関係なのか見極めるのが専決ですわ」

こうゆうことには頭のキレるセシリア。確かに今手を繋いだり、寄り添ったりしてはいるがそれぞれ本当の恋人同士という証拠はない。鈴はその考えをのんで舌打ちをしながらも甲龍をしまい、二人は2組を追いかけた。改札口を出た2組は東西に別れた。

「じゃあ俺達はこっちの方へ買いに言ってくるよ」

「おう、イイの選べよ」

別れた2組を見て鈴は東側の繁華街へ行つた一夏達を、セシリアは西側の繁華街へ行つた一樹達を追跡し始めた。

アンナは日本の繁華街に興味を示し、走っていった。すると・・・

「アンナくん、前！」

一樹が注意したと同時に景気のいい音がした。

「あいたた、あゝ頭打つたあゝ」

アンナは看板に激突し、頭を押さえていた。やはりエリカのひ孫。激突看板娘の血は継がれているようだ。

「えへへへ、アンナまたやっちゃいましたあ」

アンナのぶつけた頭をなでなでする一樹に、セシリアはハンカチを噛み締めていた。

一方鈴の方も、恋人気分でいる一夏達をさらに怨めしそうに見ており、「（もし一線超えたら赤兎馬せきとばに乗って、その幸せを壊しに行つてやるわ！）」と考えながら追跡していた。

### 第30話 追跡者（後書き）

タイトル由来はそのまんま映画「追跡者」より感想待っています。

### 第31話 天使に水着を（前書き）

水着購入の道程で続々と新キャラ登場です。活字内のキャラクターは読者の皆様のイマジネーション（想像力）にまかせます。

### 第31話 天使に水着を

水着を買いに来た時期は7月で当然外は暑い。駅に着いた時、一樹とアンナは夏服を持っておらず冬服を着て来たのでめっちゃ暑かった。そこで二人は急遽、駅前にあったIS学園制服の取扱店に行き、夏の制服を買った。

数十分後、店を出てきた一樹の格好は、薄い生地きじのスボンで、上半袖の開襟かいきんYシャツ。続いて出てきたのはアンナ。彼女の格好は十字架の入った半袖ロングワンピースタイプの制服で、両腕には紫外線防止の腕カバーという日焼け対策万全の制服だ。アンナはシスターだから肌が焼けてはいけないのでさらに日傘も買い、これで肌が焼けることはないだろう。

「お待たせしましたあ、大神さん。どうですかあ？」

「よく似合っているよ、アンナくん」

「ありがとうございます。大神さんが褒めてくれるだなんて、これもひとえに神様のおかげですね」

アンナは神様に感謝をした後、傘をクルクル回しながら走っていき、一樹もあとを追いかけた。IS学園の制服は指定された制服を自分なりにアレンジして着ることが許されつ。例を挙げると鈴の肩の露出したアレンジ例や、ラウラのナチス風のアレンジ例がある。ちなみに一樹の制服は一夏のとは違い、学ランタイプの制服を着ていた。

一樹ペアのいる繁華街西側は、巴里のシャンゼリゼ通りをモチーフとした通りに様々なお店が並んでいるオシャレな町並みだ。アンナは故郷に似た風景に大はしゃぎした。ちなみに一夏ペアの行った東側はアメリカのブロードウェイをモチーフにした通りだ。ここでアンナは臨海学校の事を聞いた。

「大神さん。臨海学校っていつ、何処に泊まるんですか」

「来週の日曜からだよ、場所は熱海で、『超新星』っていう旅館に泊まるんだ」

『超新星』とは熱海にある三ツ星旅館だ。そこに泊まるとはさすがは国立。その時、後ろからボロ〜ンとギターの音がした。

「臨海学校はいいなあ〜〜〜。俺は試験だけど」

振り向くとそこには小学校時代からの一樹の親友、加山雄四がいた。それも初夏なのに白いスーツでクラシックギターを持っていた。やっぱり暑かったのか、加山はタオルで汗を拭き、無理矢理の爽やかな顔で一夏に近づいて来た。

「いよう、大神い。久しぶりだな」

「加山！なんでここに？」

「実は東京「コ」の親戚の家に遊びに来ていているんだ。で、近くにお前「コ」のいるIS学園があったから脅かしてやろうと思ったわけだ」

「そうか、久しぶりだな。4月に旅立ったから3ヶ月ぶりか」

懐しの友人と親しげに離す一樹をアンナじつと見ていた。それに気づいた一樹は互いを紹介しあった。ここでもやっぱりアンナは加山に「チョンマゲの免許」を聞き一樹は「まだ持っていない」とごまかした。一度本物を見てみたいものだ「チョンマゲの免許」というヤツを。アンナの天然を堪能した後、加山はさつき一樹の話していた泊まる旅館の事について話だした。

「大神。さつき言ってた『超新星』っていう旅館。あそこはトオルの母親が女将おかみをしている旅館だぞ」

「トオル・・・もしかして、米田トオル？俺たちの後輩のトオルか？」

米田トオル。一樹と加山の中学時代の後輩で現在中学2年。彼は心身を鍛える為に栃木の父親の実家で暮らし、熱海で働いている両親とは別々に住んでいる。もちろん両親との仲は凄いいい（特に母）。つまり一樹達の行く臨海学校の旅館とは、その後輩トオルの母親が経営する旅館なのだ。ここで加山は一樹とアンナを連れ、オーブンカフェのお店手前15m手前まで来た。

「あそこ見てみる」

加山が指を指した方向に、カフェで牛乳を飲んでいる中2に見えない童顔の少年がいた。彼こそが一樹と加山の後輩、米田トオルなのだ。加山はドッキリを仕掛けようと一樹に耳打ちした。ドッキリの打ち合わせを終え加山は携帯を取り出し、トオルへ電話をかけた。

「はいもしもし、米田です」

「あ、もしもし。トオルか。俺だ雄四ユージだ」

「え、加山先輩！加山先輩ですか！？」

久々の先輩との電話に驚くトオル。一樹はソロリソロリと忍び足でトオルに近づいて行つた。加山はトオルが一樹に気づかないように会話に集中した。

「お前さん、今何処にいるんだ。俺と久々に会わないか？」

「加山先輩に会いたいのはやまやまなんですけど、僕はいま紐育ニユーヨークにいるんです。己の修行に來ています」

大きなウソをついたトオル。加山は電話を続け、一樹は気づかないように電話に集中しているトオルの背後に近づいた。加山はトオルにもう一度、居場所の確認をとつた。

「ほお〜紐育。お前、紐育にいるのか」

「はい！」

「ウソつくな！」

一樹は優雅にしているトオルの脳天をひっぱたいた。トオルが慌て振り向くと一樹と、電話姿の加山がゆっくり近づいて来るのが目に入り動揺した。

「あれっ、大神先輩！？加山先輩！？なんでここに！？」

「お前こそ何やっているんだ、こんなとこで？しかも紐育ニユーヨークにいるってウソついて。雰囲気なら西側コじゃなくて東側のほうが合っていない

か

ドツキリ大成功。トオルは慌てており、困り顔で弁解をした。ここにいた理由<sup>わけ</sup>は中学の期末試験が終わり、栃木から熱海へ帰郷する道程で東京の劇団にいる妹のナナが「熱海に帰る前に新しい水着が欲しい」と言うことで、買い物に付き合わされたのだ。紐育というウソをついたのは、彼が今「紐育に行つて、でっかい男になる！」目標を掲げており、一樹達にアピールしたかったという。するとカフェの向かいのお店から、大きな袋を背負った三つ編みの小学生の女の子が出てきた。

「とおる〜、水着たくさん買ってきたぞっ！」

この無邪気で可愛らしい少女がトオルの妹、米田ナナ。ドスンと袋を置くナナ。その上に星模様の入ったフェレットがいた。

「おお〜、かずき。かやま。久しぶりだな！アレ、そっちはダレだ？」

「初めまして。アンナ・フォンテーヌです。あなたがナナさん？」

「うんっ！米田ナナ！みんなはナナって呼ぶ！この子はニコ。ナナのもしものゴハン」

縁起でもない紹介にフェレットのニコはうきゅ〜と鳴いた。互いの紹介をし終わった隣りでは、買った水着の量を見てトオルは買いきすぎだから8割はお店に返品してくるように言った。しかしナナは聞かず、トオルに反発した。

「11歳の夏が終わつたら11歳の夏はもう2度とやってこない。」

だから悔いのない11歳の夏を送るっ。これナナの掟！」

「去年と同じじゃないか！」

去年も同じ事をしていたのか。暴走する下の兄妹をもつ兄はつらいなあ。ここでアンナはナナに買いすぎた水着を返品をするよう説得し始めた。

「ナナさん。その年、その年を大事にするのはとてもいいことです。でもたくさん水着を買っても、着なければその水着をつくった人達の努力がムダになってしまいます。その人たちの努力をムダにしないためにも、水着は必要な分だけ買いましょうね」

見習いとはいえさすがシスター。彼女の慈悲深い説得にナナは考え込んで、そして明るい顔で答えを出した。

「わかった！ナナ、買いすぎた水着返してくるっ！」

そう言うとナナは買った水着の9割を返品しにお店へ走って行った。トオルはアンナに感謝の言葉を贈った。ここで一樹も自分たちの新しい水着を買いに行くという事を思い出し、加山とトオルにしばしの別れを告げた。

「じゃあ俺たちも、これから水着買いに行くから。トオル、来週そっちの世話になるよ」

「はい、母さんには伝えておきます」

「大神、水着を買うならこの先の『ブルー・ラド・マレ』という店がオススメだぞ」

加山に礼を言い、ここで旧友と別れた。一樹とアンナは加山に勧められたフランス語で「青い津波」の意味を持つ『ブルー・ラド・マレ』という店に入っていた。

『ブルー・ラド・マレ』は男女の水着の品揃え豊富で競泳用からバカンス用、勝負用まで一通りそろえてある。一旦、二人は別れ、それぞれの売り場へ水着を選びに行った。

「これいいな。これにするか」

男性水着売り場にいる一樹。どうやら気に入ったのが見つかったようだ。一方、女性水着売り場にいるアンナも気に入ったのが見つかったようだ。

「これ、カワイイですつ。よし、この水着で大神さんのハートをゲットしちゃいます！」

果たしてアンナの選んだ水着とはどんなのか。一樹とアンナはそれぞれ選んだ水着の会計を済ませ、モノレールで学園に帰っていった。

帰りの電車の中で、一樹はアンナの選んだ水着の事が気になる。やはり彼女が気になるお年頃なのだろう。

「アンナくんはどんな水着を買ったんだい？」

「えへへ、内緒です」

一方繁華街にある街頭テレビ。

『次のニュースです。アメリカと中国の共同開発した新型コスモス  
ーツが、今日宇宙ステーションで使用されました。アポロ計画から  
使用されて……』

### 第31話 天使に水着を（後書き）

タイトル由来は映画「天使にラブソングを」より感想待っています。

### 第32話 インシテマス 午前2時のコンタクト

学園に帰って来た一樹とアンナ。正門を入ったその背後から一夏ペアが帰って来た。二人とも冬服で行ったので、汗だくでおまけにすごい疲れている。一樹たちの涼しい夏服を見て一夏は指を指した。

「お・・・お前たち、その涼しそうな服は・・・」

「エへへ、どうですかあ？」

「これかい。駅でお前と別れた後に買ったんだ。お前も買いに行けばよかったのに」

「ずるいなあ、俺たちは汗流して買いに行ったのに。おまけに大目玉くらうこともしちまったし。なあ、シャル」

その話を聞いたシャルロットは顔を赤くして下を向いた。

「あ、あのさ一樹。もうボクが女だっという事はみんな知っているわけだからさ。・・・一樹もボクのこと・・・シャルって呼んでもいいよ」

「じゃあそつさせてもらおうよ。よろしくシャル」

2組が寮へ帰ってたその数秒後、正門に汗をダラダラ流して帰ってきた1人の女子がいた。

「き、今日一日の・・・暑さは・・・何だったんですの・・・？」

セシリアだった。彼女も冬服で街にいたので夏服を買わず、ずっと一樹を追跡して一部始終監視していた。

「セシリア、アンタも帰っていたの？」

その後ろに同類がもう一人。首からタオルを下げ汗まみれの鈴が帰ってきた。2人は今日一日の互いの尾行の成果を聞いた。

「鳳さん、どうでしたの？一夏さんたちのほうは？」

「あの二人、一緒に試着室に入ってモゾモゾしてたわ。殴り込んでやるうと思ったら、居合わせた山田先生と千冬さんに一夏達は怒られたけどね」

一夏は旧友とその妹とあった後、シャルに連れられ一緒に試着室で彼女の選んだ水着の感想を聞かれた。その時、同じように水着を買いに着ていた千冬先生と山田先生に見つかり、正座させられお説教を受けた。今度は鈴は一樹ペアを尾行したセシリアに今日の成果を聞いた。一緒に水着と夏の制服を買い、旧友にもいい印象を与え、帰りの電車の中でラブラブな空気を聞いた鈴は衝撃を受けた。

「なに！？あの2人そんなにイイとこまで行っているんだったら、今度の臨海学校であの完全にくつついちゃうんじゃない？」

「そうはさせません！……宣言します！今度の臨海学校でわたくしはアンナさんを逆転させ、大神さんをゲットしてみせますわ！」

鈴の前で大胆に宣言したセシリアの野望は実るのか。

臨海学校の前日、1年生全員は荷造りを始めていた。一樹はすでに荷造りを終え、新聞部の部室で『篠ノ之束』に関する資料を見ていた。

「『篠ノ之束 2006年にISを発明した科学者。1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った天才科学者である。しかしISを開発したことから政府の監視され、2013年に突如行方をくらませる。失踪後、世界で唯一、コアの製造法を知っているため、現在も各国から追われている』。この人が篤くんのお姉さんか。写真、後ろからしか写っていないなあ。俺の第5世代型開発には強力は協力したって主任は言ってたけど、一度も見えてない」

一樹は束の資料をしまい、今度は保管されていた第2回モンドグロツソの記事の乗った学園新聞を見た。

「『織斑千冬 不戦敗！第2回モンドグロツソIS世界大会で連覇確実だった織斑選手は、決勝戦数時間前に突如行方不明。試合開始になっても現れず、そのまま不戦敗となった。不戦敗判定から3時間後、戻ってきた織斑選手はインタビューに関してはノーコメントだった』。(これが一夏の言っていた事か。この事件がきっかけでラウラと千冬先生が出会ったんだな。でも一夏の誘拐の事は一言もしゃべっていないみたいだ)」

一夏誘拐事件は公にはなっていない。事実を知るのはラウラと一樹の2人だ。新聞を読み終え棚にしまった時、ドアから黛が入ってきた。

「ああ、しんどっ。あの先生、今回のテスト難しくしてない？どんだけ落とす気なの」

「薫さん、試験お疲れ様です。」

2、3年生はこの時期、期末試験真つただ中。1年生は臨海学校に備え早めの期末試験を終えたのである。薫は椅子にどかっとなり座りペブシを飲み始めた。

「大神くん、明日は臨海学校なんですよ。今年の1年生はいいわね、男が2人もいるし」

「いやあ、今度は全員水着なのでちょっと恥ずかしいですよ」

女子9割8分の中で3ヶ月生活している人間が今更何を言っているのか。

「でも大神くん、いいカラダしているからモテるって評判よ。私の学年でも付き合いたいって言う人が結構いるわ」

上の先輩からお誘いがあるとは。付き合うなら一夏でもよさそうなのがするが、彼は恋愛に関しては生徒達から「唐変木・オブ・唐変木」と呼ばれているほど鈍感。紳士かつサムライな一樹の方が人気が出てきた。掘られると厄介と感じた一樹は話をそらした。

「薫さん、この間の学年別トーナメントの新聞、できました？」

「うん、まだ刷ってはいないけど。でもデータはパソコンに入っているけど見る？」

黨に頼んでもらい、新聞部PCに入っている今回の事件の載った新聞を見さしてもらった。

「『謎のIS 再び現る 前回のクラス対抗戦に現れた謎の機体につき、今大会でも謎の機体が乱入、破壊活動が行われた。謎の機体は鎮圧部隊を返り討ちにした後、アリーナから出ようとしたところを大神一樹選手に倒された。けが人数名でアリーナを4割破壊という被害がでたにもかかわらず、死傷者は0だった』。(謎の能楽師のことは書かれてないな。やっぱり見えたのは俺だけか?)」

「すごいよね大神くん。学園の危機を2度も救うなんて、ヒーローみたいね」

「そんな、俺は平和のために精一杯やっただけです」

黨の褒め言葉に一樹は少しテレた。一樹の活躍ぶりは学園のみならず、世界各国の上層部、国家代表操縦者にまで知れ渡っている。

その夜、一樹は能面のカケラを見たあと、机の引き出しにしまいそのまま寝込んだ。夜中の2時をまわったその時、急にエアコンが止まり室内はみるみる熱気に包まれた。一樹は寝苦しく、暑さで目を覚ましたが、何かおかしい。ベットのうえではない感触がする。すると光が当てられ半径数メートルが見渡された。

「(ここは、一体?)」

一樹は何やら木の板の敷き詰めた床の上にいた。暗闇の向こうから誰かが来る。それはトーナメントで見た謎の能楽師だった。

「（あなたはあの時の）」

能楽師はまた独特の口調と低音で話かけた。

「（男・・・よ・・・私の・・・力・・・を・・・手放・・・して・・・は・・・なら・・・ぬ・・・）」

我の力？アレの事か？

「（動き・・・出・・・す・・・悪・・・に・・・備え・・・よ・・・）」

能楽師はそう告げると暗闇の奥にへと消えていった。

「（待ってくれ・・・悪とはなんだ・・・どうして俺に・・・）」

一樹を照らした光が消え、再び暗闇に覆われた直後、一樹は目を覚ました。

「ん・・・夢・・・か？」

周りを見ると寮の部屋で隣りのベットでは一夏が汗をかきながら眠っていた。そして窓から朝日が入り込んで机を照らしていた。

一樹は起き上がり、昨日寝る前に引き出しに入れておいた能面のカケラを取り出して驚いた。寝る前まで面全体の4分の1しかなかった能面のカケラは、2分の1まで形が出来上がって、禍々しい姿

を表していた。

第32話 インシテマス 午前2時のコンタクト（後書き）

タイトル由来は映画「インシテミル 7日間のデス・ゲーム」より  
感想待ってます。

第33話 THE 有頂天旅館（前書き）

またまたまたサクラ大戦キャラを彷彿させる新キャラ登場。

### 第33話 THE 有頂天旅館

高速道路を走る熱海行きの上野学園のバス。その中にバスに揺られる一樹の姿があつた。一樹は外を眺め、巾着袋から半能面を取り出してじつと見た。

「（一体あの夢はなんなんだろう？面も寝る前よりも形が出来ているし）」

謎の能楽師の夢を見たあと、不思議に思った一樹は一応半能面を持つて行く事に。何事もなく無事に終わってほしいものだ。その時、大声で女子の声が出た。

「見て！見て！海よ！海！」

とりあえず今は楽しもうと、半能面を巾着袋にしまっ一樹であつた。

バスに揺られること2時間半。1年生を乗せたバスは老舗旅館『超新星』についた。一同がバスから降り、女将とのあいさつが行われた。

「それでは、今日から3日間お世話になる旅館『超新星』で、こちらが女将の米田カオルさんだ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ。」

「諸君、初めまして。旅館『超新星』の女将、米田カオルだ。この3日間、私の旅館で心身ともに成長する事を期待する！」

「よろしくおねがいします」

「うむ、今年の一年生も元気があってよろしい！それに今年は以外な生徒もいるみたいだしな」

そう言うと一樹と一夏を見るカオルさん。とても威勢のいい女将さんだ（しかも結構若く見える）。ここでカオルさんは大声で誰かを呼んだ。

「トオルくーーーーん。こっちいらっしやい！」

女将カオルさんに呼ばれて走ってきた少年。大声で呼ばれたその少年の顔は若干赤かった。

「母さん、大きな声出さないください。恥ずかしいですよ」

「ほら、こっちに来てこのカワイイ女子高生達にあいさつしなさい」  
背中を叩かれて前に出てきたトオル。トオルは実家仕込みの営業スマイルで自己紹介をした。

「え〜皆さん、こんにちは。自分は女将の息子の米田トオルです。3日間、どうぞごゆっくりと楽しんでいってください。なお、サプライズな催しもありますのでお楽しみに」

さすが老舗旅館の女将の息子。跡継ぎはとて有望だ。トオルのルックスと真面目な性格をみた女子は……

「きゃーーーーーっカワイイ！」

「ねえキミ、キミ！いくつなの！？」

「14ですけど・・・」

「え~~~~マジ！？中2なの！？てっきり小学生かと思った〜」

トオルは童顔なのでよく小学生と間違われる事がしょっちゅうある。女子高生の黄色い声を浴び、トオルは困り顔になった。これで黄色い声はと止むと彼は思った。が、あまりの可愛げのある困り顔に女子の心はさらにキューンと掴まれ、お持ち帰りしたいと言いだめた。トオルは「仕事があるので失礼します」と言い、旅館へ逃げ込んだ。めどが立ったので、千冬先生はこの後の指示を出した。

「ではこれより、各自荷物を部屋に置いて行け。30分後、海水道具を持ってここへ集合だ」

一同は解散し、女子はトオルを追いかけて旅館の中へ入って行った。置いて行かれた男2人は、女将カオルさんに目を付けられた。カオルさんは親しげに一樹の肩を組んだ。

「一樹、久しぶりだな。新聞で見たときは驚いたぞ」

「どうもお久しぶりです、カオルさん」

「大神、女将さんと知り合いなのか？」

「ああ。さっきの童顔少年、あいつ俺の後輩でこの人がお母さんなんだ。中学の合宿のときはよくお世話になったけど、高校でもお世

話になるとは」

一樹から離れ、カオルさんは一夏の方へ近づいた。

「そっちの少年、名は聞いているぞ。織斑一夏くん」

「ああ、どうも。はじめまして」

「堅苦しいあいさつはいいから、もっと楽しもうではないか」

カオルさんは一夏の背中をバンバン叩いた。千冬先生が出てきてカオルさんと少し話をした。

「女将さん、すいません。今年は男がいるので浴室わけがややこしくなっちゃって」

千冬先生が人前で誤っているのは初めて。まあこれも社会人の常識だ。でもカオルさんは全然困っていなかった。むしろ楽しんでいた。

「な〜に。旅館での男女の駆け引きも青春の一部だ。今年はなんだか楽しくなりそうだ。さ〜て腕が鳴るぞ!」

やる気満々で旅館に戻っていったカオル。なんだか豪快な女将さんということが一夏の脳に焼き付いた。

一樹と一夏の部屋割りは寮と同じ同室。まあ無難だな。室内もさす

が老舗旅館と言うことあつて悪くない。とつてもイイ部屋だ。

「あの人いろんな意味でスゴイ人だな」

「中学の剣道の合宿であの人と手合わせしたとき、手加減ナシでボコボコにされたことがあるんだ。今思い出しただけでも恐ろしいよ」

全国剣道大会の優勝者の筭を負かした一樹を負かすとは。もしかしたら千冬先生に匹敵する強さなのかもしれない。突然ふすまが開き、トオルが逃げ込んできた。

「先輩、助けてください！女の子が僕を追つて来るんです！」

廊下からトオルを追いかける女子の声。

「何処にいったの〜〜〜〜トオルく〜〜〜〜ん」

「あたしたちと海いきましょ〜〜〜う」

このままでは見つかる。中学時代、女子にいじられるとそれはもう・  
・いろいろな意味で・  
・  
・ホントに・  
・  
・とにかく一樹はトオルをかくまうことに。

「とりあえず押入れの中へ隠れる」

トオルを隠し、タッチの差で女子が一樹の部屋に入ってきた。彼女はプレデターのようにトオルを探した。

「大神くん、織斑くん、トオルくんは来ていない？」

「いや、知らない」

「俺も」

2人の証言を聞き、女子達は部屋を出て行った。もうすぐ集合時間だ。一樹は自分達が海へ行くまではここで隠れていると言い残し、海道具を持って一夏と一緒に旅館の玄関へ行った。

第33話 THE 有頂天旅館（後書き）

タイトル由来は映画「THE 有頂天ホテル」より

第34話 オーシャンズ11 ビーチ・ロワイヤル（前書き）

お待ちかねの臨海学校篇スタート。やや妄想爆発気味ですが、最後までお楽しみください。

### 第34話 オーシャンズ11 ビーチ・ロワイヤル

午前11時。強い日差し、青い海、遠くまで行き渡る砂浜。IS学園1年生御一行は熱海の海岸へ来た。女子が海、砂浜でキャイキャイ楽しんでいるそばで一樹はビーチパラソルの下で、スポーツドリンクを飲みながら女子たちの水着を鑑賞していた。

「大神さ〜ん。どうですか、アンナの水着は？」

横を振り向くとランチセットを持った水着姿のアンナが。彼女の水着は、胸元にリボンの付いた赤いワンピース水着にパーカーを着て麦わらぼうしをかぶっていた（絵がなくてごめんなさい）。ちなみ一樹の買った水着は、船の錨いかりのマークが点々と入ったトランクス水着である。

「う・・・うん。すごい・・・似合って・・・いるよ・・・」

アンナのスタイルは平均以上で、やや大きめな胸に露出した綺麗な太腿の水着姿の彼女に一樹は見とれ、手に持っていたスポーツドリンクを全部こぼしてしまった。アンナは一樹いるのビーチパラソルの中へ入って行った。その様子を見ていた一夏もアンナの水着姿に見とれ、鈴そつちのけで見っていた。

「ちょっと一夏！どこ見てんのよ！」

嫉妬した鈴に蹴られて、砂に埋もれた一夏。口に入った砂を吐き出したその様子を見ていた一樹は気の毒に思った。女子3人組が来て、大神とアンナを遊びの誘いに来た。承諾してアンナとパラソルから出ようとしたとき気品あふれる声がした。

「大神さん、ちょっといいかしら？」

横のビーチパラソルにセシリアが。隣りは彼女のマイビーチパラソルだった。セシリアはうつ伏せに寝て、ビキニの上の紐をほどいた。

「大神さん、サンオイルを塗ってくださらない？」

「あ、ああ。俺でよければいいよ」

セシリアの体は巨乳グラビアアイドル級でなかなかのものだ。一樹は心臓をドキドキさせながら、セシリアの後ろ側をサンオイルで塗った。彼女の背中一面が塗られ、それを見ていた見物者の、3人組みまでドキドキしてきた。

「よ、よし。背中塗りが終わったよ……」

「ま、まだですわ。手の届かない所は全部……足と……その、お尻も……」

何たること！お、お尻も！？ここまで大胆に誘惑する16歳、まあいない。これがセシリアの立てた一樹落とし作戦なのだ。一樹はどうしようか迷った。

「（フフ、これで大神さんは私に惹かれるはず……）」

自分のボディを利用した完璧な作戦。が、彼女はミスを犯した。それは計画に異分子の存在を計算に入れてなかったことだ。その異分子とは……

「はいはい、は〜い！私交代します。見ていたらおもしろそうです」

アンナだった。アンナは容器を取ってオイルを手に塗り、セシリアの体に塗りたくった。太腿、ふくらはぎ、足首、そしてお尻にまで・・・。

「あんっ！ いやんっ！ わたくしは大神さんにやってもらいたいのに・・・」

「ほらほら、おとなしくしてくださいっ！」

セシリアの体にはオイルがまんべんなく塗られ、その絵はとってもエロかった。さすがのセシリアも怒ってアンナに怒鳴った。見ていた女子3人組が、なんかセシリアの体がおう事に気づいた。

「ねえ、ちょっと。なんかにおわない？」

「え・・・そう？」

「ホントだ・・・なんか、甘いにおいがするぞ」

一樹も気づいた。疑問に思った一樹は、アンナがセシリアに塗ったオイルの容器をとって見た。その容器を、恐る恐るアンナに見せて確認した。

「ア、アンナくん・・・セ、セシリアくん塗ったのってもしかして・・・コレ？」

「あ。これ、サンオイルじゃなくてハチミツですね」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

セシリアはガバツと起き上がり、全身の匂いがをかいた。体から甘くにおいが放たれ、今にもカブトムシが寄ってきそう。アンナはサンオイルと間違えて、ランチでサンドウィッチに挟む八チミツをセシリアに塗ってしまったのだ。

「い……い……い……いやぁー……気持ち悪いー  
ー」

セシリアは胸を腕で隠しながら、シャワールームへで全力で走っていった。

「あらら。アンナ、またやっちゃいましたあ」

コケたポーズをしたアンナ。こうしてセシリアの『一樹落とし作戦』はアンナのド天然によって失敗した。鈴と一夏も一部始終を見ていたが、さすがの2人もセシリアにちよつと同情。

「うわ……悲惨ね、セシリア……」

「全身に八チミツ塗られるなんて、昔のバラエティ番組みたいだな……（しかしセシリアの胸、結構デカかったな……）」

「アンナくん、後でちゃんと謝つとくんだよ。いいかい（でもセシリアくん……イイ体だったな）」

走って逃げていくセシリアの胸は大きく揺れていて、男達にはとても目の保養になった。すると後ろからシャルの声がした。

「一樹、ここにいたんだ」

「おう、シャ……隣りにいるミイラはなんだ？」

シャルの隣りにはバスタオルをグルグル巻きにした人物がいた。よく見ると見覚えのある眼帯が。間違いなくラウラだ。

「ほら、一樹に見せたら。大丈夫だよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決めるっ」

そうは言っても、彼女にとっては、ビーチに来ていて今更見せたくないとも言えない状況だ。

「ラウラ、せつかくの海なんだし、顔見せて俺たちと遊ぼう」

「ま、待て。わ、私にも心の準備というものが……」

モジモジしてラウラは一向にバスタオルを取らない。ここでも彼女の本領が炸裂。

「ラウラさ〜ん。タオルなんて早くとっちゃいませうよ」

「うわあ〜！何をする！」

アンナはラウラを巻いていたタオルを掴み、全部剥ぎ取ってしまった。バスタオルの下には水着姿のラウラが。ラウラの水着は彼女の小さい体に合った紫色の可愛い水着だ。

「うう……わ、笑いたければ笑え」

「キヤーーーーー」。ラウラさん、とってもカワイイです!」

「ああ、カワイイぞ。ラウラ」

ラウラの中の何かに電撃がビリビリっと走った。

「（カワイイ……カワイイ……私……カワイイのか……）」

自分に自身がついたのはいいが、一樹のカワイイの言葉にポワ〜んとしているラウラ。一夏と鈴がスイカと棒を持って来た。

「なあ、大神。これでスイカ割りでもしようぜ」

「お、いいね。みんなでやるか、スイカ割り」

男に恋心を寄せる乙女の戦いは続く。

第34話 オーシャンズ11 ピーチ・ロワイヤル（後書き）

タイトル由来は映画「オーシャンズ11」+「007 カジノ・ロワイヤル」より

ちなみに「オーシャンズ11」のオーシャンは「海」という意味ではなく、映画の登場人物の「ダニエル・オーシャン」という意味。

ここで作者の都合により、2週間の休載をいただきます。気長にお待ちください。

（2011年9月3日）

第35話 驚いてはいけない旅館（前書き）

どうもお久しぶりです。長旅から無事帰還し、執筆再開です。

### 第35話 驚いてはいけない旅館

PM6:00。海でのバカンスを終え、旅館『超新星』に戻ってきた1年御一行は豪華な露天風呂、懐石料理を堪能していた。

「美味ぞ、この赤身」

「このサザエもイイ味だ」

海の幸をがつつく男達。一樹、一夏のワサビを刺身にのせて食べるのを見て、シャルも見よう見まねでトライ。皿に盛られたワサビ全部を口へ運んだ。

「あ〜ん……………んっんんんんん！」

「シャル大丈夫か！」

「だ、だいじょうぶ……………風味があつていいね……………」

慌てて水を飲み干すシャル。涙目になっても彼女は体裁を保とうと自然を振舞おうとした。その横でもう一人ワサビのみを食べ続ける者がいた。

「大神さん、コレがワサビっていうんですね。ツーンとしておいしいです」

ワサビまるまる1分本食べたアンナ。どうツッコんだらいいかわからない。

「アンナくん、それは刺身と一緒に食べるもので生じゃちょっと・・・。アンナくん。はいあ〜ん」

一樹はアンナにワサビの正しい食べ方を教え、彼女の刺身にワサビをのせアンナの口へよそってあげた。その様子を見て、隣りに座って足を痺らせたセシリアも一樹におねだりをした。

「お、大神さん、わたくし足が痺れて動けませんの。もしよろしければよそってくださいらない？」

「いいよ。はいあ〜ん」

「あ〜〜〜〜〜セシリアずるい！」

「大神くんによそってもらうなんて、卑怯者！」

「な、なんでわたくしだけ責められますの？アンナさんだって・・・」

セシリアにブーイングを飛ばす女子達。宴会場全体が騒ぎ始めた。するとふすまが開き千冬先生に怒鳴られた。一喝を入られた食堂は静けさを取り戻した。

「お、おほほほ。怒られてしまいましたわね」

「ああ、すまないセシリアくん。ご飯おかわりしてくる」

一樹は立ち上がり、ご飯をよそいに行くとき台所へ引きずり込まれた。一方アンナは食後のデザートをパクパク食べていた。

「ん~~~~このプリンおいしいっ」

「ちょっとアンナ、食べ放題だからって食べ過ぎだよ」

と、そこへご飯をよそってきた一樹が戻ってきた。

「大神さん、遅かったですわね」

「ちょっとね。セシリアくん後で俺の部屋に来てくれるかい」

それってまさか。セシリアはすぐにOKしてテンションがグーンと上がった。このとき彼女は知らなかった。これから始まる恐ろしい事に。

PM7:30。豪華料理を食べた後、各部屋ではトランプ、ウノ、花札、人生ゲームなど修学旅行のムードがあふれている。しかしある人物を覗いては。

「大神さんがわたくしを部屋に呼ぶなんて……。これはきつと殿方との……」

セシリアだった。一樹に呼ばれて同室の他の女子を出し抜いて一人彼の部屋へと行く彼女はルンルン気分だった。一樹の部屋は寮と同じ一夏と同室だ。部屋に着き、ふすまを開けて中に入る。

「大神さん、セシリア・オルコットですわ。入りますわよ」

おしとやかに振舞い部屋の中へ入っていく。しかし中は電気がついておらず、真つ暗闇の部屋だった。

「あら、真つ暗。・・・キヤッ」

急にふすまが閉じ、真つ暗な部屋に閉じ込められたセシリア。明かりも何もない空間でセシリアは戸惑うばかりであった。すると後ろに何かがある気配がして振り向くと血まみれナイフをもった人間が下から照らされていた。その風貌はイギリスの殺人鬼『切り裂きジャック』そのものだった。

「いやあー！ー！ー！ー！、ジャック・ザ・リッパー！ー！ー！ー！ー！」

世界的に有名な殺人鬼のいわく付きの国の生まれであるセシリアは腰を抜かした。その時電気がつき、押入れから出てきた鈴が寄って来た。

「あつはははは。大成功！いい絵もーらいつと」

「鈴さん！？なぜここに！？」

「大丈夫か、セシリア」

切り裂きジャックの正体は変装した一夏だった。鈴は写真を撮り、腰を抜かしたセシリアを起こす一夏。鈴のイタズラにまんまとひっかかったセシリアは、半ベソをかいていた。その時、ふすまに一樹、アンナ、篤、シャル、ラウラそして女将、米田カオルが立っていた。

「あら〜セシリアさん、どうしちゃったんですか。ベソかいてますよ」

「お前にも苦手なものはあるのだな」

「完璧に見えて以外と怖がりなんだね」

「情けないな」

「ち、違いますわ。これは不意をつかれただけですわ」

必死で言い訳するセシリアをみんなでイジリ回した。イジリ回した所で本題に入り全員部屋に座った。ここに集められたのは8人は、全で一樹に呼ばれた者達であった。食事の時、女将カオルに呼ばれて、「特別肝試しをやるから友達をつれてこい」と言われて、一樹はこの7人を呼んだのだ。

「さて、全員集まったところで。カオルさんお願いします」

「ふふふふ。君たち、そんなちゃっちい物よりも8人で恐怖感のある体験を試してみる気はないか？」

女将カオルの持ちかけた企画。それは夏の定番、肝試しだった。ルールは2人1組でこの旅館の裏にあるお堂へ清めの塩を盛りに行き、そこで写真を撮って帰って来るといふもの。持ち物はペンライト、清めの塩、デジカメの3つのみと、幽霊に対してはある意味頼りになる物だ。組み合わせはくじ引きで、引いたくじに書かれている番号が同じ者がペアとなり、行く順番もその番号となる。結果は

1番 篝・鈴

2番 一夏・ラウ

3番 アンナ・シャル  
4番 一樹・セシリア  
となった。

「あ〜ん、一夏と一緒がよかったのに〜」

「（くっ、私も一夏とがよかったのに。なぜこのようなじゃじゃ馬と・・・）」

「シャルさんと一緒に夜道を歩けるなんて。アンナ大感激です」

「いや、アンナ。夜道といってもオバケが出る道だよ」

「大神の親友の背中が私が守る」

「いや、楽しく行こうぜラウラ」

それぞれが歓喜、不満、不安を述べる中、運が向いてきた者がいた。

「（や、やりましたわ。ここへ来てわたくしにも運が向いてきましたわね。これで大神さんに一気に近づくチャンスですわ）」

時間は30分後、ジャージに着替えてに玄関口に集合。このとき8人は知らなかった。世にも恐ろしい出来事に遭遇することになることを。

PM8:00玄関に集められた8人。用意させられた椅子に座られ

刻一刻と迫る恐怖の時間を待つ。とそこへカオルが、額烏帽子ひたいえぼし遺体の頭につける三角の布 白装束にやって来た。

「全員来たか。じゃあ早速はじめよう。言っとくが脅かす側もガチだから、半端な気持ちで行かないほうがいいぞ」

カオルの脅しをかけられた8人は急に静かになった。トップバッター、篤・鈴ペアにペンライト・清めの塩・デジカメがの3点が支給される。そして篤・鈴はカオルに誘われて旅館の裏へと歩いて行った。待たされる残りの6人は、ポツンとうす暗い玄関口に待たされる。この待っている間の空間が、もう既に肝試しが始まっているような感じであった。

「日本の肝試しってどんなものなの？」

「ハロウィンみたいなのは期待しない方がいいぞ。日本のホラーは世界一だからな」

キヤーーーーー

早速2人の悲鳴が悲鳴が聞こえてきた。その声を聞いてビクンッと驚く6人。さらに2回、3回と聞こえてくる悲鳴に、じわりじわりと与えられる恐怖に背筋が凍ってきた。20分後、戻ってきた篤・鈴にはとてつもない疲労感と冷や汗をかいていた。

「これは……キツイぞ」

「こんな脅かし方今までにないわよ!」

一体なにがあったのか。次に行く一夏・ラウラペアの口数が減って

いた。さすがのラウラも緊張しているのか、顔が引きつっていた。

第35話 驚いてはいけない旅館（後書き）

タイトル由来はTV番組「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで  
！！」内の「笑ってはいけないシリーズ」より

### 第36話 遠すぎたお堂（前書き）

自分自身は怖いモノが超苦手ですが、自分なりのホラーテイストに仕上げてみました。

### 第36話 遠すぎたお堂

「うああああああああああっ！」

山から一夏とラウラのスクリーム（叫び）が聞こえてくる。既に終了した筈・鈴ペアは、下を向いてグツタリしていた。

「スゴイ叫んでいるな。あのラウラが叫ぶなんて、どれだけ怖いんだ」

「わたし、急に怖くなってきました。祟られるってことないですよ・  
・・ね？」

さっきまで明るかったアンナが、不安な表情で落ち着かない素振りを見せた。21世紀の科学の時代でも、いつの時代もオバケとは怖いものだ。

「なあ、もう引き返さないか。これ以上進むのはムリだ」

「そうは言ってもなあ。お堂に塩盛って、写真撮らなきゃ示しがつかないぞ」

一夏とラウラはお堂の手前まで来ていた。ここまで何回も驚き、首すじが痛い。不気味に光るかがり火の照らすお堂へ入っていった。数分後、その中からとてつもない叫びが、数十メートル離れた、一樹の所まで響いた。

一夏・ラウラペアが真つ青な顔で帰ってきたあと、3番手のアンナ・シャルペアも行って帰って来た。その顔は2人とも泣き顔で、アンナは一樹に抱きついた。カオルに呼ばれ、いよいよ一樹・セシリアペアの番だ。ここまでウキウキ分だったセシリアは、待ち時間に聞いた叫びと帰ってきた者の顔を見て、無口になっていた。

「最後は一樹ペアだな。来い」

「さ、行こう。セシリアくん」

「ま、待ってください。まだ心の準備が・・・」

一樹は怖がるセシリアの手を引いて、旅館の外へ出た。カオルに連れられて、案内された所は旅館の裏側の林道。見るからに出そうな<sup>ムト</sup>雰囲気、前3組の悲鳴を聞いた一樹もセシリアも部屋に帰りたいた気分だった。

「じゃあこれを。健闘を祈る！」

威風堂堂に言うカオルからペンライト、清めの塩、カメラを受け取り2人は真つ暗闇の林道へ足を踏み入れていった。

林道は1本道でちゃんと整備されて歩けないことはないが、明かりがいつさい無くライトが消えたらオシマイだ。しかも不気味なほど

静まりかえって、たまに吹くそよ風が揺らす草木が2人の恐怖心を仰ぐ。

「セシリアくん、大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫ですわ。わたくしを誰とと思って？」

強がりを行っている割に、一樹にひっ付いているセシリア。イギリス代表候補生は怖がりのレットルを貼られないようにとしているものの、怖いものは怖い。その時、急に後ろから冷却ガスをかけられた。

「キヤーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

バラエティ番組でよくある光景だが、こんな場所でやられるのは絶対怖いし、心臓にすごく悪い。まだ始まって5分も経っていないのに、セシリアは既にギブ寸前だ。

「・・・本当に大丈夫かい？」

彼女は無言で首を縦に振り、2人はさらに暗い林道を歩いて行った。夜、森、肝試し、男女、この要素はホラー映画に欠かせない要素。そう、今まさにこのホラー映画にありがちなシチュエーションは、2人から徐々に平常心を奪っていった。

10m間隔に驚かされながらもスタートから50m地点に差し掛かった時、矢印の書かれた看板がありその先の石段を一段、一段ゆっ

くりと登って行った。さすがに階段で脅かしはないと思い、2人は一瞬気を緩めた。ここまで大声を上げることが少なかった一樹を見て、セシリアは男のたくましさを感じていた。

「ここで刺客はないだろう。一步間違えば転落してしまうからね」

「大神さんは、怖くないのですか？」

「いや、俺もすつごく怖いんだ。でもセシリアくんを守るためならそんなのどつってことないよ」

「い、いやですわ。こんな時にそんな話しないでくださいまし・・・  
キヤーっ!」

気の緩んでいる2人の上から空き缶が落ちて来た。地味とはいえ油断していた一樹もこれにはビックリした。石段をのぼり、さらに恐怖は続いた。

数十メートル歩くと、分岐点のお堂が見えて来た。怖さを引き立てるかがり火が、辺りをゆらゆら照らしていた。お堂前の広い敷地に足を踏み入れたとき、大声がした。

「たたりじゃあ~~~~~」

横を向くと、カオルの娘でトオルの妹のナナが白装束に懐中電灯を頭にくくりつけ、両手に刀とピストルを持って走って来た。モチーフはおそらく八つ墓村のだが、作中の様に恐怖感はなく、ナナは2人の周りをグルグル回って「たたりじゃあ〜」を言いながら、刀を振り回し、ピストルを撃ちまくった。八つ墓村を知る一樹はそんなに怖くはなかったが、セシリアはキヤーキヤー叫んだ。

「やつはかみようじんのたたりじゃあ~~~~~」

ナナが去ったあと、セシリアは叫び終えて息を切らしていた。彼女が落ち着いたところで、2人はうす暗いお堂へ入って行った。中を照らしているのはロウソクのみで、ロウソクの照らす室内が普通じやない空気を醸<sup>かも</sup>し出す。

「怖いなあ~~~~。脅かされる以前に、この空気が怖いよ」

「大神さん。わ、わたくし、もう限界ですわ・・・」

「大丈夫だよ。ココで2つの任務をやればあとは来た道に戻るだけだ。しかし、ここはお寺というより何かの稽古場みたいだな。」

セシリアのメンタルも限界だ。さっきのナナの八つ墓村の件で彼女の精神力は大幅に削られた。お堂の入口ははまるで能舞台のような造りで、中は武道ができる畳張りのスペースに、周りには仏像があった。その中の一つの仏像のそばに「ここで塩を使え」と赤い字で書かれた看板があり、テーブルの上には前のペアが盛っていた塩の皿があった。

「え~~~~と、ここに塩を盛ってと・・・」

「ま、ま、待つてください。こ、こ、ここはわたくしにお任せを」

セシリアは心が满身創痕にもかかわらず仏像に塩を供えた。ここで仏像が動くというのがセオリーだが、一樹達の「動いてほしくない」という願いが叶ったのか、仏像は動かず何も起きなかった。反対側に掛けてあった掛け軸横の看板には「カメラを使え」と赤い字で書かれていた。この掛け軸を撮れということなのか。一樹がデジ

カメで「輝き」と書かれた掛け軸を撮ろうとした瞬間、掛け軸が上へ勢い良く上がり、裏から斧を持った男が現れた。

「お客さんだよおお」

「うわあああああああああ！」

シャイニングのジャック・ニコルソン風の男が出てきてこれには一樹も驚き、セシリアを連れて逃げ出した。すると塩を供えた仏像が動きだして2人の行く手を遮った。セシリアは恐怖のあまり、腰を抜かしてその場にペタンと座り大泣きしてしまった。

「いやあああ！・・・もう・・・イヤですわあ！・・・こんなことお！・・・」

セシリアが腰を抜かしたことを気づいた一樹は彼女の元へ駆け寄り、背中を差し出した。

「セシリアくん、早く逃げよう！俺の背中に乗るんだ！」

「ぐすつ・・・大神さあん・・・早く逃げましょうよお」

泣きじゃくるセシリアをおぶさり、お堂から外へ出た。お堂前の広い敷地に出て、振り向くとお堂の中からニコルソン風の男以外にも周りからジェイソン、フレディ、チャッキー、レザーフェイスなどの殺人鬼から、貞子、伽椰子かやこなどの怨霊、さらに人間大の目玉のおやじ(?)など古今東西の怖いものばかりが出てきて、もう何がなんだかわからなかった。一樹はセシリアをおぶさって、後ろから追ってくる怖い者を振り返らず、とにかく走った。



### 第36話 遠すぎたお堂（後書き）

タイトル由来は映画「遠すぎた橋」より。

後々気づいたのですが外国のホラー映画って殺人鬼やモンスター系が主で怨霊系ってないんですね。あっても見たくはないです。

第37話 タタミネーター2（前書き）

肝試し後の就寝におきた出来事です

### 第37話 タタミネーター2

「ひつく……大神さん、怖かったですう……」

「わたくし……もう……怖くて死にそうですわ」

アンナとセシリアは終了しても泣いていて、一樹に抱きついていた。やっぱり女の子で怖いもやっぱり怖いのだ。

「あなた……いい身分ね……」

「そんな……鈴、誤解だよ」

それを見ていた鈴はふてくされた。

一同が部屋に帰った時は10時を回っていた。一樹と一夏は布団を出して寝る準備をしていた。その前にアンナとセシリアを部屋に送っていったあと、スケキヨかと思いきやパツクをした山田先生に驚いたことはあまり知られていない。

「はぁ……今日は疲れたよ」

「早いとこ寝ようぜ。もうすぐ消灯時間だ」

「そうだな。おやすみ」

2人は布団を敷くと、よほど疲れたのか5分もかからないうちに寝てしまった。

「・・・さん・・・大神さん・・・」

一樹を呼ぶ声、誰か枕元にいる。その呼び声に応え静かにまぶたを開くと、そこにはマクラを持ったセシリアがいた。

「・・・ん・・・セ、セシリアくん!?何しているんだ」

「大神さん、わたくし怖くて眠れませんの。一緒に寝てくださいらな  
い?」

「待ってくれ・・・こんな所・・・見られたらマズイよ・・・」

セシリアは布団をめくり、中に入ってきた。マズイ、これじゃあ不純異性交遊が成立してしまう。特にセシリアはイギリスの代表候補生。こんな不祥事が起きたらどんな処分がされるかわからない。場合によってはイギリスの機関に抹殺ターミネートされるかもしれない。

「何をしている・・・」

「あなた、また抜けがけ!?!」

「卑怯な真似を・・・大神は私の嫁だ」

「これは・・・そう・・・寝癖でここまで来てしまったのですの！）  
ちっ、もう少しでしたのに）」

部屋の入口に箒、鈴、シャル、ラウラ、アンナがビーフジャーキーの天狗てんぐのような顔で、こちらを睨んでいた。

「大神さん！私との関係は遊びだったのですね！」

「一樹とアンナってそういう関係だったの」

アンナのせいで話がややこしくなってきた。このままではイギリスの機関より、先にこの人達タミネートに抹殺される。5人の後ろに黒い影が。

「こらっ、何をしている！さっさと部屋に戻れ、馬鹿ども！」

千冬先生が般若のような顔でこちらを睨んでいた。先生のおかげでこの事態は終息タミネートされた。怒鳴られた女子6人は慌てて自室へ帰って行き、千冬先生は一樹の布団から出て部屋に戻るセシリアの尻を叩いた。こんな騒ぎにも目を覚まさず、隣りでは一夏がグース力寝ていた。

再び眠りに入り、一体どれくらい時間が経ったのか。寝返りをうつた時、畳を踏みしめ何かいる気配を感じて一樹は目を覚ました。またセシリアが来たのかと思った。だが・・・

「セシリアくんか？」

「・・・闇が・・・迫・・・る・・・」

スローで超低音な声、セシリアじゃない。この声、どこかで。上を向くと、あのアリーナでやられそうになった時、そして臨海学校の前日の夢に出てきた能楽師がいた。一樹は動こうにも口は動くのに体は動かない。金縛りだ。

「闇・・・は・・・この・・・国・・・だけ・・・で・・・は・・・すまぬ・・・」

「闇とは・あの脇侍のことか？」

「あれは・・・雑兵に・・・過・・・ぎな・・・い・・・。そ・・・の・・・上の・・・闇・・・が・・・お・・・前に・・・くる。そ・・・い・・・つに・・・そ・・・の・・・面を・・・使・・・え・・・」

何を言っているのか一樹にはわからなかった。能楽師が言う闇とは何なのか、能楽師の正体は何者なのかわからないことだらけであった。その言葉を聞いた時一樹は再び眠りにつき、次に起きたときはもう朝だった。

一樹は朝食を食べに一夏と食堂へいく渡り廊下と途中で地面をじっと見ている筈を見つけた。

「おはよう、箒くん。何しているんだい？」

一樹と一夏が箒の見つめる視線を見てみるとそこには、地面からウサギの耳のように生えた物体と、『ひっぱってください』とマジックで書かれた汚い看板があった。

「なあ、箒……これってもしかして……」

「知らん、私に聞くな」

箒はそのまま無視して行ってしまった。箒と一夏は何か知っているようだったが、一樹はその物体と周りを疑う。これがあの能楽師が言っていたものなのか、そうは見えない。むしろ巧妙な罠なのか、純粹なイタズラなのか、選択の余地はなかった。

「一夏、とりあえず引っ張ってみてくれ」

「え〜。イヤな予感ハバシバシするんだけどなあ」

一夏は渋々ながらも、ウサギの耳のような物体を掴み、勢い良く引っ張った。でも耳の下には何もななく、一夏は尻もちを付いた。……何も起きない。やっぱりイタズラだったみたいだ。一樹はホツと一息いれた。すると空を見ると何か落ちてくる。その物体は一夏の目の前に落ちて一樹は衝撃でふっ飛ばされた。落ちてきた物はニンジンの形をしたロケットのようなもので、それが縦に二つに割れ、中に動くものが見えた。

「ひっかかったね〜いっくん。ブイ、ブイ」

人だ。紫の髪にさっきのウサギの耳をつけた女の人が出てきた。

「お、お久しぶりです・・・東さん」

「うんうん、おひさだね。ところでいつくん、篝ちゃんと、第5世代持ちの2人はどこかな？」

「え〜っと」

「ま、いいや。また後で、じゃあね〜〜〜」

一夏の返答を聞くまでもなく、ウサギ耳の女の人 は立ち去っていった。彼女が去って行ったあと、ふっ飛ばされた一樹は起き上がって土を払った。

「いててて。なんだったんだあの人」

「篠ノ之東さん。篝の姉さんだ」

第37話 タタミネーター2（後書き）

タイトル由来は映画「ターミネーター2」より  
セシリアの一樹の布団へのお忍びは、「サクラ大戦2」第5話のす  
みれの抜けがけのオマージュ。

**第38話 束の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めてISを**

タイトルは長いフルネームです。

第38話 束の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めてISを愛

朝食を食べ終え千冬先生に呼ばれて一樹他、専用機持ち7人はISスーツに着替え人目のつかない海岸の広い岩場に集められた。が、何故か専用機を持たない箒もその場にいた。

「アンナさんのISスーツも、わたくし達のは随分違いますわね」

「ホントね。第5世代型のはみんなそんなカンジみたいね」

アンナのISスーツは全身タイトのインナースーツに太もも半分までのロングブーツ、胴には6つの銀ボタンの赤いジャケットのズーツだった。しかも肩には一樹と同じコネクターがついていた。第5世代のISスーツを観察していると千冬先生が来た。

「よし、専用機持ちは全員揃ったな」

「ちょっと待ってください。箒は専用機持ってないでしょう」

確かに箒は代表候補生でもないし専用機は持っていない。それは一樹も一夏もアンナも同じなのだが、3人の場合は特例ということ専用機をもつことが認められている。そんな箒がなぜここに呼ばれたのか。

「私から説明しよう。実は……」

遠くから何やら声がして、箒と千冬先生は声を聞くと顔をしかめた。後ろを見ると人が崖を走り降りている。岩から大ジャンプ、空へ舞い上がった。それは一夏が篠ノ之束と呼んでいた人だった。束

は千冬先生に抱きついて来たが、先生は紙一重でかわし迫る束の顔を掴んだ。

「やーやー、ちーちゃん会いたかったよ〜。さーハグハグしよう、愛を確かめ、むぎゅ〜」

「うるさいぞ、束」

束は今度は妹の筈に近づき、彼女の胸を触ろうとしたが筈は実の姉を容赦なく木刀で殴った。あまりの姉妹劇に一同はあ然としていて棒立ちしていた。

「おい束、自己紹介からしろ」

「え〜面倒くさいな〜。私が天才の束さんだよ〜。ハロー、終わり〜」

「あの人が俺や世界中のISを造ったの・・・か？」

篠ノ之束。ISの開発者にして、ISの基礎理論を考案、実証し、467機+1機（一樹機）のコアを造った自他共に認める天才科学者だが、そうは見えない。しかし、各国から追われている逃亡の身の方がなぜここに居るのか。

「さあ大空をご覧あれ」

そう言つと、空からラピュタの飛行石のようなひし形の物体が降ってきた。

「ジャジャ〜ん。これぞ篝ちゃん専用機こと、紅椿〜。第5世代移

行型ISを純製第4世代型ISとして開発した東さんお手製の機体だよ」

ひし形が、紅色のISトランスフォームに変形した。これが紅椿。一樹、アンナの第5世代型よりも1世代下だが、この紅椿は正式な第4世代型だ（白式も名目は第4世代だが、事実上は第3世代）。まだ各国が第3世代型の試験段階にあるのに、これ以上の世代ISが出たら国際IS委員会がなんて言うかわからない。ここでシャルが質問した。

「一つ質問があります。第5世代移行型ISとは何ですか？」

「私が説明する。大神、フォンテイーヌの第5世代型を見た各国は自国の配備されているISを無理矢理第5世代にシフトしようという無謀な計画を考えた。ノープランだから当然、全て失敗。機体もいくつかは破棄された」

「そこでわつたしい、天才東さんがカワイイ妹の為におじやんした機体で純製第4世代型をつくったってわけ。じゃあ箒ちゃん、セッティングをするから乗ってね」

箒は新しいISスーツに着替え、紅椿に乗り込み束はセッティングを開始した。ピピピとなる電子音、束は紅椿と箒の同期をスゴイ速さでキーボードを打ち込んだ。セッティング終了。その時間2分、通常は3人がかりで15分をかかるセッティングを1人でやるとは天才科学者というのはまんざらウソではないようだ。

「セッティング終了」さっすが私い。じゃあ試運転も兼ねて飛んでみてよ」

「ええ。では試してみます」

箒は機体に念を込めるように目をつぶり、次の瞬間すごい速さで空へ飛んだ。あっという間に上空100mまで上昇した箒は4、5回転させた。機動性も第5世代を除く従来のISよりも遙かに上だ。

「なにこれ、早い」

「一樹の機体と同じくらい早い。これが第4世代の加速・・・」

「じゃあ刀使ってみてよ。右のが雨月あまつぎで左のが空裂からわれね」

箒は空中で停止、ホバリング状態にして二刀を抜いた。まずは右の雨月で突き。すると雨月からレーザーを放出され、そのレーザーは雲を晴らした。次に東は量子化していた小型の広域防空用地対空ミサイル、通称：パトリオットミサイル8発を箒に向けて発射した。箒は焦ることなく、左の空裂を振りエネルギー刃の斬撃を飛ばし、8発全てのミサイルを撃墜した。

「やるな・・・」

「すげえ・・・」

「やれる！この紅椿ならっ！」

一同は第4世代型の性能に見とれていて瞬きするヒマもなかった。試運転を終えた箒は降りてきた。その顔は満足そうな笑顔であふれていた。

「いいね、いいね〜ウフウフフ〜。じゃあ次、アンナちゃん。エヴァンジェル出して〜。」

「あ、はい。いつきますよ〜」

アンナはロザリオ状に待機していたエヴァンジェルを展開、赤色の機体に十字架がペイントされた機体が姿を表した。第5世代型IS：エヴァンジェルも光武と同じように機体から伸びたコードが搭乗者のスーツのコネクターに接続されているという形だ。主力装備は右腕に取り付けられた対IS用可変銃身式20mmガトリングのみ。可変銃身式とは使用時には銃身が伸び、不使用時には銃身が縮んで安全状態になる武器だ。ちなみにこの20mmガトリングは光武の二刀『銀狼』、『白狼』と同じで量子化出来ない。

「今度はアンナちゃんの機体に新装備を追加するよ〜」

東は今度はエヴァンジェルにコードを繋ぎ、武器のデータを送った。また高速でキーボードを叩き、スゴイ速さでエヴァンジェルの装備を変換、追加させた。

「転送完了！バージョンアップするね〜」

次の瞬間、エヴァンジェルのスラスタが、翼をイメージしたウイングスラスタに変わり、新武装の対IS用120mm砲ライフル、対IS用12.7mm機銃、対IS用7.62mmマシンガンが加わり、その姿はまさにワルキューレ。ちなみに120mm砲は戦車の主砲に使う弾で、それをどうやってライフルに改造できたのかは

謎である。

「最後に一樹くん、ちょっと光武をいじらせてもらうよ〜」

一樹は言われるままに光武を展開し、束は一樹の光武を調べ始めた。束が作業をしている時、一樹が束に質問した。

「篠ノ之博士。俺とアンナくん、2人の第5世代型ISを開発したのはあなたですか？」

「そだよ、すみれ会長とシスターエリカに頼まれてね。私が直々2人の為に第5世代をつくってあげたんだよね〜。色々大変だったんだよ〜。あ〜と〜、博士なんてメンドーだから束さんでいいよ。」

そうやり取りしている間に束は光武を調べ終えた。一樹はクラス対抗戦のころから気になっていることについて質問した。

「束さん、もう一つ教えてください。光武は今までのISとは何か違います。第5世代型ISの本質とは何ですか？」

「ああ、それはね・・・」

束その質問に答える瞬間、千冬先生を呼ぶ声があった。岩場の入口の方を見ると山田先生が血相を抱えて走ってきた。そして手に持った情報端末を千冬先生に見せ、先生の顔色も変わった。

「テストは中止！お前たちにやってもらいたいことがある！」

一体何なのか。そして山田先生は束の存在に気づき、初めて会ったIS開発者に驚いた。

第38話 束の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めてISを愛

タイトル由来は映画「博士の異常な愛情 または私は如何にして

心配するのを止めて水爆を愛するようになったか」より

束のやった事はこの映画と違うことかもしれません。

### 第39話 八人の専用機持ち（前書き）

シャルの専用機リヴァイヴってデザインや色合いが、トランスフォーマーっぽくてイイと思ってるのは自分だけでしょうか？

### 第39話 八人の専用機持ち

千冬先生、山田先生に呼ばれ、一同は旅館の部屋に作られた仮設  
フリーフィンゲーム  
の作戦指令室に集まった。畳と壁のモニターには世界地図が映し出  
され、周りの機材にはオペレータが座っていた。千冬先生はモニタ  
ーの図を一樹達に説明し始めた。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共  
同開発の第3世代型の軍用IS 『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルが制御下を離れて暴走。  
監視空域より離脱したとの連絡があつた。情報によれば無人のI  
Sということだ。」

その後、衛星による追跡の結果、福音はここから15キロ先離れた無人島に停留していることがわかつた。時間にして50分後、学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた。」

坦々と状況を説明する千冬先生。一夏以外は真剣な眼差しでモニターを凝視して、これから告げられる事を予想しているみたいだつた。

「教員は学園の訓練機を使用して空域、海域を封鎖を行い進行を防ぐ。よつて本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつた。」

「はいっ!?!?」

一夏はすつとんきょうな声をあげた。

「つまり暴走したISを我々の手で止めることだ」

さすがラウラ。千冬先生が告げた事は『暴走したISを専用機持ち8人の手で阻止せよ』と言うことだった。一夏にとつてはぶっ飛んだ事で何を言われているのかさっぱりわからなかった。

「織斑先生、新しい情報が入りました。暴走する30分前、監視カメラに『福音』に細工を施した人物が映っていたとのことですよ」

モニターに映し出された監視カメラの映像、そこには米軍の軍人が機体に針みたいなものを刺す姿が映っていた。その後の調べで映っていた軍人はアメリカどころか、どこの軍にも所属していないということだった。

「わかった。それでは作戦会議を始める。意見がある者は挙手するよう」

先に手を挙げたのはセシリアだ。彼女は福音の詳細のスペックデータを要求した。千冬先生はうなずき、この情報は口外厳禁で漏えいした場合、査問委員会による裁判と最低2年の監視のペナルティを与えられることを告げて、モニターにデータを映した。

「広域戦術を目的とした特殊射撃型IS。わたくしのブルー・ティーズと同じオールレンジ型ですね」

他にも鈴、シャル、ラウラはスペックデータを見て個人の解析を付け足した。さすがに代表候補生に選ばれただけのことだけはある。しかし分が悪いことに偵察は行えない。島にいるのは確かだが向こうも迎撃体制をとっており、うかつに近づけば撃墜されかねない。現に先ほどステルス無人偵察機を向かわせたのだが、感知され撃墜されてしまったとのことだ。

「先ほどの報告にあったように、敵は1機ではなく複数いるものと考え、作戦は2チームに別れて行う。第1陣は大神、織斑、オルコツト、デュノア、第2陣はフォンテーヌ、ボーデヴィツヒ、篠ノ之、凰の4名づつに分かれる。まず第1陣は島に潜入、敵機を撃破せよ。次には2陣は海岸で待機し、1陣攻撃開始から5分後に突入しろ。」

8人は近接型2機、射撃型2機の4人づつのチームに編成された。  
フリーフィンゲ作戦を進める千冬先生に一夏は異議を申し出た。

「ちよつ、マジい。なんで俺たち!？」

「一夏、これは実践だ。この任務は俺たちにしかできない。千冬先生はそう判断したんだ」

「そつだ、もし覚悟がないなら無理強いはいしない」

一樹と千冬先生その言葉を聞いて一夏の表情と目の色がガラリと変わった。

「わかりました、俺行きます。この作戦、参加させてください」

一夏が決心したところで、作戦開始……。のはずがどこからかまた声があった。その時、天井の板が外れ、頭にクモの巣がついた束が出てきた。

「異議アリ!!その作戦はちよつと待ったなんだよ〜。ちーちゃん、ちーちゃん!2チームの組み合わせを変更を要求しま〜す!」

「なにっ!?!？」

裁判ゲーム並にビシツと決めた束。彼女の申し出はチームメンバーの組み換えだった。

場所は代わって8人は小さな滝のある渓谷に集められた。

「じゃあ箒ちゃん、展開装甲オープン！」

箒は紅椿を起動させ展開装甲を出ら。機体がまた変形し、機体のパーツが増えた。トランスフォーム

「展開装甲は第4世代型の装備で、一言で言っちゃうと紅椿は雪片式型の進化系なんだよ、ブイ、ブイ」

一同がしんとして、イヤな空気が漂った。

「それにしてもあれだね。海で暴走なんて、白騎士事件を思い出すね」

白騎士事件。つい最近、新聞部の資料で見た覚えがある。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一齐にハッキングされ、約2500発以上のミサイルが発射されるも、その全てをIS：白騎士が迎撃した上、それを見て白騎士を捕獲もしくは撃破しようとする各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件だ。

「うふふふ、白騎士って誰だったんだろっね〜。ね、ね、ちーちゃん」

「東、うるさいぞ・・・そんな思い出を語るヒマがあったら、さっさと紅椿の調整を済ませろ・・・」

白騎士事件の話聞いて千冬先生はいつになく怖かった。蛇のような眼で睨まなまれた束は素直に受け入れ紅椿の調整を始めた。

「では本作戦は変更した2チームによる暴走ISの破壊を目的とする。作戦開始は30分後、総員準備にかかれ！解散！」

紅椿の調整が終わり、海岸に集められた8人は各専用機を展開して出撃の準備をしていた。一樹は光武を展開して、半能面を持って夢に出た能楽師のことをぼんやり考えていた。

「（もしかして、能楽師が言っていた闇ってこのことなのかな？）」

「大神さん、どうしたんですか。緊張してるのですか」

「あ、ああ、アンナくん。大丈夫だよ。君こそ1陣に代わったけど大丈夫かい？」

「私は大丈夫です。大神さんが一緒なら、なんだってできます」

アンナの信じる目を見て、樹は自信を持ち、能面をしまつて機体の

最終確認をした。一夏は1陣に代わった箒を見てみると、髪のリボンの色が黄緑から赤に変わっていたことに気づいた。

「あれ、箒。リボン変えたのか」

「ここ一番の所ではこのリボンが落ち着くんだ。昔、転校先の剣道の先生から貰った物でな」

紅い機体に、赤いリボン。なかなかいい組み合わせだ。ただ一人この組み合わせに納得がいかないのが約一名。

「（なんなのですよ、この仕打ち！大神さんと一緒に出撃するはずが2陣と交代なんて」

束の持ち出したチームメンバーの変更。1陣を大神、アンナ、箒、シャルになり、第2陣を一夏、セシリア、鈴、ラウラといった具合で大幅に変更された。セシリアには気の毒だが、火力のある第5世代2機と第4世代を1機をメインに第2世代でサポートする攻撃型の1陣、第4世代と第3世代をバランスよく組み合わせた中堅型の2陣に編成し直された。

「オルコット、国家の非情事態に個人的な私情を持ち込むな、馬鹿者！」

機体の通信機に連絡が、千冬先生だった。さっきの通信はセシリアの機体だけ接続されていたので、他の人間には聞かれていない。作戦開始の時刻となった。

「よし、では作戦を開始する。諸君らの成功を祈る」

「よし、アンナくん、篝くん、シャル！出撃だ」

「はいっ、いつでも行けます！バシューっといきましょう！」

「この紅椿の力、しかと奴の目に焼きつけさせてやる」

「サポートは任せてね」

一樹達、一陣は空へ飛び立ち水平線の向こうへ消えて行った。

第39話 八人の専用機持ち（後書き）

タイトル由来は「七人の侍」より

第40話 パイレーツ・オブ・相模湾（前書き）

今回は戦闘です。上手く書けていないかもしれませんが、最後まで  
お楽しみください。

## 第40話 パイレーツ・オブ・相模湾

第1陣の一樹、アンナ、箒、シャルは編隊を組んで飛行中。福音がいる島は熱海から相模湾の南南東へ15kmの所にある。一樹も箒の赤いリボンに気づいた。

「箒くん、リボン代えたのかい」

「このリボンの方が落ち着く。大切な物だ」

「かつこいいですう、箒さん。サムライ娘ですねっ」

よほどの思い入れがあるのだろう。アンナの褒め言葉に箒はちよつとテレた。

本土を飛び立ってから数分間で福音のいる島が見えてきた。島の広さは周囲20kmで中央に岩山が突出して、北西部はゴツゴツした広大な岩場の平地に、反対側の南東部は森が海岸線まで覆っている地形だ。

「見えたぞ。あれが福音のいる島だ」

「こんなところで停留って、海賊でもあるまいし。一体何してるんだらう?」

たしかにハワイの軍の監視下から逃げ出し、なぜ日本のこの島にいるのか。まるで「かかってこい」と訴えているような行動だ。それに監視カメラに映っていた軍人の正体も気になる。畏かもしれないがここは国家的危機の早期解決のため、速攻で叩くことが先決だ。ここで無線が来た。

「お前たち、敵はもしかしたら複数いるかもしれない。注意して行け。」

「わかりました。みんな、一旦森に降りるぞ。迎撃があるかもしれないからアンナくん、シャルは援護を頼む！」

「了解」

一気に島に急降下する1陣。千冬先生、一樹が予想した通り、島から歓迎のあいさつが来た。レーザー4門が1陣めがけて一斉に発射された。アンナとシャルは射撃武器で応戦。1陣は敵からの弾をかいくぐり、南東部の森へ着陸に成功した。

森に身を隠した1陣。一樹のレドームで調べた映像によると、島の4カ所に強力なIS用の対空レーザー砲が設置され、空を飛べば自動追尾で撃たれてしまうという。5、6喰らえばエネルギーは0になってしまうほど強力なので、なるべく飛ばないようにしなければ。1陣は一旦南東部の森に身を隠し、反撃の機会を伺っていた。一樹とシャルはISの望遠機能で森の出口から北西部の平地を見回していた。シャルが何かを見つけたみたいだ。

「ねえ、一樹あれ見て！」

シャルが指指した方向には、学年別トーナメントに乱入した脇侍と呼ばれた機兵が4機はいた。何か作業をしている。

「あ、あれは脇侍！どうしてここに!？」

「きつと量産型だろう。他にもいるかもしれん」

学年別トーナメントに乱入した脇侍は同じ型が2機だったから、大量生産の兵がいてもおかしくない。問題はこの相模湾沖の無人島で何をしているのか、一樹達は脇侍の作業を木の陰からこっそりと覗いた。

「大神さん、あそこ！福音が！」

脇侍は福音を棺桶のようなコンテナに詰め、運び出そうとしている。どうやらこの事件、ただの暴走事件ではなさそうだ。そのときアラーム音がして、脇侍達がキツとこちらを向いた。

「シンニューシャダ！ワキジドモ、ゼンイン、マツサツセヨ！」

見つかった。4機の脇侍は福音を入れたコンテナを運び去って行き、どこからか脇侍の量産型がうじゃうじゃ出てきた。その数10機で全機武装している。一樹は冷静に千冬先生に無線をかけた。

「千冬先生、トーナメントに乱入した脇侍の量産型が福音を運び出そうとしています。どうしましょう?」

「わかっている、そちらの状況は衛生で確認した。福音を暴走させたのもおそらくそいつらの仕業と見て違いない。上から攻撃の許可が降りた。脇侍を撃破して福音を追え。第2陣もそちらへ向かわせる、それまで持ちこたえろ」

千冬先生は無線を切り、2陣へ出撃を出しに行った。

「よし、篤くんは俺と斬込み、アンナくんは後方支援、シャルは2陣が来れるように対空レーザー砲を破壊しながらこっちを援護してくれ」

一樹は『銀狼』・『白狼』、篤は『雨月』・『空裂』を抜き、アンナはガトリング、シャルは2丁サブマシンガンを構え、戦闘をおっぼじ始めた。

「はあああああつ！」

篤は姉の束から貰った専用機で脇侍を蹴散らして行き、一樹も二天一流の剣術で篤のあとに続いた。学年別トーナメントの時とは違ってエネルギーも充分にあり、力一杯戦えた。ここでシャルから連絡が入った。

「一樹、レーザー砲1門目の破壊に成功。残り3門も破壊するよ」

シャルも与えられた役割を果たしている。この中で一番旧型の第2世代型を使っているにも関わらず、大いに活躍している。

「祈りなさいっ！」

アンナもガトリングを乱射し脇侍を一掃した。さすが第5世代機射撃型の火力は違う。しかし火力はこちらが上なのに脇侍は倒れるも、

平然と立ち上がり武器を手に取りこちらへ向かって来た。

「くっ、なぜだ！？なぜ切っても切っても倒れない！？ISの攻撃を喰らっても立ち上がるのだ！？」

箒も焦りを感じ始めた。脇侍が群がって来る中、一樹の呼ぶ声が。

「箒くんっ、離れてくれ！？」

後ろを振り向くと、一樹が桜色に光る銀狼を大きく振りかぶっている。箒が慌ててイグニッションブーストで回避したあと、一樹は刀を縦に振り下ろした。

「破邪剣征・桜花天昇！」

脇侍4機を巻き込んで、桜色の斬撃が一直線に飛んだ。巻き込まれた脇侍4機は煙とスパークを出しながら倒れた。

「やったのぞ。みんな、残りは6機だ。2陣が来るまで持ちこたえるんだ」

士気を高め、脇侍を攻撃していく一樹、箒、アンナ。ここでまたシヤルから連絡が入った。

「一樹、3門目を破壊した。あと1門だよ」

「よしこのまま・・・」

と、その時悲鳴がした。アンナが脇侍に両腕をつかまれて身動きが取れなくなっている。

「キヤアーーーーー来ないでーーーーー!!!」

「シャル！頼む！」

一樹がシャルに合図を送った。脇侍がアンナに襲いかかろうとした瞬間、脇侍の足が撃たれバランスを崩した。シャルのスナイパーライフルだ。脇侍が起き上がるうとしたとき、助けに入った一樹の剣を胸に×（バツ）の字に刻まれて倒れた。もう1機の脇侍も箒の空裂の飛ぶ斬撃でふっ飛ばされた。

「アンナくん、無事かい!？」

「あ、ありがとうございます。大神さん」

「箒くん、シャルのおかげさ。2人とも援護ありがとう！」

シャルはグッドサインを出して、箒はピイツとやった。箒はあまり感謝されることに慣れていないのだろうか。

戦闘開始から10分以上が経過し、脇侍の数も残り2機となった。1陣のエネルギーはまだ余裕があり、一樹も桜花天昇を1発使ったが全然大丈夫だ。と、そこへ2陣の一夏、セシリア、鈴、ラウラが到着し、シャルも戻って来た。

「大神さん、ご無事ですか!?!このセシリア・オルコットが来たか

らにはもう安心ですわ!」

「これは、トーナメントの時の。大神達がやつつけたのか?」

「やるではないか。ますます嫁に欲しくなったぞ」

「いい、多く倒したからって調子に乗ると大ケガするんだからねっ」

「みんな着いたか。シャルは全部破壊してくれたか」

シャルはIS用レーザー砲4門の破壊に全て成功、2陣の到着の活路を開いた。これで8人全員揃った。脇侍もさすがに2機では勝ち目は薄いと感じたのか一歩一歩引き始めた。その時、岩の上から声がした。

「ふん、お前たちか、福音を破壊しに来た操縦者とは。まだガキとはな、笑わせてくれる」

それは監視カメラの映像に映っていて、福音に細工を施した存在しない米国軍人だった。一体何者なのか。

「お前は何者だ! ISを暴走させるなんて何を考えている!?!」

「なあに、ちょっとした実験だよ。この新兵器の稼動演習のな」

軍人が指を鳴らすと先ほどのコンテナを運び出した脇侍が戻って来た。そしてコンテナをドスンと置くと、蓋ふたを開けて福音を見せた。

「お前が軍人ではないことはわかっている。どこの所属だ!?!」

「それをお前らに教える必要はない。この魔操機兵『凶砲』の練習台になってもらうからな」

謎の軍人はそう言うと姿を消した。その時、起動音がして福音は起き上がり、機体から出る黒い煙に覆われた。激しい金属音がして、煙が晴れたとき福音は機体の名前とは真逆な姿へ変貌した。機体は全長5m、顔は禍々しく赤く光る単眼。強靱なボディにゴツイ両腕にはキャノン砲が添えられ、まるでロボットのような姿へと変わった。

「なんなんだあれは!？」

女性が乗るパワードスーツ：ISのハズが無人の二足歩行兵器と変貌を遂げた。しかもその機体からは邪悪なオーラがビシビシ伝わって来る。地響きを起こすような声を上げ、砲口を8人へ目を向けた。

「みんな来るぞ！」

第40話 パイレーツ・オブ・相模湾（後書き）

タイトル由来は映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」より

## 第41話 アイアンマシーン(前書き)

暴走IS：福音が変形し、魔操機兵：凶砲へと変貌。この謎の機体へ勝負を挑む8人の専用機持ちの活躍を期待してください。

## 第41話 アイアンマシーン

「なんだよ、あれ？」

「暴走ISの破壊が任務だったわよね？ナニ、あのロボット！？」

一夏たちが驚くのは無理もない。今見ているISが作戦会議の時に見た機体とは全く違っていたからだ。でも目の前にいるロボットみたいな機体は真正銘の暴走したIS、福音だ。IS：福音から魔操機兵：凶砲へと姿を変えた機体は腕の砲口を一樹達に向けてた。

「あぶない、よける！」

凶砲から放たれた極太のレーザー。山を吹き飛ばし、森をなぎ倒して島の中央から南東部の海岸まで1本道をつくった。一同は間一髪かわし、空へ一時退散した。上空から一樹はレドームで凶砲をスキャンして分析した。結果は武装、エネルギー、特性など全てにアノウンと表示され、福音との関連する部分もすべて消されていた。空に退散した一同に凶砲は矢状のレーザーを雨のように撃ちまくった。全員はバラバラに飛行して島から来る攻撃を回避し続けた。一方これらの出来事は全て、旅館の作戦司令室のモニターに映って千冬先生、山田先生の目にも入っていた。あまりの出来事に司令室はてんでこ舞いになっていた。

「なんなのですか。対抗戦やトーナメントの機体の事もまだ調べ終えていないのに、的確なデータもなしでどうやって指示を遅ればいいんですか？」

「うるたえるな、山田先生。ここは一旦、様子をみよう。」

「でも、何も対抗手段がないのでは大神君たちが危険です」

「対抗手段がないならば最前線にいる奴が得るしかない。あの子た

ちに任せよう。その間、コイツにあの機体を調べさせる」  
「やほ〜〜。この天才東さんにまっかせなさ〜〜い」

東は作戦指令室の端の方で、狂気かかった動きで凶砲を調べ始めた。千冬先生はあちや〜な気持ちで頭に手を当てたあと、腕を組んで信頼を寄せるようにモニターを見つめる千冬先生を見て、山田先生も一樹達を信じ始めた。

凶砲の攻撃を回避し続ける一樹達。スキを見て射撃攻撃するも全然歯が立たない。かれこれ10分以上攻撃を受け続け、凶砲は攻撃の手を休める所を見せない。一夏も回避し続けて息があがっている。攻撃は1発当たったものの白式の動きには影響ないが、脇侍戦からの引き続きの戦闘で、そう長くは出来そうにない。回避飛行をしていると鈴と居合わせた。彼女も同じく息を切らしていた。

「一夏、大丈夫？」

「俺は大丈夫だ。鈴は？」

「3発くらったけど、大丈夫」

鈴は大丈夫そうだが、甲龍のエネルギー残量がおかしい。鈴は2陣で飛んできて脇侍戦は参加していないのに、甲龍のエネルギーシエンロウの残りは半分を切っていた。回避行動とただのレーザーを3発くらっただけなのにこの減り方は何なのか。一発一発の威力が高いのだろうか。

一夏は凶砲の攻撃を見てこの状況前にもあったと気づき始めた。

「あいつどうして飛んだり、高速で動かないんだ？」

「あんたこうゆう時だけ勘がいいわね。確かに前にもあったわ、この状況。たしか対抗戦の時だっけ」

クラス対抗戦、そして学年別トーナメントで遭遇した、高火力なのに飛行などの高速移動できない謎の機械兵と似ている。同時にシャルもこのことに気づき始め、一樹に相談した。

「一樹。もしかしてあの機体、P I Cがないんじゃないかな」

「馬鹿な！ I Sの基本システムP I Cがなければ高い機動力出すどころか、動かせるはずがない！！」

ラウラはシャルの通信を聞いて彼女の気づきを否定した。P I Cとはパツシブ・イナーシャル・キャンセラーの略でI Sの基本システムとなる機能。これでI Sは浮遊・加減速などを行うことができるが、戦闘が始まって凶砲のP I Cの機能は1度も発動しておらずみ歩行動作のみの動きだけだった。I S：福音をベースに改造しているのでP I Cが積まれているはずなのだが。

「このままでは埒<sup>ちやい</sup>があかない。ここは全員攻撃であいつを破壊しよう」

いい加減、回避ばかりしては敵は倒せない。P I CがないのならあれはI Sではなくただのロボットということになる。一樹は即行で作戦を考え、それを全員に伝えた。

「よし！まずラウラはワイヤーブレードで敵の動きを封じてくれ」

「了解！嫁のためなら喜んで引き受けよう」

「次にアンナくん、セシリアくん、シャルは射撃武器で敵機の関節を集中砲火。仮に効かなくても一瞬のスキを作れるはずだ」

「アンナ、エンジン全開です！」

「おまかせあれ」

「第2世代の底力見せてあげるよ」

「そして集中砲火の直後、俺、一夏、箒くん、鈴は4方向から刀剣攻撃をフルパワーで奴にぶつける。一夏は零落白夜を使うんだ」

「了解！！！」

一樹の作戦はまずレーザー攻撃を防ぐ為に動きを封じ、動けなくなった瞬間、3機の一斉射撃を凶砲の四肢めがけて発射。そして動きが鈍ったところを4方向から渾身の刀剣攻撃を与えるという作戦。まずラウラはレーザーでワイヤーブレードで両腕を縛り、砲口を真上に向けるという形で、凶砲レーザー攻撃を封じた。凶砲の力強いあがきにラウラは長く持ちそうにないと感じ、射撃する3人に撃てと合図する。

「ぶっ飛べえ！」

「そこですわ！」

「行っけえ！」

アンナ、セシリア、シャルによる関節部への射撃攻撃。アンナは対IS用120mm砲ライフル、セシリアはブルー・ティアーズの全武器のレーザー攻撃、シャルは2丁マシンガンで凶砲の関節部に絶え間なく撃ち込んだ。一斉射撃に凶砲はふらつきながらも、金属音をたてて体制を立て直そうとする。どんな機械兵においても関節部が弱点なのは確かだった。

そしてラストはスキを見て一樹、一夏、箒、鈴の攻撃型機による4方向からの刀剣攻撃。

「行くぞ！」

「これでも！」

「喰らい！」  
「やがれえ！」

一樹の必殺技・快刀乱麻、一夏の単一仕様能力・零落白夜ワンオフ・アビリティ、威力のある筈の雨月・空裂と鈴の双天牙月の4機の刀剣攻撃を受けた凶砲。響きのいい金属音で完全に決まったことを上にいるラウラ、アンナ、セシリア、シャルは確信した。

「大神さんの指揮って、神業ですねっ！」

「やりましたわ。あんな強靱な装甲も全員の攻撃を喰らってはタダではすまなくてよ」

「ラウラもよく持ちこたえたね！」

「お前もいい射撃だった。ぜひ私の部隊に来てほしいものだ」

上空の4人は決まったと思っ込んでいたが、刀剣攻撃の4人の顔には焦りが滲み出ていた。なぜなら渾身の力を込められた刃はは、敵の装甲を全然通らず、機体には傷一つついていなかった。効いたのは一樹の攻撃だけが、深さ数十センチの斬込みしか入っていなかった。かつてない事を目の当たりにした4人はすぐに凶砲から距離をとった。

「ど、どうして！？どうして甲龍シェンロンの刃が通らないの！？」

「確かに全員決めたはずだ。なのにどうして傷がつかない！？」

「零落白夜がつうじないなんて。おい、どうすんだ大神！」

3人はかなり驚いているが、一番驚いていたのは一樹だった。自分とアンナの一番最新型の第5世代型の機体を使っても、与えたダメージは左胸から右腹にかけて自分の刀の切込みだけ。しかも必殺技を使って負わせた傷だった。それ以外の6人の攻撃は全然効いてなかった。

作戦指令室でありえない事も確認済みだった。千冬先生も山田先生も一樹達と同じように焦っていた。

「そんな、ISの攻撃が効かないなんて。そんなものがこの世界に存在するなんて考えられません」

「おい、東！あの機械兵のことはまだわからんのか！」

「それがねーちーちゃん。あの機体、ISとは違うエネルギーを使っ  
つて動いているみたいなんだよねー」

「くそっ！その話はあとで聞かせる！その間少しでも分析を進めと  
け！山田先生、大神たちにすぐに退却の指示を」

世界最強の兵器であるISの攻撃が効かない。そんな前代未聞の  
出来事を間の当たりにしたのは、この8人の専用機持ちが世界で最  
初であった。

## 第41話 アイアンマシーン（後書き）

タイトル由来は映画「アイアンマン」より  
感想・アドバイスをお待ちしております。

第42話 ファイナル・プロジェクト (前書き)

暴走IS戦もいよいよラスト。一樹が最後の切り札を出します。

## 第42話 ファイナル・プロジェクト

山田先生は一樹達に撤退の指示を送るが通信が繋がらない。ほぼ同時に一樹も攻撃が効かない敵を目の前にして、千冬先生に指示を仰いだ<sup>あお</sup>が、こちらも通信が繋がらない。

「千冬先生！千冬先生！聞こえますか！？・・・ダメだ、通じない」

「大神！教官からの指示はなんだ！？」

「無線が通じない！みんな、ここは撤退しよう！」

一樹は全員に退却の指示を送り島から脱出するが、一樹のレドームが何やら爆発危険物を探知した模様。島の先の空に何かが飛んでいる。みんなを待機させ、空に浮いている物を調べた。

「あれはクレイモア指向性空中機雷。爆発すれば刺<sup>とげ</sup>つき鉄球が扇状の範囲に発射されるIS用トラップだ」

「アラスカ条約で使用禁止となっている武器がどうしてこんなに」

クレイモア指向性空中機雷とは第1世代型ISの対抗法として開発された武器で、殺傷能力が高いため今では使用禁止とされている。加害範囲は約500～800mで、その数500個以上。クレイモア機雷は島を覆うドーム状に設置されており爆発の向きは島に向けられている。起爆反応範囲内、もしくは攻撃して爆発すれば、誘爆して島に刺<sup>とげ</sup>つき鉄球が降り注ぎ、範囲内にいる一樹達は一溜りもない。凶砲から逃げ回っている間に他の敵が設置していたのを一樹達は気づくことが出来ず、完全に島に閉じ込められた。

「大神さん、どうしましょう。島には攻撃の効かない敵に、空には

殺傷力の高い機雷。逃げ道なんてありませんわ」

「くそっ、どうしたらいい？」

「なあ、海へ潜って泳いで爆発範囲の外に出る方法ってのはどうだい？」

「あんだ、バカあ？あたし達のISは水中活動用の改造をしていないのよ。水に入ったら数秒で全機能がダウンするわよ！」

ISは潜水加工をすれば水中でも動けるが、そのままの状態だと携帯電話と同じでめっぽう弱い。素で泳いでいくのも無理なため一夏の作戦はおじゃんした。

「援軍は来てくれるでしょ。危険な状況になったら先生達が来てくれるって言ってたし」

「あの機雷を撤去できなければ島へはこれない。私たちのエネルギーも残り少ないから援軍が撤去して来るころには全滅しているかもしれない」

「『敵を倒す』・・・私たちが助かる選択肢はそれしかないのですよるか」

全員が見たこともない敵4前に絶望を感じていたとき、一樹はある持ってきた装備を見て考えた。そして『敵を倒す』という勝率の非常に少ない判断を下した全員に伝えた。

ここは島を覆っているクレイモア空中機雷のドームの外側。千冬先生は無線の通じない一樹達を助けに待機していた教師を増援に出していた。教師達はクレイモアの前で立ち往生していた。

「織斑先生、禁止兵器のクレイモア空中機雷を発見しました。通信ができなかったり生徒達が撤退できなかったのもこれのせいです」

「（撤去できそうですか）」

「機体が無事に通れるくらいの穴をつくるには1時間はかかります」

「（ではお願いします。一刻も早く救援に行ってください）」

クレイモア機雷は指向性のため起爆範囲外である後ろ側から解除することができが、失敗すればその地点でドカン。しかも一樹たちの逃げ道を考えて撤去するなら30個以上は撤去しなければいけない。教師達は早速、機雷の撤去作業を始めた。その間、千冬先生は束を連れて女子トイレに連れ込んだ。

「おい束・・・これはお前の・・・」

「違う違ううちーちゃん！これは違う！このあたしの目を見て~~~~」

「この純真無垢でカワイイ目を~~~~」

「わかった。わかったからその暑苦しい顔をちかづけるな。」

一方、島では一樹が賭けといえる作戦をみんなに伝え終わっていた。

「.....を使って撃破する。以上だ！」

「ダメですつ、大神さん！危険すぎます！」

「そうよ！あんた死ぬ気なの！？」

アンナと鈴が猛反対した。アンナと鈴だけじゃなく、ラウラ、シャ

ルこの作戦に反対した。

「嫁一人だけ死に行く事はこの私が許さん！どうしても行くのであれば私も連れて行け！」

「君まで来る必要はない。それに俺は死なない」

「でもその作戦で勝てる根拠も少ないし・・・ねえ、箒もなんとか言つてよ」

みんなが反対する中シャルは箒に説得を頼むが、箒は強い目で一樹を見て口を開けた。

「・・・大神、武士たるもの負け戦は御免だ。私もそのつもりだからお前に託す」

「箒までなに言つてんだよ〜」

「お前が何をするのか知らんが、それなりの価値はあるものだろう」

「ああ、絶対上手くいく。『危険を冒す者が勝利する』ってことさ」

「SAS（イギリス陸軍特殊空挺部隊）の言葉をだな。・・・よし、私もその作戦乗った」

箒とラウラは一樹の作戦に乗った。

「私、大神さんを信じます」

「ボクも一樹を信じる」

「わ、わたくしも信じますわ。ちょっと怖いですが・・・」

アンナ、シャル、セシリアも乗り出し、残りは一夏と鈴。さすがにここまで来たらもう引けない。

「お、俺も男だ！やってやるぜ！」

「う・・・わかったわよ。やればいいんでしょ！やれば！」

もうヤケクソだ。これで全員参加が決まり、決心がついたところで最後の作戦開始。まずシャルとアンナは凶砲の攻撃を引きつける囷となり、次に箒とラウラのレーゲンによるワイヤーブレードによる2度目の捕縛。

「いまだよ、ラウラ！」

「うおっ！く……ダメ……だ……力が強すぎ……る」

「箒、もう少しだ！大神が接近するまで耐える！」

捕縛は成功だが、さっきよりも力がある。今にも振り回されそう。2人が捕縛している間に鈴とセシリアは凶砲のアームキャノンを集中攻撃。囷だったシャルとアンナも捕縛組と攻撃組に別れて援護した。セシリアの1発が右の砲口に入り、煙が出た。

「や、やりましたわ！」

「カズキ！今よ！」

最終段階。一夏の白式の最後のイグニッションブーストで一樹を背負って凶砲へ突撃する。一夏は高速飛行状態から一樹を投げ出し、投げ出された一樹は凶砲へ体当たりして攻撃、撃破する。まさしく零戦の爆弾のごとくに。

「本当にいいのか？」

「やってくれ。コレに賭けるしかない！」

「よし！お前に全て任せるぜっ！」

一夏は一樹を背負って白式のイグニッションブーストを起動。一直線に凶砲へ接近した。ラウラ、箒、アンナによる捕縛ももう持ちそうにない。

「大神さん、はやく！」

「大神！あとは頼んだあああああ！」

一夏は一樹を勢い良く投げ出し、一樹は凶砲に向かって砲丸のように飛んでいった。凶砲まであと少しのところ、あの顔半分の能面を取り出し顔に押しつけた。それと同時に捕縛組も限界だった。

「うわっ、くそっ！ワイヤーが切れた！なんて力だ」

「大神、叩つ斬れえ！」

「（これがISを強化する物なら……こた応える！）」

顔に面をつけた瞬間、光武のエネルギーが一気に回復し、疾風改をフル回転させてとつもない機動力で砲撃を避け凶砲に接近した。ワイヤーを切った凶砲を二刀をコーティングして右脇腹かわ左胸にかけて攻撃。さっきよりも大きく切れ込みが入り、中の機械部が見えた。

「凄い……さっきの攻撃とは威力が違い過ぎますわ」

「大神さん！やっちゃえ〜〜」

凶砲のアーム攻撃を避けて二刀で両腕を切り落とし、疾風改をさらに回転させ一樹は刀にありつただけのエネルギーを注ぎこみ大きく振り回した。

「狼虎滅却う……いくぞ！刀光剣影！！！」

激しい雷を帯びた刀の斬撃が凶砲の体に切り刻まれた。両腕を失い、胴や足の部分から機械部と配線が露出し大きく損傷した。最後

に一樹は穴の空いた凶砲のみぞおちへ手を突っ込みコードに繋がれたコアらしきものを引きずりだし、握り潰した。そのとき凶砲は断末魔のような声をあげて、不思議なことに灰になって崩れ落ちた。

「やった……。やったぞ！俺たち、勝ったんだ！鈴っ、お前もよろこべよっ！」

「まあ、これも……。あたしのおかげねっ……。と言いたい所だけど、本当は一樹のおかげであたしもみんなも助かったんだし……。つてあたしったらなんであいつを褒めたのかしら！そもそもあたしはこの作戦は反対だったわけで……」

「スゴイです！さっすが私の大神さん！やる時はやりますねえ」

「『私の大神さん』！？アンナさんっ、何をおっしゃってますの！大神さんは『わたくしの大神さん』であってあなたのこと……」

「まーまーセシリア。いいじゃない、みんな助かったんだし」

強敵を全員で倒し、チームで勝つということがこんなにも気持ちいいなんて。

「賭けに勝ったな」

「お前もよくやった、ラウラ」

幕とラウラも握手を交わし、学年別トーナメントの険悪なムードもこれで晴れた。一樹も能面を外しみんなの喜ぶ姿を眺めていた。その時、作戦指令室から無線が来た。

「（大神、聞こえるか？今、教員達によるクレイモア機雷の撤去作業が完了した。安全なルートデータを送ったからそれを見て島を脱出しろ。うっかり起爆反応範囲に入って、自滅なんてことになるなよ）」

「（残りの機雷は大神くん達が脱出したあと、無人なのかを確認し

た上で爆破撤去します。旅館へ帰還するまで気を抜かないでくださいね）」

「わかりました。……みんな！先生達の機雷の撤去作業が終わった。安全なルートのデータを見て島を脱出しよう」

8人の専用機に機雷を抜ける安全ルートのデータが送られた。全員島を出ようとした時、目の前にあの謎の軍人が現れた。

「貴様、ISでは絶対倒せないはずの魔操機兵：凶砲をいつたいたいんな手で倒した？」

「答える必要はないっ！それに貴様は何者だ！？ISを暴走させた拳句、ISの攻撃が効かない機体へ変形させたあれはなんだ！？」

「……いいだろう、教えてやる」

謎の軍人は服を脱ぎ捨て帽子を取った。謎の軍人の正体は20代半ばで、大きめの胸に細いウエストで露出度の高い服を着用し、ルパン三世の峰不二子を連想させるような女性だった。

「お、お、女！？福音を暴走させ、改造したのはこの女！？」

「お前は一体……？」

「私は亡国機業の幹部、タチアナ・ゴルルコビッチ。今この場で消したい所だが、このことを本部に伝えなくてはいけないので、今回は見逃してやる。次は容赦しないぞ」

タチアナという謎の女性はスタングレネードを投げ、その間に逃げた。

「亡国機業？一体なんなんだ？」

「大神さん、戻りましょう。こっちもこの事を報告するんです」

「ああ、わかったよアンナくん。みんな起爆反応範囲に入らないように脱出するんだ！」

とにかく考えるのは後だ。いまは機雷で危険なこの地域を脱出することが先だ。一樹達は島を出て、送られてきた安全ルートを通ってクレイモア機雷のドームの外へ出た。ドームから出ると援軍に駆けつけ、機雷を撤去した教師達が待っていた。

「よく無事だったわね。さあ戻りましょう。織斑先生達も待っているわ」

教師達に守られながら8人は無事に旅館に帰還した。8人が旅館についたと同時にクレイモア機雷の爆破撤去が始まった。遠く離れた所からクレイモア機雷のドーム目がけて攻撃し、1つに命中、爆発した。そして次々と誘爆していき、戦場だった島に約40万個の刺付き鉄球が降り注ぎ、島の地形を丸ハゲにしてしまった。まるで誰かが降り立った痕跡を消すかの様に。

第42話 ファイナル・プロジェクト (後書き)

タイトル由来はそのまま映画「ファイナル・プロジェクト」より  
感想・アドバイスをお待ちしております

第43話 デッドマンズ・レポート（前書き）

臨海学校篇も今回が最後です

### 第43話 デッドマンズ・レポート

8人が旅館に帰還した時は夕方だった。千冬先生から今回の事件の他者への口外厳禁と褒め言葉を言 い渡されたあと、専用機で録画した戦闘などのデータを山田先生に渡し休養に入った。かなり疲れた 8人は旅館の食事にがつついた。

「ねえねえ、結局なんだったの、福音の暴走の原因って？」

「本当に誰も乗っていなかったの？」

「戦っているとき怖くなかった？」

「もつと話聞かせて。先生達にも教えてくれないんだもの」

彼女達は興味深々に目を光らせて聞いて来てる。千冬先生に固く言われているので話す事ができない し、そもそも福音が変形し8機のISの攻撃が全く効かない敵という未知の機体と遭遇したなんて言 える訳がない。

「だぐめ。機密って言われてるんだから」

「だいたい、あたし達だって何も聞いてない訳だし」

「別に変形なんて、うぶっ！」

っ！！！！！アンナの天性のドジで早くも機密漏えいが起きてしまった。なんとか誤魔化さなければ裁判と監視員付きの罰がくだされる。

「変形？何の話？」

「そ、それはあ、アンナさんの機体はお、大神さんのと同じ第5世代型で可変武器が内蔵されていることですね。そうでしょうアンナさん？」

「は、はい、そうです。でもこれ以上聞かないほうがあなた達のためですよ」

「アンナの言う通りだ。詳細な情報を知ればお前たちに行動の制限がつくぞ。いいのか？」

「ああ、それは困るかな」

「見張りとかついたらヤダもんね」

触らぬ神に祟りなしだ。3人組もラウラの警告を聞いて引き下が  
り事情聴取を諦めた。

事件の翌日、今日は臨海学校最終日。いよいよ女将と別れの時が  
来た。

「女将、今回は色々な事がありました。本当に申し訳ありませんでし  
た」

「なあに、いいってことさ。1人もけが人が出なくてよかった」

「では皆のもの、女将にお礼とあいさつを！」

「ありがとうございます！ー！ー！ー！ー！ー」

女将に別れを言ったあと一同はバスに乗り始めた。ここまでパラ  
ダイス気分から一気に学校という現実。実で殺伐とした生活へスイツ  
チを切り替えるのは容易ではない。

「大神先輩、IS学園に帰るんですね」

「ああ、まだ終業式も終わってないしこの間の事件で色々聞かれる  
かもしれない」

「気をつけてくださいね。大神先輩、何かと損を受ける人間です  
ら」

「俺だって、そう感じてるよ」

何かこの先、IS学園の男は女難の相が気になって仕方がない。  
一番被害を受けているのは一夏だ　　が、それは彼の唐変木が原因  
だろう。

「じゃあまたここへいらしてください。お待ちしております」

「あ~~~~んやっぱりトオルくんカワイイ~~~~」

「ね〜ね〜、お持ち帰りしちゃおよ~~~~」

「いいね、いいね。お持ち帰りい~~~~」

女子達はトオルを持ち上げ、バスの中へ押し込んだ。バスの中で  
止めてくださいという声が聞こえ、そんなトコ触らないでという  
声もあがり何か貞操に関わることをされている。

「ちょっと待つてください！男の子をお持ち帰りなんて・・・そ、そ  
んなハレンチな事はいけません！」

「山田先生だってトオルくんカワイイって言ってたじゃないですか  
あ」

「そ、それとこれとは話が別ですっ」

「馬鹿者共、教師の前で淫行するものがあるか！お前らには10年  
早い！」

女子達はお持ち帰りを諦めトオルを解放した。バスから降りて来  
たトオルは服を半分脱がされ、ベルトを持って出てきた。どうや  
ら女難の相は一樹や一夏よりもトオルの方がデカかった。

ともあれ臨海学校もこれで終わり。もうすぐ始まる夏休みに一行  
は次なる期待を胸に膨らませている。

臨海学校最終日から2日後（福音暴走事件から4日後）。IS学園に戻った8人は事後報告を終え、千冬先生と山田先生に呼び出され、とある部屋へ連れてこられた。

「千冬姉え。一体なんだ、話ってる？」

「織斑先生と言えと言ってるではないか、馬鹿者」

「ここは一体なんですか？会議室のような部屋ですが」

「まずはこれを見て欲しい。山田先生、お願いします」

そう言われると山田先生はウィンドウを操作してこの間の事件の写真を見せた。

「この人、あの時の女性ですわ。ええと」

『タチアナ・ゴルルコビッチ。元ロシア代表操縦者で2年前に死亡ですって!?!』

「『2014年、当時27歳。ロシア軍施設で第2世代型の稼動試験中、ISを装着したままトライアル武器を取りにIS用武器庫に押し入るといふ横着な行動をとり、その反動で武器が爆発し軍施設を丸ごとふきとばし、死傷者100人を出した』。なんて馬鹿な事をしたんだ、この軍人は」

「行動が軽率すぎる。こんな人間がよく代表操縦者になれたものだ」

「この写真はヒドイね。原型をとどめてないよ。んゝとね」

『機体は爆風を受け施設から南2マイル（約3.2キロ）離れた所で発見。エネルギーも少なかったことから絶対防御が発動せず機体

に大きな損傷が見られた』」

スラスター、部位の欠落したISの写真見た一同は、エネルギー0で絶対防御が発動しないISの末 路は鉄くずだと感じた。

しかしこっからが一番重要だった。次の文を鈴が幽霊を見たかのような声で読み始めた。

「ちょ、コレツ、

『機体には操縦者タチアナ・ゴルルコビツチの姿は無く、操縦者の血痕や焼けただれた皮膚がこびりついており爆発を直に受けたと考えられる。施設の半径5キロ圏内を搜索したが遺体は見つからず、生存の可能性も低かったことから死亡届を国、国際IS委員会に報告した』って書いてあるわ」

「じゃあ私達たちが見たのは一体なんですか？まさか生ける屍なんてこと・・・」

「フオンティーン、馬鹿を言うな。死んだハズの人間が生き返る事はない。この女性は死んだと思われていたが実は生きていた、ただそれだけのことだ」

ミステリアスな事を聞かされた8人。しかし話はこれで終わりではなかった。

第43話 デッドマンズ・レポート（後書き）

タイトル由来は映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」のサブタイトル「デッドマンズ・チェスト」より

### 第43話 情報カイズ 人生激動ゲーム (前書き)

今回で物語の発端が明かされます。

余談ですが、ゲーム『サクラ大戦1』4<sup>巻</sup>までプレイした方にしかわかりませんが、大神一郎と隊員は波乱の人生だと自分は思っています。

### 第43話 情報カイジ 人生激動ゲーム

謎の女性は死んだ事となっていたロシア代表操縦者であることが判明。さらにこの女性が言い残した言

葉に大きな闇と陰謀があった。

「教官、この女は亡国機業の幹部と名乗っておりますが」

「亡国・機業・・・なんだそれ」

ファントム・タスク

「亡国機業。聞いたことあるぞ。50年以上前、第二次世界大戦中に生まれた秘密結社だ。国家、思想、信仰を持たずに今もどこかで世界を混沌に陥れようと企てる謎の組織だ。まさかっ！」

「篠ノ之の言うとおり、今回の事件は間違いなく亡国機業が仕組んだ事件だ。今まで水面下で活動していた組織が大きく動き出した」

「で、でも亡国機業はただの都市伝説に過ぎないのでは」

「確かに表向きは噂に過ぎないですが、裏ではいくつもの事件に関与している中には歴史に残る事件にも関わっているそうです。」

この亡国機業、フリーメイソンやイルミナティ並に巨大な組織のようだ。

ファントム・タスク

亡国機業。もしかして能楽師の言っていた闇、そしてトーナメントで脇侍の言っていた大神一郎が女尊男卑、ISの時代をつくったと言った言葉に関係するののか。

「千冬先生、この組織に関する情報は少ないと言っ事ですか？」

「頼れる情報は少ない。だが1つこの組織について一番有力な情報、対抗策があると思われる物がここにある」

千冬先生はなにやら茶色の皮の封筒を取り出した。全員が息を飲む中それを開けると思いきや、なぜか一樹へ皮の封筒を渡した。



「大神くんのひいおじいさんがどうやって組織を調べたんでしょうか？」

「山田先生、焦る気持ちはわかりますがここは落ち着いてください」「じゃあ読むよ」

『一樹へ。もしこれを見ている時は俺が死に、お前が学園で亡国機業と接触した事だろう。』

まずは俺の事を全て話しておく。1923年～1927年。当時俺は旧日本海軍の軍人で、帝都（現：東京都）にある劇場と巴里<sup>パリ</sup>にあるテアトルでモギリをしていた。しかしそれは表向きの話で、世に忍ぶ仮の姿。俺は帝都と巴里を霊的脅威から守る秘密部隊・『帝国華撃団』と『巴里華撃団』の隊長だ。『華撃団』とは魔の力から守るために設けられた秘密防衛組織であり、政府直属のため軍に属さない組織だ。これを『華撃団構想』という。

その隊員はお前の知っている

真宮寺さくら 神崎すみれ マリア・タチバナ アイリス（

本名：イリス・シャトープリアン）

李紅蘭 桐島カンナ ソレッタ・織姫 レニ・ミル

ヒシュトラージェ

の8人の帝都組。

エリカ・フォンティエヌ グリシーヌ・ブルーメール コクリコ

ロベリア・カルリーニ 北大路花火

の5人の巴里組の計13人だ。彼女達は表向きは劇団女優だが、いざ魔物が現れると秘密部隊として勇敢に戦う隊員だ』

「・・・これは・・・」

「ミルヒシュトラージェ大将が秘密部隊の隊員だと!？」

「グリシーヌ様の名前までありましたわ!大神さんその手紙見してください!」

ラウラとセシリアが血眼の顔を近づけ、驚いた一樹はネコのように

縮んだ。千冬先生に頭を叩かれ、2人は我にかえり、一樹は手紙を再び読み続けた。

「同時に俺と彼女は魔物を討ち抜く不思議な力『靈力』を持っていた。この靈力を使って魔物と戦うための兵器が、『靈子甲冑・光武』と呼ばれる特殊兵器だ。この光武は蒸気と搭乗者の靈力を使って動く兵器で、通常兵器では効かない魔物、怪人に対抗できる唯一の手段だ。言ってみれば邪気を祓う事ができる除靈戦闘兵器である。この光武の特徴は、搭乗者の靈力が必要とされるため、操縦者は強い靈力を持つ人間に限定される。強い靈力を持っている者が特に女性に多いためか、操縦者には女性が多い。靈子甲冑の操縦が可能レベルの強い靈力を持つ男性は俺しかいなかった。」

「お前やアンナのご先祖って靈能力者だったとは驚きだな。お前も瞬間移動とかできんのか？」

「マンガの見すぎだ、馬鹿」

不思議な力の感覚は今まで一度もない。それに靈子甲冑が一樹の専用機と同じ名前。光武F式の名前の由来はこれから来ているのか？

「この光武に乗り、魔操機兵、降魔と呼ばれる邪気に満ちた機兵と魔物を倒し、都市の平和を守っていた。」

それら闇を率いて23年、江戸時代の僧侶・天海の亡霊が徳川幕府再興を目論み、それを手引きしたサタンよる暗黒世界の創造。25年に陸軍大臣が帝都を魔都とし王として君臨するべく計画。26年、太古の亡霊が巴里を滅ぼし大自然に還す陰謀。27年、亡霊として蘇った能楽師・大久保長安が帝都を無に還す4つの出来事あった。俺と彼女たちは強大な敵に挫けることなく光武に乗り、その悪を打ち砕き、歴史に載ることなく帝都と巴里を計4度の靈的脅威から守った。27年の亡霊・大久保長安は華撃団の説得により成仏したあと、俺は帝国華撃団・司令に就いた。その後、華撃団構想は世

界中の都市で採用される事となった。

これが俺の秘密にしていた事あり、1923年からこの手紙を開ける時まで続いている出来事の始まりだ（この詳細は別紙にて記載）』

「こんな事・・・じいちゃんは一言も言っただけじゃなかった」

「私のおばあさんも言っただけじゃなかった。互いに秘密にしていたことなんですわね」

写真が同封されており、それを見た一同はあ然とした。そこに写っていたのは二足歩行のロボットだった

た。霊子甲冑は太正時代、表には公表できないオーバーテクノロジーだったという事を示していた。

「こんな兵器が世界大戦が起きる前にあったって言うなんて、信じられないわ」

「確かに戦争で二足歩行戦車というのが使われたという話は1回も聞いたことがない」

「それはともかく、そのコウブって兵器。女性に限られた兵器ってのがISと似ているな」

「ねえ一樹、あのiPod！あの歌手欄にあるのは誤変換じゃなかったんだよ。歌劇の劇団じゃなくて、都市を守る華撃団の意味を指していたんだよ」

シャルが気づいた事。それは、一樹のiPodにあるアーティスト欄の帝国華撃団、巴里華撃団、大神

華撃団。手紙の事が本当なら、これは単なる誤変換ではなく歌劇団のもう一つの顔を示していた。

一樹は再び呼吸を整え手紙を読んだ。

『大久保長安を成仏させた12年後の1939年。第二次世界大戦

が始まり、あの混沌の時代に亡国機業は生まれた。亡国機業は結成以前から華撃団の存在を知り、戦乱のどさくさに紛れて華撃団の特殊兵器・霊子甲冑のデータを盗み、それを世界に拡散して莫大な利益を得ようとした。

そうとは知らず俺たちは反戦態度をとり、華撃団は活動停止、隊員は無期限の軟禁、俺は東亜へ左遷された。華撃団の警備が手薄の中、奴らはまんまとデータ強奪に成功。終戦後、日本の軍国主義解体とフランス新政治体制への移行に伴い華撃団は解散、設備と霊子甲冑も全て廃棄処分、隊員は釈放、俺は東亜から復員した。復員して間もなく彼女たちと再会した俺は、華撃団の正式な解散を聞き、霊子甲冑のデータが盗まれているとは知らずに、俺と彼女たちはそれぞれの残りの余生を静かに送ろうとした。』

「なんてこと考えたんだ、この組織は！！」  
「落ちていくください。まだ続きがありますわ」

亡国機業の結成は第二次世界大戦中に生まれたということは周知の事実だが、その背景に大神一郎と華撃団が絡んでいたとは意外だった。

『だが1950年代、復員して警察予備隊（現：防衛省）に入った俺に、ソ連が二足歩行戦車の研究をしている情報が入って、このとき霊子甲冑のデータが流出している事を知った。警察予備隊はのちに防衛庁に変わり俺はその地位を利用して、その研究に霊子甲冑の技術が使われている確かなことと、そのデータを盗んだのが亡国機業であることを突き止めた。

俺は彼女たちを再び集結させ共に戦う事を決意し、『亡国機業を倒す』『霊子甲冑のデータの完全抹消』の二つの任務を背負い、体に残った霊力を延命に充て戦いに挑んだ。50年〜60年の間、はたから見れば過激派に近かった行為をして、俺たちは組織の8割以上を壊滅させた。組織の核心まであと少しという所で、思いもしな

かった幸運が俺たちに運ばれた。

亡国機業は新型霊子甲冑を完成させたが、『搭乗者の不在』大きな落し穴に落ちた。霊子甲冑は有人型のみ異常な火力を発揮するもの。開発に成功したが、それに乗る霊力を持つ搭乗者の不在、霊力増強育成法を知らないというなんとも間抜けな結果に終わった。

そして俺たちが追い詰めた時、亡国機業は悪あがきで霊子甲冑のデータをブラックマーケットに流した後だった。搭乗者の不在と育成法を知らなければ霊子甲冑はただの鉄の塊で、机上の空論となった。亡国機業もほとんど虫の息で組織壊滅は時間の問題だった。これ以上の戦いはムダと感じ俺たちは戦いをやめた』

「この文を読む限り、亡国機業は一度壊滅した事になるな。では、我々の戦った組織は亡国機業ではないのか？」

「いや、一樹のおじいさんは見逃したとも書かれているから、きっと組織は何らかの方法で復活したに違いないよ」

どうやら亡国機業という組織、ゴキブリ並みにしぶといようだ。霊子甲冑の開発が頓挫したのに、一体どうやって復活したのか？

### 第43話 情報カイジ 人生激動ゲーム（後書き）

タイトル由来は映画「カイジ 人生逆転ゲーム」より  
大神一郎の手紙は1話でまとめたかっただのですが、量が多かったの  
でできませんでした。

#### 第44話 とあるISの創世記(ジェネシス)(前書き)

大神一郎の手紙の後半。開発者をまじえたISメカニズムが明らかになります

## 第44話 とあるISの創世記（ジェネシス）

壊滅仕掛け、霊子甲冑の開発が『搭乗者の不在』という物理的不可  
能で失敗した組織がどうやって復活したのか。その事実はドキュメ  
ンタリーにもなりそうな劇的なものだった。

『1960年代後半、亡国機業の残党は組織を復活し霊子甲冑の開  
発を再開させようと試みたが、当時の国際情勢で大きく先延ばしさ  
れてしまった。』

「東西冷戦の緊張緩和か<sup>テクニク</sup>」

「米ソ陣営が財政難で冷戦が続かなくなったら、亡国機業は霊子甲  
冑の売り込むどころか開発したって売れませんかからね」

急に歴史の話になった。まさか冷戦へ売り込もうとしてたとは。

『亡国機業の存続は冷戦によって左右され、やがて組織は霊子甲冑  
に必要な霊力の源が人間の『善の力』であると知り、悪の塊である  
自分たちには永久に宿ることがないと感じ、霊子甲冑の研究を全て  
捨てた。だが冷戦が終わった90年代、組織に加わっている日本  
人がある設計図を見つけた。それは太正時代、俺たちの戦った魔操  
機兵の設計図だった。この魔操機兵とは霊子甲冑の真逆で『妖力』、  
つまり人間の『悪の力』で動く機械兵器である。邪心を持った人間  
は組織内にゴマンといるため『操縦者の不在』問題は起きず、あと  
は設計図をもとに現代のテクノロジーをフル活用して亡国機業の完  
全復活を賭け、魔操機兵を開発し始めた。そして2007年（IS  
が開発されてから1年後）。亡国機業はついに魔操機兵の復元に成  
功。以降、組織独自の機体を次々と開発していった。』

その情報を手にした時、俺は『亡国機業は魔術の兵器を使い、世  
界を闇世界へ誘う』と仮説した。案の定それらを示す事件は起き、

この仮説は立証された。(この詳細は別紙にて記載)。

これが亡国機業が復活した真相の全てだ。組織はこの先、大量の魔操機兵を率いて全世界に戦争を仕掛けるだろう。組織が勝てば混沌と邪心が渦巻く暗黒世界が創造されるだろう」

「霊力だの妖力だのって、そんな非科学的な物を利用した兵器なんてバカらしいわ」

「織斑先生、この手紙の内容の信ぴょう性は？」

「それは手紙を読み終わって全員で解析し終わってから決めます」

華撃団、霊力、妖力、霊子甲冑、秘密結社の復活。ここまでで歴史、科学、魔術がごちゃ混ぜになった出来事を聞いてイマイチ信じられないのが当たり前だ。50年以上も謎だらけの闇組織がこんなにさらけ出され、それを調べたのが一樹の曾祖父なのに一樹本人はすぐには信じられなかった。曾祖母が華撃団の隊員であるアンナも同じだった。

もうすぐ手紙も終わりに差ししかかり、全員がこの手紙に不安と不信感を感じ始めた。

「まだあるの？ボクなんか怖くなってきたよ」

「次が最後の文みたいだ。どうもISについて書かれているだ。先生・これも・・・読みますか？」

「その前に・・・おいっ！出てこい！！」

千冬先生が誰かを読んだ。次の瞬間、天井の板が外れ、うさ耳の力チューシャをつけた人が出てきた。

「ハロー……。また会ったね、君たち……」

「東さん……どうしてそこから??」

「私が呼んだ」

天井裏から現れたのはISの開発者にして篝の姉、篠ノ之束だ。また頭にクモの巣がついていた。臨海学校で島から帰ったあと、こつ然と消えたのでそれ以来会ってなかった。

「その手紙に書いてあるISの事を開発者であるコイツに聞かせて、その事が本当ならお前らも手紙の事をお前らも少しは信じるだろう」「ちーちゃん、一郎さんからもらった手紙なんで私に隠しての……。仲間外れなんてずる……い……」

「お前に見せたら大神に渡す前に開けてしまうからだ」

「ええ……、ちーちゃんヒドイっ!」

「じゃ、じゃあ、読みますね」

インフイニット・ストラトス

『最後に1つ説明しよう。ISは2006年、科学者篠ノ之束により開発された宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツと教科書に書いてあることだろう。しかしISは篠ノ之束が開発した新技術ではなく、90年も前の既存技術と50年前に出たその発展型を組合せてつくられた兵器である。』

それは上記で話した霊子甲冑と、冷戦時代のアポロ計画以降使われているアメリカの宇宙空間作業スーツ、通称：コスモスーツである。』

「姉上っ、どういう事だ!? ISが既存技術の組み合わせって!？」

「うんうん、やっぱり大神さんはお見通しだねっ! ……ホブツ!」

「説明しなければ殴りますよ……」

どこからか竹刀を取り出した篝は、束を殴ってから説明を説いた。

「な、なあ。コスモスーツってなんだ？」

「通常の宇宙服だと1週間かかる作業を、2、3日で終わらせる操作性の高いスーツだよ。これで2年かかる宇宙ステーションの建設をたったの9ヶ月で終わらせた実績もあるんだ」

コスモスーツは60年代の宇宙開発競争時代にアメリカが開発し、操作性が良いと評価され、あのアポロ計画の月面着陸にも使用された技術だ。その後、改良され続けて現在まで宇宙空間での作業に使われることとなった。

「シャルはよく知っているな。じゃあ続きを読むよ」

『だがこのコスモスーツも、霊子甲冑の技術を利用した産物である。50年代の亡国機業との闘争後、組織の悪あがきで霊子甲冑のデータが世界にばらまかれ、その一部がアメリカがに知れ渡った。当初アメリカは、霊子甲冑の兵器利用よりその高い操作性を見込んで、宇宙開発に利用する事を考えた。その結果、アポロ計画、のちの宇宙開発において、『無重力での作業効率の向上』という宇宙開拓に大きく貢献する技術となった。』

そして2006年、東博士は霊子甲冑のメカニズム『霊子力エネルギー』のデータを入手し、コスモスーツをベースに『霊子力エネルギー』を組み込んで製造したのがISである。

式に表すと

霊子甲冑（メカニズム）+コスモスーツ（ボディ）=IS（マルチフォーム・スーツ）  
という形になるのだ』

「ISは新技術ではないのですか!？」

「うっっん、こっぴつた形でみんなに知られるなんてね」

ISの開発者は弁解どころか否定せずあっさり認めたと認めた。ISの原点を知った一樹は焦りはじめ、手紙を読むスピードが若干早口にな

った。

『靈子甲冑とISのメカニズムは全く同じで、機体のコアには『靈子水晶』というものが組み込まれている。この靈子水晶とは搭乗者の靈力を増幅し、靈子機関を通じて靈子力エネルギーに変換する。』

靈子甲冑は靈子力エネルギーを機体の基本動作と除靈効果に充てており、ISは高機動と高火力と防御能力に充てている。ISの並外れた兵器能力はこの靈子力エネルギーによるものである』

「これはISのコアの事か？今までブラックボックスとされていたISのコアがこのような仕組みになっているという・・・」

「ん？・・・次のはさらにすごいぞラウラ。これは開発者しか知らないISの定義の真相だ」

ISの定義『ISは女性にしか動かせない』。その真相は靈子甲冑と同じ事だった。

『『ISが女性にしか動かせないという』のは大きな間違いだ。靈子甲冑とISのメカニズムは同じで、起動には搭乗者の強い靈力が必要とされる。ただ、強い靈力を持っているのが特に女性に多いため、束以外の科学者はそれを証明出来ず『ISが操縦出来るのは女性だけ』という定義を作ってしまった。』

例外でお前のように強い靈力を持つ男がいれば、ISの靈子水晶を反応させてISを動かすことが可能である』

「そんな・・・ISが・・・魔術で動いているなんて」

「山田先生、落ち着いて。砂糖入りコーヒーでも飲んで」

「先生、それ塩ですう・・・んぐう」

山田先生の不幸を哀れむことよりも、手紙の最後の文が気になる。

『これは警告だ。亡国機業は今後、復元させた魔操機兵を使って攻

撃してくるだろう。皮の封筒の中には新装備の設計図が入っている。それを束博士に渡し、博士を主導に神崎グループとフランスのシャトーブリアン社にその武器の製造を依頼し、完成したら専用機に装備しろ。それで亡国機業に対抗できるはずだ。もう1つ、別紙に用語、当時の新聞記事の切抜を入れておいた。

最後に俺の懺悔を聞いてほしい。大戦が始まる前、もつと警戒しておけば霊子甲冑のデータも盗まれ世界にばらまかれる事もなく、そしてISが開発され軍事バランスも崩れることもなく、女尊男卑の時代を招く事もなかった。そしてお前やお前の大事な人も巻き込むこともなかった。許してくれ。

元帝国華撃団・司令、巴里華撃団・隊長 大神一郎 2015年1月3日『』

「脇侍が言っていた言葉はこういう意味だったのか……。女尊男卑の元凶はじいちゃんじゃないっ！霊子甲冑のデータをばらまいた亡国機業が悪いじゃないか！！」

女尊男卑の時代は大神一郎が仕組んだことではないかと疑っていた自分を責めた。他の人はもはや聖書を書き換える並みの事実には全員は言葉を失った。

第44話 とあるISの創世記(ジエネシス)(後書き)

タイトル由来はアニメ「とある魔術の禁書目録」と映画「猿の惑星  
創世記」<sup>ジエネシス</sup>より

コスモスーツの初出は第31話にて

## 第45話 大神青年の事件簿 (前書き)

サクラ大戦1〜3の物語が記されています。

確認をとりますが、この小説ではサクラ大戦とISの世界は直結していません。

(サクラ大戦の舞台の時代から約100年後にISの世界を置きます)

## 第45話 大神青年の事件簿

手紙を全部読み終え、部屋に禍々（まがまが）しい空気が漂った。

「これがISの真実・・・俺が男なのにISを動かせるのは霊力が高いからなのか？」

「あの・・・なんか私たちマズいこと聞いたんですけどしょうか？」

「マズいも何も、これは開発者にしかわかっていない事実だよアンナ！国が寝る間も惜しんで研究していることをボクたちはあっさり知っちゃったんだよ！」

「ええ！アンナびっくし〜」

「遅え！」

世界最強で女性にしか動かせない兵器にして女尊男卑のモニユメント、ISの真実をここにいる全員が知ってしまった。

だが一樹は1つ疑問に思った。

「束さん、ISが霊子甲冑とのメカニズムが全く同じなら、ISも霊力の強い人間にしか反応しないはず。一体どうやって、女性なら誰でも動かせるようにしたんですか？」

ISのコアが強い霊力を持つ者で反応する霊子水晶だとしたら、起動できる人間は最小限に限られる。そのネックをどうやって解消したのか？

「基準を下げたんだよ。霊子水晶が霊力のある人間に反応する数値を」

「どういう事ですか、姉上？」

「霊子甲冑の水晶は天然物で霊力数値90以上の人間にしか反応し

ない代物なんだけど、私は霊力数値30以上の人間に反応する『人工霊子水晶』を自作してISに組み込んだの。

で、ISの霊子水晶は搭乗者の30以上の霊力に反応し、増幅させた霊力を霊子力エネルギーに返還して機体の機動力と火力に充てる事で、ISは最強の兵器になった。ただ、ブイブイ！」

「でも基準を下げてたのはいいとして、どうして女性にしか動かさせませんか？」

「不思議なことに女の子は生まれた時から既に30以上の霊力を持っているから動かせるけど、男の子は成長しても数値は10未満だから起動はムリなんだよね〜〜」

女性の内なる力をこんなに引き出し、明確化させた画期的な兵器を作るとは、さすが天才だ。

「でもなんで男は霊力が低いんだ？」

「霊感が鈍いか、あるいはないかも」

「それか宗教的な意味かもしれないわね」

「そういえば卑弥子やジャンヌ・ダルクも不思議な力があつたという歴史があるから、やっぱり霊感や女性の方が強いかもしれん」

「違うない」

霊感という別次元においても男は劣っていると思うと、一樹と一夏はちよつとへこむ。

皮の封筒の中には用語集と新聞の切抜、設計図などの書類が入っていた。

「もう1つの紙もあるぞ……」

「ねえねえ一樹くくくん！その手紙もつと見せて見せてくくく」

「ええい！束、うるさいぞ！少し黙ってる！」

千冬先生は興味心身で一樹にべったりくつついた束の頭にげんこつをくらわせ、椅子に縛りつけた。書類を見たがる束を一樹は無視して、皮の封筒から書類を取り出し机に広げた。入っていたのは用語集、新聞の切抜帳、年表、設計図の4つだった。

「この新聞はなんでしよう？すつこい古そうですけど……」

「おそらく新聞で報道された事と、用語に書いてある一郎さんの関わった公表されていない事と照らし合わせ、それらが事実であることを立証するための証拠品だろう」

「教官の言うとおり、これで事実理解を確定した方がいい。大神、よんでみせる」

ラウラに押され、一樹は用語の書いてある紙を広げ、読もうとしたその時だった。

「ちょっと待ちなさい！カズキまだ手紙を見るつもり？」

突然、『意義あり！！』を申し出た者がいた。鈴だ。

「全部見なきゃ今後の対策に役立てないだろう。それに鈴はこの手紙を信じていないのかい？」

「そりゃ信じたいのは山々だけどマズくない？これ事実だとしたらマジ国家機密級かそれ以上よ」

「ここまで知ったからにはもう引き下がれません！絶対見るべきですっ……」

「うっ・・・た、確かにそうだけど・・・」

「大神、考えてみるよ。この手紙を書いたのは事件の当事者、そして戦前の日本とフランス、関係した国が約100年間も隠していたトップシークレットだぞ」

一夏も国家機密級の手紙を見て怯え始めた。

「俺たちはすでにそのトップシークレットとISの秘密を知ったんだ。知った以上結論は出さなきゃいけない」

「鈴さん、一夏さん。もう行くしかありませんわ・・・」

賽は投げられた。読み始めた以上先へ進むしかない。一夏と鈴も覚悟を決め、全員に再び緊張が走った。まず一樹は用語集で太正時代の4つの霊的脅威を探した。

「用語は全部で50個はあるみたいだ。先に太正時代の霊的脅威の事件を読むよ・・・」

『・江戸時代僧侶・天海を首領とした『黒之巢会』による帝都破壊、及び徳川幕府の再興

1923年に活動を始めた悪の組織『黒之巢会』による怪事件発生。同年9月1日午前3時00分。天海の怨霊が帝都の芝と浅草、深川と九段、日比谷と築地に六破星降魔陣と呼ばれる「キ」の形の魔法陣を作成、発動させ都市の建造物を破壊、壊滅に追いやる』

「この年と日付、関東大震災の年ではないかっ！」

「入っているこの新聞は震災当時の記事みたいだ」

同封の新聞の切抜を、モニターに映して読み始めた。戦前の新聞は左へ読む『右読み』方式でなんだか読みづらい。写真も載っており浅草十二階（凌雲閣）の倒壊した写真だ。

〔太正十二年九月一日午前三時〇〇分。東京湾沖60kmを震源として発生したマグニチュード7.9の大規模な地震が起こり浅草、銀座などの地域が全壊。巷で噂されている悪の組織、黒之巢会の仕業でないかという声もあがっている。また震災後、政府に天海と名乗る人物が謎の脅迫を叩きつけたこともあり、この地震は陰謀で起こされたものと言う専門家が出始めた。しかし政府や軍、警察は『黒之巢会と震災は関係ない』と否定し、陰謀によって起こされた確実な証拠もないため、この説の信ぴょう性は零ゼロに近いとされてた』

「・・・なんだ・・・コレ？」

「きつと日本政府はパニックを防ぐために、表向きは地震ということにしたんだと思う」

関東大震災がまさか魔術によって人為的に起きていたとは。霊的脅威の記事はまだ続く。

『・・・一九二五年を囿カバーストリーに陸軍大臣による帝都の魔都化計画

1925年11月9日。天笠士郎を指導者に「軍部による日本国の統治」を目指して陸軍青年将校達が結成した太正維新軍によるクーデター未遂事件。しかし一九二九年事件は社会への囿カバーストリーで、その裏では陸軍省の大臣・京極慶吾率いる『黒鬼会』が帝都を魔都とし自らが王として君臨するべく降魔兵器と呼ばれる悪魔の兵器の復活を企んでいたのであった。

クーデター最中、影武者で死んだと世間に思わせたあと、翌年に『武蔵』と呼ばれる降魔兵器を復活させた』

「新聞にはなんと書いてある？」

〔1926年11月9日に起きた太正維新軍によるクーデターが発生から1日後。指導者・天笠士郎を逮捕し海軍と警察は太正維新軍を完全鎮圧。鎮圧後、維新軍の1人が『首謀者は陸軍大臣・京極慶吾』と自供し、逮捕に踏み込んだ時、京極は頭から血を流しすでに遺体となって発見された。遺書が出てきたため自殺と見て捜査を続

ける方針だ。」

「1926年1月未明 日光上空に謎の浮遊体現るといふ怪事件が発生。軍関係者によるとこの物体は『武蔵』と言ふ名で詳細は不明。浮遊体に陸軍の軍服の男がいたというという目撃情報が入っている事から、海軍と警察の合同捜査本部は、去年クーデター未遂を起こした太正維新軍残党によるものではないかと陸軍に事情を追求したが、重要な証言は得られなかった。」

維新後の捜査は進展しておらず、首謀者・京極慶吾の自殺、指導者・天笠士郎の獄死のため事件の取り調べは難航していた」

関東大震災と一一九事件。日本史に大きく刻まれた出来事は怨霊が起こしたものだっただ。

「巴里華撃団については何か書いてありませんか？」

『巴里にて亡霊『パリシイ』との戦い』

1926年、シテ島に住んでいた先住民族、パリシイ（パリという地名はこれから来ている）の亡霊との戦い。亡霊はパリシイの怨念が具現化した神樹『オーク巨樹』を復活させ、パリを大自然へ還そうと企んだ。ノートルダム寺院を中心にオーク巨樹は急速に根を生え巡らせ、24時間でパリの7割を根で埋め尽くした。人的被害は最小限に抑えられ、負傷者は100人を超えたが死傷者は奇跡的に0だった。表向きは植物の科学実験の失敗とされているだろう」

「……ん、フランスの新聞か。シャル！」

「うん」

「1926年11月未明、パリ市、謎の巨大樹により半壊」

「って書いてある」

フランスの新聞には用語集に書いてある『オーク巨樹』らしき巨大樹がモノクロで映っていた。

霊的脅威というのは今に始まったことではない。IS開発、冷戦、

世界大戦が起きる遙か以前に起きていたのであった。

「こんな事が起きていたとは……」

「まだ見るかい？」

「いやもういいわ……」

一部の正史が靈的脅威で起きていた事に全員相当ショックを受けた。山田先生も教師なのに偽の歴史を教えてしまったとガツクリしていた。

でもなぜ千冬先生が大神一郎からこんな国家機密級の物を預かったのか？

「ん〜知られちゃった、ね〜ちーちゃん。まあ私が説明する手間ははぶけたしい〜まいつか」

「いつかは言わなければならぬ事だ。それが早まっただけの事だ、束」

国家機密級の書類を見ても平然としている千冬先生と束は既に知っているみたいだった。一樹はこの手紙が曾祖父から預かった理由を聞いた。

「織斑先生、どうしてじいちゃんからこれを預かったんですか？束さんもじいちゃんの事知っているみたいですし、一体じいちゃんとどういう関係があるのですか？」

「私と束は一郎さんとある事件で関係を持った。一郎さんが亡くなる1年前、『一樹が組織と接触したときコレを渡してくれ』とその手紙を預り、『大神一樹とその仲間たちを全面的にサポートしてくれ』と頼んだ」

「千冬姉え、どういことだ？」

千冬先生は椅子に腰を降ろし、いつになく真剣な表情で全員を見た。

「お前たちにだけ話す。ISが世に広がるきっかけとなった事件、『白騎士事件』。そしてこの女尊男卑の時代についてだ」

第45話 大神青年の事件簿 (後書き)

タイトル由来はアニメ「金田一少年の事件簿」より  
感想待ってます

第46話 運命の歯車（ディステニーギア）（前書き）

白騎士事件の全貌が明らかに

この作品は二次創作ですので、この小説の白騎士事件の真相とI  
S本編とは関係ありません。

## 第46話 運命の齒車（ディステニーギア）

白騎士事件・・・IS発表から1カ月後の2006年3月に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、約2500発以上のミサイルが発射されるも、その全てをIS『白騎士』が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。

この事件以降、ISが世に広まり、ISは核兵器と同様な価値になり新たな抑止力となった。同時に女性にしか動かせないということとで、世論が女性に対して優性認識するようになり2016年現在、時代は女尊男卑となった。

「ちーちゃん、言っちゃおうの？」

「もうこいつらには言わなければならない事になった。東、お前から言え」

東は一樹たちの方を向いて、スマイルした。

「じゃあみんな、単刀直入に言うよ。白騎士事件を起こしたのはわつたし、篠ノ之東です」

「・・・・・・・・何を言っているのか？」

「あ~~~~~どういう事ですか？白騎士事件を起こしたのが東さんっていうのは」

「東、ちゃんと説明しろと言っただろ！」

「だって、めんどくさいんだもの~~~~~」

「くっ・・・・こいつに説明しろと頼んだ私が馬鹿だった」

気を取り直して結局千冬先生が説明することとなった。

「・・・2005年、東はNASAにハッキングして保管されていた霊子甲冑のデータを入手し、それを当時のコスモスーツに組み込んでISを開発し、06年2月に完成させた。

完成、発表から1ヶ月後、東は世界中のミサイル基地のコンピューターへ一斉にハッキングしてミサイルを発射させ、自分の作ったIS『白騎士』に撃墜させた・・・これが何を意味するかわかるか？」「まさかっ！白騎士事件は東さんが自分の発明品であるISを認知させるために起こしたという事ですか？」

「そのためにミサイル2500発も日本へ撃ち込もうとするなんて、正気なのですか？」

「あんたの姉さんって結構ぶっ飛んでいるわね。どっとういう神経してるの？」

「姉上は昔から自分の興味のないことにはとことん無関心になる性格で、暴走特急のような人間だからな」

「無茶苦茶だ・・・」

箒は薄々感じていたみたいだった。姉がISを広めるマッチポンプとして白騎士事件を起こしたことを。でも話はこれで終わりではなかった。

「でも事件を起こしたのは東博士として、白騎士のパイロットは一体誰だ？多国籍軍を迎撃させたあと、夕暮と共に姿を消して今だに判明していない謎だ」

「・・・いいかよく聞け。10年前、ISが世に知らしめることになった『白騎士事件』。あのミサイル発射を仕組んだのが東で、ミサイルを撃墜した『白騎士』がこの私・・・織斑千冬だ」

千冬先生の衝撃的なカミングアウト。白騎士事件を起こしたのが束でその白騎士が千冬先生??

「またまた〜〜厳しい千冬先生も冗談言うんですね」

「……………」

「あの〜もしかして……本当……なんですの」

「フォンテーター……私はからかわれるのが嫌いだ……」

アンナの言う通りギャグで済ましてほしかった。何より一番衝撃を受けたのは千冬先生の弟、一夏だった。

「……………どうゆう……事だ……千冬姉え……」

詳細はこうだ。2006年、束はISを開発し、それを世界へ知らしめるためにこの白騎士事件を計画した。だが1つだけ束にも解決できない難問があった。それは白騎士に乗る操縦者がいないということだ。発明されたばかりのISでいきなりミサイル2500発も撃ち落とすには普通の人間では訓練に時間がかかり経験不足で実戦投入は無理があるし、束本人が乗る訳にもいかない。そこで選ばれたのが飲み込みが早く、戦闘力、精神力も常人以上で優れたセクスを持った千冬先生だった。千冬先生は束の計画に同意して白騎士に乗り、2500発のミサイルと多国籍軍の軍艦・戦闘機を潰し、日の入りと共に退却した。

こんなテロ行為スレスレな事件を千冬先生がやるなんて。無敗神話を持つ日本代表でIS世界一に上り詰めた王者の過去が、テロまがいの事件に手を貸しているなんて信じたくなかったが、千冬先

生の口からは事件の当事者側にしかわからない事が出続けた。

「千冬さん、なぜ姉のこんな計画に手を貸したのですか！？姉は昔から飛んだ人ですが一歩間違えばテロリストになるところですよ！！」

「そうだっ！それにどうして弟の俺に隠していたんだっ！！両親に捨てられても姉弟一緒に生きてきたじゃないか！！弟にも言えない理由があるのかっ！？」

「落ち着け一夏！落ち着くんのだ！」

一夏は激昂していた。尊敬していた姉がISを広める事件を起こした犯人の1人なんて。その時、千冬先生から一夏の怒りを飲み込むかのような激しい憎悪が出た。

「……復讐だ……私が束の白騎士事件に手を貸した理由は、両親への復讐だ」

「ウソだろ……俺の知っている千冬姉えはそんな陳腐な感情をだす人間じゃない……」

「落ち着いてください一夏さん。姉弟にも話せないという事はそれなり理由がありますわ」

一夏は深呼吸して怒りを抑えた。一夏が落ち着いた所で千冬先生は織斑姉弟の過去を語った。

「昔、私は物心のつく前の一夏と共に両親に捨てられた。生活保護制度で最低限の暮らしは出来たが、私の心は暗雲に覆われていた。両親に捨てられ途方に暮れていた私に手を差し伸べてくれたのが束だった。束のその無邪気な心で、私の凍った感情を溶かしてくれた。今の私があるのもコイツのおかげとっていい」

「デヘヘヘ〜ちーちゃん照れるじゃない。そんな風に言われち

や〜」

「でも心は潤ったが、潤った心を覆う闇は晴れる事はなかった。2005年、東は自分の開発した新兵器のパイロットを探していた。それが現代兵器を遙かに凌ぐマルチフォーム・スーツ、ISだった。東は操縦者に私を指名してきた」

「それでIS開発に協力したのですね」

「私は借りを返したいと思い、自ら進んで東の開発したIS『白騎士』の操縦者に志願した」

世界初のISが生まれる背景には2人の女性の友情があった。

「翌年2006年『白騎士』を完成させ発表したあと、東は自ら作ったISを世に知らしめるために『白騎士事件』を起こすと私に話した。最初は私は乗る気ではなかったが東は『これが成功すればISの大会が開かれ、エリートIS操縦者はオリンピック選手のように高い地位と名誉が手に入り、国からも優遇される』と説明し、私の心境は一転した。

【親に捨てられた日から、私の心を覆う闇を晴らす方法は復讐しかない】。そう考えた私は両親への復讐を誓った。私と幼い一夏を捨てて自分達だけ裕福に生活をしている親を見返し、のちに自分の捨てた子が世界中から注目される人間になって捨てた罪悪感、後悔を一生味あわせるために」

「待つてください、東さんの説明はあくまで仮説の段階です。その仮説を信じるのは早すぎたのでは？」

「東は頭の回転が異常に速い。ドイツの立てた仮説は95%本当になる」

1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのコアを造った天才ならではの思考回路だ。

「結果、白騎士事件は成功。のちに束の仮説した通り、モンド・グロツソIS世界大会が行われて私は優勝し、世界中の各メディアで大々的に報じられた。捨てた両親は否が応でも私の存在は目に入り、捨てた事を悔やむ。そして優勝したことで国からの報酬が出て一夏を養わせる事が出来た。私の目的は達成されたのだ」

「千冬姉えは両親への復讐と俺を養うために白騎士事件を・・・」

「ウソだ・・・教官は・・・」

「ラウラ、アンタ大丈夫？」

「水だ。飲め」

あんなに尊崇していた人の心が復讐心の塊であることが信じられず、ラウラは少しめまいがした。一夏の幼なじみである筈、鈴は昔から千冬先生を知っているが、彼女たちも千冬先生がそんな醜い心を持っていたことが信じられなかった。

千冬先生は両親への復讐、束は自分の発明を知らしめるために白騎士事件を起こした。だがその事件がのちの2人の運命の歯車を狂いだすことになる。

「白騎士事件から2年後の2008年。私と束のもとに、ある1人の老人から1通の手紙をもらった。その差出人が大神一郎、大神一樹の曾祖父だ」

「ひいじいちゃんか？」

「一郎さんからの手紙は、ISを開発した束と操縦者の私に会いたいという内容で、私と束は彼が隠居する栃木へ赴いた」

「そこで会ったんだよ。私とちーちゃん以外でISの開発を知って

いる、大神一郎さんに」

大神一郎と華撃団隊員は感じていた。ISの技術とボディにかつて自分たちが乗っていた霊子甲冑と後にでた発展型であることに。

「私と束は一郎さんと帝国・巴里の華撃団の元隊員のみなさんと会い、この手紙に書いてある事を全て聞かされ、束がISを製造する際、霊子甲冑とコスモスーツを組合せて作った事も見抜いた。

一郎さんとみなさんは、私たちがした事は華撃団が抹消しようとした霊子甲冑を、私と束がISとして世界に拡散させてしまった事を告げた。私たちは時代を狂わせる歯車（IS）を作ってしまった事を歯車（IS）は女尊男卑の時代を動かす金属の歯車となった」

「メタル・ギア・・・」

「あのゲームのことか？」

メタルギアソリッド、世界中が認めた傑作ゲームだ。それに登場するメタルギアという言葉。この言葉の意味は「兵器は時代を動かす歯車」で、ISは男女のパワーバランスを崩し女尊男卑の時代を動かす歯車と千冬先生は作ってしまったというわけだ。

「一郎さんは霊子甲冑が拡散したら悪用以外にも、男女パワーバランスが崩れる事を考えていた。それを阻止するために戦ったが、最終的には私たちが拡散させてしまった。私は一郎さんと隊員のみなさんに謝り続けた。

そして一郎さんと隊員のみなさんは、許す代わりにある事を私に頼んだ。それは亡国機業が復活し闇世界を創造する計画を阻止する事を頼み、私と束は快く引き受けた。

復讐のためとはいえ、私たちは表に出してはいけない物を出してしまい世界を狂わせた。私がやっている事はせめてもの償いだ」

「うう~~~~私もいけなかったと思ってたんだよ。ただ面白半

分でやったらこんなに広がってしまうとは思わなかったんだよ」「

面白半分でミサイル2500発も撃つのは普通じゃないと思う。

一樹は臨海学校の時、東さんが白騎士事件を口に出した時、千冬先生が怖い顔になったはこれがそうなんだと考えた。

第46話 運命の歯車（ディステニーギア）（後書き）

タイトル由来はゲーム「メタルギアソリッド」より

織斑千冬ファンの方々、本当に申し訳ございません。

こんな世界線、こんな話があったかもしれないということでも「承、ご理解をお願いします。」

第47話 エネミー・オブ・ファントムタスク（前書き）

大変長らくお待たせしました。

亡国機業の歴史、ISのメカニズム、白騎士事件の真相を全て知った8人に、千冬先生からある勧誘があるお話です。

## 第47話 エネミー・オブ・ファントムタスク

PM5:00 食堂

一樹はラーメンを食べ終え、アンナは大好物のプリンを前に大きなため息をついた。シートの中にはなにやらファイルが置かれていた。

「はあ~~~~」

「どうしたんだい？」

「ダメージ大きいですよ。私と大神さんのご先祖があんな事してたなんて・・・千冬先生が白騎士という事も・・・」

「それを言うなら一夏の方が深刻だよ・・・」

「行ってみますか？一夏さんのところへ」

「無理だと思うけど・・・」

遡ること3時間前。IS・女尊男卑の時代は束の好奇心と千冬先生の復讐によつて幕開けたことが判明し、集められた8人だけに告げられた。

「見損なつたよ・・・千冬姉え・・・大神のじいさんがこの世から消そうとしていた物を復讐の道具に使うなんて・・・」

「言い訳はしない。女尊男卑の本当の元凶は束と私が・・・」

「もういい！！もう聞きたくないっ！！千冬姉えなんて知るか！！！！」

一夏は椅子を倒してドアへ走っていった。

「一夏！お前も親を恨んでいたろう・・・」

「確かに恨んでいたさ。でも・・・復讐しようなんて考えた事はない！！」

「あああ、いつくん！！」

「一夏！」

ボタンツとドアを開けて出て行ってしまった一夏、あとを追うとした篤を千冬先生は止めた。

「千冬さん・・・」

「篠ノ之、まだ話は終わっていない。お前たちにはまだ伝える事がある。山田先生、例の物を配ってください」

山田先生はファイルを7人に渡した。中の紙を見てみるとそこには『IS学園への特務部隊の設立』と書かれていた。

「教官、これは？」

「福音暴走事件の犯人が亡国機業の幹部と上に報告した事で、上層部はかなり頭を悩めた。そこで私は「この組織に対抗する特殊部隊をIS学園に設立する」という提案を出した」

「部隊は司令官は織斑先生、副司令は私、山田真耶が務める他サポート数名から成る指令部と、あなた方8人編成の迎撃部隊で構成します。迎撃部隊は敵の出現と同時に攻撃、排除を目的とします」

「もしかして、その部隊へアタシたちを入れるってことですか？」

「確かに8人ちようどいますわね・・・」

「そうだ。お前たちは既に1回以上は組織との交戦を交えているし、福音の暴走が奴らである事を証明させたことをお偉方は大変評価していた」

「それに君たちは今まで多くの国家代表が交戦しても、何も得ることとできなかった組織から有力な情報をぶんどったしねっ！」

8人が呼び出された理由はIS学園に新設される部隊への入隊だった。先に大神一郎の手紙を読ませたのは組織の歴史、ISの秘密を熟知させる必要があったからだ。

「この案はまだ仮にすぎない。1週間後、もう一度集まりお前たちの意志を聞く」

「もし自分たちが1人でも入隊を辞退した場合？」

「この案は廃案となる。命が惜しかったら無理強いはいしない。大神はこのファイルを一夏に渡しておいてくれ。では解散！」

そして現在、食堂。千冬先生から渡された曾祖父の手紙の用語集をもう一度読み返した。用語集には戦後様々な事件の裏側が書かれていた。キューバ危機、ベトナム戦争など冷戦期の出来事以外にも、21世紀の「ドイツ・ベルリン国際空港テロ」「フランス〜ロシア間の大陸鉄道横転事故」「日本人青年による中国人IS操縦者監禁事件」「中米国家への核脅迫事件」など数々の事件があった。

「カズキ、ここにいたの」

「鈴、セシリアくん」

「席、よろしいですか？」

「ああ、いいよ」

彼女たちもかなりブラックだ。いつもの元気とエレガントさが欠落している。

「で、アンタたちはどうすんの？」

「なにがですか？」

「部隊への入隊ですわよ。あなたたち2人のご先祖様は組織に挑んだこともあります。ご遺志を継ぐ気はありますの」

「カズキのひいじいさん、最後まで自分のあやまちを悔やんでいたみたいだし千冬さんだって・・・」

「東さんは一応反省はしている・・・みたいですが・・・かね？」

「・・・確かに東さんと千冬先生は霊子甲冑を発展させ広めた。

でも問題なのは亡国機業が魔術で闇世界を創ろうとしていることだ」

「魔術なんて非科学的なものを信じて言われてもねえ」

「鈴さん、福音が変形した時、なにか変な気がしませんでしたか」

「言われて見れば・・・確かに戦っているときちよつと気分悪くなつたわね」

「わたくしもですわ」

「私たちはすでに非科学的なものと接触しているんですよ。否定のしようがありません」

福音が変形した機兵・凶砲。あの時、亡国機業の幹部タチアナは、《この魔操機兵『凶砲』の練習台になってもらう》と言っていた。

あれが妖力で動く魔操機兵という物なら、大神一郎の『闇世界の創造』の仮説は現実になる可能性がある。

「たしかに可能性はあるね」

「シャル。ラウラ」

「単刀直入に聞く大神。お前は入隊志願するのか」

一樹は数秒間下を向き。覚悟の目で自分の意思決定をくだした。

「俺は・・・志願する。亡国機業の野望を野放しにはできない。一郎じいちゃんの遺志を継いで奴らを倒す」

「私も志願します。私は亡国機業と戦った巴里華撃団の隊員・エリカ・フォンテイーヌのひ孫です」

「・・・シャル、私も志願する。理由は大神と同じだ。ミルヒシュトラールセ大将の無念を晴らすために」

「わたくしも志願いたしますわ。グリシー又様の男性復権に参加した真相を知りましたから。それにイギリスの代表候補生でもあり名門貴族の名にかけて闇組織壊滅を宣言します」

「あんたたちマジで言ってるの？ISの攻撃が効かなかった機械を相手にすんのよ。勝算はあるの？」

「鈴さん、心配にはおよびませんわ。大神さんのひいおじいさんが手紙と一緒に入れた対抗する装備の設計図が入っていますのよ。なんとかなりますわ」

「君たち2人はどうするんだ？」

「ボクは・・・」

シャルは志願を悩んでいて、鈴は懐中時計を出して時間を確認した。

「ゴメン、一樹。アタシこれから課題出しに行ってくるから、入隊の事はその後と言っわ」

鈴は走って食堂を出ていった。鈴と入れ替わりにクラスの3人組の相川、谷本、布仏が入って来て一樹の所へ来た。

「あ、いたいた。大神く~~~~ん」

「ああ君たちか、どうしたんだい」

「ねえ、大神くん。織斑くんと何かあったの？なんか今までにない恐い顔していたけど」

「ケンカでもしたの？女の子の取り合いか何かで。『あの子は俺のモンだっ！』とかなんとか言ったりい〜？」

「い、いや。そんな事はしてないけど・・・あ、ちょうどよかった、一夏がどこに行っただか知らないかい？」

「え〜と〜、おりむーなら屋上かな？あとしののーも一緒にいたよ〜」

一樹はファイルを持って席を立った。

「俺、一夏の所に行って話してくるよ」

「私も行きます」

「わたくしも」

「私も」

「気持ちありがたいが、ここは俺に任せてくれ・・・シャル、荷が重いなら無理する必要はない。自分に忠を尽くすんだ」

「自分に忠を・・・」

そう言つと一樹は一夏の所で行った。

「ねえ。どうやって自分にチューすんの？」

「違う『自分の生き方は自分で決める』って意味だ」

「ボクの生き方は・・・ボクが決める・・・ってこと？」

「ところでさー、何の話してたの？恋バナ？」

「ええー聞かせて、聞かせてー」

「い、いえそんな事は決して・・・」

「実はですねえ〜ムグッ！」



線がこのまま2人の仲を対立させる境界線となってしまうんじゃないかな  
いかと筈は考えてしまった

第47話 エネミー・オブ・ファントムタスク（後書き）

タイトル由来は映画「エネミー・オブ・アメリカ」より最近やつとクラス3人組の名前がわかりました。

第49話 ファーストミッション (前書き)

最近、就活中で更新が遅れてしまい申し訳ありません(2011年現在)。

## 第49話 ファーストミッション

「はあく。あの先生、アタシが数学ニガテだからって課題出しすぎだっつものっ」

グチをこぼしながら廊下を歩く鈴。でも鈴はニガテな数学の課題から解放されても、新部隊の入隊に未だに悩んでいた。対亡国機業特殊部隊。IS界で最も巨大な悪の組織と戦うのは危険も伴うが、入隊し検挙したら崇高な名誉が手に入って国家代表にいち早く上り詰めれるし、何より専用機持ちのプライドもある。

「(どうしようかな？シャルや篤、一夏だって決めてないし。代表候補生ならなおさら出た方がいいと思うけどな・・・)」

角を曲がると食堂から出てきアンナたちとバツタリ出会った。

「あれ、鈴さん。もう用事は済んだんですか？」

「アンナ、みんなも・・・あれ？カズキは？」

「大神なら一夏を説得しに行った。かなり困難な交渉だと思っがな」

鈴に事情を説明して一同は一樹の言いつけを破って、屋上へ足を運んだ。

「ねえ、カズキに言われたんでしょ。『俺に任せろ』って」

「そっだが、あの怒り様では説得は難しいだろう」

「そこで私たちが説得するんです。一緒に平和の祈りましょうと」

「アンナはじつとしててね。話がややこしくなるから」

一同は屋上へのドアの陰からからこつそりと覗いた。一夏たちを見つけたが、逆光の夕日で眩しくて、表情までは見えなかったが声は聞こえた。

「いた。やっぱり箒もいるよ」

「なにか言い争っているみたいですねえ」

「《千冬姉えと束さんがISを世に広めたことでどれだけの人の人生が狂ったと思っただ！》箒と箒の両親が国から監視されて心身傷つく事も、シャルも父親のための道具にならなかったし、ラウラだって体を酷使することもなくて済んだぞ！！！！》」

「なんか・・・ケンカになってますわ」

ISができる前、それまで普通に暮らしていた箒、シャルには苦い過去があった。またIS開発は各国が威信をかけた国家プロジェクトに発展したため、それまで影響のあった男は窓際に立たされるような扱いを受け、すっかり蚊帳の外となった。

「《とにかく入らねえぞ。俺らよりも他の国家代表にでも任せりゃいいだろ。箒、行こうぜ》」

「《すまない。私もまだ結論は言えない。少し時間をくれ》」

一夏と箒はイエスと言うことなく一樹の元を去ろうとしたとき、それを見計らって覗いていたシャルが出てきた。

「待つて！・・・確かに一夏の言う通りISのせいでボクにはつらい過去があった。でも苦い事ばかりじゃない。ISに乗れたおかげでいい仲間と出会えた。だから・・・ボクは仲間のために戦うよ！」

自分の生き方は自分で決める。そう言われたシャルの答えがこれだ。『いつまでもこの仲間たちと一緒にいたい』という平穏な世界を守るためにシャルは戦う事を決意した。これで5人が決まったが・

「シャル、悪いが俺は・・・」

「アンタたち！専用機持ちっつーのはね、そんな甘ったれたことを言える立場じゃないのよ！任務を受けたら従わなきゃいけないものなの！」

「なんだよ、お前は入るのかよ？」

「あ、当たり前よ！ち、中国の代表候補生の底力を奴らに見せてやるわ！！（流れで言っちゃったけどもうやってやるわ！！）」

鈴もやれかぶれになったのか、それとも専用機持っているのにわがままを言う一夏と箒にイライラしていたのか、流れで入隊すると言ってしまった。一夏は勝手にしろと言い残し校舎へのドアの奥へ消えていった。箒にも入隊の意志を聞いたが保留と返答され、彼女は一夏の後を追った。

屋上残った新部隊への志願者6人。後から入隊を決めたシャルと鈴に真意を聞いた。

「シャル、鈴、いいのかい？」

「勘違いしないで。闇世界の創造なんていまいちピンと来ないんだけど、世界が世紀末のように無法地帯になるようなもんでしょ。アタシはそんなのゴメンだから志願したんだからね！」

「ボクは仲間を守りたい。無論、一夏や箒だつて守るつもりだよ」

部隊が認められる人数はあと2人だが、これは一筋縄ではいきそうにない。1人は白騎士の操縦者の弟、もう1人はIS開発者の妹。こんな複雑な関係がある人間をどう説得すればいいのか。あと7日、

どうしたものか。

新部隊創設の勧誘から5日後。あれから2、3回一夏、箒と話をした。一夏は最初のころと比べて怒りは少し冷めたみたいだが、白騎士事件の暴露以来、千冬先生と顔も口も合わせない日々を送っていた。『裏切りの姉の部隊に入りたくない』というのが一夏の意志らしい。箒は反対の意を示さないがまだ悩んでいる。

それはさておき、今、一夏、箒を除く8人はアリーナでISの2対2の模擬戦をしていた。

「シャルさんっ、行きますよ〜〜〜」

「ひゃあ、ちよっ、アンナさん！味方を撃つてどうするんです!!」

「はう〜〜〜アンナ、またやっちゃいましたあ〜〜〜」

「よそ見をするな!!」

「あうっ、やられちゃいましたあ〜〜〜」

アンナ&セシリア対シャル&ラウラの模擬戦を、一樹と鈴はスタンドで見ている。

「アンナ、あんなん現場で役にたつの？」

「まあ、ああ見えてもアンナくんは俺と同じ第5世代の操縦者だからな。それにアンナくんはやる時はやる人間だ」

「まあ、幼なじみのアンタが言うくらいだから信じるけど。それよりさ、もし8人集まらなくて廃案になった後は奴らの対処はどうなの」

あと2日で決めなければ新部隊は廃案となる。千冬先生が言うには廃案となった場合、国際IS委員会が独自に選んだ国家代表を集めて対亡国機業部隊を編成するというそうだが、国籍の違う人間同士で即席に組んだ部隊なんてモロいに決まっていると一樹は考えた。天下の国家代表にあるまじき発言だが、現に何人かの代表が亡国機業と交戦しても情報も勝利も得なかったのに、寄せ集めて勝算は高くなさそうだ。

一樹は腕時計を見たが、10時4分で止まっていた。

「あ、時計止まっている。鈴、今何時かわかるかい？」

「えっと、11時8分ね」

鈴は5日前の食堂で見せた懐中時計を取り出して時間を見た。

「その懐中時計、ずいぶん年季の入ったものみたいだけど、どこで手に入れたんだい」

「コレ？コレねえ、両親が離婚して中国のお母さんの家へ帰ったあと、お隣に住んでいたおばあちゃんのから貰ったの。ほとんど寝たきりだったからアタシが介護してあげて、そのお礼にしてくれたんだ。今年の春に亡くなったけどね」

「優しいんだな、鈴は」

「ちよっ、照れるじゃない、バカ」

「いてっ！！」

甲龍の部分展開で叩かれた一樹はフィールドまで吹っ飛ばされた。その瞬間、学園全体に警報がなった。

「《緊急事態発生、緊急事態発生。研究事故が発生しました。学生の皆さんは最寄りの地下シェルターに避難してください》」

IS学園はISというケタ外な兵器を扱ったため、学園にはそれに備えたシエルターが敷地内に何ヶ所かある。一樹たちも模擬戦を切上げ、地下シエルターへ避難しようとしたとき、山田先生が息を切らして走って来た。

「大神くん・・皆さん・・今すぐ私について来てください」

言われるまま山田先生について行った一樹、アンナ、セシリア、鈴、シャル、ラウラは前回集められた部屋に連れてこられ、そこには千冬先生、束もいた。

「千冬先生、これは？」

「お前たち聞け。研究事故というのは偽装で本当は襲撃だ。謎の機兵が臨海公園から陸に上がってきた。おそらく亡国機業からの刺客だ」

「なんだって！もう攻撃を！？」

「まだわかんない。敵は臨海公園に上陸してそのまま待機しているだけだね」

「では先生、わたくしたちを呼んだのは一体？」

「お前たちには校舎の防衛、及び敵のせん滅を目的とした戦闘を行うってもらう」

まだ部隊として決まっていけないのに早く出動命令が。全員の答えはイエスだが疑問が。

「先生、8人いなきゃ部隊は出来ないんじゃないですか？」

「今回は事情が異なる。敵のせん滅以外にも、新部隊の実用性を上に示す形で任務を遂行してもらう。戦果次第では6人編成で認められるという可能性もある」

「バーチャスミッション（貞淑な任務）ってことですね、教官」

これは部隊編成への大きなチャンス。だが、ここで戦果を上げ部隊が認められれば一夏と篤は部隊に入隊する必要がなくなる。そうなれば2人は身内に対して歪んだ感情を抱いてしまう。

「千冬先生、一夏と篤・・・」

「言うな・・・。ここに居ない奴の名を言うな」

千冬先生は厳しい顔で一樹を黙らせた。確かに今は、敵のせん滅が先だ。ブリーフィングを受け、いざ出撃とその前にラウラが拳手した。

「教官、隊長として大神を推薦したいのですが」

「確かに大神さん、臨海学校の時の確かな指示を送って自分も勇猛に戦ってましたわ」

「私も賛成です。大神さんが隊長ならどんな戦いだってきつと勝てますよ」

「ボクも賛成です。今まで最前線へ行き、勇猛果敢に戦う姿は隊長にふさわしいよ。鈴木も問題ないよね」

「まあ・・・いいんじゃない？カズキ強いし」

6人だけでなく山田先生、束も隊長に一樹を選び、千冬先生も隊長は一樹が適任と判断し、満場一致で隊長は一樹に決まった。6人はすぐさま外に出て専用機を展開。亡国機業の刺客のいる臨海公園へ赴いた。

「よしー…みんな行くぞー…！」

第49話 ファーストミッション (後書き)

タイトル由来はそのまま映画「ファーストミッション」より

第50話 バトル：インポッシブル（前書き）

ついに50話までできました。

## 第50話 バトル：インポッシブル

亡国機業からの刺客が現れ一樹たちはすぐさま専用機を出し、学園の臨海公園へ急行した。仲間たちと共に戦い、勝利と情報を得れば部隊として認められる絶好の好機だ。

「一夏さんたちは本当に来ないんでしょうか？」

「一夏たちは自分たちの選択した意志に従ったんだ。このまま部隊が決まっても、一夏と箒を批難するような事は絶対するな」

一夏と箒にはそれぞれの『身内の犯行』という事情があり、傷心をおった彼らに、一樹たちがとやかく言うことではない。2人の意志を尊重すべきであると一樹は言った。

煙の立ちこめる公園について6人は目を疑った。公園はベンチ、手洗い場、水飲み場はことごとく破壊され、花や木から火が出るなど荒んだ光景だった。生徒は全員地下シェルターに避難して、外は人っ子1人いなかった。

「おかしいな。レーダーに敵の反応がない。」

「（大神、私だ。今回もお前たちの戦闘をモニターしている。迅速に敵機を排除しろ）」

「千冬先生、敵の正確な情報を送ってください。レドームを使っています敵がいらないんです」

一樹はレドームで、沿岸部200mにまっすぐ伸びる公園全域を調べているが見つからない。すると、海のほうからなにやら音がするのにシャルが気づいた。みんなを呼ぼうとした瞬間、脇侍4体と大型ロボットが海から勢いよく出てきた。大型ロボットはまるで古代生物の始祖鳥のような姿をして、以前戦った凶砲と同じ邪悪な雰

困気を感じた。どうやらあれも亡国機業の復元した魔操機兵の一種らしい。

「来ましたわね。先制攻撃ですわ、鈴さんっ！」

「オツケー！これでどうっ！」

なぜか今回に限って息の合ったセシリアのブルー・ティアーズ、鈴の衝撃砲の同時攻撃。まともにくらった脇侍は撃破されたが、魔操機兵の方は平然と動き反撃してきた。

「ダメだ。全然効いてない。それどころか傷すらついてないよ・・・」

「くっ、前と同じか。魔操機兵の前ではISの武器では通じないらしいな」

「じゃどうすんのよ！」

やはり前回と同じように魔操機兵は通常のISの武器では歯が立たないらしい。大神一郎の手紙にあった対亡国機業用の新兵器は、部隊として認められるまで開発はされておらず、今回も既存の武器で挑むこととなっていた。

「あなたたち、少し落ち着いてくださいまし。この状況、以前にもあったことをお忘れですか？大神さんのお面があれば万事解決ですわ」

「そうですね！確か前、お面をつけた大神さん、一撃でやつつけちゃいましたよね。あのお面持っていないんですか？」

こんなこともあろうかと、ちゃんと用意しておいた。が、まだ面の正確な分析もわかっていないものを続けてつかうのは危険だ。もしかしたら時間や耐久などの制限があるとなれば厄介になる。

今度は魔操機兵からの攻撃を受けた。三角すいの口が開きレーザーが発射され、かわした一樹たちに背中から発射された誘導ミサイルを襲う。全員は手持ちの刀剣、射撃武器を巧みに使いミサイルを両断、撃墜し、同時に魔操機兵に一斉射撃を行なったがやはり効果はなかった。

もう3度一斉攻撃したが、少しの傷と汚れが付いただけで魔操機兵は平然と立ち向かって来た。さらに致命的とは言えないが何発か被弾して、全員の専用機のエネルギー残量は60%を切っていた。

「くっ、これじゃあ埒が明かない。大神、面を使え！でなきゃコイツは倒せん！」

「やるか？このままじゃ倒す前にみんなのエネルギーが無くなるっ」  
顔半分の能面をつけようとした時、魔操機兵の頭部がガバツと開き、中から女性が出てきた。

「ふん、さすがはタチアナの見込んだ者たち。なかなかやるではないか。……やはり、今まで戦った奴らとは何かが違う。こんなに長く戦闘するのは久しぶりだっ！」

「お前は？」

「私は亡国機業、幹部。アリス・F・ブラウン。タチアナと同じ元ISの国家代表操縦者よ」

「IS操縦のトップに上り詰めた国家代表がなぜ亡国機業に肩入れする！？」

「肩入れ！？亡国機業の望む世界があたしたちの望む世界だからよ。おんなじ目的を持つもの同士が手を組んだら、仕事はかどるものでしょ」

「目的？闇世界の創造か！？魔操機兵を復現させて世界を混沌の時代にするという……」

「そんな目的もあるけど私には私の目的があるのよ。征服というね」

「征服！？なにを！？」

「おしゃべりはここまでよ！ISでは絶対倒せない、この『シードラ』で海に沈めてやるわ！！」

幹部のアリスは再び魔操機兵に乗り込み起動させ、シードラは雄叫びをあげた。雄叫びに全員は怯み、シードラは海水を飲み始めた。すると機体が光沢を出し、これまでにない跳躍をして一樹たちから距離をとった。

「こうなったらやむを得ない。面を使うぞ！」

一樹は顔半分の能面をつけた。光武のエネルギーが全快し、機体が光り出した。白狼を構え渾身の必殺技「桜花天昇」を放った。放たれた「桜花天昇」はシードラの右翼に当たり、切れ込みが入った。

「この魔操機兵『シードラ』に切傷をつけるとは・・・面白い！」

一樹は続けて疾風・改を起動させて突進し、胴体を「快刀乱麻」で切りつけた。これも効果があり、シードラは少しふらついた。

「やっぱり、大神さんのお面は魔操機兵に対抗できる能力があるそうですね」

「なんで効いてるか知らないけど、あれだったらカズキ1人でやっつけちゃうわね」

「みなさん、ブーツとしてないで！私たちも助太刀するんですっ」「わ、わかってるわよ」「わ、わかってますわ」

アンナたちの援護射撃でシードラは怯み、一樹はレールガンをチャージしてシードラの左翼を貫いた。わずかだが勝機が見えてきた。一方、千冬先生と山田先生は、学園の一室で一樹たちの戦闘をマ-

クしていた。

「山田先生、敵の音声は録音できましたか？」

「バッチリです。でもどうして名乗ったりしたんでしょう？謎に包まれた組織をこつもさらけ出すなんて」

「何か別の意味があるのかもしれない」

とそこへ束が勢い良くドアを開けて入ってきた。

「やつほ~~~~ちーちゃん。《待たせたな》なんて~~~~いざやっ  
！」

「遅いぞ馬鹿者！もう戦闘は始まっている！」

「あ~~~~いたいよ~~~~。あの魔操機兵のことを調べて来たっていうの~~~~」

伝説の傭兵の名台詞を使ったが、使いどころを間違えた束は千冬先生からゲンコツを受けた。

「それで、束さん。あの魔操機兵のことなにかわかりましたの？」

「やっぱり前と同じ、ISとは違うエネルギーを感じしているのは確か。でもいい情報を持った助っ人を呼んできたよブイブイ」

「助っ人・・・ですか？」

「はあ、なんか体が気持ち悪いなあ」

IS学園第2地下シエルター。そこには一夏がいた。彼はシエル

ターに避難してから少し体調が悪い。そこへ箒が走ってきて一夏を人目の無いところへ連れてきた。

「なんだよ箒、こんなとこ連れてきて？」

「一夏、これは事故ではなく襲撃だ」

「襲撃？なんの？」

「（・・・亡国機業だ。姉さんが連絡してきた）」

小声で一夏の耳に亡国機業の襲撃と言った。彼女もシエルターに避難してから体調が悪く、そのあとに携帯のメールに束から襲撃、千冬先生や一樹たちが前線で戦っていること聞かされた。

「一夏・・・私は行く。みんな戦っているのに自分だけ隠れている訳にはいかない！お前も来い、男だろっ！」

「お前もか。俺あ行かねえぞ・・・ぐっ」

「いい加減にしろ！！いつまで目をつぶるつもりだ！」

箒は一夏の胸ぐらを掴んで壁に叩きつけた。

「お前と私の家族がした事は事実だそれを受け止める！そしてお前がクラス対抗戦選抜試合の誓いを思い出せ」

一夏の誓ったこと。【今まで俺を護ってくれた千冬姉えを今度は俺が護る】。

「大神の曾祖父さんの言う闇世界が本当になったら、親しい人がいつ死んでもおかしくない。それを阻止するには戦うしかない。千冬さんを責めるのはそれからいいだろう」

「・・・箒」

「はぁ……はぁ……まだ……倒れませんの？」  
「もう……エネルギーが……」

一樹の攻撃が効いているのは確かだ。なのに魔操機兵『シードラ』は全然倒れない。セシリアやシャルたちの専用機のエネルギーも半分を切っている。

「くっ、これで決め……」  
「大神、どうしたっ？何を……!？」

一樹が特攻型必殺技「刀光剣影」を使用しようとした時、面が外れて、無限だったエネルギーが面をつける前の状態に戻った。一樹は再び面をつけたが、エネルギー回復や機体が光ることなく、能面はただの面になってしまった。  
シードラは鈍った一樹たちを蹴散らした。

「どうやらその面がないと、さっきのような攻撃は出来ないようね。さあ！海に沈みなさいっ！まずは中国娘からよっ」

シードラは地面で膝ついていた鈴に狙いをつけ、一気に突進して足を大きくあげた。マズイ、あのまま踏み潰すつもりだ。

「鈴さん、逃げてください！この巨体で踏み潰されたら一溜りもありませんわ！」

「くっ、お願い甲龍ツェンロン！動いて」  
「ダメだっ！展開を解除して自力で……」

「無理だ、敵の足が大きすぎて回避出来ない」

踏み潰される！そう思った時、シードラの足が高さ2メートルで止まった。よく見ると一夏が足を支えていた。

「い、一夏!？」

「鈴・・・早く逃げる・・・」

「ふん!じゃあコイツから踏み潰してやる」

シードラがもう一度足を上げ一夏を踏み潰そうとした時、もう片方の足に紅椿の空裂からわれの斬撃が入り、シードラはバランスを崩した。

「みんな、遅くなった!」

「篤くん!どうして」

「話はあとだ。今は敵を倒すのが先だろう!」

「・・・よし。セシリアちゃんとアンナくんは鈴を連れて後ろに下がってくれ。俺と一夏と篤くんは攻撃を仕掛ける。シャルとラウラは援護を頼む!絶対コイツを学園に入れてはいけない。なんとしてでもここで食い止めるぞ!」

第50話 バトル：インポッシブル（後書き）

タイトル由来は映画「ミッション：インポッシブル」より

第51話 壊されるのは奴だ（前書き）

今年最後の更新です。

## 第51話 壊されるのは奴だ

前線から鈴を担いで退却したアンナとセシリア。鈴の甲龍シエンロンはエネルギー切れ間近でもう飛べない、歩行だけで精一杯の状態だ。あのまま敵の踏みつけを受けたら絶対防御も起動せず、ペシャンコになっていたと思う。

「待ってください。今、救助を呼びますね」

「ちよつと待つて。救助は呼ばず、アタシの甲龍シエンロンを回復させて」

「な・なに言ってますの、鈴さん！ほんのわずか回復させた所であなたにいったい何ができますの!？」

「うっさいわね、考えがあんのよ！全部とは言わないからアナタたちのエネルギー、ちよつとだけ分けて」

2人は顔を合わせ、しぶしぶ自分の専用機を甲龍シエンロンに繋いでエネルギーを送った。送っている最中に鈴はアンナとセシリアに耳打をした。

一夏、篁が駆けつけたおかげで、退却した3人の戦力は補われたが戦況は変わらず、第4世代の紅椿の攻撃を受けてもシードラはものともせず立ち上がった。

「大神、あの魔操機兵に一体どれだけの攻撃をした？」

「・・・臨海学校の時に使った能面を使ってあのダメージだ。それ以外の攻撃は通用しなかった」

「マジかよ！6人で戦ってもあれだけかよ・・・」

シードラには切れ込み8ヶ所、被弾5ヶ所（内貫通2ヶ所）のダメージ。それも一樹1人の攻撃でだ。

「一樹、何かいい策はないの？」

「考えてはいるが相手は闇のエネルギー『妖力』で動く魔操機兵。ISの攻撃も効かず、唯一の対抗手段だった『謎の能面』も急に使えなくなってしまった」

「どーすんだよっ、勝目ないじゃんか！俺は勝ち目のない戦いに来ちまったってのか!？」

自分で来といて弱音を吐く一夏。それをシードラから戦闘再開の雄叫びが。

「無駄と言っているでしょう！お前たちのようなIS乗りがなん人来ようと絶対に勝てないわよ！いい加減海に沈みなさい!!」

「まずいな。一夏と篤くんが来たとはいえ、攻撃の効果がない以上勝ち目は本当がない。どこか弱点があれば、ISの攻撃でも十分通用すると思うだが・・・」

そこへアンナとセシリアが通信が入った。

「2人とも鈴は大丈夫だったかい？」

「大神さんもうじき鈴さんから通信がはいりますわ」

「（カズキ、みんな聞こえる?）」

鈴からの通信は全員の機体の通信回線に入ってきた。

「（アタシがやみくもに龍砲を撃っていたら1発がヤツの口の中に

入ったの。そうしたら機体が大きくよろめいたの」

「つまり口の中が弱点ということか」

「でも口の開閉なんてあつという間だよ。それにいつ開けるかもわかんないし」

「・・・レーザーを撃つとき口が開く！その時を狙えば・・・」

「数秒のうちでありつたけの攻撃をする、か。いくら攻撃が効かなくとも、弱点を突かれたら一溜りもないな」

「（数秒じゃない、数十秒よ）」

鈴は一樹たちにある事を伝え、それを聞いた全員は射撃武器をスタンバイした。

「じゃあ鈴、任せたぞ」

「カズキたちもちゃんと狙いなさいよ」

何を伝えたのか。全員は固まった陣形をとりシードラからのレーザーの瞬間を待った。しかし、来るのはミサイル、機銃、蹴りなど攻撃でレーザーはなかなかこない。

「ちょこまかとござかしいっ！」

来た。シードラは口を開きレーザーを放った。一樹たちは固まった陣形を解き散開した。

「ちっ、もう我慢の限界よミサイル全弾をお見舞い・・・っ！？な、なんなの！？」

シードラの口が閉じなくなった。よく見ると鈴の甲籠シホンロンの武器、双天ソウテン牙月んがげつがシードラの口が閉じるを邪魔するつかえ棒になっている。

「く、口が閉じない!?!」

「今だ、撃てえ!」

「了解!?!」

シードラの口内めがけて一樹、セシリア、シャル、ラウラ、アンナが一齐に撃った。レールガン、スターライト、2丁マシンガン、レールカノン、ガトリングの全弾を撃ち込み、さらに一夏の零落白夜と第の雨月あまつぎ、空裂からわれの斬撃を口内にお見舞い。

思った通り口内は弱点で、シードラは鳴き声をあげてボディのいたる所から黒煙をあげ、右翼がもぎ取れて膝をついて倒れた。

なぜ、鈴が戻つて来たのか、詳細はこうだ。エヴァンジェルとブルー・ティアーズから少しのエネルギーを補給した甲龍シエンロンは、シードラのレーザー攻撃が終わると同時にイグニッション・ブーストで敵機の口の前を通過。その時、閉まる口に向かって双天牙月そつてんがげつをつつかえ棒になるように投げて、口が閉じるのを防いだ。結果はミラクルフィット。あとは開いた口の中に入りつけたけの弾丸を撃ち込んでやるというまさに小人戦法。見事、魔操機兵「シードラ」の破壊に成功したのであった。

千冬先生たちにもこの瞬間は、ちゃんと目に入っていた。

「す、すごいです!あの大型兵器を倒しましたよ!」

「対魔操機兵用の武器もないのによくやったもんだ」

「うんうん、がんばったがんばった」

一樹たちもなんとか敵機の破壊の成功に一安心していた。

「ふう〜〜〜うまくいったわね」

「鈴、ナイスコントロール!」

「見事だ、鈴」

「あつたりまえじゃない!アタシを誰だと思っているのよ!」

「ちよいと鈴さん！アンナさんとわ・た・く・し・がエネルギーを分けてあげたのですから、礼を言われるのはわたくし達ですわっ！」

「まあまあセシリアさん。いいじゃないですか。みんなで勝てたんですから」

「よくありませ〜〜〜ん」

やっぱり自分が自立たなきやすまないセシリア。

「2人とも・・・来てくれると思ったよ」

「大神・・・すまなかつた。みんなが戦っているのに俺は逃げて目をつぶっていた」

「私も謝罪する。決断を下すのに時間をかけてしまいすまなかつた」

「謝るのはよしてくれ。君たちは危険をかえりみず、仲間の元へ駆けつけ、仲間と共に戦うという大きな決断をしたんだ。それを誇りに思ってくれ」

これで8人、新部隊創設の人数が揃った。

すると、怪しい機械音がした。倒れたシードラが再び立ち上がり、雄叫びをあげた。

「く・・・この・・・魔操機兵は・・・そんな攻撃じゃあ・・・まだまだ・・・倒れないわよ」

「ちっ、まだ動くのか。こうなったらもう1発・・・」

ラウラがレールカノンを構えた瞬間、目の前に奇妙な生物が10体現れた。目はなく、鋭い牙があり、後ろへ伸びた後頭部、紫色の皮膚に悪魔のような羽が生えたその生物は、異様な雰囲気に含まれていた。10体の奇妙な生物は一斉に一樹たちに襲いかかって来た。

「くそつ、なんだ！？このエイリアンのような生き物は！？」

「いやあ！こないで~~~~」

「くそ、上空から桜花天昇で……なんだ！？機体が……光武が……飛べないぞ！」

「お、おいどうした白式。止まるなよ！零落白夜を出してくれえ！」

「だ、ダメですわあ！墮ちます~~~~」

「か、一樹。エネルギーが何もしていないのにどんどん減ってくよ  
！」

「大神、PICが動かない。システムに異常が起こっている！」

一体どうしたというのか。奇妙な生物が現れた途端、全員の機体からエネルギーがどんどん減っていき、ISの基本システムであるPICが異常をきたし飛行や加速ができなくなった。一樹は体勢を立て直そうとするが予想外の出来事に全員の頭はパニックっていた。

「ジャマが入ったわ、また会いましょう」

「待てっ、うおおっ！」

一樹たちが奇妙な生物に足止めをくらっている隙に、シードラは海へ飛び込みままと逃亡した。それを見計らって奇妙な生物も攻撃を止め、自然発火してドロンと消えてしまった。専用機は全機エネルギーがゼロになり、展開が解けて待機状態になった。

「みんな無事か！？」

「ああ……なんとか」

「なんなの！？あの気持ち悪い生き物！？地球外生命体！？」

「鈴、落ち着いて。一樹、一回千冬先生の所へ戻ろっ。この事を報告しないと」

「そっだな。みんな撤退しよう。気を緩めるなよ」

一樹たちは恐る恐る、戦場となった臨海学校を脱出し先生たちのいる校舎へと戻っていった。

暗闇の倉庫。そこには傷つき、口がラツパ状に損傷した無残なシードラの姿があった。そのそばでかん高い女性の怒鳴り声が聞こえてきた。

「ちよつと！この魔操機兵、口内の装甲がモロすぎじゃない！なんでそんな弱点を残したまま開発してたの！？」

「弱点じゃないわ、弱みよ。人間も兵器も弱みがなきゃ可愛くないじゃない」

「そんな美学、戦場では命とりだわ。今すぐ直しなさい！」

「待ちなさいアリス。新型の実験に名乗り出たのはあなたなのよ。なら今回の戦闘でこのような欠点が出るのが当たり前じゃない？」

「う、それはそうだけど。でもタッチアナ、負けたこの屈辱は凄まじいわ……」

「いずれにせよ、この先ISはただの飾り着にすぎないものになる。私たちには絶対的な力があるよよ。今度はそれを思う存分振舞えばいいわ。……ふふふ」

第51話 壊されるのは奴だ（後書き）

タイトル由来は映画「007 死ぬのは奴らだ」より

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4365t/>

---

サクラ大戦 花たちからの手紙

2011年12月29日06時51分発行